

次郎物語

第五部

下村湖人

青空文庫

一 友愛塾・空林庵
ゆうあいじゆく
くうりんあん

ちゅんと雀すずめが鳴いた。一声鳴いたきりあとはまたしんかんとなる。

これは毎朝のことである。

本田次郎じろうは、この一週間ばかり、寒さにくちばしをしめつけられたような、そのひそやかな、いじらしい雀の一声がきこえて来ると、読書をやめ、そつと小窓のカーテンをあけて、硝子戸ガラスどごとに、そとをのぞいて見る習慣になつてゐる。今朝はとくべつ早起きをして、もう一時間あまりも「歎異抄たんいしょう」の一句一句を念入り

に味わっていたが、そとをのぞいて、いつもと同じかえて楓のこえだ小枝の、それも二寸とはちがわない位置に、じつと羽根をふくらましている雀の姿を見たとたん、なぜか眼がしらがあつくなつて来るのを覚えた。

かれの眼には、その雀が孤独こどくの象しやう徴ちゆうのようにも、運命の静観者のようにも映うつつた。夜明けの静せい寂じやくをやぶるのをおそれるかのようには、おりおり用心ぶかく首をかしげるその姿には、敬けい虔けんな信仰者しんこうしやの面影おもかげを見るような氣もした。

雀は、しかし、そのうちに、ひよいと勢いよく首をもたげた。同時に、それまでふくらましていた羽根をぴたりと身にひきしめた。それは身内に深くひそむものと、身外の遠くにある何かの力

とが呼吸を一つにした瞬間しゅんかんのようであつた。そのはずみに、とまっていた楓の小枝がかすかにゆれた。小枝がゆれると、雀ははねるようにぴよんと隣りの小枝に飛びうつつた。その肢体したいには、急に若い生命がおどりだして、もうじつとしてはおれないといった気配けはいである。

間もなく雀は力強い羽音をたて、澄みきつた冬空に浮うき彫ぼりのように静まりかえっている櫟くぬぎの疎林そりんをぬけて、遠くに飛び去つた。そして、すべてはまたもとの静寂にかへつた。

次郎は深いため息に似た息を一つつくつと、カーテンを思いきり広くあげ、机の上の電気スタンドを消した。そして、外の光でもう一度「歎異抄」のページに眼をこらした。

机の上の小さな本立てには、仏教・儒じゆきよう教・キリスト教の経典類や、哲てつじん人の語録といった種類のもものが十冊あまりと、日記帳が一冊、ノートが二三冊たててあるきりである。次郎は、どういふ考えからか、一ひとつき月ばかりまえに、自分の蔵書ぞうしよの中から、それだけの本を選んで座右におき、ほかはみんな押し入れにしまいこんでしまったのであるが、このごろでは、そのわずかな本のいずれにもあまり親しまないで、ほとんど「歎異抄」ばかりをくり返し読んでいるのである。

*

次郎が郷里の中学校を追われてから、もうかれこれ三年半になる。父の俊しゆんすけ亮すけが退学の事情をくわしく書いて朝倉先生に出し

てくれた手紙の返事が来ると、かれはすぐ上京して先生の大久保の仮寓かぐうに身をよせた。先生の
上京からかれの上京までに二十日は日があつていなかったので、かれが着京したころには、先生自身もまだ十分にはおちついていず、運送屋から届けられたままの荷物が、玄関げんかんや廊下ろうかなどにごろごろしていた。次郎は、はじめの十日間ばかりは、朝倉夫人と二人で、毎日その整理に没頭ぼつとうした。

「本田さんとは、よくよくの因縁いんねんですわね。同じ学校を追われた先生と生徒とが、また同じ家に住むなんて……」

次郎を東京駅にむかえてくれた朝倉夫人は、電車に乗って腰こしをかける、すぐしみじみとそういつたが、次郎は、荷物を整理し

ながらも、夫人が心の中でたえず同じ言葉をくり返しているような気がして、うれしくてならないのだった。

先生は、毎日外出がちだった。帰りも、たいていは夜になってからで、夕食をとにもすることもまれだった。たまに家におちつく日があつても、夫人とも、次郎とも、めつたに口をきかず、何か考えこんでは、心にうかんだことをノートに書きつけるといったふうであつた。

ところが、荷物もあらましかたづき、階下の六畳二間じようを先生の書齋と茶の間兼食堂に、二階の四畳半を次郎の部屋にあて、夫人の手で簡素かんそながらも一通りの装飾そうしよくまで終わったころになつて、先生は、ある夕方、外出先から帰つて来て室内を見まわしながら

言つた。

「せっつかく整理してもらつたが、近いうちにまた引越すことになるかもしれないよ。」

「あら。」

と夫人は、めつたに先生には見せたことのない不満な気持ちを、かるい驚きおどろの中にこめて、

「やはり、こちらでは手ぜまでしようか。」

夫人がそういうと、次郎も、それが自分のせいだという気がして顔をくもらせた。先生は、しかし、笑いながら、

「手ぜまなのは、覚悟かくごのまえさ。越したところで、どうせ今度の家も広くはないよ。あるいは、ここよりも窮きゆう屈くつになるかもし

れん。実は、はっきり決まらないうちに話して、ぬか喜びをさせるのもどうかと思つて、ひかえていたんだが、私がかねて考えていたことが近く実現しそうになつたのでね。」

「考えていらしつたことといひますと?」

「青年塾じゆくのことさ。」

「あら、そう?」

夫人はもう一度おどろいた。それは、しかし、深い喜びをこめたおどろきだつた。

「土地や建物も、あんがいぞうさなく手に入ったんだ。何もかもたぬま田沼さんのお力でできたことなんだがね。」

田沼さんというのは、朝倉先生が学生時代から兄事けいじし崇拝すうはいさ

えしていた同郷の先輩で、官界の偉材いせい、というよりは大衆青年の父と呼ばれ、若い国民の大導師だいどうしとさえ呼ばれている社会教育の大先覚者で、その功績によつて貴族院議員に勅選ちよくせんされた人なのである。次郎はまだ一度もその風貌ふうぼうに接したことはなかった。しかし、朝倉先生の口を通して、およそその人がらを想像していた。先生のいうところでは、「田沼さんは、聖賢せいけんの心と、詩人の情熱とをかねそなえた理想的な政治家」であり、「明治・大正・昭和を通じて、日本が生んだ庶民教育家しよみんの最高峰さいこうほう」だったのである。

次郎は、「田沼さんのお力で」という言葉をきいた瞬間、何か靈感れいかんに似たものが胸にわくのを覚えた。朝倉先生の青年塾の計

画については全くの初耳であり、ただ先生が上京以来、普通ふつうの学校教育以外のことを何かもくろんでいるらしいと想像していただけたのだが、田沼——朝倉——青年塾——と、こう結びつけて考えただけで、近年日本の空を重くるしくとじこめている雲の中を一道のさわやかな自由の風が吹きぬけて行くような心地が、かれにはしたのである。

同時にかれはきわめて当然の事として、かれ自身がその青年塾の最初の塾生になる事を考えていた。朝倉先生に師事しつつ、塾生の立場から塾じゆくふう風樹立じゆりつの基礎固きそがために努力し、しかもしばしば田沼という大人格者に接して親しく言葉をかわしている自分を想像すると、胸がおどるようだった。

朝倉先生は、そのあと、計画中の青年塾について、あらましつぎのようなことを二人に話した。

場所は東京の郊外で、東上線の下赤塚しもあかつか駅から徒歩十分内外の、赤松あかまつと櫟くぬぎの森にかこまれた閑静かんせいなところである。敷地しきちは約五千坪つぼ、そのうち半分は、すぐにでも菜園につかえる。さる老実業家が自分の隠居所いんきよしょを建てつつもりで、いろいろの庭木にわきなども用意し、ことに、千本にも近いつつじを植え込んでおいたところなので、花の季節になると、錦にしきをしいたような美観を呈する。

隠居所の建築は、老実業家の急死で取りやめになった。相続者はその追善ついでんのために、だれか信頼しんらいのできる人で、精神的な事業に利用したいという人があつたら、土地だけでなく、相当の建

築費をそえて寄付したいという意向をもらしていた。それがある人が田沼さんの耳に入れた。田沼さんは、満州事変以来日本の流
行のようになってきている塾風教育が、人間性を無視した、強権的な
鍛練主義一点ばりの傾向にあるのを深く憂えていた際だった
ので、すぐそれを自分の新しい構想に基づく青年塾に利用したい
と考えた。しかし、それには、自分と思想傾向を同じくし、かつ
専心その指導に任じてくれる人がなければならぬ。自分自身で
やって見たいのは山々だが、各方面に関係の多いからだでは、そ
れが許されないし、ことに最近では自分が中心になって、憲政擁
護と政治浄化の猛運動を展開している最中なので、それから
手をひくわけには絶対に行かない。そんなことで、内々適任者を

ぶつしよく
物色

していたところだった。そこへ、たまたま朝倉先生の五

・一五事件批判の舌禍ぜっか事件が発生し、つづいて教職辞任となり、

そのことで二人の間に二三回手紙をやり取りしている間に、どち

らも願ったり叶かなったりで、朝倉先生が青年塾に専念する約やくそく束が

成立した。そして先生の上京後、二人で懇談こんだんを重ねた結果、具

体案を作つて寄付者に提示したところ、先方では、その根本方針

にもろて双手をあげて賛成し、一切いっさいを田沼さんの自由な処理ゆだに委ねた

ばかりでなく、事情によつては年々経常費の一部を負担ふたんしてもい

いということまで申し出て来ている。

「そんなわけで、経費の点では全く心配がないんだ。まるで夢ゆめみ

たような話さ。実は、私としては、それでは安易にすぎて多少気

恥はずかしいような心地がしないでもない。しかし、われわれの塾堂の構想からいうと、経費のことなどでじたばたする必要がないということもまた一つの大事な条件なんだ。むろん勤労はたいせつだし、自給自足も結構だ。しかし教育の機関が金もうけに没頭ぼつとしなければ立つて行けないというようでも困るからね。田沼さんもそのことを言つて非常に喜んでいられたよ。」

「すると、どんなような塾ですの？」

夫人がたずねた。

「それはおいおいわかるだろう。どうせお前には寮りょうぼ母ぼみみたいな仕事をしてもらいたいと思つてゐるし、そのうち印刷物もできるから、それについてみっちり研究してもらうんだな。しかし、お

そらく実際に生活をはじめてみないと、ほんとうのことはのみこめないだろうね。」

「何だか、むずかしそうですわ。」

「むずかしいといえは非常にむずかしいし、へいほん平凡だといえばしごく平凡だよ。」

「一口にいつて、どんなご方針ですの？」

「友愛感情に出発した共同生活の建設とでもいったらいいかと思つているんだ。しかし、こんななまに生煮えの言葉をそのままうの鵜呑みにされても困る。それよりか、これまでの学校でやって来た白鳥会の気持ちをも、塾の共同生活の隅すみから隅まで生かす、といったほうが呑みこみやすいかね。」

「そういつていただと、あたしたちにもいくらか自信が持てそうですね。ねえ、本田さん。」

「ええ、ぼく、先生のお気持ちはよくわかるような気がします。」

次郎は頬ほおを紅潮させてこたえた。

「あんまり自信をもつてのぞんでもらっても困るよ。白鳥会の精神がいいからといって最初からそれを押おしつける態度に出たら、かんじんの精神が死んでしまうからね。お互たがいが接せつ触しよくに接触を重ねて行くうちに、自然に各人の内部からいいものが芽を出し、それがみごとに共同生活に具体化され、組織化される、そういうところをねらうのが、今度の塾堂生活なんだ。」

夫人も次郎もだまっとうなずいた。

「まあ、しかし、こういうことはお互いにゆっくり話しあうことにして、さつそくかたづけなければならないのは、本田君の問題だ。中学校も五年になってからの転校は、どうせ公立では見込みがないので、私立のほうの知人に二三頼たのんではある。しかし、夏休みのせいか、まだはつきりした返事がきけないでいる。それがきまるまでは、君も落ちつかないだろうと思うが、どうだい、私が紹しょうかいじょう介状を書くから、君直接会ってみないか。」

「はあ——」

次郎は気がすすまないというよりは、むしろ意外だという眼をして先生の顔を見た。

「私立ではいやなのか。」

「そんなことはありません。」

「じゃあ、会ってみたらいいだろう。私立でも、まじめな学校では、やはりいちおう本人に会ってみてからでないと入れてくれないからね。」

「先生！」

と、次郎は急にからだを乗り出し、息をはずませながら、

「ぼくは先生の青年塾にはいるわけには行かないんですか。」

「青年塾に？ 君が？」

朝倉先生はおどろいたように眼を見はった。

「ぼくは、中学校を卒業することなんか、もうどうでもいいんです。先生が青年塾をお開きになるのを知っていながら、普通ふつうの中

学校にはいるなんて、ぼくはとてもそんな気にはなれないんです。
」

「ばかなことをいうものじゃない。私の計画している青年塾は、学校とはまるでちがうだよ。現に働いている青年たちのために、ごく短期間の、——今のところながくてせいぜい二か月ぐらいにしたいと思っているが、——まあいわば一種の講習をくりかえして行くようなものなんだ。そんなところにはいつて、君、どうしようというんだね。」

次郎はだまりこんだ。かれは自分が想像していた塾とはかなり性質の違ちがったものだということがわかり、ちよつと失望したようだった。しかし、どんな種類の塾にもせよ、その最初の塾生とな

つて、塾じゆくふう風樹立じゆりつに協力したいという希望は、やはり捨てたくなかつたのである。

「そりやあ、私としても、一度は君に一いっばん般の勤労青年と生活をともにする機会を作ってもらいたいとは願っている。しかし、それは今でなくてもいいことなんだ。今のところは、何といたつて中学を出て、上級の学校に進むように努力することがたいせつだよ。」

「ぼく、ほんとうは、先生が青年塾をお開きになるんなら、一生先生の下で働かしていただきたいと思つているんですけれど。」

次郎はいくらかほにかみながらも、哀願あいがんするようにつた。

「ありがとう。それは私ものぞむところだ。実は、機会が来たら、

私のほうから君に願いたいと思つていたところなんだ。しかし、それにはやはり一通り基礎的な勉強をしてもらわなくちゃあ。」

「勉強は独学でもできると思います。それよりか、最初から先生の下でいろんな体験を積むことがたいせつではないでしょうか。」

「塾の大先輩だいせんぱいになろうとでもいうのかね。はっはっはっ。」

と朝倉先生は愉快ゆかいそうに笑つたが、すぐ真顔まがおになり、

「なるほど、塾の気風を作るには、最初から君のような人にはいつていてもらえば大変ぐあいがいいね。これは、君のためというよりか、私にとってありがたいことなんだが。」

次郎は、眼をかがやかした。朝倉先生は、しかし、また急に笑いだして、

「ところで、塾はまだできあがっているわけではないんだよ。建築その他に、少なくとも三か月は見ておかなければならないし、趣^し旨^{ゆし}を宣伝したり、募集の手続きをしたりしていると、いよいよ塾生が集まって来るのは、早くて半年後になるだろう。あるいは、君が中学校を卒業したあとで、第一回目が始まるということになるかもしれない。とにかく、君の転校の手続きだけは早くすましておくことだよ。何だかお互いに青年塾の夢にすっかり興奮してしまつて、現実を忘れていた形だね。はっはっはっ。」

夫人も次郎もつい笑いだしてしまつた。

こんなふうで、次郎はとにもかくにもある私立中学に通いだした。むろん学校にとくべつの期待もかけていなかったし、したが

って大した不満も感じなかった。むしろ、科目によつては、郷里の中学におけるよりも学力のある先生がいたので、勉強にはかえって実がはいるくらいであった。

そのうちに、塾堂の建築も次第しだいにはかどりだした。日曜には次郎もかかさず朝倉先生といっしょに下赤塚の駅におりたが、そのたびごとに、かれは、建物の位置とにらみあわせて、つつじその他の小さな樹木を幾いくほん本ほんかずつ植えかえた。先生夫妻の住宅——その一室に次郎も自分の机をすえさしてもらうことになっていた——は、本館とは別棟べつむねにして、まず第一に着手されたが、その付近の小さな樹木は、ほとんどすべて次郎の手で整理され、南側には、いつの間にか小さな庭園らしいものさえできあがっていた

のである。

住宅が完全にできあがったのは、その年の十月はじめだった。夫人と次郎とは、それでまた引越しさわぎに忙殺ぼうさつされたが、それはいかにも楽しい忙いそがしさだった。荷物を作ったり、解いたりする間に、次郎は、「本田さんとは、よくよくの因縁いんねんですわね」といったかつての夫人の言葉を、何度思っておこしたかしのれない。それに夫人は、このごろ、いつとはなしに、かれを「本田さん」と呼ぶ代わりに「次郎さん」と呼ぶようになっていたので、かれは心の中で、「次郎さんとは、よくよくの因縁ですわね」と夫人の言葉を勝手にそう言いかえたり、また、自分はこれから夫人を「お母さん」と呼ぶことにしようか、などと考えてみたりして、

ひとりで顔をあからめたこともあった。

できあがった住宅は、思いきり簡素だった。八畳じょうに四畳半しじょうはん、それに玄げん関かんと便所べんじょとがついているきりだった。開塾かいじゅくご後は、食事は朝昼晩、塾生といっしよに本館でとることになつていたので、台所は四畳半の縁えん先さきに下屋したやをおろして当分間に合わせることになつていた。

引越し荷物は決して多いほうではなかったが、それでも、この手ぜまな家にはどうにも納まりおさかねた。本だけでも相当だった。本館ができあがると、そこに先生専用の室が予定されていたし、また物置きになるような部屋も当然できるはずだったので、何とか始末のしようもあつたが、それまでは極度きよくどに不便をしのぶほ

かなかつた。で、結局、四畳半と玄関とは当分物置きに使うことにし、八畳一間を三人の共用にした。その結果、ひる間は一つの卓たくを囲かこんで食事もし、本も読み、事務もとり、夜は卓を縁えん側がわに出して三人の寢床ねどこをのべるといったぐあいであつた。次郎は、先生夫妻に対してすまないという気で一ぱいになりながらも、心の奥おく底そこでは、それが楽しくてならないのだつた。里子さとこ時代に、乳母ばの家族と狭せまくなるしい一室で暮くらしていたころの光景までが、おりおりかれの眼まなこに浮うかんでいたのである。

引越しがすんだあとでも、先生はとかく外出がちだつた。おもな用件は、講師陣しんの編成とか、助手や炊事夫すいじふその他の使用人の物ぶ色しよくとかいうことにあつたらしく、帰つてくるとその人選難を

かこつことがしばしばだった。ことに講師陣の編成について苦勞が多かつたらしい。

「著書や世間の評判などをたよりにして、この人ならと思つて会つてみると、思想傾向と人柄ひとがらとがまるでちぐはぐだったりしてね。知性と生活情じようそう操ひらとがぴったりしている人というものは、あんがい少ないものだよ。」

そんなことをいったりしたこともあった。

先生が在宅の日には、よく夫人が外出した。それは寮母として参考になるような施設しせつをほうぼう見学するためであつた。また、その方面の参考書も、見つかり次第買つて帰つた。しかし、ふだんは先生の秘書役といったような仕事を引きうけ、また、先生の

留守中は本館の工事のほうの相談にも応じていた。

次郎は学校に通うので、まとまった仕事の手助けはあまりできなかったが、それでも家におりさえすれば、塾堂建設に役だつような仕事を何かと自分で捜し^{さが}だして、それに精魂^{せいこん}をぶちこんだ。畑も片っぱしから耕して種をまいた。鶏^{けい}舎^{しや}も三十羽^ぱぐらいは飼^かえるようなのを自分で工夫^{くふう}して建てた。こうしたことには、郷里でのかれの経験が非常に役にたった。そして、その年の暮れには、^{にわとり}鶏に卵を生まれ、畑に冬ごしの野菜ものさえいくらか育てていたのである。

かれは、上京以来、父の俊亮^{しゅんすけ}にはたびたび手紙を書いた。それはすべて喜びにみちた手紙だった。恭^{きよう}一^{いち}や大沢^{おおさわ}や新賀

や梅本うめもとにも、おりおり思い出しては、絵はがきなどに簡単な生活報告を書き送った。乳母のお浜はまには、郷里では久しく文通を怠おこたっていたが、いざ上京というときになって、ふと彼女かのじよのことを思いおこし、妙みょうに感傷的な気分になった。で、くわしい事情はうちあけないで、単に東京に出て勉強することになったという意味のことだけ書きおくれたが、それがきつかけになって、上京後も何度か絵はがきぐらいで便りたよをした。そのほかにかれが手紙を書いたのは、正木一家と大巻一家とであった。正木の祖父母には、中学入学以来、自然接触がうすらいでいたが、幼時の思い出にはさすがに絶たちがたいものがあり、ことに二人とももう八十に近い高こうれい齢れいなので、遠く隔へだたつたらいつまた会えるかわからないとい

う懸念けんねんもあつた。で、上京前にはぜひ一度会っておきたいという気がしていたが、上京の理由を説明するのに気おくれがして、とうとう会わずに来てしまった。その謝罪の意味もふくめて、とくべつ長い手紙を書いたのである。大巻一家は、郷里では眼と鼻の間に住んでいて、こちらの事情は何もかも知りぬいており、上京前には、運平うんべいろう老がわざわざかれのために「壮行会そうこうかい」を開いて劍舞けんぶまでやって見せてくれたりしていたので、手紙を書くのにも気は楽だった。しかし、その壮行会の席につらなつた人たちの中に、恭一と道江みちえという二人の人間がいて、何かにつけ睦むつまじく言葉をかわしていたことは、かれにとって消しがたい悩みなやの種になつていた。

「恭一さんは、大学はどちらになさるおつもり？ 東京？ 京都？」

「東京さ。」

「すると来年は次郎さんとあちらでございっしょね。うらやましいわ。」

「道江さんは、女学校を卒業するの、さ来年だね。」

「ええ。」

「あと、どうする？」

「あたしも、東京に出て、もっと勉強したいわ。でも、うちで許してくれるかしら。」

「そりゃあ、話してみなけりゃあ、わからんよ。」

「恭一さんは賛成してくださいさる？」

「道江さんが本気で勉強する気なら、むろん賛成するさ。」

次郎はそこまで回想しただけで、もう頭がむしゃくしゃして来るのである。しかも、そのあと、道江はだしぬけに、

「次郎さんも賛成してくださいさる？」

と、質問をかれのほうに向けた。かれは、その時、

「う、うん、賛成してもいいね。」

と、半ば茶化ちやかしたような調子で答えたが、それがゆとりのある茶化し方ではなく、むしろ虚きよをつかれて、どぎまぎした醜しゆう態たい

をかくすための苦しい方便でしかなかったことは、だれよりもかれ自身が一番よく知っている。その時、道江の顔にうかんだ変な

笑い、それは自分に対する痛烈つうれつな軽侮けいぶの表現ではなかったのか。

かれは大巻一家を思い出すと、かならず道江を思い出し、道江を思い出すと、かならずそうした対話を思い出す。そのせいか、大巻への手紙はただ一回きりで、その後は父あての手紙に、大巻にもよろしくと書きそえるだけだった。

道江本人に対しては、かれははがき一枚も書かなかつた。道江のほうから、それをうらむようなことをいって来たこともあつたが、その返事さえ出そうとしなかつたのである。

さて、塾の本館が落成したのは、翌年の一月半ばであつた。それで住宅のほうもずっと楽になり、次郎は四畳半一間を自分の部屋に使うことができるようになった。そして二月はじめにはいっ

さいの準備がととのい、いよいよ第一回の塾生がはいつて来ることになったのである。

塾名を「友愛塾^{ゆうあいじゅく}」といった。

開塾の日取りが、次郎の中学卒業よりもわずかに一か月ばかり前になっていたのは、かれにとつてくやしいことであつたにちがいない。しかし、この半年ばかりの生活で、かれにはもう、自分はずでに塾堂とは切つても切れない縁を結んだ人間だ、という確信が生まれていた。そのせいか、最初の塾生になりたいというかれの希望は、今では是が非でもというほど強くはなかつた。それに、朝倉先生が、これはむろん主として各方面の事情を考慮^{こうりよ}してのことではあつたが、いくらかはかれの気持ちをも察して、開

塾式の日取りを日曜に選んでくれたおかげで、かれも入塾者の中にまじって式場につらなることができ、またその日じゅう彼等と行動をともし、夜になって最初の座談会がひらかれた際には、自己紹しょうかい介かいまで同じようにやらしてもらったし、なお翌日からも、通学にさしつかえないかぎりには、すべて彼等と生活をともにすることもできたので、ほとんど最初の塾生といつてもいいような気持ちで暮らすことができたのであった。

塾生は、だいたい二十歳さいから二十五歳ぐらいまでの勤労青年で、その七八割までが農業者だった。中に三十歳をこした教育者が二
三まじっていたが、いずれにしても、各地の青年団員、もしくはその指導に密接な関係をもつものばかりであった。これは、この

塾が地域共同社会の理想化に挺身ていしんする中堅ちゅうけん人物の養成ということにその主目標をおいていた自然の結果だったのである。

塾生の学歴はまちまちだった。しかし、次郎の接したかぎりでは、かれがこれまで見て来た中学五年の生徒たちにくらべて、常識の点でも、理解力や判断力の点でも、はるかにすぐれていると思われる青年が大多数だった。

次郎はそうした青年たちに接しているうちに、自分のこれまでの学生生活が、ほんとうの生活から浮きあがったもののように思われて恥はずかしい気がした。朝倉先生は、かつて白鳥会の集まりで、学生が勤労青年を友人に持つことの必要を説いたことがあったが、その意味が今になってやっとわかるような気がするのだっ

た。かれは次第に塾生たちに愛情と尊敬とを感じはじめていた。中学の卒業試験はもう間近にせまっていたが、かれの関心はそのほうの勉強よりも、少しでも多くの時間を彼等といっしょに過ごすことに^{はら}払われていたのである。

しかし、かれにとつての最大の喜びは、何といつても、田沼先生——開塾以来、田沼さんは自然みんなに先生と呼ばれるようになっていた——にたびたび接して、直接言葉をかけてもらうようになったことであつた。

田沼先生は、塾財団の理事長という資格で、開塾式にのぞみ、一場のあいさつを述べたのであるが、次郎は、仏像の眼を思わせるようなその慈眼^{じがん}と、清潔であたたかい血の色を浮かしたその豊^ほ

うきよう

頬うきよう とに、まず心をひきつけられ、さらに、透徹とうてつした理知と

燃えるような情熱とによつて語られるその言々げんげんくく句々くくに、完全に魅みせられてしまったのであつた。

にしき

「錦にしきを着て郷土に帰るとというのが、古い時代の青年の理想でありました。もしそれで、郷土そのものもまた錦のように美しくなるとするならば、それもたしかに一つの価値ある理想といえるであります。しかし事實は必ずしもそうではなかつたのであります。錦を着て郷土に帰る者が幾いくにん人ありましても、郷土は依然いぜんとしてぼろを着たままであり、時としては、そうした人々を育てるために、郷土はいつそうみじめなぼろを着なければならぬ、というような事情さえあつたのであります。今後の日本が切に求め

ているのは、断じてそうした立身りっしん出世主義者ではありません。じつくりと足を郷土に落ちつけ、郷土そのものを錦にしたいという念願に燃え、それに一生をささげて悔くいない青年、そうした青年が輩はい出してこそ、日本の国士がすみずみまで若返り、民族の将来が真まに輝かがやかしい生命の力にあふれるのであります。」

そんな言葉をきいた時には、次郎は自分の心に一つの革命が起こったかのようにさえ感じたのである。

その後、かれが朝倉先生に紹介されて親しく接するようになった田沼先生は、ふかさの知れない愛と識しぎけん見との持ち主であつた。かれは、田沼先生のそばにすわっているだけで、自分の血がその愛によつてあたためられ、自分の頭がその識見しぎけんによつて磨みがかれて

行くような気がするのであった。

朝倉先生の開塾式における言葉もまた、次郎にとって新しい感か
激んげきの種だった。先生は、人間が本来もっている創造の欲望と調
和の欲望とを塾生相互そうごの間にまもり育てつつ、何の規則もなく、
だれの命令もなしに、めいめいの内部からの力によつて共同の組
織を生み出し、生活の実体を築きあげて行きたい、といった意味
のことを述べた。そうした共同生活の根本精神は、次郎がこれま
で白鳥会においておぼろげながら理解していたことではあつたが、
まだはつきりした観念にはなつていなかった。非常に新鮮しんせん
なひびきをもつてかれの耳をうつたのである。

塾生活の運営は、しかし、実際にあたってみると、朝倉先生の

理想どおりに進展するものではなかった。次郎は、期間の半ばを過ぎるまで、先生の顔にも、しばしば苦悩くのうの色が浮かぶのを見てとって、自分も心を暗くすることがあった。しかし、期間の終りが近づくにしたがって、だれの顔にも次第に明るさが見えて来た。「塾生の言動に、このごろ、やっとうらおもてがなくなつて来たようだね。」

先生が夫人に向かつてそんなことをいったのは、期間もあと十日かそこいらになったころであつた。それに対して夫人は答えた。「ええ、そのせいか、このごろほんとうに心からの親したしみが感じられて来ましたわ。それに、塾生同士の話しあいでも、いろんないい計画が生まれて来ますし、あだし、もう何にもお世話すること

ありませんの。」

期間の終わりに近く、全塾生は三泊ぱく四日の旅行に出た。朝倉先生夫妻も、むろんいつしよだった。次郎も、それには学校を休んでもついて行きたかったのであるが、あいにく卒業試験の最中だったので、どうにもならなかった。かれはここに来てから、この時の留守るすい居ほど味気ない気がしたことはなかったのである。

終しゅうりようしき了式

にもかかれはつらなることができなかった。やはり

試験のためだった。朝倉夫人のあとでの話では、塾生たちがいよいよ門を出て行く前には、かなり涙ぐましい場面もあつたらしかつた。次郎はそんな話をきくにつけても、塾生と終始生活をともにする機会が一日も早く来ることを望まないではいられなかった。

その機会は、しかし、そうながく待つ必要はなかった。というのは、かれが中学を卒業した翌月には、すでに第二回の塾生募集がはじまっていたからである。もつとも、かれにはまだ残された問題が一つあった。それは上級学校への進学の問題であった。このことについては、先生夫妻は、むろん極力かれに進学をすすめた。しかしかれはいつもの従順さに似ず、頑^{がん}として自分の考えをまげようとしなかった。

「読書のできるかぎりは、ぼく、どんな勉強でもします。上級学校の講義程度のことなら、それで十分間に合うと思います。それに、上級学校に籍^{せき}をおかなくても、それぐらいの知識が得られるということを一^{いっぱん}般の勤労青年に知ってもらうこともたいせつで

はないでしょうか。ぼくは実際に自分でそれを証明してみたいと思っているのです。」

これがかれの決心だった。この決心は、かれが第一回目の開塾以来考えぬいた結果固めていたことで、朝倉先生がそのために自分を放逐するといわぬかぎり、ひるがえさないつもりでいたのである。

朝倉先生も、それにはとうとう根負けして、

「では、いちおう君のお父さんに相談した上のことにしよう。なお、念のため、田沼先生のお考えもうかがって見るほうがいいね。」

「
」
と、
いって、その場を片づけた。そして、俊亮には手紙で、田沼

先生には直接会ってその意見をただしてみたところ、俊亮からはあつさり、本人の意志に任せる、といつて来た。田沼先生も、本人の意志がぐらつきさえしなければそれもおもしろかろう、勤労青年相手の指導者には、そういう人物が必要だから、といつて、むしろ賛意を表してくれた。なお、朝倉先生自身としても、まだ助手の適任者が見つからないでいたところだったので、次郎は、はじめのうちは塾生とも助手ともつかない立場で、あとでは一人まえの助手として、その後の塾生活にはいりこむことになったのである。こんなふうで、かれは現在までに、第一回目ちゅうとはんの中途半端ぱな体験までを合わせると、すでに九回の塾生活を送つて来ており、間もなく、その第十回目の生活にはいろいろとしているの

ある。その間に、かれはその心境においても、助手としての指導技術においても、また読書力においても、めざましい進歩のあとを示して来た。なお、かれについて特記すべきことのひとつは、かれが学校時代に大して熱意を示さなかつた運動競技とか、音楽とか、ごつくゆうぎ娯楽遊戯とかいったことにも研究の手をのぼし、今では技術的にも一通りの心得があり、それが塾生活の運営にかなりの役割を果たすようになって来たことである。

朝倉先生夫妻が、その真しんけん剣な反省と創意工夫によつて、一回ごとに向上のあとを示したことは、いうまでもない。二人には、いっばん一般の塾生活指導者にありがちな自己陶酔とうすいということが微塵もなかつた。次郎の眼にはすばらしい成功だと映ることも、二人

にとつては常に反省の資料であり、検討の余地を残すことばかりであつた。「肝胆かんたんを砕くだく」という言葉は、古人がこの二人のために残した言葉ではないかとさえ思われるほど、生活のあらゆる面について研究をかさね、工夫くふうを積んだ。それは、はた目には苦く悩のうの連続ともいふべきものであつた。しかも、それでいて二人の気分はいつも澄すみきつており、あせりがなく、あたたかではがらかだつた。次郎は、そうした気分気分に接するごとに、二人がうらやましくも尊くも思え、同時に自分のいたらなさかえりが省かえりみられるのだつた。

ある冬の朝、——それはたしか第四回目の塾生活がはじまろうとする数日前のことだつたと思うが、——朝倉先生は、居間いまの硝ガ

子戸ラスビごしに、じつと庭のほうに眼をこらし、無言ですわっていた。そこへ次郎が朝のあいさつに行つた。すると先生は黙だまつてかれに眼くばせした。かれにもそとを見よという合い図あひずらしかつた。次郎は、すぐ二人のうしろにすわつてそとを見た。葉の落ちつくした櫟くぬぎの林が、東から南にかけて、晴れた空に凍いてついている。日の出がせまつて、雲が金色に燃えあがつていた。数秒の後、まぶしい深紅しんくの光が弧こを描えがいてあらわれたと思うと、数十本の櫟の幹かたはだの片膚かたはだが、一せいにさつと淡あわい黄色に染まり、無数の動かない電光しんぱのような縞しまを作つた。

「しずかであたたかい色だね。」

朝倉先生は、櫟の林に眼をこらしたまま、ささやくように言つ

た。夫人も次郎も、言葉の意味をかみしめながら、かすかにうなずいただけだった。

太陽がすっかりその姿をあらわしたころ、今度は次郎が言った。
 「あの櫟くぬぎ林ばやしの冬景色は、たしかにこの塾しやうちやうの一つの象徴しやうちやうですね。ことにこんな朝は。——まる裸はだかで、澄んで、あたたかくて

——」

「うむ。しかし本館からはこの景色は見られない。惜おしいね。」
 「すると、この住宅の象徴でしょうか。しかし、それでもいいですね。——先生、どうでしょう。櫟の林にちなんでもこの住宅に何とか名をつけたら。」

「ふむ。……空林、空林庵くうりんあんはどうだ。つめたくて、すこし陰気いんき

くさいかな。」

「しかし、空林はすばらしいじやありませんか。ぼく、すきですね。庵がちよつとじめじめしますけれど。」

「それはまあしかたがない。こんな小さな家には、庵ぐらいがちよどいいよ。閣かくとか荘そうとかでは大げさすぎる。はっはっ。」

すると夫人が、

「いい名前ですわ。すつきりして。あたたかさは、三人の気持ちで出して行きましようよ。」

それ以来、この簡素な建物を空林庵と呼ぶことになったが、次郎にとつては、庵という字も、もうこのごろでは、じめじめした感じのするものではなくなっている。それどころか、かれは今で

は、どこにいても、空林庵の名によつて自分の現在の幸福を思い、しかもその幸福が、故郷の中学を追われたという不幸な事実に原因していることを思つて、人生を支配している「摂理」せつりの大きな掌てのひらの無限のあたたかさに、深い感謝の念をさえささげているのである。

*

次郎は、今、その空林庵の四畳半で、雀の声をきき、その飛び去つたあとを見おくり、そしてしずかに「歎異抄」たんにしやうに読みふけているわけなのである。

かれがなぜこのごろ「歎異抄」にばかり親しむようになったかは、だれにもわからない。それはあるいは数日後にせまっている

第十回目の開塾にそなえる心の用意であるのかもしれない。あるいは、また、かれの朝倉先生に対する気持ちだが、「たとへ法ほうねん然ぜん上しょうにん人にすかさされまゐらせて念仏して地獄じごくにおちたりとも、さらこうかいに後悔こうかいすべからずさふらふ」という親鸞しんらんの言葉と、一いちみやく脈脈相通あいっうずるところがあるからなのかもしれない。さらに立ち入つて考えてみるなら、自分の現在の生活を幸福と感じつつも、まだ心の底に燃えつづけている道江への恋れんじょう情情、恭一きんいちに対する嫉妬しつと、馬田うまたに対する敵意、曾根少佐や西山教頭を通して感じた権力に対する反抗はんかうしん心心、等々が、「歎異抄」を一貫して流れている思想によつて、煩惱ぼんのう熾しじょう盛せい・罪惡ざいあく深しん重ちゆうの自覚を呼びさます機縁きえんとなつて、いるせいなのかもしれない。すべてそうしたことは、かれ

のこれからの生活の事實に即して判断するよりほかはないであろう。

で、私は、過去三年半のかれの生活の手みじかな記録につづいて、かれのこれからの生活を、もつとくわしく記録して行くことにしたいと思つてゐる。

二 ふたつの顔

次郎は今朝から事務室にこもつて、第十回の塾生名簿を謄写版で刷つていたが、やつとそれが刷りあがつたので、ほつとしたように火鉢に手をかざした。しかし、火鉢の炭火はもうすつ

かり細っていた。謄写インキでよごれた指先が痛いほどつめたい。塾堂の玄関げんかんは北向きで、事務室はその横になつていたので、一日陽ひがささない。それに窓の近くに高い檜ひのきが十本あまりも立ちならんでいて青空の大部分をかくしている。つるつるに磨みがきあげられた板張りの床ゆかが、うす暗い光線を反射しているのが、寒々として眼めにしみるようである。

かれは火鉢に炭をつぎ足そうとしたが、思いとまった。そして、刷りあげた名簿をひとまとめにしてかかえこむと、すぐ中廊なかろうか下をへだてた真向かいの室にはいつて行つた。そこは食堂にもなり、座談会や、そのほかのいろいろの集まりにも使われる置敷たたみじきの大広間なのである。

事務室からこの室にはいつて来ると、まるで温室にでもはいつたようなあたたかさだった。午前十時の陽が、磨硝子すりガラスをはめた五間ぶつとおしの窓一ぱいに照っており、床とこの間の「平常心」と書いた無落款むらつかんの大きな掛軸かけじくが、まぶしいほど明るく浮き出している。

次郎は、かかえて来た刷り物を窓ぎわの畳の上に置いて、硝子戸を一枚あけた。霜しもに焼けたつつじの植え込みこが幾重いくえにも波形なみに重なって、向こうの赤松あかまつの森につづいている。空は青々と澄すんでおり、風もない。窓近くの土は、溶とけた霜柱でじつくりぬれ、あたたかに光って湯気をたてていた。

次郎はしばらく窓わくに腰こしをおろしてそとをながめていたが、

やがて陽を背にして畳にあぐらをかき、名簿を綴じはじめた。クリップをかけるだけなので、六七十部ぐらいは大して時間もかからなかった。

名簿を綴じおわると、かれは窓わくによりかかり、じっと眼をとして考えこんだ。開塾の準備は、これですっかりととのつたわけで、天気はいいし、いつもなら、新しい塾生を迎える喜びで胸が一ぱいになるはずなのだが、今度はどうもそうはいかない。開塾が近づくにつれて、かえって気持ちが悪く落ちていって来るのである。それは、このごろ、ともすると、かれの眼にうかんで来る二つの顔があったからであつた。まるで種類のちがつた、それして、おたがい縁もゆかりもない二つの顔ではあつたが、それ

が代わる代わる思い出され、全くべつの意味で、かれの気持ち
不安にしていたのである。

その一つは、荒田直人あらかたなおとという、もう七十に近い、陸軍の退役将
校の顔であつた。

この人は、中尉ちゆういか大尉かのころに日露戦争にちろに従軍して、ほと
んど失明に近い戦傷を負うた人であるが、その後、臨濟禪りんざいぜんにこ
つて一かどの修行をつみ、世にいうところの肚はらのすわつた人とし
て、自他ともに許している人である。それに家柄いえがらも相当で、上
層社会に知人が多く、士官学校の同期生や先輩せんぱいで将官級になつ
た人たちでも、かれには一目いちもくおいてるといったふうがあり、
また政変の時などには、名のきこえた政治家でかれの門に出入り

するものもまれではない、といううわささえたてられているのである。

次郎がこの人の顔をはじめて見たのは、第七回目の開塾式の時であつた。その日、かれは玄げん関かんで来らい賓ひんの受付をやつていた。受付といつても、いつもなら来賓はほんの六七名、それも創設当初からの深い関係者で、塾の精神に心から共鳴している人たちばかりだったので、かれにはもう顔なじみになつていたし、ただ出迎えるといった程度でよかつたのである。ところが、その日は、いつもの来賓がまだ一名も見えていない、定刻より三十分以上もまえに、一台の見なれない大型の自家用車が玄関に乗りつけた。そして、その中から、最初にあらわれたのは、眼すゝめの鋭い、四十が

らみの背広せびろふく服の男だったが、その男は、車のドアを片手で開いたまま、もう一方の手を中のほうにさしのべて言った。

「着つきました。どうぞ。」

すると、中のほうから、どなりつけるような、さびた声がきこえた。

「ゆるしを得たのか。」

「は。……いいえ。」

「ばかッ。」

次郎はおどろいた。そして、思わず首をのぼし、背広の男の横から車の内部をのぞこうとした。しかし、かれがのぞくまえに、背広の男はもうこちらに向きをかえていた。そして、てれくさい

のをごまかすためなのか、それとも、それがいつものくせなのか、
変に肩かたをそびやかして、玄関先のたたきをこちらに歩いて来た。

かれは、帽子ぼうしをとっただけで、べつに頭もさげず、ジャンパー
姿の次郎をじろじろ見ながら、いかにも横柄おうへいな口調くちようでたずね
た。

「今日は新しく塾生がはいる日ですね。」

「そうです。」

「式は何時からです。」

「もうあと三十分ほどではじまることになっています。」

「荒田さんがそれを見学したいといって、今日はわざわざお出で
になっていますが、そう取次いでください。」

「荒田さんとおつしやいますと？」

「荒田直人さんです。田沼^{たぬま}理事長にそうおつたえすればわかります。」

「田沼先生はまだお見えになっておりませんが……」

「まだ？」

「ええ、しかし、もうすぐお見えだと思えます。」

「塾長は？」

「おられます。」

「じゃあ、塾長でもいいから、そう取り次いでくれたまえ。」

次郎は、相手の言葉つきが次第^{しだい}にあらつぽくなるのに気がついた。しかし、もうそんなことに、むかつ腹^{ばら}をたてるようなかれで

はなかつた。かれは物やわらかに、

「じゃあ、ちよつとお待ちください。」

と言つて、玄関のつきあたりの塾長室に行った。そして、すぐ朝倉先生といつしよに引きかえして来て、二人分のスリッパをそろえた。

朝倉先生は、いつもの澄すんだ眼に微笑びしょうをうかべながら、背広服の男に言つた。

「私、塾長の朝倉です。はじめてお目にかかりますが、よくおいでくださいました。さあどうぞ。」

それはいかにも背広の男を荒田という人だと思ひこんでいるかのような口ぶりだった。

「はあ、では……」

と、背広の男は、いくらかあわてたらしく、さつきとはまるでちがった、せかせかした足どりで自動車のほうにもどって行った。そして、

「田沼さんはまだお見えになっていないようですが、さしつかえないそうです。」

と、まえと同じように、片手を自動車の中にさしのべた。

「どうれ。」

うなるようにいって、背広の人に手をひかれながら、自動車がらあらわれたのは、縫い紋ぬもんの羽織はおりにセルはかまの袴はかまといういでたちの、でっぷり肥ふとった、背丈せたけも人並ひとなみ以上の老人だった。黒眼鏡をかけ

ているので、眼の様子はわからなかったが、顔じゆうが、散弾さんだんでもぶちこまれたあとのようにでこぼこして、いかにもすごい感じのする容貌ようぼうだった。

二人が近づくのを待つて、朝倉先生があらためて言った。

「あなたが荒田さんでいらつしやいますか。私は塾長の朝倉です。今日はよくおいでくださいました。さあ、どうぞこちらへ。」

「塾長さんですか。荒田です。」

と、老人はかるく首をさげたが、顔の向きは少し横にそれていた。それから、背広の人にスリッパをはかせてもらつて玄関をあがり、そろそろと塾長室のほうに手をひかれて歩きながら、

「田沼さんが青年塾をはじめられたといううわさだけは、もうと

うからきいていました。わしも青年指導には興味があるんで、一度見学したいと思つていたところへ、つい昨日、ある人から今日の開塾式のことをきいたものじゃから、さつそくおしかけてまいたたわけです。ご迷惑めいわくではありませんかな。」

「いいえ、決して。……迷惑どころではありません。……理事長も喜ばれるでしょう。……実は、ごくささやかな、いわば試験的な施設しせつだものですから、各方面のかたに大げさな御案内を出すのもどうかと思ひまして、いつも内輪うちわの者だけが顔を出すことにいたしているようなわけなんです。」

朝倉先生は、べつにいいわけをするような様子もなく、淡々たんたんとしてこたえた。すると、荒田老人は、ぶつきらぼうに、

「これからは、わしもその内輪の一人に、加えてもらいたいもの
ですな。」

朝倉先生も、それにはさすがに面くらつたらしく、

「はあ——」

と、あいまいにこたえて、塾長室のドアをひらいた。

塾長室のドアがしまると、ほとんど同時に田沼理事長が自動車を乗りつけた。次郎が出迎えて、小声で荒田老あらたろうのことを話すと、

「そうか。」

とうなずいて、すぐ塾長室にはいつて行つたが、次郎には、気のせいかな、そのうなずきかたに何か重くるしいものが感じられた。そのあと、いつもの顔ぶれの来賓らいひんがつぎつぎに見え、せまい

塾長室はいっぱいになった。しかし、廊下にもれる話し声は、これまでの開塾式の日のようににぎやかではなかった。まるで話し声のきこえない時間がむしろ多いくらいだった。次郎はいやにそれが気がかりだった。河瀬^{かわせ}という少年の給仕がいて、茶菓^{さか}をはこんだりするために、たびたび塾長室に出はいりしていたので、かれに中の様子をきいてみようかとも思ったが、それも何だか変だという気がして、ただひとりで気をもんでいた。

定刻になって塾生を式場に入れ終わると、かれは来賓を案内するため、すぐ塾長室にはいつて行ったが、その時にも、話し声はほとんどきこえなかった。見ると荒田老は両腕^{りょううで}を深く組み、その上にあごをうずめて、居眠り^{いねむ}りでもしているかのような格好^{かっこう}。

をしていた。ほかの人たちの中にも、頭を椅子いすの背にもたせて眼をつぶっているものが二三人あつた。あとはみんなめいめいに塾生名簿に眼をとおしていたが、それも気まずさをそれでまぎらし、ているといったふうであつた。

やがて式場に案内されて着席してからの荒田老の姿は、まさに一個の怪奇かいきな木像であつた。式の順序は一般いっぽんの教育施設とたいして変わったこともなく、何度か起立したり着席したりしなげればならなかつたが、老は着席となると、必ず両手をきちんと膝ひざの上におき、首をまつすぐにたて、黒眼鏡の奥おくからある一点を凝ぎよう視ししているといった姿勢になつた。そして壇だんじよう上の声は、理事長、塾長、来賓と三たび変わり、たつぷり一時間を要したにも

かかわらず、老は身じろぎ一つせず、黒眼鏡から反射する光に微び動どうさえも見られなかつたぐらいであつた。

式がすむと、来賓も塾生といつしよに昼食をともにする段取りになつていた。しかし荒田老は式場を出るとそのまま塾長室にもはいらず、すぐ帰るといいだした。理事長が食事のことを言つて引きとめようとすると、

「めし？ わしはめしはたくさんです。」

と、そつけなく答え、付き添ついの背広その男をうながし、さつさと自動車に乗つてしまった。

朝倉夫人は第一回以来のしきたりで、その日は入塾生のこまごました世話をやいたり、炊事すいじのほうの手助けをしたりしていたた

め、開式になって、はじめて荒田老の怪奇な姿に接し、非常におどろいたらしかった。そして、午後になって、理事長以下來賓が全部引きあげたあと、次郎に今朝のいきさつを話してきかされ、なお塾長室で、朝倉先生と三人集まったの話のときに、先生から老の人物や、その社会的勢力などについてあらましの話をきくと、夫人はさすがに心配そうに眉根まゆねをよせて言った。

「塾の中だけのむずかしさなら、かえって張りあいがあつて楽しみですけど、外からいろいろ干渉かんしょうされたりするのはいやですわね。」

しかし、朝倉先生はそれに対して無雑作むざうさにこたえた。

「外からの圧力の加わらない共同生活なんか、あり得ないさ。あ

つても無意味だろう。そういう点からいって、実はこれまでのこの生活は少し甘すぎたんだ。これからがほんものだよ。」

その後は、開塾式にも閉塾式にもきまつて荒田老の姿が見えた。こちらからそのたびごとに案内を出すことになったのである。式場における理事長と塾長とのあいさつは、時によつて多少表現こそちがえ、趣旨は第一回以来少しも変わっていないので、荒田老も何回となく同じ内容のことをきくわけであった。そして式がすむとすぐ帰つてしまうのだから、何がおもしろくて毎回わざわざ顔を見せるのか、次郎にはわけがわからなかつた。世間には来賓祝辞を所望しよもうされる機会が来るのを一つの楽しみにして、学校の卒業式などに臨むのぞ人も少なくはないが、それにしては人がらが少

し変わりすぎている。少なくとも、それほど低俗ていぞくで凡庸ほんような人物だとは思えない。内々心配されているように、指導方針について何か文句をつけたがつているとすれば、すでに最初からその機会だったはずである。にもかかわらず、いつも黙々もくもくとして式場へのぞみ、黙々として理事長と塾長とのあいさつをきき、そして黙々として帰って行く。次郎には、それが不思議でならないのだった。怪奇な容貌ようぼうがいよいよ怪奇に見え、気味わるくさえ感じられて来たのである。

しかしこの謎なぞは、このまえの第九回の開塾式の日について解けた。

その日、荒田老は、めずらしく式後に居残いのこつてみんなと食事を

ともにした。そして食事がすんだあとも、いつになくけいみょう軽妙な
 しやれを飛ばしたりして、他の来賓たちと雑談をかわし、なか
 か帰ろうとしなかった。で、いつもなら食後三十分もたてば引き
 あげるはずの他の来賓たちも、荒田老に対する気がねから、かな
 りながいこと尻しりをおちつけていた。しかし二、三の来賓がとうと
 うたまりかねたように立ちあがり、その一人が荒田老に近づいて、
 「お先にはなはだ失礼ですが、ちよつと急な用をひかえています
 ので……」

と、いかにもきようしゆく恐縮したようにいうと、荒田老は、黒眼鏡の
 顔をとぼけたようにそのほうに向けて答えた。

「わしですか。わしにならどうぞおかまいなく。……今日はわし

は午後までゆっくり見学さしてもらうことにしておりますので。」

それから朝倉先生のすわっているほうに黒眼鏡を向け、

「塾長さん、ご迷惑ではないでしょうか。」

「いいえ、いっこうかまいません。どうぞごゆっくり。」

朝倉先生は、みんなの緊張した視線の交錯こうさくの中でこたえた。

わざとらしくない、おちついた答えだった。

「実はね、塾長さん——」

と、荒田老はいくらか威圧いあつするような声で、

「式場であんたのいわれることは、毎度きいていて、大よそは、

わかつたつもりです。しかし、ちよつと腑ふにおちないところがあ

りましたな。——これは、理事長のいわれることについても同じ

じやが。——で、もう少し立ち入っておききたいと思つて
います。」

「いや、それはどうも。……なにぶん式場ではじつくり話すとい
うわけにはまいりませんので。で、どういう点にご不審ふしんが
おありでしょうか。」

立ちかけていた来賓たちも、そのまま棒立ちになつて、荒田老
の言葉を待っていた。すると荒田老はどなるように言った。

「わしとあんたの間で問答しても、何の役にもたたん。」

「は？」

と、朝倉先生はげんそうな顔をしている。

「あんたがこれから塾生に何を言われるか、それがききたいので

す。」

「なるほど、ごもつともです。」

朝倉先生は微笑びしょうしてうなずいた。

「今日、式場で、あんたは午後の懇談会こんだいかいであんたの考えをもつと委くわしく話すといわれましたな。」

「ええ、申しました。」

「わしは、それを傍ぼうちよう聴きさしてもらえば結構です。」

「なるほど、よくわかりました。どうか、ご随意ずいになすつていただきます。」

来賓ぬまたちは、あとに気を残しながら、間もなく引きあげた。田沼理事ぬま裏もすぐあとを追って引きあげたが、立ちがけに荒田老の

肩かたを軽くたたきながら、冗談じょうだんまじりに言った。

「どうぞごゆつくり、私はお先に失礼します。あとは塾長まかせですが、塾長に何かまちがったことがありましたら、お叱しかりは私
がうけますから、よろしく願いますよ。」

荒田老は、それに対してはうんともすんとも答えず、腕を組んで木像のようにすわっているきりだった。

そのあと、玄関で、塾長と理事長との間に小声でつぎのような問答がかわされたのを、次郎はきいた。

「行事はいつもの通りにすすめていくつもりです。」

「むろん。」

「さけ得られる摩擦まさつはなるだけさけたいと思っておりますが……。」

「そう。それはできるだけ。……しかし、それも塾の方針があいまいにならない程度でないと……」

「それは、いうまでもありません。」

やがて午後の懇談会の時刻になった。合い図はすべて、事務室の前につるした板木ばんぎ——寺院などでよく見るような——を鳴らすことになっていたが、次郎がその前に立って木槌きづちをふるおうとしていると、荒田老の例の付き添いの男——鈴木すずた田という姓せいだった——が、塾長室から急いで出て来てたずねた。

「懇談会はどこでやるんです。」

「さつき食事をした畳敷きの広間です。」

「あ、そう。」

と、鈴田はすぐに塾長室に引きかえした。そして、次郎がまだ板木を打っている間に、荒田老の手を引いて広間にはいつて行った。

次郎が板木を鳴らしおわって広間にはいつたときには、荒田老はもう窓ぎわに、鈴田とならんでどつしりとすわりこんでいた。次郎が床の間のほうを指さして、

「どうぞこちらに。」

というと、鈴田はだまって手を横にふり、ただ眼だけをぎらぎら光らした。

やがて朝倉夫人が炊事場のほうから手をふきふきやって来て、しも手の入り口から中にはいつた。ほとんど同時に、朝倉先生も

かみ手のほうの入り口からはいつて来た。

二人は代わる代わる荒田老に上座かみざになおつてもらうようにすすめた。しかし老は、黒眼鏡を真正面に向けたまま黙々としてすわつており、鈴田は眼をぎらつかせて手を横にふるだけだった。

塾生はそれまでにまだ一名も集まつていなかった。それからおおかた五分近くもたつて、やつと四十数名のものが顔をそろえたが、しかしみんなしも座のほうに窮きゆうくつ屈くつそうにかたまつて、じろじろと荒田老のほうを見ているだけである。

「いやにちぢこまつているね。そんなふうに一とところにかたまらないで、もつとのんびり室をつかつたらどうだ。」

床の間を背にしてすわっていた朝倉先生が笑いながら言った。

夫人は先生の右がわに少し斜め向きにすわっていたが、しきりに塾生たちを手招きした。

塾生たちは、それでやっと立ちあがり、前のほうに進んで来るには来たが、しかし、今度おちついた時には、講演でもきく時のように、みんな正面を向いてすわっていた。しかも、朝倉先生との間には、まだ畳二枚ほどの距離きよりがあつた。

「これから懇談会をやるはずだつたね。そうではなかつたのかい」

朝倉先生が一番まえの塾生にたずねた。

「はあ。」

と、たずねられた塾生は、何かにまごついたように、隣となりの塾

生の顔をのぞいた。

「これでは、しかし、懇談ができそうにもないね。一たい君らは、村の青年団で懇談会をやる時にも、こんな格好かっこうに集まるのかね。」

みんながおたがいに顔を見合わせた。

「懇談会なら懇談会のように、もつと自然な形に集まったらどうだ。塾長と塾生とが川をへだてて相対峙あいたいじしているような格好では、懇談できない。第一、これでは君らお互いたがの間の話し合いに不便だろう。そんなわかりきったことにまで一々世話をやかせるようでは心細いね。」

そこでみんなは、まごつきながらも、もう一度立ちあがって、

どうなり円座えんざの形にすわりなおした。しかしまだ十分ではない。不必要に重なりあつて、顔の見えない塾生もある。

すると、先生の左がわにすわっていた次郎が言った。

「だいじょうぶ暴風のおそれはありませんから、そう避難ひなんしないでください。」

とうとうみんな笑い出した。笑っているうちに、円座らしい円座がやつとできあがった。

そんなさわぎの中で、荒田老はやはり眉まゆ一つ動かさないうすわっており、鈴田はあからさまな冷笑をうかべて、みんなを見まもっていた。

座がおちつくのを待つて、朝倉先生がおもむろに話し出した。

「けさ式場で、ここの共同生活の根本になることだけはだいたい話しておいたが、これまで諸君がうけて来た団体訓練とはかなりゆきかたがちがっているのではないかと思うし、自然腑ふにおちなかった点も多かろうと思うので、懇談にはいるまえに、念のためもう少しくだいて私の気持ちを話しておきたいと思う。」

次郎は荒田老の顔の動きに注意を怠おこたらなかつた。黒眼鏡がかすかに動いて、朝倉先生の声のするほうに向きをかえたように思われた。

「私はまず諸君にこの場所を絶海ぜっかいの孤島ことうだと思ってもらいたい。偶然ぐうぜんにも諸君は時を同じゅうしてこの孤島ことうに漂流ひょうりゅうして来た。私もむろん諸君と同様、漂流者の一人である。これまではおたが

いに名も顔も知らなかつたものばかりであるが、運命は、この孤島の中で、おたがいをいつしよにした。まずそう心得てもらいたい。――

「さて、そう心得ると、おたがいに知らん顔はできないはずである。それどころか、一人ぼっちでなくて、まあよかつた、と胸をなでおろし、さつそく言葉だけでもかわしてみたくなるのが自然であろう。多人数の中には、一目見たばかりでいやな奴やつだと思つような相手があるかもしれないが、それでも、絶海の孤島でこれから毎日顔をあわせるように運命づけられた相手だと思えば、好んでけんかをする気にはなれないだろう。できれば表面だけでも仲よく暮くらしたいと思うにちがいない。それが自然の人情である。

憎み^{にく}あうのも自然の人情の一種にはちがいないが、しかし、仲よく暮らすのと憎みあつて暮らすのと、どちらがほんとうの人情に合するかというと、それはいうまでもなく前者である。というのは、憎みあつて暮らすより、仲よく暮らすほうが愉快^{ゆかい}だからである。人情の中の人情、つまりいつさいの人情の基礎をなすものは、愉快になりたいと願う心である。だれも不愉快になりたいと願うものはあるまい。憎みあうのが一種の人情だというのも、もとをただせば、相手が自分を不愉快にする原因になっているからだと思ふが、しかし憎みあうことのために、決しておたがいが愉快にならないばかりか、かえつていつそう不愉快さを増すことが明らかである以上、憎みあうのは、いわばとまどいをしている人情で、

ほんとうの人情だとはいえないわけである。――

「そこで、まず第一に私が諸君にお願いしたいのは、このほんとうの人情、だれもがまちがいなくめいめいの胸に抱いだいているこの人情を存分に生かしあいたいということである。宗教・道徳・哲て学つがくなどの理論を持ち出してやかましいことをいえば、いろいろいうこともあるだろうが、愉快になりたいのがおたがいの偽いつわらない人情であり、そしてそのためにおたがいに仲よく暮らしたいというのも人情であるならば、ひとまずやかましい理屈りくつはぬきにして、その人情を生かしあうことに、ここの共同生活の出発点を定めてもいいのではあるまいかと思う。」

次郎は、これまで、いくたびとなく朝倉先生の話を書きいて来た

が、今日の表現は全く新しいと思った。塾生を「絶海の孤島の漂流者」に見たてたのはじめてのことだったし、だれにも納得のいく「人情」に出発して塾の生活を説明しようとしたのも、これまで例のないことだったのである。かれは先生の言葉にきき入って、いつの間にか荒田老の顔から眼をそらしていた。

先生は、その澄んだ眼をとじたり開いたりしながら、考え考え、話をすすめていった。

「ところで、一口に仲よくするといっても、仲のよさにも、種類があり、深^{しんせん}浅^{せん}の差がある。そして、どうかすると、仲のよいままに、みんなが墮落^{だらく}するということがないとも限らない。みんなが墮落するというのは、実はみんながおたがい人間を殺しあつ

ているからで、それでは真の意味で仲がよいとはいえない。しかも、そうした仲のよさは決してながつづきするものではない。ほんのちよつとしたはずみで冷たくなってしまうか、あるいははなはだしいのになると、仇かたきどし同士のようになってしまうものである。その結果、非常に不愉快になつて、愉快になりたいという人情の中の人情もだめになつてしまう。――

「そこでたいせつなのは、おたがいに人間を伸のばしあうようにたえず心を使うということではなければならない。これが諸君に対する私の第二のお願いである。伸ばしあうためには、時にはおたがいに気にくわぬことをいいあつたり、尻をたたきあつたりしなければならぬかもしれない。それはちよつと考えると不愉快なこ

とであり、人情にもとることである。しかし、それを忍しのばなければ、ほんとうの意味で仲よくなれないし、したがってほんとうの意味で愉快にもなれない。つまり人情の中の人情が味わえないということになるのである。――

「仲よく戒いましめあい、仲よく尻をたたきあうということは、決してなまやさしいことではない。それをうまくやつていくには、随ずいぶ分ぶんとおたがいの心が深まらなければならぬのである。ところ
で、心が深まるためには、やはりおたがいに戒めあい、尻をたたきあわなければならぬ。それは最初のうちは愉快でないかもしれないが、しかし、ある程度辛しん抱ぼうしてやつていくうちには、かえってそういうことに大きな喜びを感じるようになるものである。

それは心が深まるからである。そしてそうになると、人間が加速度的に伸びていくし、喜びもそれに伴^{ともな}っていいよ大きく、高く、深くなつていくものである。――

「さて、第三にお願いしたいのは、おたがいの生活に組織を与^{あた}えるための工夫をこらしてもらいたいということである。それは、むろん、この共同生活の体^{てい}裁^{さい}をととのえるために必要なのではない。組織のための組織を作るような弊^{へい}におちいつてならないことは、いうまでもない。おたがいが仲よく人間を伸ばしあうのに最も都合のよい組織を作りあげたいのである。――

「ところで、さつきも言ったとおり、おたがいは、今日ここに漂流して来て、偶然いっしょになつたばかりなのだから、どんな組

織を作るかということについて、たよりになるような社会伝統というものが全くない。また、過去におたがいと同じような事情のもとに、ここで共同生活を営んだ人たちがあつたとしても、その組織がどんなものであつたかは、今は全く不明である。要するに伝統は何一つない。すべてはこれから始まるのである。もつとも、こうした建物があり、森があり、畑があるからには、さがせば過去の漂流者たちが営んだ共同生活の姿をしのぶ材料がいくらかはあるかもしれない。しかし、法律・制度・規則・命令といった種類のもものは、何一つ残されてはいない。諸君は私の口からそれを聞きたいと思つているかもしれないが、私もまた今日漂流して来たばかりの人間なのだから、それを知つていよう道理がない。

あるいは諸君の中には、私にそうしたものを作ってもらいたいと考えているものがあるかもしれない。しかし、私はただ諸君よりいくらか年をとつていてというだけで、この島の生活について無経験であるという点では、諸君と少しも変わるところがない。その点では諸君の先輩せんぱいだとさえいえないのだから、まして諸君の指導者でもなければ、命令者でもない。そういうことを私に期待しては、ここの生活は成り立つ見込みみこがない。すべては、諸君自身の努力にかかっているのである。——」

次郎は、いつもなら、朝倉先生がこの大事な一点にふれると、塾生たちのそれに対する反応を見ようとして、いそがしく眼をうごかすところだった。しかし、その時、かれの視線は、かれ自身

でも気づかないうちに、荒田老のほうに引きつけられていた。ところで、かれにとって全く意外だったのは、荒田老がその時めずらしく、その木像のような姿勢をくずし、両手を口にあてて大きなあくびをしたことであつた。かれが荒田老に予期していたものは、よかれあしかれ、もつと真しんけん剣な表情か、さもなくば全くの無表情だったのである。

かれは思わず齒をくいしばつた。朝倉先生は、しかし、相変わらずしずかに話をつづけるのだった。

「かように、何一つ伝統もなければ、一人の指導者もないところでは、おたがいがめいめいの知恵をしぼり、その協力によつて組織を作りあげていくよりしかたがない。そこで、これからのこ

この生活にとって非常に大切なのは創造の精神である。諸君の中には、これまで、伝統や規則や、特定の人の指揮命令しきに従って行動するようにのみ訓練され、共同生活訓練といえ、だいたいそういう訓練だと心得ている者があるかもしれないが、ここでの生活はそれとは全くちがわなければならない。全くと言っては少し言ひすぎるかもしれないが、ともかくも、まずめいめに自分で考え、自分で判断し、その考えなり判断なりをおたがいに持ちよつて、それを取捨しゆしゃし、選択せんたくし、総合して行くのでなければならぬ。共同生活にとって、遵奉じゆんぽうとか服従とかいうことのないせつなことはいうまでもないが、ここでは守るべき法も、従うべき権威けんいもまだできていないのだから、もしそれが必要なら、ま

ずおたがいの努力によつてそれを創^{つく}りあげていかなければならぬのである。伝統や、すでにできあがっている規則や、だれかの指揮命令で動くように慣らされた人にとっては、随分勝手がちがうだろう。何だかたよらないという気がするかもしれない。しかし、たよるべき何ものもない絶海の孤島におたがいが漂流して来たと思えば、それよりほかに道はないわけである。とにかく努力して見ることである。あるいは、中には、——これはまさかとは思うが——組織などなければいい、強制がなくてそのほうがかえつて気楽だ、と考えているものがあるかもしれない。もし、万一にも、諸君のすべてがそう思っているなら、——いいかえると、それが諸君の精一ぱいの知恵を出しあつての結論なら、私は

あながちそれに反対しようとは思わない。何事も経験だから、それではたしておたがいの生活が愉快になるものかどうか、ためして見るのもいいだろう。しかし、常識ある諸君が、まさかそんな乱暴な実験をやるだろうとは、私には信じられない。――

「考えて見ると、おたがいが、今言つたように知恵をしぼりあつて、おたがいの共同社会を建設して行くという生活は、ただ従じゆう

じゆん

順じゆんに伝統や規則や指揮命令に従つて形をととのえていくという

ような簡単な生活ではない。それだけにむずかしくもあれば、またその途とちゆう中で、いろいろのつまずきも経験しなければならぬだろう。あるいは、最後までつまずきの連続で終わるかもしれない。しかし、それも結構である。それでもおたがいの人間が伸び、

心が深まり、したがってほんとうの意味で仲のいい愉快的生活がひらけていくなら、命令服従の関係で形だけをとのえていく生活よりははるかに有意義である。要するに、ここの生活は、与えられたある型にはまりこむ生活ではない。あくまでも創る生活である。おたがいにはよく愉快に暮らしたいという共通の人情に出發して、その人情をできるだけ高く深く生かすような共同の組織とその運営のしかたとを、おたがいの頭と胸と行動とで創り出す生活、そしてその創り出すということに喜びを感じずる生活でなければならぬのである。——

「そこで、最後に言っておきたいのは、おたがいに結果をいそいで自分を偽^{いっわ}るようなことをしてはならないということである。形

のととのつた共同生活の姿を一刻も早くつくりあげようとしていかげんに妥協だきようしたり、盲従もうじゆうしたり、あるいは人任せにしたりすることは、厳につつまなければならぬ。めいめいが正直に、生き生きと自分の全能力を發揮はつきしつつ、矛盾衝突むじゆん しょうとつを克服こくふくし、それを全体として総合し、統一して行く、そういう過程が何よりもたいせつなのである。過程をいかげんにして、結果だけをとのえてみたところで、諸君は人間として少しも伸びたとはいえない。たとえ結果はどうであれ、その過程さえまじめにふんで行くなれば、それで諸君はたしかに伸びたといえるし、ここの生活は、諸君の将来の生活に対して一つの大きな役割を果たすことになるだろう。とかく世間は、形にあらわれた結果だけ

を見て、いろいろと批評したがるものだが、諸君は世間のそんな批評などに頓とんちやく着する必要はない。諸君はあくまでも純真に、諸君自身の良心の声にきいて、おたがいを伸ばしあうためにはどうすればいいか、それだけに専念すればいいのだ。——」

朝倉先生の言葉の調ちようし子には、これまでになく力がこもっていた。次郎は、思わずまた荒田老の顔をのぞいた。荒田老は、しかし、その時には、もういつもの動かない木像の姿にかえっていた。その代わりに、鈴田がいかにも自分の気持ちをおさえかねたかのように、唇くちびるをかみ、眼をいからしていた。

「そこで——」

と、朝倉先生は、調子をやわらげて、

「これからおたがいの生活設計について具体的に話しあいたいと思うが、それには、まず第一におたがいに漂流して来たこの島がどういうところであるか、つまり、おたがいは今どういうかんきよ環境うにおかれてしているのか、それをみんながはつきり知っておく必要がある。客観的な現実、それを知らないでは、理想も信念もどうにもなるものではないのだから。……で、私は懇談に先だつて、まず諸君にこの建物の内外をくまなく探検しておいてもらいたいと思つている。あらましのことはもうわかつているかもしれない。しかし、これからの生活にどこをどう利用し、何をどう使つたらいいか、そういう点まで注意してこまかに見てまわつた人は、おそらくまだないだろうと思う。遠慮えんりよはいらない。森や畑はむろ

んのこと、物置でも、戸棚とだなでも、押し入れでも、本箱ほんばこでも、どしどし探検してもらいたい。もつとも、本館の一部に炊事夫すいじふの家族と給仕の私室があり、なお向こうに空林庵くうりんあんという別棟べつむねの小さな建物があつて、そこはここにいる三人の私室になつていて、それだけは除外してもらふことにする。こんな除外例を設けると、絶海の孤島という感じがうすらぐかもしれないが、どうもいたし方がない。」

朝倉先生は、そう言つて笑つた。みんなも笑つた。笑わなかつたのは、荒田老と鈴田の二人だけだつた。

次郎が勢いよく立ちあがつていった。

「では、約一時間たつたら、また板木ばんぎを鳴らしますから、ここに

集まって下さい。それまでは自由に探検を願います。」

塾生たちは、面くらったような、しかしいかにも愉快そうな顔をして、いくぶんはしやぎながら、どやどやと室を出て行った。

塾生たちがまだ出おわらないうちに、朝倉先生が荒田老に近づいて行って、言った。

「長い時間おききいただいて、あうがとうございました。しばらくあちらでお休みくださいませんか。」

「いや、もうたくさん。」

荒市老はぶつきらぼうに答えた。そして、

「鈴田、もう用はすんだ。帰ろう。」

と腕組みをしたまま、すつくと立ちあがった。黒眼鏡は真正面

を向いたままである。

鈴田はすぐ荒田老の手をひいて歩き出したが、その眼は軽蔑けいべつするよう朝倉先生の顔を見ていた。

「もうお帰りですか。どうも失礼いたしました。」

と、朝倉先生は、べつに引きとめもせず、二人を見おくつて出た。朝倉夫人と次郎とは、眼を見あいながら、そのあとにつづいた。

荒田老は、それから、玄関口まで一言も口をきかなかつたが、自動車に乗るまえに、だしぬけにうしろをふりかえつて言った。

「塾長さん、あんたは毎日、新聞は見ておられるかな。」

「はあ、見ております。」

「時勢はどんどん変わっておりますぞ。」

「はあ。」

「自由主義では、日本はどうにもなりませんな。」

「はあ。」

「どうか、命令いっか一下、いつでも死ぬるような青年を育ててもらいたいものですな。」

「はあ。」

自動車が出ると、朝倉先生は夫人と次郎とをかえりみ、黙だまつて微笑した。

次郎は、それ以来、荒田老の顔を見ていない。このまえの閉塾式には、案内を出したにもかかわらず、顔を見せなかったのだ。

る。田沼理事長に対して、老がその後どんなことをいい、どんな態度に出ているか、それは朝倉先生にはきつとわかっているはずだが、先生は、次郎にはもとより、夫人に対しても、そのことについて何も語ろうとはしない。ただときどき、何かにつけて、

「われわれの仕事も、これからがいよいよむずかしくなつて来る。しかし、そうだからこそ、こうした性質の塾が、いよいよたいせつになるわけだ。」

といった意味のことを言うだけである。次郎にしてみると、発生が荒田老のことにふれまいとすればするほど、かえつて大きな不安を感じ、第十回の開塾式が近づくにつれ、その顔を思い出すことが多くなつて来たわけなのである。

かれの眼の底から荒田老の顔が消えると、それに代わって浮か
んで来るもう一つの顔があつた。それは道江みちえの顔であつた。

兄の恭きょういち一は、現在東大文学部の三年に籍せきをおいている。道

江は、女学校卒業後、しきりに女子大入学を希望していたが、何
かの都合でそれが実現できなかつたらしい。次郎にとつては、む
ろんそれは不幸なことではなかつた。かれは、上京後、日がたつ
につれ、いくらかずつ過去の記憶きおくからのがれることができ、三年
以上もたったこのごろでは、恭一にあつても、はじめのころほど
かれと道江とを結びつけて考えることもなく、時には、まるで道
江のことなど忘れてしまつて、愉快にかれと語りあうことができ

るまでになつていたのである。

ところが、つい二週間ほどまえ、ちょうど第十回の塾生募集をしめ切つたその日に、道江本人から、かれあてに、全く思いがけない手紙が来た。それには、かれが上京以来三年以上もの間、一度もかのじよ彼女に手紙を出さなかつたことに対して、じようたん冗談まじりに軽い不平がのべてあり、そのあとに、つぎのような文句が書いてあつた。

「近いうちに、父が用事で上京することになりましたので、私もその機会に、見物かたがたつれて行つてもらふことにしました。宿や何かのことは、何もかも恭一さんにおねがいしてありますから、ご安心ください。まだ日取りは、はつきりしません。ついた

らすぐお知らせします。お迎えは恭一さんに出でいただきますから、これもご安心ください。いずれお会いした上で、手紙で言い足りない不平を思いきりならべるつもりでいます。」

次郎は、この文句を通じて、道江のかれに対して抱いだいている感情が普通ふつうの友だち以上のものでないことを、はつきり宣告され、同時に彼女と恭一との関係が、過去三年の間にどんな進展を見せているかを暗々あんあんり裡に通告されたような気がして、それを読み終わった瞬しゆんかん間、頭がかつとなつた。しかし、すぐそのあとにかれの心をおそつたものは、めいるようなさびしさであり、虚無きよむてき的な自嘲じちようであつた。そして、それ以来、これまでほとんど忘れていたようになっていた道江の顔が、しばしば彼の眼底しゆつぼつに出没

するようになり、時としては、荒田老の怪奇な顔を押しよけることさえあつたのである。

広間の窓わくによりかかつて眼をつぶつたかれは、しかし、二つの顔が代わる代わるその眼底に出没するのに心をまかせていたわけでは、むろんなかつた。開塾式を明日にひかえた今、何といつても、かれにとつての最大の関心事は、塾堂生活のことであり、朝倉先生夫妻の助手としてのかれの任務を手落ちなく遂行すいこうすることであつた。だから、かれは、これまでもいくたびとなく反省して来た過去の塾堂生活の体験を、あらためて反省しなおして、新しい工夫くふうをこらすことに専念したかつたのである。だが、そう

であればあるほど、荒田老の怪奇な顔がかれの顔にのしかかり、道江のあざ笑うような顔がかれの胸をかきみだすのであった。

「ふうっ。」

と、かれは大きな息をして眼をひらいた。そして、さつきとじこんだ塾生名簿の一つをとりあげ、無意識にそれをめくっていった。塾生がはいつて来るまえに、その名前と経歴とをすつかり覚えこんでおこうとする、いつものかれの習慣が、そうさせたのである。しかし、かれの眼にうつったのは、塾生の名前や経歴ではなくて、やはり荒田老の顔であり、道江の顔であった。

かれは名簿をなげすて、もう一度ふかい息をして、床の間のほうに眼を転じたが、そこには、「平常心」と大書したたいしよ掛軸かけじくが、

全く別の世界のもののように、しずかに明るくたれていた。

三 大河無門・平木中佐

昼近くになつても、次郎は広間を出なかつた。陽を背にして窓によりかかつたままぼんやり塾生名簿を見たり、眼をつぶつたり、床の間の掛軸をながめたりして、落ちつかない気持ちを始め末しかねていたのである。

「あら、次郎さん、朝からずっとこちらにいらしたの？」

和服の上に割烹着をひっかけた朝倉夫人が廊下の窓から顔のぞかせ、不審そうにそう言ったが、

「ご飯はこちらでいただきましたよ。そのほうがあたたかくなってよさそうだよ。じゃあ、すぐはこびますから、先生をお呼びして来てちょうだい。」

と、すぐ顔をひっこめた。

次郎は返事をするひまがなかった。というよりも、変にあわてていた。かれはいきなり立ちあがって、部屋の片隅かたすみにつき重ねてあった細長い食卓しよくたくの一つを、陽あたりのいい窓ぎわにとくと、走るようにして空林庵くうりんあんに朝倉先生をむかえに行った。

二人が広間にはいつて来た時には、朝倉夫人は、もう食卓のそばにすわっていた。

「今日はどんぶりのご飯がまんしていただきますわ。でも、中

身はいつもよりごちそうのつもりですの。」

「そうか。」

と、朝倉先生は、どんぶりのふたをとりながら、

「よう、うなぎ鰻どんぶりじゃないか。えらくふんぱつ奮発したね。」

「三人だけでご飯をいただくの、当分はこれでおしまいでしよう。ですから——」

「なあんだ、そんな意味か。そうだとすると、せつかくのごちそうだが、少々気がつまるね。」

「どうしてですの。」

「女にとっては、やはり小さな家庭の空気だけが、ほんとうの魅みりよくらしい。そうではないかな。」

「あら、あたし、つい女の地金じかねを出してしまいましたかしら。自分では、もうそれほどではないと思つていますけれど。」

「ふ、ふ、ふ。私もそれほど深い意味でいったわけでもないんだ。」

朝倉先生はそう言つて笑つたが、すぐ真顔まがおになり、床の間の

「平常心」の軸にちよつと眼をやつた。そして、箸はしを動かしながら、しばらく何か考えるようなふうだったが、

「むずかしいもんだね。今度でもう十回目だが、私自身でも、いざ新しく塾生むかを迎えらるとなると、やはりちよつと悲壮ひそうな気持ちになるよ。」

次郎は先生の横顔に眼をすえた。すると、先生はまた、じょう

だんめかして、

「やはり、うなどんぐらいの壮行会には値あたするかね。はっはっはつ。つ。」

それで夫人も笑いだした。しかし次郎は笑わなかつた。先生はちらつと次郎の顔を見たあと、

「しかし、うなどんぐらいでごまかせる悲壮感でも、ないよりはまだまだかもしれない。元來愛の實踐じっせんは甘いあまものではないんだからね。愛が深ければ深いほど、そして愛の対象が大きければ大きいほど、その実践には、きびしい犠牲ぎせいを覚悟かくごしなけりやならん。十字架じゅうじかがそれを証明しているんだ。だから、悲壮感はじは決して恥はじではない。むしろ悲壮感のない生活が恥なんだ。」

「すると、平常心というのは、どういうことになるんです。次郎がなじるようにたずねた。」

「悲壯感をのりこえた心の状態だろう。」

「のりこえたら、悲壯感はなくなるんじゃないですか。」

「そうかね。」

と、先生は微笑^{びしょう}して、

「金持ちが金をのりこえる。必ずしも貧乏^{びんぼう}になることではないだろう。」

「ほんとうにのりこえたら、貧乏になるのがあたりまえじゃないですか。」

「じゃあ、知識の場合はどうだ。学者が知識をのりこえる。それ

は無知になることかね。」

次郎は小首をかしげた。朝倉先生は、箸をやすめ、夫人に注ついでもらった茶を一口のんでから、

「水泳の達たつじん人は、自由に水の中を泳ぎまわる。水はその人にとつて決して邪魔じやまではない。それどころか……」

「わかりました。」

次郎はきっぱり答えた。しかし、それがいつもそうした場合に二人に見せる晴れやかな表情はどこにも見られなかった。かれはむしろ苦しそうだった。おこっているのではないかとさえ思われた。

「今日は、次郎さんはどうかなすっているんじゃない？」

朝倉夫人が、不安な気持ちえがおを笑顔につつんでたずねた。次郎がむつつりしていると、今度は朝倉先生が、

「やはり悲壮感かな。それにしても、いつもとはちがいきるよ
うだね。そろそろ塾生も集まるころだが、何か気になることがあ
るんだったら、その前にきいておこうじゃないか。」

次郎はちよつと眼をふせた。が、すぐ思いきつたように、
「荒田さんは、このごろどうしていられるんですか。」

かれの心には、むろんこの場合にも道江みちえのことがひつかかつて
いた。むしろそのほうが荒田老以上に彼かれをなやましていたともい
えるのだった。しかしそれは口に出していえることではなかった
のである。

朝倉先生は、ちよつと眼を光らせて次郎の顔を見つめたが、すぐ笑顔になり、

「なあんだ。荒田さんのことがそんなに気になっていたのか。なるほど、あれつきり、こちらには見えないようだね。しかし、大したこともないだろう。何かあつたところで、うなどんでそうこう壮行かい会かいをしてもらったんだから、だいじょうぶだよ。はっはっはっはっ。
」

朝倉先生は、いつになくわぎとらしい高笑いをして箸をおいた。そして、茶をのみおわると、ふいと立ちあがり、そのまま空林庵のほうに行つてしまった。

次郎は、むろん、にこりともしなかつたし、朝倉夫人も今度は

笑わなかった。二人はかなりながいこと眼を見あつたあと、やつと食卓のあと始末にかかったが、どちらからも、ほとんど口をきかなかつた。

食卓がかたづくくと、次郎はすぐ玄関げんかんに行つて、受付の用意をはじめた。用意といつても、小卓を二つほどならば、その一つに、塾生に渡すわた印刷物を整理しておくだけであつた。

朝倉夫人も、間もなく和服を洋服に着かえて玄関にやつて来た。洋服は黒のワン・ピースだったが、それを着た夫人のすがたはすらりとして気品があり、年も四つ五つ若く見えた。夫人は、受付をする次郎のそばに立つて、塾生に印刷物を渡す役割を引きうけることになつていたのである。

二時近くになると、ぼつぼつ、塾生が集まり出した。リュック・サツクを負うたものもあり、入塾のためにわざわざ買い求めた^{まあた}ら^かわ^らとしか思えないような真新しい革のトランクをぶらさげているものもあつた。たいていは、カーキ色の青年団服だったが、中に四五名背広姿がまじつており、それらは比較的年かさの青年たち^だつた。

どの顔もひどくつかれて、不安そうに見えた。これは、毎回のことで、決してめずらしいことではなかつた。入塾生の大部分は、東京の土をふむのがはじめてであり、それに一人旅が多い。募^{ほし}集^し要^い項^くの末尾^{まつ}びに印刷^{いん}刷^{さつ}されている道順^{みち}だけをたよりに、東京駅^{とうきょう}や、上野駅^{うげん}や、新宿駅^{しんじゅく}の雑踏^{ざつ}をぬけ、池^{いけ}袋^{ぶくろ}から私鉄^{しりてつ}にのり

かえて、ここまでたどりつくのは、かれらにとって、なみたいていの気苦労ではなかつたのである。

次郎は、青年たちのそうした顔が見えだすと、もう荒田老や道江の顔など思い出しているひまがなかつた。かれは、かれらがまだ玄関に足をふみ入れないうちに、何かと歓迎かんげいの気持ちをあらわすような言葉をかけた。そして、かれらの名前をきき、それを名簿とてらしあわせて、到とうちやく着ちやくのしるしをつけおわると、すぐかれらに朝倉夫人を紹しょうかい介かいした。

「この方は、塾じゆくちよう長ちやう先生の奥さんです。期間中は、あなた方のお母さん代わりをしていただく方なんです。」

それをいう時のかれの顔はいかにも晴れやかで、得意そうだつ

た。朝倉夫人は、

「よくいらつしやいました。おつかれでしょう。」

と印刷物を渡しながら、ひとりひとりに笑顔を見せるのだったが、青年たちのつかれた顔は、夫人の聡明そうめいで愛情にみちた眼に出つくわすと、おどろきとも喜びともつかぬ表情で急に生き生きとなるのだった。次郎にとっては、青年たちのそうした表情の變化を見るのが、受付をする時の一つの大きな楽しみになっていたのである。

到着は午後四時までとなっていたが、その時刻までに、予定されていただけの顔が、全部異状なくそろった。みんなは、ひとまず広間に待たされ、受付が全部おわったところで各室に割りあて

られた。総員四十八名、一室六名ずつの八室でちようどであった。朝倉夫人と次郎とは、みんなを各室におちつけてしまうと、事務室のストローヴにあたりながら、あらためて塾生名簿に眼をとおした。これは二人のいつもの習慣で、めいめいに、受付の際に自分の印象に残った青年たちの顔を、その中からさがすためであった。

「次郎さんは、もう幾いくにん人ぐらいお覚えになつて？」

「さあ、十四五人ぐらいでしょうか。」

「もうそんなに？ あたし、まだやつと五六名。」

「今度は、特とくちよう徴のある顔が割合多いようですね。」

「そうかしら。あたし、そんなにも思いませんけれど。」

「こうして名簿を見ていると、覚えやすいのは、比較的年上の人のようですね。やはり、年を食っただけ特徴がはつきりして来るんでしうか。」

「それだけ垢^{あか}がたまっているのかも知れませんが。ほほほ。……だけど、ほんとうね。あたしが覚えているのも、たいていは年上の人だわ。大河さんっていう方もそうだし……」

すると、次郎は、急に名簿から眼をはなして、夫人の顔を見つめながら、

「その人、すぐ目につきましたか。」

「ええ、ええ、一目で覚えてしまいましたわ。名前からして、禪^{ぜん}の坊^{ぼう}さんみたいで、変わっていたからでもありませんしうけれど。」

「その人ですよ。ほら、こないだ先生からお話があったのは。」

「はああ、あの、京都大学で哲学てつがくをおやりになつて、今、中学校の先生をしていらつしやるつて方？」

「ええ、そうです。」

二人はあらためて名簿を見た。名簿には、それぞれの欄らんに、

「大河無門、二十七歳さい、千葉県、小学校代用教員、中学卒」と記入してあり、備考欄には、「青年団生活には直接の経験なきも興味を有す」と何だかあいまいなことが書いてあつた。

「これは本人から書いて来たとおりになんです。先生もそれでいいだろうとおっしゃつたものですから。」

次郎はそう言つて笑つた。むろんこれには事情があつたのであ

る。

実は、大河無門は、一昨年の春京都大学の哲学科を出ると、すぐ母校である千葉県の中学校に奉職ほうしよくしたが、もともと、いわゆるきょうだんてき教壇的きょうだんてき教育には大した興味も覚え、もつと実生活にまみれた教育をやつて見たいという希望を、たえず持ちつづけていた。そのうちに、たまたま友愛塾のことをききこみ、幸い任地から一日で往復できる距離きよりでもあつたので、ある日曜——それは一か月ばかりまえのことだったが——わざわざ朝倉先生をたずねて来て、塾長室で二人つきりで一時間あまりも話しこんだあと、すぐその場で入塾を決意し、その希望を申し出たのであつた。

もし現職のままでは入塾ができないとすれば、すぐ辞表を出し

てもいいときえかれは言ったのである。

朝倉先生は、話しているうちに、かれの決意がなみなみならぬものであるのを見てとった。同時にかれの人物に一種の重量感を覚えた。その重量感は、決してかれの言葉つきや態度から来るものではなかった。そうした表面にあらわれる言動の点では、かれはむしろ率^{そつちよく}直にすぎ、どこやらにおかしみさえ感じられるほどであった。しかし、それにもかかわらず、かれの人がら全体には、何とはなしに、どっしりしたものが感じられたのである。朝倉先生は、それを大河の人間愛の深さや思索^{しよく}の深さがそのまま実践力の強さになっているからであろう、というふうに判断したのだった。

しかし、先生は大河の人物に重量感を覚えれば覚えるほど、かれの入塾について、答えをしぶった。それは、自分の過去の経験から、かれのような人物をながく中等教育にとどめておきたいという気持ちからでもあったが、それよりも当面の問題として、かれを友愛塾の塾生としてむかえることに、ある不安が感じられたからであった。すべての点で一般いっばんの青年とはあまりにもへだたりのある人物が、指導者としてならとにかく、一塾生としてはいつて来るということが、塾の性質上、はたしていいことかどうか。みんなが、貧しいながらも、それぞれの創意と工夫とをささげあつて、集団の意志をねりあげ、共同の生活をもりあげていこうという、この塾の第一の眼目がんもくが、光りすぎた一人物の圧倒的あつとうてきな

影えいき響きょう 力りよく によつて、自然にくずれてしまふのではあるまいか。そうしたことが気づかわれたのである、

で、先生は最初、大河につきのよゝな意味のことを答へた。

「君のよゝな人に、この塾の生活を十分理解してもらふといふことは、学校教育にも何かきつとプラスになることだと信ずるし、その意味で、むしろ私としては、大いに歓迎かんげいしたい。しかし普通ふつうの塾生として来てもらうには、君はもうあまりにレベルが高すぎる。こちらとしては取り扱あつかいにも困るし、君としても物足りないうちがするだろう。で、学校の手すきの時に、おりおり見学といつたよゝなことでやつて来てはどうか。ここには君よりも三つ四つ年の若い助手が一名いるが、その助手に協力するといつた

立場で、見学してもらえば好都合だと思うのだが。」

大河は、しかし、そのすすめには全然応ずる気がなかった。かれは言った。

「僕はこれからの僕の教育生活の方向てんかん転換ぼくをする決心でお願いしているんです。そのためには、見学というような、なまぬるい立場では、どうしても満足できません。青年たちが共同生活をやって行く時の心の動きを、よかれあしかれ、その生活の内部からつかんでみたいんです。また、僕自身でも、青年たちと同じ条件で、その体験をみっちりなめてみたいんです。塾の根本方針は、お話で十分わかりましたし、むろん、出しゃばってリーダーシップをとったりするようなことは、絶対にいたしません。僕の学歴

や職業が、ほかの塾生たちに何かの先入観を与え^{あた}るといふご心配
がありましたら、ごまかしては悪いかもしれませんが、履^り歴^{れき}書^{しょ}
には何とか適当に書いておくつもりです。青年団生活にはまるで
無経験ですし、ついでにそういうことも書きこんでおけば、青年
たちに買いかぶられる心配もないだろうと思います。」

朝倉先生も、そうまで言われると、むげに拒^こむ^はわけにはいかな
かった。現職をなげうつても、というかれの決意には、冒^{ぼう}険^{けん}だ
という気がしないでもなかったが、一方では、かれほどの人物で
あれば、将来はまた何とでもなるだろう、という気もして、つい
にその希望をいれてやることにしたのであつた。

「やっぱり、ねえ。」

と、朝倉夫人は、いかにも何か感動したように、名簿から眼をはなし、

「ほかの方たちとは、どこかにまるで感じのちがったところがありましたわ。」

「ぼく、名前がわかっていましたので、とくべつ注意していましたが、あれですいぶんこまかいことに気のつく人のようですね。」

「そう？ 何かありましたか？」

「メモ用の紙が一枚、机の足のところにおちていたのを、来るとすぐひろいあげて、ぼくに渡^{わた}してくれました。」

「そう？ あたし、気がつかなかったわ。」

「その時の様子が、ちつともわざとらしくないんです。自分ではそんなことをしているのをまるで意識していないんじゃないかと思われるほど無表情だったんです。ぼく、それでよけい印象に残りました。」

朝倉夫人は、何度もうなずきながら、

「どうも、そんなたちの人らしいわね。白鳥会でいうと、おおさわ大沢さんみたいな人ではないかしら。」

「どこかに共通したところがあるかもしれないですね。見た感じは、たしかに似ていますよ。」

「だけど、——」

と、朝倉夫人はしばらく考えてから、

「大沢さんのまじめさとは、ちよつとちがつたところがあるようにも思えるわ。もつと自然なまじめさ、といったものが感じられるんではありません？」

「自然なまじめさ——」

次郎は口の中で夫人の言葉をくりかえした。

「こんなふうに言いますと、大沢さんのまじめさは不自然だということになりそうですけれど、それは悪い意味で言っているのじやありませんの。ただ、大沢さんのまじめさには、いつも意志がはつきり出ていますわね。いい意味の政治性と言いますか、それが人から全体にはつきり出ていて、無意識にものを言ったり、したりすることなんか、めつたにないでしょう。」

「なるほど、そう言われると、大河という人には、政治性といったものがまるでなさそうに思えますね。」

二人は、その時めいめいに、背のひくい、肩はばの広い、頬ひげを剃そったあとの真まっさお青な、五分刈りの、そして度の強い近眼鏡をかけた丸顔の男が、のっそりと玄関にはいつて来たときの光景を思いうかべていた。かれは黒の背広に黒の外がいとう套を重ねていたが、まず肩にかけていた雑ざつ囊のうをはずし、それからゆつくりと外套をぬいで、ていねいに頭をさげ、次郎に向かって、いくぶんさびのある、ひくい、しかし底そこ力じからのこもった声で、「千葉県の大河無門ですが」と言い、それから次郎にわたされた塾生名簿をすぐその場でひらいて、自分の名前のところを念入りに見たあと、

紹しょうかい介かい された朝倉夫人のほうにおもむろに眼を転じたのであつた。

「白鳥会の仲間にも、これまでの塾生にも、あんな型の人はひとりもいなかったようですが、その点から言つて、今度の塾生活には、とくべつの意味がありそうで、愉快ゆかいですね。」

「そう。やっぱり一人でも変わった目ぼしい人がいると、それだけ楽しみですわね。……もつとも、そんなことに大きな期待をかけるのは、平凡へいぼんじん人の共同生活をねらいにしているこの塾では邪じ道やどうだつて、先生にはいつも叱しかられていますけれど。」

「しかし、先生だつて、塾生の粒つぶがあまり思わしくないと、やはりさびしそうですよ。」

「それは、何といてもねえ。」

と、朝倉夫人は微笑した。そして、もう一度名簿をくつて、自分の印象に残っているほかの顔をさがしているらしかったが、急に首をふつて、

「だけど、こんなこと、いけないことね。受け付けたばかりの印象で、さつそく塾生の品しなさだ定めをはじめるなんて。」

次郎は頭をかいて苦笑した。朝倉夫人はしんみりした調子になり、

「大河さんという方、無意識に紙ぎれをひろつてくださつたとしても、あたしたち、ただその無意識ということだけを問題にしてはいけないと思いますわ。そうなるまでには、どんなに意志をは

たらかせ、どんなに苦勞をなすったかしれませんものね。」

次郎は、なぜか顔を赤らめ、眼を膝ひざにおとしていた。

しばらくして玄関に足音がしたが、それは朝倉先生が空林庵くうりんあんからもどつて来たのだった。

「みんな無事にそろつたかね。」

先生は、事務室をのぞいてそう言うと、そのまま塾長室にはいつて行つた。二人もすぐそのあとからついて行つて、何かと報告した。

先生は到着のしるしのついた名簿に眼をとおしながら、

「大河も来たんだね。何室にはいつたんだい。」

「第五室です。いろんな関係から、それが一番よかりそうに思つ

たものですから。」

次郎は、そう言つて、室割り^{へやわ}を書いた紙を先生に渡した。それには、大河の名を何度も書いたり消したりしたあとがあつた。

「大河の室割りには、ずいぶん苦心したらしいね。それほど神経に病む^やこともなかつたんだが。……しかし、まあ、どちらかというと、室長におされたりする可能性の少ないところがいいだろう。」

「ええ、それを考えまして、第五室には、大河より一つ年上で、郡の連合団長をやっている人を割り当てておいたんです。」

「なるほど。」

朝倉先生は、何かおかしそうな顔をしながら、うなずいた。

三人は、それから、そろって各室をいちじゆん一巡した。朝倉先生は、室ごとに、入り口をはいると、立ったまま無造作むぞうさに言った。

「私、朝倉です。……こちらは私の家内かないで、寮母りょうぼといったような仕事をしてもらうんだが、君らに、これから小母おぼさんとも呼んでもらえば、よろこぶだろう。……あちらの若い人は、本田君。君らの仲間の一人だと思ってもらえばいい。」

それから、

「みんな汽車でつかれただろう。今晚は、宿屋にでも泊とまったつもりで、のんきにくつろぐんだな。もつとも、郷里にはがきだけはすぐ出しておくがいい。」

そして、みんなが居いずまいを正し、きようしゆく恐縮おそくしているような顔

を、にこにこしながら見まわしたあと、すぐ室を出た。

その日はそれつきりで、べつに何の行事もなかった。塾生たちは、朝倉夫人や次郎をはじめ、給仕の河瀬や、炊事夫すいじふの並木なみき夫婦ふうふに何かと世話をやいてもらって、入浴をしたり、広間に集まって食事をしたり、各室で大火鉢おおひばちをかこみながら、各地のおみやげを出しあつて茶をのんだりするだけのことだった。就寝しゅうしんの時刻についても、十時半になったらきちんと電燈でんとうを消すことになつているから、そのつもりで、という注意あつたが与えられただけだった。何だか塾堂に來ているというより、修学旅行で宿屋に泊まっているという感じのほうが強かった。そして、そうした意味での親愛感なら、各室かくしつごとには、もうたいていできあがつてしまつて

いたのである。

それでも、いざ就寝という時になつて、どの室にもちよつとした混雑こんざつが生じた。というのは、十畳じようの部屋に大火鉢一つと六人分の机とをすえ、そこに六人分の夜具を都合よくのべるのには、かなりの工夫と協力を必要としたからである。

混雑は申し合わせたように十時ごろからはじまつた。それまで、塾生の一人一人に關係したことで、かゆいところに手がとどくように世話をやいていた朝倉夫人も次郎も、なぜかこの混雑には何の助言も与えず、事務室から、遠目に成り行きを見まもつているといったふうであつた。そして、十時半になると、次郎は、予告どおり、一分の遅延ちえんもなく廊下ろうかのスイッチをひねり、塾生た

ちの室の電燈を全部消してしまった。電燈を消されて悲鳴をあげた室も二三あつた。

次郎は、しかし、頓とんちやく着しなかつた。かれは電燈を消すまえに、廊下をあるいて、それとなく各室の様子をのぞいてまわつたが、どの室よりも早く室員が寢床ねどこについていたのは、第五室であつた。そして、大河無門は、その一番はいり口のところに、その大きな栗ぐりあたま頭を横たえ、近眼鏡をかけたまま、しずかに眼をつぶっていたのであつた。

次郎が、それを、その晩の一つの意味深いできごととして、朝倉夫人に報告したことはいうまでもない。

*

あくる日は、いよいよ第十回の入塾式だった。二月はじめの武蔵野さしのの寒さはきびしかつたが、空は青々と晴れており、地は霜しもどけでけぶっていた。

十時の開式までは、塾生たちはやはり自由に過ごすことになっていた。朝食をすますと、彼等かれらは日あたりのいい窓ぎわにかたまつて雑談をしたり、事務室におしかけて来て新聞を読んだりしていた。

八時をすこしすぎたころに、けたたましく事務室の電話のベルが鳴った。次郎が出て見ると、田沼たぬま理事長からだった。

「朝倉先生は？」

「塾長室においでです。」

「じゃあ、そちらにつないでくれたまえ。」

次郎は、何か急用らしいが今ごろになって何事だろうと思いな
がら、線を塾長室にきりかえた。

すると、まもなく、塾長室から朝倉先生の声がきれぎれにきこ
えて来た。

「はあ、なるほど。……それは、むろん、こぼむわけにはいきま
すまい。……ええ、ええ、……承知いたしました。いたし方ない
でしょう。……すると、こちらで予定していた来賓祝辞は、……
……ああ、そうですね。では、時間の都合を見まして適当にやるこ
とにいたしましたよう。……ええ？　ええ。やはりずいぶん気にやん
でいるようです。私からは何も話してはいませんけれど、あれっ

きり荒田あらたさんの顔が見えないので、何かあると思っ
ているんですよ。はっはっはっ。……ええ。……ええ。……ちよつとむき
になるところがありますが、ご心配になるほどのこと
もありません。……はい、では、お待ちして
います。」

電話がすむと、次郎は、すぐ自分から塾長室には
いって行って、たずねた。

「田沼先生は何かおさしつかえではありませ
んか。」

「いいや、まもなくお見えになるだろう。」

朝倉先生は、何でもないうように答えたあと、
次郎の顔を見て微笑しょうしながら、

「今日は、変わった来賓らいひんが見えるらしいよ。」

「荒田さん……じゃありませんか。」

「荒田さんもだが、陸軍省からだれか見えるらしい。」

次郎は、はっとしたように眼を見張り、しばらくおしだまつて突つ立っていたが、

「田沼先生から案内されたんですか。」

と、いかにも臍ふにおちないというような顔をしてたずねた。

「いや、そうではないらしい。荒田さんから、今朝急に、そんな電話が田沼先生のほうにかかつて来たらしいんだ。」

次郎はまただまりこんだ。朝倉先生は、わざと次郎から眼をそらしながら、

「それで、今日の来賓祝辞だが、時間の都合では、その陸軍省の方だけをお願いすることになるかもしれないから、そのつもりでいてくれたまえ。」

「軍人に祝辞をやらせるんですか。」

次郎はもうかなり興奮していた。

「礼儀れいぎとして、私のほうからお願いすべきだろうね。」

「しかし塾の方針と矛盾むじゆんするようなことを言うんじゃないか。」

「自然そういうことになるかもしれない。しかし、それはしかたがないだろう。」

「先生！」

と、次郎は一步朝倉先生のほうに乗り出して、

「先生は、自然そういうことになるかもしれないなんて、のんきなことをおっしゃいますが、ぼくは、それぐらいのことではすまないと思うんです。」

「どうして？」

「これは計画的でしょう。」

「計画的？」

「ええ、荒田さんの卑劣ひれつな計画にちがいないんです。荒田さんは、軍の名で塾の指導精神をぶちこわそうとしているんです。」

次郎の顔は青ざめていた。朝倉先生は、きびしい眼をして次郎を見つめていたが、

「そんな軽率けいそつなことは言うものではない。」

と、いきなり、こぶしで卓をたたいて、叱しかりつけた。しかし、次郎はひるまなかつた。

「軽率ではありません。これはまちがいのないことです。ぼくは断言します。」

「かりにまちがいのないことだとしても、そんなことを言つて、何の役にたつんだ。」

「ぼくは、祝辞をやらせるのは絶対にいけないと思うんです。それをやめていただきたいんです。」

「それは不可能だ。」

「こちらからお願いさえしなけりやあ、いいんでしょう。」

「そういうわけにはいかないよ。陸軍省からわざわざやって来るのに、知らん顔はできない。それではかえって悪い結果になるんだ。」

「すると、おめおめと降こうふく伏するんですか。」

朝倉先生の眼は、いよいよきびしく光り、しばらく沈ちんもく黙がつづいた。しかし、そのあと、先生の唇くちびるをもれた言葉の調子は、気味わるいほど平静だった。

「本田は、友愛塾の精神が、だれかの祝辞ぐらいで、わけなくくずれてしまうような、そんな弱いものだと思っっているのかね。」

先生の眼には次第しだいに微笑しだいさえ浮うかんで来た。次郎はこれまでの勢いに似ず、すっかり返事にまごついた。

すると、先生は、今度は、次郎をふるえあがらせるほどの激し^{はげ}い調子で、

「血迷ったことを言うのも、たいていにしたらどうだ。聞き苦し^い。」

次郎は、これまで、朝倉先生に、こんなふうな叱り方をされた記憶^{きおく}がまるでなかった。かれは、ながい間の先生との人間的つながりが、それで断絶でもしたかのような気になり、思わず、がくりと首をたれた。

朝倉先生は、しかし、すぐまた平静的な調子にかえって、

「いつも言うとおりに、今は日本中が病気なんだから、友愛塾だけがその脅^{きようい}威から安全でありうる道理がないんだ。病^{びようきん}菌はこ

れからいくらでもはいつて来るだろう。いや、これまでだって、すいぶんはいつて来ていたんだ、塾生自身が、ほとんど一人残らず、病菌の保有者だと言つてもいいんだからね。今日は、病菌がすこし大がかりに持ちこまれるというにすぎないんだ。むろん、大がかりな病菌の持ち込みは、できれば拒絶きよぜつするにこしたことはない。しかし、拒絶どころか、表面だけでもいちおうはありがたく頂戴ちようだいしなければならぬところに、実は、現在の日本の最大の病根があるんだよ。だから、おたがいとしては、病菌はこれからいくらでもはいつて来るものだど覚悟かくごして、その覚悟のもとに、病菌を無力にする工夫をこらすほかに道はない。むろんそれは、厄介やっかいなことではあるさ。しかし厄介なだけに、うまくそ

の始末がつけば、それだけ塾の抵抗ていこうりよく力をまし、かえつて健康が増進されるとも言えるんだ。とにかく何事も事上れんま錬磨だよ。その意味で、私は、今日はいいい機会にめぐまれたとさえ思っている。こんなことを言うと、君はそれを私の負け惜おしみだと思うかもしれないが、しかし、避けさけがたいものは避けがたいものとして、平気でそれを受け取つて、その上でそれに対たい処しよするのが、ほんとうの自由だよ。それがほんとうに生きる道でもあるんだ。随ずい所しよに主となる。そんな言葉があつたね。じたばたしてもはじまらない。わかるかね、私のいつていることが？」

「わかります。」

次郎はかなり間をおいて答えた。かれは、しかし、まだ先生の

気持ち正しく理解していたわけではなかった。事上錬磨という言葉を通じて、権力に対する反抗の機会を暗示あんじされたかのような気持ちでいたのである。

朝倉先生は、次郎の心の動きを見とおすように、その澄んだ眼をかれの顔にすえていたが、急に笑顔になって、

「そこで、変なことをきくようだが、君は今日、軍からの来賓に對して、どんな態度で接するつもりかね。」

これは、次郎にとって、なるほど変な質問にちがいはなかった。かれは、これまで、来賓に対する態度のことまで先生に注意をうけたことがなかったのである。かれはいかにも心外しんがいだという顔をして、

「ぼく、べつに何も考えていないんです。あたりまえにしていれば、いいんでしよう。」

「あたりまえ？ うむ。あたりまえであれば、むろんそれでいいさ。そのあたりまえが、友愛塾の精神にてらしてあたりまえであればね。」

次郎は虚きよをつかれた形だった。朝倉先生はたたみかけてたずねた。

「まさか、君は、あたらずさわらずの形式的な丁寧ていねいさを、あたりまえだと考えているのではないだろうね。」

次郎は眼をふせた。しばらく沈黙がつづいたあと、朝倉先生は、しんみりした調子で、

「今さら、君にこんなことを言う必要もないと思うが、友愛塾は、どんな相手に対しても冷淡れいたんであつてはならないんだ。あたたかな空気、それが塾の生命だからね。お互いたがは、それで世に勝とうとしてゐる。勝てるか勝てないかは、むろん予測よそくできない。しかし、それで勝とうとする意志だけは失つてはならないんだ。やはり事上錬磨だよ。今日のような場合に、それを忘れるようでは、何のための友愛塾だか、わからなくなる。」

次郎の耳には、事上錬磨という言葉が異様にひびいた。前の場合には、権力に対する反抗の機会を暗示されたように受け取つていたが、今度の場合は、明らかにその反対のことを意味していたからであつた。かれは、しかし、もう何も言うことができなかつ

た。頭も気持ちも、めちやくちやに混乱していたのである。

「よくわかりました。気をつけます。」

かれは、表面すなお素直にそう言つて塾長室を出た。そして講堂に行き、今日の式しき次第しだいをチョークで黒板に書いたが、いつもは何の気なしに書く「来賓祝辞」の四字が、呪じゆもん文のように心にひつかつた。

式次第を書きおわると、かれは事務室にもどり、新聞を読んでいた塾生たちにまじつてストーヴを囲んだ。しかし気持ちはやはりおちつかなかつた。

(どんな人をでも、平和であたたかい空気の中に包みこむ、それが塾の理想でなければならぬことは、むろんよくわかっている。

だが、そのためには、実際にどうふるまえばいいのか。先生は、まさか、ぼくに ついで 追従笑 い をさせようとしていられるのではあるまい。自然の感情をいつわるところに、何の平和があり、何のあたたかさがあるろう。いつさいに先んじて大切なのは、自分をいつわらないことではないのか。)

そうした疑問が、胸にわだかまって、かれは塾生たちと言葉をかわす気にもなれないのだった。

そのうちに、ぼつぼつ来賓が見えだした。田沼理事長も、いつもよりは少し早目に自動車で乗りつけた。次郎は、でむか 出迎えながら、それとなくその顔をうかがったが、友愛塾の精神を しやうちよう 象徴 し するかのような、その平和であたたかな眼には、みじん 微塵のくもりもな

く、そのゆったりとしたものごしには、寸分のみだれも見られなかつた。次郎は、ほつとした気持ちになりながらも、一方では、何かにおしつけられるような、変な胸苦しさを覚えた。

最後に二台の自動車が、同時に乗りつけた。その一つは、荒田老のであり、もう一つは、せいしょう星章を光らした大型の陸軍用であつた。荒田老は、例によつて鈴田すずたに手をひかれながら、黒眼鏡の怪奇かいきな顔をあらわした。陸軍用の車からは、中佐ちゆうさの肩章けんしょうをつけた、背の高い、やせ型の、青白い顔の将校が出て来たが、しばらく突つ立って、すこしそり身になりながら、玄関前の景色を一わたり見まわした。

その間に、鈴田が次郎に近づいて来て、

「田沼さんはもうお出でになっているだろうね。」

「はあ、見えています。」

「じゃあ、陸軍省から平木中佐がお見えになったと、通じてくれたまえ。荒田さんから今朝ほど電話でお知らせしてあるんだから、おわかりのはずだ。」

次郎は、横柄おうへいな口のきき方をする鈴田に対して、いつになく憤りいきどおを感じ、返事をしないまま塾長室に行った。

塾長室の戸をあけると、田沼理事長が、すぐ自分から言った。

「陸軍省のかただろう。こちらにお通ししなさい。」

次郎は玄関にもどつて来たが、やはりだまつたままスリッパをそろえた。

「通じたかね。」

鈴田が次郎をにらみつけるようにして言った。

「ええ、通じました。塾長室におとおりください。」

次郎の返事もつつけんどんだった。

鈴田が荒田老の手をひいて先にあがった。平木中佐は靴くつをぬぎかけていたが、鈴田に向って、

「今日の式には、勅語ちよくごの捧読ほうどくがあるんじゃないやありませんか。」

「ええ、それはむろんありますとも。……」

「じゃあ、靴はぬぐわけにはいかないな。ほかの場合とはとにかくとして、勅語捧読の場合に軍人が服装規程にそむくわけにはいかん。」

「そのままおあがりになつたら、いかがです。かまうもんですか。」

「かまうも、かまわんも、それよりほかにしかたがない。」
平木中佐は、片足ぬいでいた長靴ちようかを、もう一度はいた。

鈴田は、その時、じろりと次郎の顔を見たが、その眼はうす笑いしていた。

その間、荒田老は、黒眼鏡をかけた顔を奥おくのほうに向け、黙もくも々として突つ立っていた。事務室にいた塾生たちは、入り口の近くに重なりあうようにして、その光景に眼を見はっていた。

やがて中佐は、荒田老と鈴田のあとについて、ふきあげた板張りの廊下ろうかに長靴の拍車はくしゃの音をひびかせながら、塾長室のほうに

歩きだした。

次郎は、ちよつとの間、唇をかんでそのうしろ姿を見おくつていたが、急にあわてたように、三人の横を走りぬけ、塾長室のドアをあけてやった。

四 入塾式の日

式は予定どおり、十時きっかりにはじまった。

来賓席らいひんせきの一番上席には、平木中佐が着席することになった。

中佐は最初、その席を荒田老にゆずろうとした。しかし荒田老は、

「今日は、あんたが主賓しゅひんじゃ。」

と、叱しかるように言つて、すぐそのうしろの席にどつしりと腰こしをおろし、それから中佐が何と言おうと、木像のようにだまりこんで、身じろぎもしなかつた。中佐はかなり面くらつたらしく、すこし顔をあからめ、何度も荒田老に小腰こしをかがめたあと、いかにもやむを得ないといった顔をして席についたが、それからもしばらくは腰が落ちつかないふうだった。

しかし、式がいよいよはじまるころには、もう少しもてれた様子ごうぜんがなく、塾じゅくせい生せいたちをねめまわすその態度は、むしろ傲然ごうぜんとしていた。

来賓席の反対のがわには、田沼たぬま理事長、朝倉塾長、朝倉夫人の

三人が席をならべていた。次郎はそのうしろに位置して、式の進行係をつとめていたが、かれの視線は、ともすると平木中佐の横顔にひきつけられがちだった。かれの眼めにうつつた中佐の顔には、多くの隊付き将校に見られるような素朴そぼくさが少しもなかった。その青白い皮膚ひふの色と、つめたい、鋭すどどい眼の光とは、むしろ神経質な知識人を思わせ、また一方では、勝ち気で、ねばっこい、残ざん忍んな実務家を思わせた。次郎は、中佐の横顔を何度かのぞいて、いるうちに、子供のころ、話の本で見たことのある、ギリシア神話のメデューサの顔を連想していた。

中佐の眼は、理事長と塾長とが式辞をのべている間、塾生のひとりびとりの表情を、注意ぶかく見まもっているかのようであつ

た。式辞の趣旨は、二人とも、いつもとほとんど変りがなかった。ただ理事長は、つぎのような意味のことを、特に強調した。

「国民の任務には、恒久的こうきゆうてき任務と時局的任務とがある。このうち、時局的任務は、時局そのものが、あらゆる機会に、あらゆる機関を通じて、声高く国民にそれを説いてくれるので、なにもそれに関心であることができない。ところが、恒久的任務のほうは、時局が緊迫きんぱくすればするほど、とかく忘れられがちであり、現に今日のような時代では、何が真に恒久的任務であるかさえわかっていない国民が非常に多い。諸君は、友愛塾における生
活中、時局的任務に関する研究にも、むろん大いに力を注いでも
らわなければならぬが、しかし、いつそうかんじんなのは、恒

久的任務の研究であり、その研究の結果を共同生活に具体化することである。それが不十分では、時局的任務に対する熱意も、根なし草のように方向の定まらないものになってしまふであろうし、時としては、かえつて国家を危険におとし入れるおそれさえあるのである。」

また、朝倉塾長は、

「これまで、日本人は、上下の関係を強固にするための修練はかなりの程度に積んで来た。しかし、横の関係を緊密きんみつにするための修練は、まだきわめて不十分である。私は、もし日本という国の最大の弱点は何かと問われるならば、この修練が国民の間に不足していることだ、と答えるほかはない。というのは、どんなに

強い上下の関係も、横の関係がしっかりしていないところでは、決してほんとうには生かされないからである。そこで、私は、これからの諸君との共同生活を、主として横の関係において、育てあげること努力したいと思う。むしろ最初は、まったく上下の関係のない状態から出発し、横の関係の生長が、おのずからみごとに上下の関係を生み出すところまで進みたいと思っている。」

といったような意味のことから話しだし、いつもなら、午後の懇談会こんだんかいで話すようなことまで、じっくりと、かんでふくめるように話をすすめていったのであった。

次郎は、きいていてうれしかった。田沼先生も、朝倉先生も、ちやんと打つべき手は打っていられる。これでは、中佐も打ち込

む隙すきが見つかからないだろう。そんなふうにかれは思つたのである。朝倉先生が壇だんをおりると、つぎは来賓の祝辞だつた。次郎はさすがに胸がどきついた。かれは、昔むかしの武士が一騎打ちいつきうちの敵にでも呼びかけるような気持ちになり、一度息をのんでから、さげぶように入った。

「来賓祝辞——陸軍省の平木中佐殿どの。」

平木中佐は声に応じてすつくと立ちあがつた。そしてまずうしろの荒田老の方に向きなおつて敬礼した。

荒田老は、しかし、眼がよく見えないせいか、黒眼鏡の方向を一点に釘くぎづけにしたまま、びくとも動かなかつた。一瞬いつしゆん、場内の空気が、くすぐられたようにゆらめいた。といつても、だれ

も声をたてて笑ったわけではなかった。笑うにはあまりにまじめすぎる光景だったし、しかも、その当事者が二人とも、場内での最も重要な人物らしく見えていただけに、微笑びしょうをもらすことさえ、さしひかえなければならなかったのである。しかしまた同じ理由で、おかしみはかえって十分であった。したがって、それをごらえるしぐさで、場内の空気がゆらめいたのに無理はなかったのである。とりわけ次郎にとっては、それがかれの最も緊張きんちようしていた瞬間しゆんかんのできごとであったために、そのおかしみが倍加くちびるされていた。かれは唇をかみ、両手をにぎりしめて、こみあげて来る笑いをおしかくしながら、中佐の表情を見まもった。

中佐は、その口もとをわずかにゆがめて苦笑した。それは場内

で見られたただ一つの笑いだった。その笑いのあと、かれはほかの来賓たちのほうは見向きもしないで、靴くつと拍車はくしゃと佩劍はいけんとの、このうえもない非音楽的な音を床板ゆかいたにたてながら、壇だんにのぼった。

次郎の気持ちの中には、もうその時には、どんなかすかな笑いも残されてはいなかった。かれは、中佐の青白い横顔と、塾生たちのかしこまった顔とを等分に見くらべながら、息づまるような気持ちで中佐の言葉を待った。

中佐は、しかし、あんがいなほど物やわらかな調子で口をきいた。そして、まず、田沼理事長と朝倉塾長の青年教育に対する努力を、ありふれた形容詞をまじえて賞しょうさん讃さんした。それは決して、

真実味のこもったものではなく、いちおうの礼儀れいぎにすぎないものであることは明らかであつたが、次郎はそれでも、この調子なら、そうむき出しに塾の精神をけなしつけることもあるまい、という気がして、いくぶん緊張をゆるめていた。

しかし、中佐のそんな調子は三分とはつづかなかつた。かれはやがて世界の大勢を説き、日本の生命線を論じた。そしてその結論としての国民の覚悟かくごについて述べだしたが、もうそのころには、かれはかなり狂きょうき気じみた煽せんどう動演説家になつていた。さらに進んで青年の修養を論ずる段になると、かれの佩劍さいやの鞘さやが、たえ間なく演壇の床板をついて、勇ましい言葉の爆ばくはつ発はつに伴奏ばんそうの役割をつとめた。かれはしばしば「陛下へいか」とか「大御心おおみこころ」という言

葉を口にしたが、その時だけは直立不動の姿勢になり、声の調子もいくぶん落ちつくのだった。しかし、佩劍の伴奏がもつとも激しくなるのは、いつもその直後だったのである。

かれの意図が、塾の精神を徹底的にたたきつけるにあつたことは、もうむろん疑う余地がなかつた。かれは、しかし、真正面から「友愛塾の精神がまちがっている」とは、さすがに言わなかつた。かれはたくみに、——おそらく、かれ自身のつもりでは、きわめてたくみに、——一般論をやつた。そして、なおいつそうたくみに、——もつとも、この場合は、かれ自身としては、たくらんだつもりではなく、かれの信念の自然の発露であつたかもしれないが、——「国体」とか、「陛下」とか、「大御心」とか

という言葉で、自分の論旨を權威づけることに努力した。

「日本の国体をまもるためには、国民は、四六時中非常時局下にある心こころがま構えでいなければならない。恒久的任務と時局的任務とを差別して考える余裕よゆうなど、少くともわれわれ軍人には全く想像もつかないことである。」

「大命を奉じては、国民は親子の情でさえ、たち切らなければならない。いわんや友愛の情をやである。」

「日本では、国民相互そうごの横の道徳は、おのずから、君臣たての縦の道徳の中にふくまれている。陛下に対し奉るたてまつ臣民の忠誠心が、すべての道徳に先んじ、すべての道徳を導き育てるのであつて、友愛や隣人愛りんじんあいが忠誠心を生み出すのでは決してない。」

およそこういうった調子であつた。

次郎はしだいに興奮した。ひとりでに息があらくなり、両手が汗^{あせ}ばんで来るのを覚えた。かれは、しかし、懸^{けんめい}命に自分を制した。自分を制するために、おりおり、うしろから田沼先生と朝倉先生の顔をのぞいた。かんじんの二人の眼をのぞくことができなかつたので、はつきりと、その表情を見わかることはできなかつたが、のぞいたかぎりでは、二人とも、すこしも動^{どうよう}揺しているようには見えなかつた。かれはいくらか救われた気持ちだつた。

かれの視線は、おのずと、朝倉夫人のほうにもひかれた。夫人の横顔は、いつもにくらべると、いくぶん青ざめており、その視線は、つつましく膝^{ひざ}の上に重ねている手の甲^{こう}におちているように

思われた。かれは、朝倉夫人のそんな様子を見ると、つい眼がしらがあつくなくなって来るのだった。

かれは、しかし、そうしているうちに、いくらか自分をとりもどすことができ、眼を来賓席のほうに転じた。すると、そこには、とうわく 当惑して てんじょう 天井を見ている顔や、にがりきつて演壇をにらんでいる顔がならんでいた。しかし、どの顔よりもかれの注意をひいたのは、相変わらず木像のように無表情な荒田老の顔と、たえず皮肉な微笑びしょうをもらして塾生たちを見わしている鈴田の顔であった。

鈴田の顔を見た瞬間、次郎は、自分にとってきわめてたいせつなことを、いつの間にか忘れていたことに気がついて、はつとし

た。中佐の言葉に対する塾生たちの反応はんのう、それを見のがしてはならない。できれば一人一人の反応をはつきり胸にたたみこんでおくことが、これから朝倉先生に協力して自分の仕事をやって行く上に何よりもたいせつなことではないか。

かれの視線は、そのあと、忙いそがしく塾生たちの顔から顔へとびまわった。どの顔もおそろしく緊張している。眼がかがやき、頬ほおが紅潮し、唇くちびるがきつと結ばれている。中佐のかん高い声と、佩劍はいけんの伴奏とが、電気のようにかれらの神経をつたい、かれらの心臓にひびき、かれらの全身をゆすぶっているかのようなのである。

次郎の興奮は、もう一度その勢いをもりかえした。しかもその勢いは、かれが中佐の声と佩劍の伴奏とから直接刺激しげきをうける場

合のそれよりも、はるかに強力だった。で、もしもかれが、塾生たちの顔の間に、ただ一つの例外的な表情をしている顔を見いだすことができなかったとすれば、かれはその興奮のために、すくなくとも、自分のすぐ前に腰をおろしている田沼先生と朝倉先生夫妻の注意をひくほどの舌打ちぐらいは、あるいはやったかもしれないなかつたのである。

ただ一つの例外の顔というのは、大河無門の顔であつた。かれは半はん眼がんに眼を開いていた。それは内と外とを同時に見ているような眼であつた。中佐の言葉の調子がどんなに激げき越えつになろうと、佩劍さやの鞘さやがどんな騒そう音おんをたてようと、そのまぶたは、ぴくりとも動かなかつた。かれは、椅子いすにこそ腰をおろしていたが、その

姿勢は、あたかも禪堂ぜんどうに足を組み、感覚の世界を遠くはなれて、自分の心の底に沈潜ちんせんしている修道者を思わせるものがあつた。

次郎の視線は、大河無門の顔にひきつけられたきり、しばらくは動かなかつた。かれは何か一つの不思議を見るような気持ちだつた。

（大河無門は、ぼくなんかにはまだとてもうかがえない、ある心の世界をもっているのだ。）

かれにはそんな気がした。その気持ちだが、しだいにかれをおちつかせた。そして大河無門と荒田老とを見くらべてみる心のゆとりを、いつのまにか、かれにあたえていた。

かれの眼に映えいじた大河無門と荒田老とは、まさに場内の好一こういつ

対ついでであつた。荒田老は、平木中佐の所論の絶対の肯定者こうていしやとして、怪奇かいきな魔像まぞうのように動かなかつたし、大河無門は、その絶対の否定者として、清せい澄ちような菩薩像ぼさつぞうのように動かなかつたのである。

次郎は、これまでの不快な興奮からさめて、ある希望と喜びとに裏付けられた新しい興奮を感じはじめていた。そのせいか、中佐の狂気じみた言葉も、もう前ほどにはかれの耳を刺激しなくなつていたのである。

中佐は、最後に、いつそう声をはげまして言った。

「諸君にとつてたいせつなことは、いかに生くべきかではなくて、いかに死ぬべきかだ。大命のまにまにいかに死ぬべきかを考え、

その心の用意ができさえすれば、おのずからいかに生くべきかが決定されるであろう。くりかえして言うが、諸君は、楽しい生活などという、甘あまつたるい、自由主義的・個人主義的享き楽よろこ主義ゆぎに、いつまでもとらわれていてはならない。日本は今や君国のために水火をも辞さない勇ゆう猛もう果か敢かんな青年を求めているのだ。この要求にこたえうるような精神を養うことこそ、諸君がこの塾堂に教えをうけに来た唯ゆい一いつの目的でなければならぬ。自分はいえ、て全軍の意志を代表して、このことを諸君の前に断言する。終わり！」

塾生たちの中には「終わり」という言葉をきくと同時に、機械人形のように直立したものがあつた。その他の塾生たちは、理事

長と塾長との式辞が終わったときに、顔をさげただけですました関係からか、さすがに立ちあがるのをためらった。しかし、どの顔も、何か不安そうに左右を見まわした。そして、直立した塾生たちを見ると、それにさそわれて、半ば腰をうかしたものも少なくなかった。ただ大河無門だけは、そうしたざわめきの中で、その半眼にひらいた眼を、ながい夢ゆめからでもさめたように、ゆっくり見ひらき、しずかに頭をさげて中佐に敬意を表したのだった。

次郎の眼は、いつまでも大河無門にひきつけられていた。そのために、かれは、中佐がどんな顔をして塾生たちの「不規律」な敬礼をうけ、どんな歩きかたをして自分の席もとに戻って行ったかを観察することができなかつたし、また、閉式を告げるかれの役割

を果たすのに、いくらか間がぬけたのではないかと、かれ自身心配したぐらいであった。

式が終わると、恒例こうれいによつて、塾生と中食をともにすることになつていた。今日は朝倉先生の式辞がいつもより長かつたうえに、平木中佐の祝辞がそれ以上に長かつたため、時刻もかなりおくれていたし、一同式場を出るとすぐ、広間に用意されていた食しよくたく卓よくたくについた。今日は荒田老もめずらしく上機嫌じようきげんで、「わたしはめしはたくさんです」などと無愛想ぶあいそうなことも言わず、自分からすすんで平木中佐をさそい、その席につらなつたのである。

食卓では、荒田老がすすめられるままに來賓席の上座かみざにつき、平木中佐がその横にならんだ。ごちそうは、これも恒例で、赤飯

に、小さいながらも、おかしら付きの焼鯛やきだい、それに菜なつ葉汁はじると大根なますだった。

朝倉先生の「いただきます」という合い図で、みんなが箸はしをとりだすと、平木中佐がすぐ荒田老に言った。

「なかなかしやれていますね、おかしら付きなんかで。」

荒田老は、黒眼鏡すれすれに皿さらを近づけ、念入りに見入りながら、

「小鯛こだいらしいな。なるほどこれはしやれている。しかし若いものは、これでは食い足りんだろう。」

「ええ、やはり青年には質よりも量でしょうね。」

二人の話し声は、かなりはなれたところにすわっていた次郎の

耳にもはつきりきこえた。かれは、それも塾に対する皮肉だろうと思つた。そして、食卓につくとすぐそんなことを言いだした二人のえげつなきに、ことのほか反感を覚えた。

「しかし、気は心と言いますか、こうして祝つてやりますと、やはり青年たちにはうれしいらしいのです。」

そう言ったのは田沼先生だつた。ふつくらした、あたたかい言葉の調子だつた。すると朝倉先生が冗じょうだん談まじりの調子でそれに言い足した。

「これまでの塾生の日記や感想文を見ますと、そのことがふしぎなぐらいはつきりあらわれていましたね。それで、つい、多少の無理をしても、入塾式の日には小鯛を用意することになっているん

です。」

「しかし、お祝いのお気持ちなら、赤飯だけでたくさんでしょう。そうご無理をなさらんでも。」

中佐も冗談めかした調子で言ったが、その頬ほおには、かすかに冷笑らしいものがただよっていた。

「おっしゃるとおりです。」

と、朝倉先生はしごくまじめにうけた。しかしすぐまた冗談まじりに、

「ただ塾生たちには、おかしら付きの鯛みようというものが妙に印象に残るらしいので、ついそれに私たちが誘惑ゆうわくされてしまうのです。それも教育の一手段だという口実もありましてね。はっはっはっ

。」

「甘いすな。」

と、荒田老が横からにがりきつて言った。

まわりの来賓たちが、それで一せいに笑い声をたてたが、それがその場の空気をまぎらすための作り笑いだったことは明らかだった。

「塾長はそうした甘いところもありますが、根は辛い人間ですよ。実は辛すぎるほど辛いです。甘いところを見せるのは辛すぎるからだともいえるんです。油断はなりません。」

田沼先生がそう言って笑った。それでまた来賓たちも笑ったが、今度は救われたといったような笑い方であった。平木中佐と鈴木

とは変に頬をこわばらせていた。荒田老は相変わらず無表情だったが、無表情のまま、

「田沼さんは、やはり逃げるのがうまい。まるで鰻うなぎのようですな。」

もう一度笑いが爆発ばくはつした。しかしだれの笑い声も、いかにも苦しそうだった。

「荒田さんにあつちやあ、かないませんな。」

と、田沼先生は、そのゆたかな頬をいくらか赤らめて苦笑したが、そのあと、話題をかえるつもりか、急に思い出したように言った。

「それはそうと、荒田さんは、このごろは禅ぜんのほうはいかがです。

相変わらずおやりになつていらつしやいますか。」

「ふっふっふっ。」

と、荒田老は、あざけるように鼻で笑つたが、

「禅は私の生活ですからな。毎日ですよ。」

「毎日だと、おかよいになるのが大変でしょう。このごろは、どちらのお寺で？」

「すわるのに寺はいりませんな。」

「すると、お宅で？」

「うちでもやりますし、どこでもやります。こうして飯を食つたり話したりしている間も、私は禅をやっているんです。」

「なるほど。」

「どうです。塾生たちにも、少しやらしてみては？」

荒田老はおしつけるように言った。

「坐禪ざぜんとまではむろん行きませんが、静坐程度のことなら、ここでもやっているんです。起床きしょうご後とか、就寝しゅうしんまえ前とかに、ほんの二十分か、せいぜい三十分程度ですが。」

「それでもやらんよりはいい。」

と、荒田老は、これまでのぶつきらばうな調子から、急に気のりのした調子になり、

「しかし、指導をうまくやらんと、時間のむだ使いになりますな。時間が短いほど、とかくむだになりがちなものだが、塾長さん、そのへんの呼吸はうまくいっていますかな。」

田沼先生は、とうとうまた自分たちに矛先が向いて来たらしい、と思つたが、もう逃げるわけにいかなかった。で、朝倉先生をかえりみて、

「塾長、どうです。これまでのやり方をお話して、ご意見をうかがつてみたら？」

朝倉先生は、ちよつとためらつたふうだつた。しかし、すぐへりくだつた調子で、

「私には、本式な坐禅の指導なんか、とてもできませんし、ただ塾生たちに、朝夕少なくとも二回は、おちついて内省する時間を持たせたい、と、まあ、そんなような軽い気持ちで、静坐をやらしているわけなんです。ですから、べつにそう変わった方法はと

っていません。ただ、静坐のあとで、——あとでと申しましても、静坐の姿勢をそのままつづけながらなんですが、——ほんの五六分、なるだけ心にしみるような例話や古人の言葉などをひいて、話をするにしているのですが。」

「なるほど。」

と、荒田老はめずらしくうなずいた。そしてちよつと考えるようなふうだったが、

「それはいい。心をすましたあとにきく短い話というものは、あとまで残るものです。だが、それだけに、その話の種類次第しだいでは、その害も大きい。これまでどんな話をして来られたかな。」

「やはり心の問題にふれた話がいいと思ひまして——」

「それはわかりきったことです。だが、その心の問題というのが、このごろでは、どうもじめじめしたことになりがちでしてな。」

次郎は、きいていて齒がゆかった。——朝倉先生は、これではまるで荒田老に口頭試問こうとうしもんでもうけているようなものではないか。くつじゅう
屈けん従そんは謙遜けんそんではない。先生は、どうしてもっと積極的にものをいわれないのだろう。

朝倉先生は、しかし、あくまでも物やわらかな調子でこたえた。「たしかにおっしやるとおりです。で、私は及ばおよずながら、いつも塾生たちの心に光を点じ、希望あたを与えるような話をするにつとめて来たつもりなのです。」

「ふん。」

と、荒田老は、いかにもさげすむように鼻をならした。それから、ずけずけと、

「あんたはやつぱり西洋式ですな。光だの、希望だのつて、バタくさいことをいって、生きることばかり考えておいでになる。東洋の精神はそんな甘つたるいものではありませんぞ。東洋では昔むかしから、死ぬことで何もかも解決して来たものです。禅道ぜんどうがその極き致よくちです。大死たいし一番、無の境地に立つて、いつさいに立ち向かうというのです。そこにお気がつかれなくちやあ、せつかくの静坐のあとのお話も、青年たちを未練な人間に育てあげるだけの結果になりはしませんかな。」

朝倉先生も、さすがにもう相手になる気がしなかつたのか、

「いや、今日はいろいろお教えいただきありがとうございます。存じました。いずれ私も十分考えてみることにいたしましょう。」

と、おだやかに話をきりあげてしまった。

次郎はその時、朝倉先生が、かつてかれに、つぎのような意味のことを、いろいろの実例をあげて話してくれたのを思いおこしていた。

「みごとに死のうとするところと、みごとに生きようとするところとは、決してべつべつのところではない。みごとに生きようとする願いのきわまるところに、みごとに死ぬ覚悟かくごが湧わいて来るのだ。生命を軽視けいしし、それを大事にまもり育てようとする願いを持たない人が、一見どんなにすばらしい死に方をしようと、それは

断じて真の意味でみごとであるとはいえない。」

次郎にとっては、この言葉は朝倉先生のいろいろの言葉の中でもとりわけ重要な意味をもつものであった。かれは、この言葉で思いおこすことによつて、これまでいくたびとなく、かれの幼時からの性癖せいへきである激情げきじょうをおさえ、向こう見ずの行動に出る危険をまぬがれることができたし、また、かれが日常の瑣事さじに注意を払い、その一つ一つに何等なんらかの意味を見出そうと努力するようになったのも、主としてこの言葉の影響えいきようだったのである。

それだけに、かれは、朝倉先生が、なぜそのことをいつて荒田老を説き伏ふせようとしないのであるだろうと、それが不思議にも、もどかしくも思えてならないのだった。

塾生たちは、もうそのころには、とうに食事を終わっていた。来賓もほとんど全部箸はしをおろしており、まだすんでいないのは、目が不自由なうえに、何かと議論を吹ふきかけていた荒田老と、その相手になっていた朝倉先生ぐらいなものであった。しかし、この二人も、話をやめると間もなく箸をおろした。

来賓たちは、畳たたみ敷きの広間のガラス窓いっぱいには、あたたかい陽ひがさしこんでいるのが気に入ったらしく、食事がすんで塾生たちが退散したあとでも、窓ぎわに集まって、たばこを吸い、雑談をまじえた。そのうちに荒田老に付き添そっていた鈴田が、平木中佐と何かしめしあわせたあと、朝倉先生の近くによつて来てたずねた。

「今日も、午後は例のとおり懇談会をおやりになるんですか。」
「ええ、その予定です。しかし今日は、懇談らしい懇談にはいるのはおそらく夜になるでしょう。私から前もっていつておきたいことは、今日はもう大体、式場で話してしまいましたし、午後集まったら、さっそく、ご存じの『探検』にとりかからしたいと思つています。」

鈴田はすぐもとの位置にもどった。そして荒田老と平木中佐を相手に、何か小声で話しながら、おりおり横目で朝倉先生のほうを見たり、にやにや笑ったりしていたが、まもなく、荒田老の手をとって立ちあがった。すると平木中佐も立ちあがった。

三人の自動車が玄関をはなれると、ほかの来賓たちの話し声は、

急に解放されたようににぎやかになった。しかし、話の内容は決して愉快なものではなかつた。塾の将来に対する憂慮や、理事長と塾長に対する同情と激励の言葉が、ほとんどそのすべてであつた。そして、具体的対策については、何一つ示唆が与えられないまま、それから二十分ばかりの間に、来賓たちの姿もつぎつぎに消えて行つた。

田沼理事長だけは、今日はめずらしくゆつくりしていた。そして、来賓たちを送り出すと、すぐ、朝倉先生と二人で塾長室にはいつて行つた。

次郎は、一人になると、急にほつとしたような、それでいて何か固いものを胸の中におしこまれたような、変な気持ちになり、

もう一度広間にはいつて、窓によりかかった。今日は式の時間
のびたので、午後の行事は、三十分ほどくり下げて一時半からと
いうことになっていた。それまでには、まだ十五六分の時間があ
る。いつもなら、そうしたわずかな時間でも、ぼんやりしてはい
ないかれだったが、今日の式場と食卓とでうけた刺激しげきの余波よはは、
かれに小まめな仕事をやらせるには、まだあまりに高かったし、
床の間の「平常心」の掛軸かけじくは、やはりかれにとっては全くべつ
の世界の消息をつたえるものでしかなかったのである。

かれは、荒田老と平木中佐の顔を代わる代わる思いうかべなが
ら、陽を背にして眼をつぶっていた。すると、だしぬけに、

「どうだ、つかれたかね。昨日から、ずいぶん忙いそがしかったろう。」

そういつてはいつて来たのは田沼先生だった。

次郎は、目を見ひらき、あわてて居いずまいを正した。

「そう 窮きゆうくつ 屈くつにならんでもいい。」

田沼先生は、次郎とならんで窓わくによりかかりながら、

「今度の塾生には、変わったのが一人いるらしいね。」

「ええ。」

次郎の頭には、すぐ大河無門の顔がうかんで来た。しかし、

「変わった」という先生の言葉の意味がちよつとうたがわしかつたらしく、

「大河っていう人のことでしょう。」

「うむ、大河無門、さつき名簿で見たんだが、めずらしい名前だ

ね。」

「ええ、名前もめずらしいんですが、人間も非常にめずらしいんじゃないかと思えます。」

「私もそう思う。たしかにめずらしい青年だよ。」

「もう本人をご存じなんですか。」

「まだ直接会ってはいない。しかし、式場で眼についたので、朝倉先生にたずねて見たんだ。」

次郎は、「式場で眼についた」ときいた瞬間^{しゅんかん}、何か明るいものが胸の中にさしこんだような気がした。かれはうれしくなつて、膝^{ひざ}をのり出しながら、

「あの人、大学を出ているんです。」

「そうだってね。」

「年も、ぼくよりずっと上なんです。」

「そうだろう。顔を見ただけでも、たしかに君の兄さんだ。それに——」

と田沼先生は、ちよつと微笑して、

「精神年ねんれい齡のほうでは、いつそう年上らしいね。」

次郎はそれを冗談だとは受け取らなかつた。かれは真しんけん剣な顔を
をして、

「ぼく、あの人が塾生で、ぼくが助手では、変だと思ふんですけど……」

「どうして？ それはかまわんさ。本人が塾生を希望しているし、

また、君が助手だからといって、大河を先^{せんばい}輩として尊敬できないという理由もないだろう。」

「それはむろんそうですけれど……」

「それとも、大河に気^け押^おされて、やるべきことがやれないとでもいうのかね。」

「そんなことはありません。ぼくはただ朝倉先生のあとについて、仕事をやっていくだけのことなんですから。」

「じゃあ、何も気にすることはないじゃないかね。」

「ええ。」

と、次郎はこたえたが、まだ何となく気持ちを始めしかねているふうであった。

田沼先生は、しばらくその様子を見まもったあと、

「やはり気がひけるらしいね。」

「ええ、ぼく、代われたら代わりたいと思うぐらいなんです。」

「代わる？ そんなことはできないよ。かりにできたところで、

それは小細工こざいくというもんだ。そんな小細工をするよりか、与あたえら

れた立場をそのまますなおに受け取って、それを生かす工夫くふうをし

たらどうだ。君自身のためにも、大河のためにも、塾生たちみん

なのためにも、生かそうと思えばどんなにでも生かされると思う

がね。私は、ある意味では、むしろ、いいチャンスが、君にめぐ

まれたとさえ思っている。元来、環かんき境きょうというものは、それが

不合理であつても、無理に小細工をして変えようとしてはならな

いものなんだ。まずその環境をそのまま受け取って、その中で自分を練りあげる。それでこそほんとうの意味で環境に打ち克^かてるし、またそれでこそ、どんな不合理も自然に正されていくだろう。私は何事についても、そういう考えから出発したいと思っている。暴力に訴^うえる社会革命に私が絶対に賛成できないのも、根本はそういうところにあるんだ。」

次郎はじつと考えこんだ。すると田沼先生は急に笑いだし、「つい、話がとんでもない、大きな問題に飛躍^{ひやく}してしまったね。しかし、真理は問題の大小にかかわらないんぜ。小細工はいわば小さな暴力革命だし、暴力革命はいわば大きな小細工だからね。……大きな小細工なんて、言葉はちよつと変だが。……とにかく

君は、君のやるべきことを落ちついてやって行くことだ。大河に
気おくれして仕事がにぶつてもならないし、かといって、大河に
心で兄事けいじすることを忘れてもならない。世間には、先生よりも弟で
子のほうしが偉い場合えらだつてよくあることだし、それは気にするこ
とはない。大事なのは、そういう関係を先生も弟子も、どう生か
すかを考えることだよ。」

次郎はやはり考えこんでいた。田沼先生も何かしばらく考える
ふうだつたが、

「ところで、どうだね、今日の気持ちは？ 式場では、いつもに
似ず、まごついていたようだつたが。……」

次郎は、田沼先生が、わざわざ広間にやって来て自分に話しか

けた目的はこれだな、と直感した。同時に、かれの胸の中では、感謝したいような気持ちと圧迫あっぱくされるような気持ちとが入りみだれた。かれはすぐには答えることができなかった。自分の感想を、あからさまにというのが、何となくはばかられたのである。

それに、今はもう式場や食卓で感じた不愉快な気持ちもかなりうすらいでいて、だれかにそれをぶちまけなければ治まらないというほどではなかった。大河無門が早くも田沼先生の注目をひいているということを知ったことで、かれの気分がかなり明るくなっていたうえに、さつきから二人で取りかわした問答の間から、自分の生き方に何か新しい方向を見いだしたような気になり、そのほうにかれの関心が高まりつつあったのである。

かれには、これまでとはまるでちがった気持ちと態度とをもつて、戦いに臨のぞもうとする意志が、ほのかに湧わきかけていた。むろんそれが決定的にかれの行動を左右するまでには、まだ数多くの試練を経へなければならなかつたであろう。しかし、少なくともかれの頭だけでは、そうした意志に生きることの必要が、かなりはつきりと理解されていたようであつた。——真の勝利は、相手を憎にくみ、がむしやらに相手に組みつくだけでは、決して得られるものではない。自分みずからを充じゆうじつ実じつさせることのみが、それを決定的にするのだ。友愛塾の精神を勝利に導く手段もまたそこにある。そして、友愛塾の内容を充実させるために、自分にとって必要なことは、友愛塾の助手としての自分の道を、ただまっしぐ

らにつき進みつつ、人間としての自分を充実させることであつて、いたずらに荒田老や平木中佐の言動を気にし、かれらに対して感情的に戦いをいどむことではない——かれの頭は次第にそんな考えに支配されはじめていたのであつた。

かれが答えをしづつしていると、田沼先生は、その張りきつた豊かな頬ほおをほころばせて言つた。

「軍人にあのぐらいいどなられると、ちよつとこわくなるね。大河は別として、塾生たちには、すいぶん強くひびいただろう。」

「ええ——」

と、次郎はあいまいに答えたが、すぐ、

「それは、かなりひびいただろうと思います。」

「私の話も、朝倉先生の話も、すっかり嵐あらしに吹きとばされた形だつたが、こんなふうだと、今度の塾生は、いつもとは少し調子がちがうかもしれないね。」

「ええ、それはもう覚悟しています。」

「これからは、この塾の生活も、だんだんむずかしくなつて来るだろう。しかし、いい試練だね。われわれにとつてはむろんだが、塾生たちにとつても、こうした摩擦まさつは決して無意味ではない。どうせ将来は、もつと大きなスケールで経なければならぬ試練だからね。」

次郎は眼をふせて、畳たたみの一点を見つめているきりだつた。

「軍人のああした話に、盲目もうもくてき的に引きずられるのも險けん呑のんだが、

感情的に反発するのはんぱつも險呑だ。時代はそんな反発でますます悪くなつて行くだろう。あんな話を、相手にしない、——といつては語弊ごへいがあるが、冷静に批判しながら聞くような国民がもつと多くならないと、日本は助からないよ。」

次郎はやはり眼をふせたまま、

「ぼく、さつきからそんなことを考えていたところなんです。」

「そうか。うむ。」

と、田沼先生は大きくうなずいたが、

「しかし、理屈りくつではわかつていても、実際問題となると、またべつだからね。せいぜい自重じちようしてくれたまえ。今の日本では、青

年たちは、何と云ったって、軍からの影えいきよう響きようを最も多く受けやすいし、そう簡単にはわれわれのいうことを受け付けないだろう。そんな場合に、あんまりあせって、塾生とにらみあいのような形になつては、友愛塾も台なしだよ。」

塾生とにらみあう。——そんなことは、次郎がこれまで夢ゆめにも考えたことのないことだつた。しかし、幼年時代からの闘争心とうそうしんが、今でも折にふれて鼪いたちのように顔をのぞかせる自分を省みかえりると、今度の場合、それが全く起こり得ないことでもないような気がして胸苦しかつた。

「ぼく、先生にご心配をかけないように、気をつけます。」

かれは、やっとそれだけいって、田沼先生の顔を見た。田沼先

生もかれの顔をみつめて、かるくうなずいたが、その眼は、ほとけ仏の眼のように静かであたたかだった。

「もう時間だね。」

と、先生は腕時計うでどけいを見て立ちあがりながら、

「しかし、今度のような時に、大河のような塾生をむかえたのは、非常にしあわせだったね。多分大河はいい緩衝地帯かんしょうちたいになってくれるよ。はっはっはっ。」

次郎は笑わなかった。そして、田沼先生のことについて広間を出ると、すぐ板木ばんぎを鳴らしたが、その眼は何かを一心に考えつめているかのようであった。

午後の行事は、これまでの例を破ってごくあっさりしていた。

朝倉先生は、塾生たちが広間に集まると、簡単に「探検」の主旨しゆしを説明しただけで、さつそくそれにとりかからせた。また「探検」がすんでもう一度広間に集まった時にも、つぎのようなことをいっただけで、すぐ解散した。

「今日式場で、田沼先生なり私なりから話したこの塾の根本の精神と、たゞ今諸君が実際に見て来た探検の結果とを土台にして、これからのお互たがいの共同生活をどう組立てて行くか、それを今から相談したいと思うが、しかし、これだけの人数が、まだめいめいの頭を整理しないうちに、いきなり一堂に集まって相談しあつてみたところで、大した収しゆう穫かくは得られないだろうと思う。で、ひとまずこの集まりは解散して、各室ごとに集まって、その下相

談をすることにしたい。むろん、その下相談にしたところで、急にはまとまらないかもしれない。しかし、まとまらなければまとまらないでも結構だ。それで一人一人の頭に何程なほほどかの準備ができればいいのだから。……そのつもりで、ともかくも、いちおう各室ごとに、小人数で意見をたたかわしておいてもらいたい。そして、夕食後にはもう一度ここに集まって、みんなでじっくり話しあうことにしよう。その時には、私も私の考えを十分のべて見たいと思っているが、それはむろん一つの参考意見であって、決してそれを君らに押しつけるのではない。もつとも、あらかじめこれだけは断わっておきたい。それは、毎日朝食から中ちゆうじき食までの時間は講義にあててあるということだ。これには外来の講師

の都合もあるので、時間を勝手に動かすわけには行かない。それ以外の時間は、みんなの合意によってどうにでも使えるし、なるだけお互いの創意を生かしたいと思う。要するに、ここの生活の根本になるものは、あくまでも友愛と創造の精神なのだから、それを忘れないで、各室で仲よく、しかも活発に頭をはたらかして、夕食後の集まりまでの時間を十分に生かしてもらいたい。」

次郎の眼は、その話の間にも、注意ぶかく塾生たちの顔に注がれ、その動きからたえず何かを読もうとしていた。とりわけ大河無門はかれの注目の的だった。しかし、どの顔にも、これといって変わった表情は見られなかった。大河無門の近眼鏡の奥おくに光っている大きな眼は、特異な眼ではあったが、それもふだんと変わ

った表情をしているとは思えなかった。みんなは、ただかしまつて朝倉先生の言葉をきいているというにすぎないらしかった。

次郎の張りつめていた注意力は、いくらか拍子ひょうしぬ抜けの気味だった。

かれはその日、田沼先生とふたたび顔をあわせる機会がなかった。塾生たちの「探検」の案内をしている最中に、先生が帰って行ってしまったので、見おくることもできなかったのである。朝倉夫人が、あとでかれに話したところによると、先生は、玄関を出がけに、

「友愛塾の関係者も、今日は軍から正式に自由主義者のレツテルをはられたわけですね。奥さんもその有力なメンバーですから、

これから何かと風当たりが強くなるかもしれないよ。そのうち、憲兵なんていう、招かれざるお客もたずねて来るでしょう。

ご迷惑めいわくですね。」

と、冗談めかしていい、朝倉先生と二人で、声をたてて笑ったそうである。

五 最初の懇談会こんだんかい

「何だか、だらしがないね。やっぱり自由主義的だよ。」

次郎が、夕食後、小用をたしたかえりに第一室の前を通りかかると、中から、すこししやがれた声で、そんな言葉がきこえて来

た。かれは思わず立ちどまって耳をすました。

「探検だなんていうから、よほどめずらしい設備でもあるのかと思うと、何もありやあしないじゃないか。このぐらゐの設備なら、どこの青年道場にだってあるよ。」

同じ声である。次郎は自分の印象に残っている室員の顔の中から、声の主をさがしてみたが、まるで見当がつかなかった。

「そりゃあ、そうだね。」

と、ちがった声が相づちをうった。それはしかし、大して気乗りのした相づちだとは思えなかった。すると、また、しゃがれた声が、

「探検だの、室ごとの相談だの、まったく時間の浪費ろうひだよ。塾じゆく生せい活かつの設計だなんていったって、はいつて来たばかりの僕ぼくたちに、そんなことができるわけがないじゃないか。ね、そうだろう。」

「じっさいだね。」

第三の声が、今度は心から共鳴したらしくこたえた。

そのあと、しばらくは、がやがやといろんな声が入りみだれた。どの声もいくぶんうわずった真しん剣けん味みのない声だったが、しゃがれた声に相づちをうっていることはたしかだった。おりおり、何かを冷笑するような声もまじっていた。

そうしたざわめきをおさえつけるように、また、しゃがれた声

がいった。

「だからさ、だから、もう相談なんかする必要はないよ。」

みんなは、ちよつとの間沈黙ちんもくしたが、すぐだれかが、

「しかし、懇談会がはじまつたら、何とか報告はしなくちやならないんだらう。」

「そりゃあ、報告はするさ。ぼく、やってもいいよ。」

「何と報告するんだい。」

「相談の必要なし、ということに相談できめた。そういえばいいだらう。」

どつと笑い声がおこった。すると、しやがれた声がおこつたように、

「ぼく、ふざけていつてるんじゃないんだ。じつさいそうだから、そういうよりほかないじゃないか。もしそれでいけなかつたら、ぼくいつでも退塾するよ。わざわざ旅費を使って出て来たのが、ばかばかしいけれど、しかたがない。」

室内が急にしいんとなった。

次郎は、これまでの例で、この日の室ごとの相談会に大した期待はかけていなかった。また、軽い気持ちでなら、かれらの間にそうした言葉のやりとりぐらいはあるだろう、とも想像していた。しかし、しゃがれた声の調子はあまりにもいきりたっていたし、それを今朝の式場での平木中ちゅうさ佐の言葉と結びつけて考えないわけには行かなかつた。

かれは変な胸さわぎを覚えながら、息をころしていた。

「じゃあ、君にまかせるかな。」

だれかが不安そうにいった。

「ほかの室では、どうなんだろう。」

べつの声で、これもいかにも不安そうである。

「ぼく、様子を見て来るよ。」

だれかが立ちあがる気配けはいだった。

次郎は、それであわてて事務室のほうにいそいだ。

かれは、事務室にはいつていつて自分の机のまえに腰こしをおろす

と、急に、立聞きをしたり、あわてて逃にげだしたりした自分のみ

じめさが省かえりみられて、さびしかった。それは、変にいらいらした

さびしさだった。しだいに腹もたつて来た。いつもなら、ごく気軽に、いまのことを朝倉先生に報告するところだったが、——そして今日の場合、とくべつその必要が感じられていたはずなのだった。——なぜか、かれは、いつまでも机の上にほおづえをついたまま、動こうとしなかった。

それでも、七時になると、かれは元気よく立ちあがって、廊下ろうかの板木ばんぎを打ち、そのまま広間にはいつて行った。夜の懇談会がはじまる時刻だったのである。

みんなが集まると、朝倉先生のつぎの言葉で懇談会がはじまった。

「では、これから、いよいよおたがいの共同生活の具体的な設計

にとりかかりたいと思う。それには、まず、各室で話しあつた結果をいちおう報告してもらつて、それを手がかりに相談をすすめることにしたい。どの室からでもいいから、遠慮なく発表してくれたまえ。」

塾生たちは、しかし、そう言われても、おたがいに顔を見合わせるだけで、だれも口をきこうとするものがなかつた。次郎は、第一室のしやがれ声の発言を、今か今かと待っていたが、それもすぐには出そうになかつた。

かなりながい沈黙がつづいた。

朝倉先生は、しかし、そんなことは毎回慣らされていることなので、ちつとも困つたような顔を見せなかつた。みずから考え、

みずから動く訓練よりも、指導者の意志どおりに動く訓練をうけることによつて、よりよき人間になると信じこまされて来た青年たちにたいして、塾堂の主脳者たる自分から、そんなふう^にに相談をもちかけることが、いかに場ちがいな感じを彼等^{かれら}にあたえるかは、先生自身が、一ばんよく知っていたのである。

先生は、しんぼうづよく待った。待てば待つほど沈黙が探まつた。しかし、こうした沈黙というものは、ある程度以上に深まるものではない。またそうながくつづくものでもない。というのは、だれも自分の考えを深めるために沈黙してゐるのではなく、ただ沈黙のやぶれるのをおたがいに待っているにすぎないような沈黙でしか、それはないのだから。——このことについても、先生は

決して無知ではなかつたのである。

事実、三分とはたたないうちに、沈黙に倦けんたい怠を感じたらしい視線が塾生たちの間にとりかわされはじめた。すると、その視線にはげまされたように、ひとりの塾生が口をきつた。

「ぼくは第五室ですが、さつき板木が鳴るまで真剣に話しあつてみました。しかし、話がばらばらになつて、まだ、まとまつた案が何もできていないのです。ほかの室はどうでしょうか。」

いくぶん気がひけるといった調子で、そういったのは、塾生中の最年長者でもあり、郡の連合青年団長でもあるというので、次郎が気をきかして、大河無門と同室に割り当てておいた、飯島好造という青年だつた。職業は農業となつていたが、農村青年ら

しい風はどこにもなく、つやつやした髪かみを七三にわけて、青白い額ひたいにたらし、きちんと背広を着こんだところは、どう見ても小都会のサラリーマンとしか思えなかった。

本人が第五室といっただので、朝倉先生もすぐ思いあたったらしく、名簿めいぼを見ながら、たずねた。

「飯島君だね。」

「ええ。」

飯島は、自分の存在がすでに塾長にみとめられているのを知って、ちよつと意外に感じたらしかつたが、つぎの瞬しゆんかん間には、もう、いかにも得意らしくあたりを見まわし、自分をみんなに印象づけようとするかのような態度を見せていた。

朝倉先生は、その様子を見まもりながら、

「そりやあ、二時間や三時間のわずかな時間で、ここの生活全体についての案をまとめあげるわけには行かないだろう。しかし、部分的なことで、こんなことをぜひやってみたいというような希望なら、何か一つや二つはまとめりそうなものだね。」

「それがなかなかそうはいかないんです。」

と、飯島は、もうすっかりなれなれしい調子になり、

「何しろ、責任をもって話をまとめる中心がないんでしよう。ですから、ただめいめいにわいわいしゃべるだけなんです。中には、手紙を書いたり、雑誌をよんだりして、話に加わらないものもありますし……。」

「なるほどね。」

と、朝倉先生は、飯島の言うことを肯定こうていするというよりは、むしろさえぎるように言つて、眼めをそらした。そしてちよつと思案したあと、

「ほかの室はどうだね」

返事がない。塾生たちの大多数は、ただにやにや笑っているだけである。次郎は、第一室の一団に眼をやつたが、気のせいか、どの顔も変に緊きんちよう張ちやうしているように思えた。

「どの室も、やはり同じかな。」

と、朝倉先生は微笑びしょうしながら、

「すると、わずか六人の共同生活でも、だれか中心になる人がい

ないと、うまく行かないという結論になるわけだね。」

みんなの中には、それを自分たちに対する非難の言葉とうけとって、頭をかいたものもあつた。しかし、大多数は、それがあたりまえだ、といった顔をしている。とりわけ、飯島の顔にそれはつきりあらわれていた。かれはいくらか抗議するこうぎような口調で言つた。

「ぼくは、中心のない社会なんて、まるで考えられないと思ひます。おたがいに協力することは、むろんたいせつですが、みんなが平等の立場でそれをやったんでは、どんな小さな社会でも、まとまりがつかなくなつてしまふのではないでしようか。」

「大事な問題だ。そういうことを理論と実生活の両面から、もつ

と深く掘りさげ^ほて行くとおもしろいと思うね。平等という言葉なんかも、うかうかとは使えない言葉だし……しかし、そうした研究は、ゆつくり時間をかけてやることにして、とりあえず必要なことは、あすからの生活を具体的にどうやっていくかだ。 magari なりにもその生活計画がたたなくては、まるで動きがとれないのだから、さしあたり必要なことだけでも、きめておこうじゃないか。」

「そんなことは、先生のほうでびしびしきめていただくほうが、めんどろがなくていいんじゃないやありませんか。」

「めんどろがない？ なるほどめんどろはないね。しかし、みんなだめんどろを見るのが、ここの生活ではなかったのかね。」

「しかし、それでは、時間ばかりくって、実質的なことが何もできなくなってしまうと思うんです。」

「何が実質的なことか、それも問題だ。君が時間のむだづかいだと考えていることに、あんがい人間としての実質的な修練に役だつことがないとも限らんからね。しかし、そんなこともおいおい考えることにしよう。そこでさっきの話だが、どの室でもわずかに六人の話しあいが、今のままでは、うまくいかないということだつたね。」

「そうです」

「各室だけの話しあいさえうまくいかないようでは、これだけの人数の共同生活が成りたつ見込みみこは絶対になさそうだ。だから、

まず、第一にその問題から解決してかからなければならぬが、それはどうすればいいのかね。」

「室長といったものをきめさえすれば、何でもなく解決するんじゃないですか。」

飯島は、いかにも齒がゆそうに言った。

「そう。まあ、そんなことかな。室長というものが、はたしてどの程度に必要なものか、あるいは、六人ぐらいの人数では、これからさき君たちの生活のやり方次第しだいで、その必要がないということになるかもしれない。しかし、さっきの話のようだと、少くとも現在のところは、それをきめておいたほうがいらしいね。で、どうだ、さっそく今夜のうちにそれをきめることにしては？」

むろん、どこからも反対意見は出なかった。朝倉先生は、しばらくみんなの顔を見まわしていたが、

「では、懇談会が終わったら、すぐ各室で相談してきめてくれたまえ。それがまとまらないなんて言ったら、今度は、君らの恥はじだよ。君ら自身でそうすることにきめたんだから。」

みんなが笑った。その笑いの中から、

「投票で選挙するんですか。」

「そんなことは、私にきいたってわからない。君らの室長を君らできめるんだから。」

朝倉先生は、くそまじめな顔をしてこたえた。それから、

「これで、生活設計の大事な一つである組織が、どうなりきまっ

たわけだ。各室が室長を中心に小さな共同社会を作る。それが集まって、塾全体の共同社会ができる。その中心は塾長である私。それでいいね。」

みんなは、また笑いだした。なあんだ、そんなことが生活設計か、という意味の笑いらしかった。すると朝倉先生は、それをとがめるように、きつとなつて言った。

「君らは、そんなことはあたりまえだ、今さら生活設計だの何だのと言つてさわぐことはない、と考えているかもしれない。しかし、これは大事なことだ。だれかにきめてもらつた組織と、自分たちでその必要を感じて作つた組織とは、全然意味がちがうからね。君らは、君ら自身の幾時間いくじかんかの体験によつて、室長の必要

を感じ、その制度を作り、その人選をすることになった。そうしてできあがった室長は、よかれあしかれ、君ら自身のものだ。したがって室長の言動に対しては君ら自身が責任を負わなければならぬ。そういつたぐあいには、すべてを自分のものにしていくところには、おたがいの生活設計の意義があるんだ。何も世間をあつと言わせるような、^{めずら}珍しい生活形式を強いて作りだそうというのではない。形式は、むしろ平^{へい}凡^{ぼん}なほうがいい。その平凡な形式を、ほんとうに自分のものにして、内容を深めていこうというのが、ここの生活のねらいなんだ。どうか、そのつもりで、^{きばつ}奇抜な案でなければいけないだろう、などという考えにとらわれないで、
実際君らが、君ら自身の生活に必要なと思っっていることを、正直

に提案ていあんしてもらいたいと、私は思っている。そこで、——」

と、先生は、次第にやわらいだ顔になり、

「組織については、むろんまだほかにいろいろ工夫しなければならぬことがあるだろう。しかし、さしあたっては、室長と塾長とがあれば、どうにかやっつけていける。ところで、さっそく困るのは、明日からの行事だ。何時に起きて何時にねて、その間に何をするのか、とりあえず明日一日のことだけでもきめておかないと、まったく動きがとれない。それについて、君らに何か考えはないかね。」

「先生！」

と、かなり激げき昂こうしたような声が、みんなの耳をいきなり刺しげ激き

した。それは次郎の耳にはききおぼえのある、しゃがれた声だった。

「そんなことまで、みんなで相談してきめるんですか。」

みんなの視線が一せいにそのほうにあつまつた。頬骨ほおぼねの高い、眉まゆの濃い、いくらか南洋の血がまじっていそうな顔だちの、二十四歳さいの青年が、膝ひざに両腕りょううでを突つつぱり、気味のわるいほど眼をすえて、朝倉先生を見つめている。

「むろんそうだよ。みんなの生活は、みんなで相談してきめるよりしかたがないだろう。」

朝倉先生はしずかにこたえた。

「しかたがあると思うんです。」

「どういう方法があるかね。」

「ここは塾堂でしょう。そして先生はその塾長でしょう。」

「そうだ。それで？」

「先生には、何もご方針はないのですか。」

「方針はあるとも。それは、今朝ほどから、くりかえし話したとおりだ。」

青年は、つぎの言葉にちよつとまごついたようだったが、

「ああいうことがご方針なら、それはわかりました。しかし、毎日の行事まで、ぼくたちに相談してきめるなんて、あんまり無責任じゃありませんか。」

「無責任？　これはきびしいね。」

朝倉先生は、そう言つて苦笑したが、

「そりやあ、私のほうでも、一通りの案は作つてあるよ。君らの相談が行きづまつたり、あんまり無茶むちやだつたりする時の参考にするつもりでね。だから、君が思っているほど無責任ではないつもりだ。」

「案があつたら、そのとおりに実行してください。ぼくたちは、うんと鍛きたえていただくつもりで、わざわざ田舎いなかから出て来たんですから、先生の案がどんなにきびしくても、決して驚おどろかないつもりです。」

「いい覚悟かくごだ。」

と、朝倉先生は相手の顔から眼をはなして、塾生名簿を見なが

ら、

「君は何室だったかね。」

「第一室です。」

「名前は？」

「田川大作。」

田川の返事は、しだいにぶつきらぼうになつていった。

名簿には、「熊本県、二十六歳、村農会書記、村青年団長、農学校卒」とあり、備考欄に、「歩兵伍ごちよう長、最近満州より帰還きかん」とあつた。塾生たちも、しきりに名簿と本人の顔とを見くらべた。本人は、しかし、それでてれた様子はすこしもなく、相変わらずりき力みかえつて、朝倉先生の顔を見すえていた。

朝倉先生は、名簿から眼をはなして、田川と視線をあわせながら、

「君の覚悟は、なるほどいい覚悟だが、しかし、そういう覚悟は、何かとくべつの場合の覚悟で、日常の生活を建設するための覚悟ではないようだね。第一、自分というものをあまりに軽んじすぎている。というよりは、自分の力を惜し^おみすぎている、と言ったほうが適当かもしれないがね。」

「それはどうしてです？ ぼくは——」

と、田川は、ふるえる唇^{くちびる}をつよくかんだあと、

「ぼくは軍隊生活をやって来た人間ですが、自分の力を出しおしみましたことなんか、一度だつてなかつたんです。これからもない

つもりです。ぼくは、今日、平木中佐どの殿が言われたように、なに
ごとにも死ぬ覚悟でぶつつかるつもりでいるんです。なまぬる
いことは、ぼく、大きらいです。」

「よろしい。私は、だから、それはそれとしていい覚悟だと言っ
ているんだ。しかし、君はだれかに鍛えてもらうことばかり考え
て、自分で自分を鍛える努力を惜しんでいるのではないかね。」

「そんなことはありません。ぼくは、自分を鍛えたいと思つたか
らこそ、自分で希望して、わざわざ遠い田舎からこんなところ
にも出て来たんです。」

「しかし、自分の生活のことを自分で考えてみようもしないで、
人に計画してもらおうとしているんだらう。それで自分の力を惜

しんでいないといえるかね。」

田川は返事に窮きゆうしたらしく、黙だまりこんだ。しかし、心で納得なつとくしたようには、すこしも見えなかつた。かれは、それまで膝の上
に突っぱつていた両腕を組んで、天てんじよう井あおを仰あおいだ。

朝倉先生は、注意ぶかくその様子を見まもつていたが、

「田川君——」

と、ものやわらかな、しかし、どこかに重みのある声で呼びかけた。

「君の気持ちは、私にはわからんことはない。大いに鍛練たんれんされるつもりで、はるばるやって来て、ちつとも鍛練してもらえないとなつたら、そりやあ腹もたつだろう、無理はないよ。しかし、

君がのぞんでいるような鍛練なら、君はもう軍隊生活で、十分うけて来たんではないかね。」

天井をにらんでいた田川の眼が、やつと朝倉先生のほうにもどつて来た。しかし返事はしない。朝倉先生は、すこし考えてから、「どうも、君と私とでは、鍛練という言葉の意味が、まるでちがつているようで、そこいらに君の不平の原因もあるようだが、自分たちの生活を自分たちで築きあげる能力を養うことも、一つの鍛練だと考えて、ここでは一つ、そういった意味での鍛練に精進^{しん}してみる気にはなれないかね。」

田川の顔には、冷笑に似たものが浮^うかんだだけだった。

「やはり納得が行かないようだね。」

と、朝倉先生はちよつと眼をふせたが、すぐ何か決心したように、

「じゃあ、君にたずねるが、君は、私のほうできめたことなら、それにどんな無理があつても、無条件に従う気なんだね。」

「そうです。それがぼくたちの鍛練のためでさえあれば、喜んで従います。」

「もし、私が、明日からの起床きしやうは午前三時、就寝しゅうしんは午後十
一時ときめたとしたら？」

田川は、かなりめんくらつたらしく、眼玉めだまをきよろつかせたが、
すぐ決然として、

「むろん、その通りにします。」

「よく考えてから、答えてくれたまえ。睡眠^{すいみん}時間はわずかに、

四時間だよ。」

「いいんです。覚悟をきめたら、がまんできないことはありません。ナポレオンは四時間しかねなかつたんです。」

「なるほど。ナポレオンはそうだったそうだね。」

と、朝倉先生は微笑しながら、

「しかし、一日や二日はがまんでできるだろうが、一か月半もの期間、はたしてできるかね。」

「できます。」

「君はできても、ほかの諸君はどうだろう。」

「そうきまったら、その覚悟をするほかありません。それが共同

生活です。」

「ふむ、なるほどそれが共同生活か。しかし、そう無理をしては、病人が出るかもしれないね。」

「そんなことで病気になるのは覚悟が足りないからです。」

「かりに君らの覚悟次第で病人は出ないとしても、飯島君がさつき言った実質的なことがお留守るすになる心配はないかね。」

「それも覚悟次第です。」

田川は、追いつめられて、何もかも「覚悟」でかたづけしたが、もうすっかりやけ気味らしかった。朝倉先生は、それ以上、深追ふかおいすることを思いとまって、しばらくじつと田川の顔を見つめていたが、

「君、片意地かたいじになつては、いけないよ。それじゃあ、ちつとも君自身の心の鍛練にはならない。とかく世間では、意地をはつて心にもないやせがまんをするのを、鍛練だと思いがちだが、それは鍛練の本筋ほんすじではない。鍛練の本筋は、すなおな気持ちになつて、道理に従つていく努力を積むことなんだよ。君にはその大事な本筋が、まだわかつていないんじゃないかね。……いや、君だけじゃない。私を見るところでは、今の日本人の大多数に、それがわかつていないらしい。そのために、日本は今、国全体として変りりき力みかえり、意地をはつて、非常な無理をやっている。国の内でも外でも、意地をはり、無理をやるのが、日本の生きて行くただ一つの道でもあるかのような考え方で、すべてのことが運ば

れているんだ。だから、自然、君らも、鍛練といえ、すぐ、意地をはったり無理をやったりすることだ、というふう考えたがるのかもしれないが、しかし、そうした傾向けいこうは、日本にとつて決して喜ぶべき傾向ではないよ。私は、そうした傾向から、おそろしい結果が近い将来に生じて来やしないかと、それをいつも心配しているぐらいなんだ。私が、こうして、及およばずながら、この塾の責任をひきうけているのも、せめては、ここに集まって来る青年諸君だけにでも、すなおな、道理にかなった共同生活の建設に努力してもらつて、その体験をとおして、いくらかでもそうした危険な傾向を阻止そししてもらいたいためなんだ。わかつてもらえるかね。」

朝倉先生は、しだいに、しみじみとした調子になっていった。

田川も、さすがに、それでいくらか心を動かされたらしく、もう、あからさまな反抗的はんこうてき態度は示していなかった。しかし、何かまだ腑ふにおちないとところがあるのか、ちよつと首をふつただけで、やはり返事はしなかった。

すると、それまで、窓の近くにいて、腕をくみ、眼をつぶり、何か深く考えこんでいるらしく見えていた一人の青年が、急に眼を見ひらいて、言った。

「ぼくは、先生のおっしやることが、やっと、どうなりわかったような気がします。しかし、すいぶんむずかしい生活ですね。」
どちらかというと、青白い顔の、知性的な眼をした、しかし十

分労働できたえたらしい、がっちりした体格の持ち主だった。

「第三室の青山敬太郎君です。」

次郎が朝倉先生に小声で言った。

青山の推薦者すいせんしゃから塾堂に來た手紙によると、かれは二十三歳

の若さで、弘前ひろさきの郊外に、相当大きなりんご園を經營しており、

しかも、そのりんご園の中に、私財を投じて、付近の青年たちのために小さな集会所を建て、毎晩のように、自分もいっしょになつて読書会や農業研究会などをやっている、とのことであつた。

そのせいで、大河無門とともに最初から次郎の注目をひいていた一人だったのである。

朝倉先生は、青山の青年集会所のことが簡単に名簿の備考欄に

書きこまれてあるのに目をとおしながら、何度もうなずいていたが、

「むずかしいっていうと?」

「強制されないでうまくやっていくほど、むずかしいことはないと思うんです。」

「しかし、強制されないとやれないほど、むずかしいことをやろうというんではないよ。」

「ええ、それはわかっています。」

「常識をはたらかせさえすれば、だれにもできる生活をやろうというんだから、こんなやさしいことはない、とも言えると思うがね。」

「しかし、常識をはたらかせると言っても、ふまじめではこまるんでしよう。」

「そりやあむろんさ。まごころのこもった常識でなくちやあ——」
「そのまごころのこもった常識というのが容易ではないとぼくは思うんです。常識的な、平凡へいほんなことをやる時ほど、人間はふまじめになりがちなものですから。」

「うむ。」

と、朝倉先生は大きくうなずいて、

「たしかに、君の言うとおりだ。その点では、ここの生活は非常にむずかしい。これまで、鍛練というと、とかく常識はずれのこ
とばかりが考えられて、まともな日常生活に必要な常識を、まご

ころをこめてはたらかすための鍛練ということは、ほとんど忘れられていたようだが、実は、一ばんたいせつで、しかも一ばんむずかしいのは、そうした鍛練なんだ。そのたいせつでむずかしい鍛練を、これから君らおたがいの間でやってもらおうというのが、ここの生活の目的なんだから、そういう意味で、君がここの生活をむずかしいと言ったのは、ほんとうだ。しかし、そこに気がついて、そのつもりで努力する気になってさえもらえば、もうほかにむずかしいことはないだろう。特別にすぐれた能力がなくても、常識のある人間なら、だれにだってできる生活なんだからね。ここの生活を甘くあま見てもらっても困るが、おびえる必要もないよ。」

塾生たちの表情は、さまざまだった。次郎は、その一人一人の

顔を注意ぶかく観察していたが、先生の言ったことを十分理解したのは、青山のほかには大河無門だけではないかという気がした。

朝倉先生は、そこでちよつと腕時計うでどけいをのぞいたが、

「話がついいろんなことにとんだが、しかし、むだではなかったようだね。ところで、かんじんの明日からの行事計画に、まだちつとも目鼻がついていないが、どうだね、ここいらで話を具体的なことにもどしては？　もし君らのほうに特別な案がなければ、私のほうから話のきつかけを作る意味で、それを出してみてもいいが。」

「どうかお願いします。」

飯島がまっさきにこたえた。つづいて同じような答えがほうぼ

うからきこえた。飯島はそれにつけ足すように言った。

「はじめからそうしていただくと、むだな時間がはぶけてよかつたんですがね。」

朝倉先生は、あつけにとられたように飯島の顔を見た。それから、ちよつと皮肉らしい苦笑くしやうをうかべながら、

「なるほどね。しかし、君らにうのみにされて、あとで腹いたでも起こされては困ると思つたものだからね。」

塾生たちの中に笑つたものがあつた。しかし、それはほんの二人にすぎなかつた。大多数は先生の言つた皮肉の意味が、まだ、まるでわかつていないかのような、まじめくさつた顔をしていた。飯島もやはりその一人だつた。

朝倉先生は、ちよつとため息をついたあと、

「では、まず起床と就寝の時刻からきめていこう。これは、まさか、午前三時に起きて午後十一時にねる、というわけにはいくまいね。それとも、鍛練のつもりで、やってみるかね。」

「わあっ！」

塾生たちは、一せいにどよめいて、頭に手をやった。田川も、さすがに苦笑しながら、頭をかいている。

「みんな不賛成らしいね。すると、何時が適當かな。」

「先生の原案はどうなんです。」

飯島がまた原案を催促さいそくした。

「これぐらいは、私から原案を出さなくても、何とかまとまりそ

うなものだね。」

「しかし、みんなで相談していたら、起床はなるだけおそいほうがいいということになりやあしませんか。」

「あるいは、そういうことになるかもしれないね。極端きよくたんにいうと、十時起床ということになるかもしれない。」

「かりにそうなるとしたら、それでもいいんですか。」

「君自身はどう思う？ 私の意見より、まず君自身の意見からききたいね。」

「ぼくは、むろん、いけないと思います。」

「君のまじめな常識がそれを許さないだろう。」

「そうです。」

「そうだとすると、みんながまごころをこめて常識をはたらかさえすれば、落ちつくべきところに落ちつくんではないかね。」

「そうなればいいんですが、実際は、やはり、なるだけおそくということになりそうに思っています。」

「その実際を、おたがいに鍛えあうのが、ここの生活だろうか？」

「はあ。しかし、それには、先生のほうからもいくらかの強制を加えていただかないと——」

「やはり強制が必要だというのかね。それじゃあ話はまた逆もどりだ。」

朝倉先生は、手にもっていた塾生名簿を畳のうえになげだして、腕をくんだ。そして、かなりながいこと、眼をつぶってだまりこ

んでいたが、やがて眼をひらくと、ちよつと飯島のほうを見たあと、みんなの顔を見まわして言った。

「強制されると、どんな不合理なことにももうじゆう盲従する。おた

がいの相談に任されると、なまけられるだけなまける工夫をする。もしそういうことが人間にとってあたりまえのことだとして許されるると、いったい人間の自主性とか良心とかいうものは、どういう意味をもつことになるんだ。いや、いつになったら、人間はおたがいにしんらい信賴のできる共同生活をいとな営むことができるようになるんだ。」

先生の言葉の調子は、はげしいというよりは、むしろ悲痛だった。

「私は、君らを、良心をもった自主的な人間としてここに迎えた。むかだから、かりに君ら自身が、君らを機械のように取りあつかってくれとか、いぬねこ犬猫のようにならしてくれとか、私に要求したとしても、私には絶対にそれができない。私は、あくまで、君らが人間であることを信じ、君らに人間としての行動を期待するよりほかはないのだ。むろん私も、人間の世の中に、強制の必要が全然ないとは思っていない。弱い人間にとっては、やはりそれが必要なこともあるだろう。時には、それが弱い人間を救うゆいいつ唯一の方
法である場合さえあるのだ。それは私にもよくわかつている。しかし、私は、君らがこの塾堂の生活にもたえないほど弱い人間であるとは思っていないし、また思いたくもない。だから、私は、

君らが何かの強制力にたよるまえに、まず君ら自身の良心にたよ
り、人間として、君らの最善をつくしてもらいたいと思つてい
るんだ。君らが、ほんとうにその気になりさえすれば、少なくとも、
この塾堂の生活ぐらゐは、何の強制もなしに運営していけるだろ
うと、私は信じている。君ら自身も、人間であるからには、その
ぐらゐの自信は持つていてもいいだろう。いや、持つていなけれ
ばならないはずなのだ。もし君らに、それだけの自信、——人間
としてのそれだけの誇りほこも持つてないとすると、私としては、もう
何も言うことはない。明日からの行事計画をたてることも、まっ
たく必要のないことだ。……どうだ、飯島君、やはり強制がなく
てはだめかね。」

「わかりました。」

飯島は、いくぶんあわて気味にこたえた。それだけに、いかにも無造作な、たよらない答えだった。

「田川君は、どうだね。」

田川は、それまで、眉根まゆねをよせ、小首をかしげて、いやに深刻そうに畳たたみの一点を見つめていたが、だしぬけに自分の名をよばれて、飯島とはちがった意味で、あわてたらしかった。しかし、かれはすぐにはこたえなかった。こたえるかわりに、何度も小首を左右にかしげ直し、するどい眼で畳をにらみまわした。それから、朝倉先生のほうをまともに見て、そのしやがれた声をとぎらしがちにこたえた。

「ぼく……もつと……考えてみます。」

「もつと考える？ ふむ。腑ふに落ちなければ、腑ふに落ちるまで考えるよりないだろう。自分で考えないで、人の言うことをうのみにする生活なんて、まるで意味がないからね。」

朝倉先生は、そう言つて微笑した。そして、それ以上口で説きふせることを断念した。いずれはこれからの生活体験が、徐々じよじよにかれらを納得させるだろう、というのが先生のいつもの信念だったのである。

「田川君のほかにも、まだよく納得がいかないでいる人がたくさんあるだろうと思うが、そうした根本問題については、これから何度でもむしかえして話しあう機会があるだろう。そこで、それ

はいちおう未解決のままにして、ともかくも具体的な問題にはいることにしよう。じゃあ、時間もおそくなつたし、私のほうから案を出すことにするよ。」

先生は、そう言つて、次郎に目くばせした。次郎は待ちかまえていたように、自分のそばに置いていた紙袋かみぶくろから、ガリ版の印刷物をとり出して、みんなに配布した。

それには、組織や、講義科目や、諸行事の時間割など、必要な諸計画が一通りならべられていたが、そのどの部分を見ても常識からとびはなれたようなことは一つもなかった。塾堂と名のつくところでは、そのころほとんどつきものようになっていた「みそぎ」とか、「沈黙ちんもくの労働」とか、およそそういった、いわゆ

る「鍛練^{たんれん}」的な行事が全く見当たらないのは、むしろみんなには、ふしぎに思われたくらいであった。五時半起床というのが、二月の武蔵野^{むさしの}では、ちよつとつらそうにも思えたが、それも青年たちにとつては、決しておどろくほどのことではなかった。むしろかれらをおどろかしたのは、生活にうるおいを^{あた}与えるような行事が、かなりの程度に、織^おりこまれていることであつた。とにかく、見る人が見れば、日常生活を深め高める目的で、すべてが計画されているということが明らかであつた。

相談は安易^{あんい}にすぎるほど、すらすらはこび、ほとんど無修正だつた。特異^{とくい}な行事を期待していた塾生たちにとつては、多少物足りなく感じられたらしかつたが、そのために、これという強^{きょう}

硬こうな主張も出なかった。最も多く発言したのは飯島だった。しかし、それも、自分の存在を印象づける目的以上の発言ではなく、たいていは原案賛成の意見をのべ、同時に進行係をつとめるといったふうであった。田川は、はじめから終わりまで、一言も口をきかなかった。

ただ、組織に関することで、室編成のほかに、生活内容の面から、いろいろの部が設けてあり、全員が期間中に、一度はどの部の仕事も体験するという仕組みになっていたので、その運営の方
法や、人員の割り当てなどについて、いろいろの質問が出、その説明に大部分の時間がついやされたのであった。

就しゅうしん寝は九時半、消しょうとう燈十時ときまつたが、懇談会を終わ

つたときには、すでに九時半を過ぎていた。

解散するまえに、朝倉先生が言った。

「これで、ともかくも、ここの生活設計がおたがいのものとしてできあがった。おたがいのものとしてできあがった以上、それがうまくいかなければ、おたがいの責任だ。むろんこの設計は、明日からのすべり出しに、いちおうのよりどころを与えたままで、これが最上のものであるとは保証できない。だから、だんだんやっていくうちに、不都合な点があれば、いつでも修正しようし、また、新しい案が出て、それがいいものであれば、どしどしとり入れて行くことにしたい。そういうことをやるのも、やはりおたがいの責任だ。あらためて言うが、友愛と創造、この二つを精神

的基調として、これからのおたがいの生活を、すみからすみまで磨きあげ、いきいきとした、清らかな、そして楽しいものに育てあげていきたいと思う。」

そのあと、就寝前の行事として、最初の静坐がはじまった。塾生たちは、各室ごとに、きちんと縦にならび、朝倉先生の指導にしたがってその姿勢をとった。

次郎は足音をたてないように、みんなの間をあるきまわり、いちじるしく姿勢のわるいを見つけると、それをなおしてやった。まっさきにかれの目についたのは、田川だった。田川はいやに胸を張り、軍隊流の不動の姿勢でしゃちこばっていた。そして、次郎が肩から力をぬかせようと、どんなに骨をおつても、なかなか

かそうはならなかった。これに反して、飯島は最初から、ごく器用に正しい姿勢をとっていた。もしかれが、おりおりうす目をあけて朝倉先生の顔をのぞくようなことさえしなかったら、かれの静坐は、塾生の中でも、最もすぐれた部類に属していたのかもしれない。なかつたのである。

静坐は十分足らずで終わった。

次郎は、いつになくつかれていたが、床とこについてからも、なかなか寝ねつかれなかつた。

六 板木の音

コーン、コーン、——コーン、コーン。

凍りついたような冷たい空気をやぶつて、板木が鳴りだした。

そとはまだ、真つ暗である。白木綿しろもめんの、古ぼけたカーテンのす

き間から、硝子戸ガラスどごしに、大きな星がまたたいているのが、はっ

きり次郎の眼に映った。

かれは、あたたかい夜具をはねのけ、勢いよく起きあがつて、

電燈でんとうのスイッチをひねった。その瞬間しゆんかん、枕時計まくらどけいがジン

ジンと鳴りだした。きつかり起床時刻きしやうの五時半である。

いそいで、寝巻ねまきをジャンパーに着かえ、夜具を押し入れにしま

いこむと、ぞんぶんに窓をあけた。風はなかったが、その空気

が、針先はりさきをそろえたように、顔いっぱいにつきささった。

かれは、そのつめたい空気の針をなぎ払うように、ばたばたと部屋中にはたきをかけはじめた。

開塾かいじゅく中は、次郎は、朝倉先生夫妻だけを空林庵くうりんあんに残して、本館の事務室につづく畳敷たたみじきの小さな部屋に、ひとりで寝起きすることになっているのである。

次郎がはたきをかけおわり、箒ほうきをにぎるころになっても、ほかの部屋は、まだどこもひっそりと静まりかえっていて、板木の音だけが、いつまでも鳴りつづけていた。

かれは、むろん、そのことに気がついていた。しかし、べつに気をくささらしてはいなかった。毎回開塾の当初はそうだったし、時刻どおりに板木が鳴ることさえ珍めづらしかったので、今朝の板木当

番の正確さだけでも上できだぐらいに思っていたのである。

かれは、掃除そうじをしながら、根気よく鳴りつづけている板木の音に、ふと好奇心こうきしんをそそられた。それは、鳴りはじめた時刻がきわめて正確だったからばかりでなく、その音の調子に何かしら落ちつきがあり、しかも、いつまでたってもそれが乱れなかったからであった。

（最初の朝の板木の音が、こんなだったことは、それまでにまったくないことだ。だれだろう、今朝の当番は？）

そう思ったとき、自然に、かれの眼にうかんで来た二つの顔があった。それは、大河無門の顔と、青山敬太郎のそれだった。ゆべの懇談会の様子から判断して、こんな落ちついた板木の打ち

かたのできるのは、おそらくこの二人のほかにはないだろう。そして、第一週の管理部の責任をひきうけたのは第五室だったのだ。——そこまで考えると、かれはもう、今朝の板木が大河の手で打たれていることはまちがいないことだと思った。

かれは、自分の部屋の掃除をすまずと、そつと事務室との間の引き戸をあけた。いつもなら、そのあとすぐ事務室の掃除にとりかかる順序だったが、しばらく敷居しきいのところにつつ立って耳をすきました。それから、足音をしのばせるようにして入り口に近づき、ドアを細目ろうかにあけて、板木のほうに眼をやった。板木は、事務室前の廊下ろうかと中廊下との角に、斜め向きななにかかっていたのである。

板木を打っていたのは、はたして大河無門だった。シャツにズ

ボンだけしか身につけていず、足袋たびもはいていなかった。しかし、べつに寒そうなふうでもなく、両足をふんばり、頭から一尺ほどの高さの板木を、近眼鏡の奥おくから見つめて、いかにも念入りに、ゆつくりと槌つちをふるっていた。

次郎は、思いきりドアをあけ、

「おはようございます。」

とあいさつして、大河に近づいた。

大河は、その時、ちようど槌をふりあげたところだったが、それを打ちおろしたあと、ちらと次郎のほうを見て、あいさつをかえした。

そして、そのまま、すこしも調子をかえないで、また槌をふる

いつづけた。

「もういいでしょう。ずいぶんながいこと打つたんじやありませんか。」

次郎が、寒そうに肩かたをすくめながら、言うど、

「ええ、でも、まだだれも起きた様子がないんです。」

と、大河は槌をふるいながら、こたえた。

「しかしもう眼はさましていますよ。」

「そうでしようか。」

「きつとさましていますよ。どの室にも、眼をさましているものが、もう何人かはあるはずです。」

大河は、それでも同じ調子で打ちつづけながら、

「いつもこんなに起きないんですか。」

「ええ、はじめのうちは、いつもこんなふうですよ。五分や七分はたいていおくれます。」

「すると、起こしてまわるほうが早いですかね。」

「そうかもしれませんが。しかし、それはやらないほうがいいでしょう。板木ばんぎで起きる約束やくそくをしたんですから。」

「じゃあ、やはり打ちつづけるよりほかありませんね。」

「打ちやめると、それでかえって起きることもありますかね。」

「なるほど。……ふん。……そういうものですかね。……あるいはそうかもしれない。」

大河は、ひとりごとのように、そう言いながら、やはり打ちや

めなかつた。そして、相変わらぬ板木に眼をすえ、

「ぼくたち、学生時代の学がくりよう寮生活を自治だなんていつて、いぼつていたものですが、本気にやろうとすると、実際むずかしいものですね。」

「ええ、結局は一人一人の問題じゃないでしょうか。」

「ぼくもそうだと思います。命令者に依いら頼する代わりに、多数の力に依頼するのでは、自治とは言えませんからね。」

次郎は大河の横顔を見つめて、ちよつとの間だまりこんでいたが、ふと、何か思いついたように、

「ちよつとぼくに打たしてみてください。」

大河は板木を打ちやめ、けげんそうに次郎のほうをふり向いて

槌をわたした。次郎は、すぐ大河に代わって板木を打ちだしたが、その打ちかたは、一つ一つの音が余韻よゐんをひくいとまのないほど急調子で、いかにも業ごうをにやしているような乱暴さだった。

大河は、あきれたように、その手ぶりを見つめて立っていた。次郎は、しかし、それには気づかず、おなじ乱暴な調子で、つづけざまに三四十も打つと、急にぴたりと手をやすめた。そして、半ば笑いながら、言った。

「板木を打つのは、もうこれでおしまいにしましょう。これで起きなければ、ほっとくほうがいいんです。」

ところで、かれの言葉が終わるか終わらないうちに、二三の室から、急にさわがしい人声や物音が、廊下をつたってきこえだし

た。

「起きだしたようです。もうだいじょうぶですよ。」

次郎は、そう言つて、槌を柱にかけ、事務室のほうにかえりかけた。すると、その時まで眉根まゆねをよせるようにしてかれの顔を見つめていた大河が、急に、真赤な齒ぐきを見せ、にっと笑つた。

そして、

「なんだか、ひどく叱しかりとばされて、やつと起きた、といったぐあいですね。」

「はっはっはっ。」

次郎は愉快ゆかいそうに笑つて、事務室にはいり、すぐ掃除そうじをはじめたが、その時になつて、大河のにっと笑つた顔と、そのあとで言

つた言葉とが、変に心にひつかかりだした。

塵ちりを廊下に掃はき出すと、かれはバケツに水を汲くんで来て、寝間ねまと事務室とに雑ぞうきん巾がけをはじめた。窓をすっかりあけはなつた、まるで火の気のない、二月の朝の空気は、風がないためにかえつてきびしく感じられた。これまでたびたび同じ経験をつんできた。かれにとつても、仕事は決してなまやさしいものではなかつた。どうかすると、手がしびれるようにかじかんで、雑巾が思うようにしぼれず、また、拭ふいたあとの床板が、つるつるに凍ることさえあるのだつた。かれは、しかし、二つの室をすみからすみまで、たんねんに拭ふきあげた。

もう、そのころには、廊下を行き来する塾生たちの足音も頻ひんば

繁んになり、ほうぼうから、わざとらしいかけ声や、とん狂きような笑

い声などもきこえていた。ゆうべの懇談会ぶんたんで分担ぶんたんをきめ、かれ

ら自身の室はもとより、建物の内部を、講堂や、広間や、便所に

いたるまで、全部清せいそう掃そうすることに申し合わせていたので、かれ

らも、まがりなりにも責任だけは、果たさなければならなかつた

し、それに、きびしい寒さと、おたがいの眼かとが、かれらを、外

見だけでも、いかにも忙いそがしそうな活動かに駆りたてていたのである。

次郎は、自分の責任である二つの室の掃除を終わると、すぐ便

所掃除の手伝いに行った。これは、かれが助手として塾生活をは

じめた当初からの、一つの誓ちかいみたようになっていたのである。

かれが、便所に通ずる廊下の角をまがると、一段さがった入り

口のたたきの上に立って、何かしきりと声こわだか高にがなりたてている一人の塾生がいた。見ると、飯島好造だった。

「おはよう。ここは何室の受け持ちでしたかね。」

次郎は近づいて行って声をかけた。

「第五室です。僕たちで、最初ほくにここを受け持つことにしたんです。」

飯島は、いかにも得意らしくこたえた。

ゆうべの懇談会で、日々の掃除の分担は管理部で割りあて、毎晩就寝前しゅうしんまえに、翌日の分を各室に通告するということにきまつたのだったが、その管理部の責任を、最初の一週間第五室が負うことになっていいる関係上、だれしもいやがる便所掃除を、まず手

始めに自分たちで引きうけることにしたものであろう。それはそれで、むろんいいことにちがいない。しかしあたりまえ以上のいいことでもなさそうだ。——次郎は、つい、そんな皮肉な気持ちになったのだった。

しかし、つぎの瞬しゅんかん間に、かれの頭にひらめいたのは大河無門のことだった。かれは、すると、もう飯島の存在を忘れて、大河の姿を便所のあちらこちらにさがしていた。

左右の窓の下に、小便つぼがそれぞれ七つほど並ならんでおり、そこを四人の塾生が二人ずつにわかれて、棒だわしで掃除していたが、その中には、大河の姿は見えなかった。

つきあたりに、大便所がこれも七つほどならんでいる。そのう

ちの、右はじの一つだけが戸が開いており、その少し手前の、たたきの上に、水をはったバケツが一つ置いてあるのが見えた。戸の開いた便所の内側は、電燈の光を斜めななにうけているので、よくは見えない。しかし、だれか中で掃除をしていることだけはたしかだった。六人の室員のうち、飯島は入り口に立っており、両がわの小便所に二人ずつ働いているのだから、あとの一人は大河にきまつている。次郎は、そう思って、すぐ声をかけようとした。しかし、なぜか思いとまった。そして、入り口の横の板壁いたかべにかけてあった便所用の雑巾を一枚とり、それをたたきの上のバケツの水にひたして、しばったあと、大河のはいつているのとは反対のはじの大便所の戸をあけ、中にはいった。

飯島は、それまで、やはり入り口の階段に立って、何かと指図さしずがましい口をきいていた。しかし、次郎が雑巾をもって大便所の中にはいったのを見ると、さすがに気がひけたらしく、指図する言葉のはしびしがにぶりがちになり、何かしら気弱さを示していた。

「こんな寒い時には、ぐいぐいはたらくに限るよ。室長なんかになるもんじやないね。」

じょうだんめかして、そんなこともいった。ゆうべ各室で就寝前に行なわれた互選ごせんの結果、かれは第五室の室長になっていたのである。

次郎は吹ふきだしたい気持ちだった。同時に、心の中で思った。

（飯島のような人間はどうてい救えない。それにくらべると、田川大作のほうはまだ見込みがある。）

かれは、窓ガラス、窓わく、板壁、ふみ板と、上から下へ、つぎつぎに拭きあげて行きながら、おりおりそとをのぞいて飯島の様子に注意していた。そのうちに、飯島は急に何か思い出したように叫んだ。

「あつ、そうだ。僕はここだけにへばりついては、いけなかつたんだ。」

そして、次郎のほうをちよつとぬすむように見ながら、

「第五室は、管理部として全体の責任を負っているんだからね。」

僕、一まわりして、様子を見て来るよ。」

飯島は、そう言うのと、いかにもあわてたように、あたふたと廊下に足音をたてて去った。

朝倉先生は、かつて次郎に、「現在の日本の指導層の大多数は、正面からは全く反対のできないようなことを理由にして、自分たちの立場を正当化したがるきらいがあるが、そうしたずるさは、ひとり指導層だけに限られたことではないようだ。たいていの日本人は、何かというと、表面堂々とした理由で自分の行動を弁護したり、飾^{かざ}ったりする。しかも、それで他人をごまかすだけでなく、自分自身の良心をごまかしている。それをずるいななどはちつとも考えない。これはおそろしいことだ。友愛塾の一つの大きな使命は、共同生活の^{じっせん}実践を通じて、青年たちをそうしたずる

さから救い、真理に対してもつと誠実な人間にしてやることだ。」
というような意味のことを、いったことがあったが、次郎は、便所の中から、飯島のうしろ姿を見おくりながら、その言葉を思いおこし、今さらのように、大きな困難にぶつつかったような気がしたのだった。

飯島の足音がきこえなくなると、小便所の掃除をしていた四人が、かわるがわる言った。

「すいぶん、ちやつかりしているなあ。」

「何しろ紳士しんしだからね。」

「郡の団長なんかやっていると、あんなふうになるもんかね。」

「そりゃあ、あべこべだよ。あんな人だから、郡の団長なんかに

なりたがるんだ。」

「つぎは、そろそろ県会議員というところかね。」

「ふ、ふ、ふ。」

「そういうと、ゆうべの室長選挙も何だか変だったぜ。」

「はじめから、自分が室長だときめてかかっているんだから、かなわないよ。」

「心臓だね、じつさい。」

「その心臓に負けて、いやいやながら全員一致いっちの推薦すいせんをやったというわけか。」

みょう「妙なもんだね、選挙なんて。」

「選挙なんてそんなものらしいよ。どこでもたいていは心臓の強

いのが勝っているんだ。」

「はっはっはっ。」

次郎は、そんな対話の中にも、友愛塾に課された大きな問題があると思つた。そして、かれらの話がどう発展していくかを興味をもつて待つていた。かれらは、しかし、笑つたあと、急に口をつぐんでしまった。次郎が大便所の中にいることをだれかが思い出して、みんなのおしやべりを制止する合図をしたものらしい。次郎と大河とは、間もなく、それぞれに最初の大便所の掃除を終わつて、となりの大便所に移つていた。まだだれも手をかけない大便所が、あいだに三つほどはさまっている。次郎は、さつきから、大河に話しかけてみたい気持ちは十分だった。しかし、遠

くからのかけ合い話は、この場合、何となくぴったりしなかつたし、また、雑巾をゆすぎに出たついでに、そつとのぞいて見た大河の様子が、いかにも沈黙ちんもくの行者ぎようじゃといった感銘かんめいをかれに与あたえていたので、口をきるのがよけいにためられるのだった。

そのうちに、小便所の掃除が終わつたらしく、それにかかつていた四人のうちの三人が、とん狂な笑い声をたてながら、大便所の掃除をはじめ、あとの一人が、たたきに水を流しはじめた。で、次郎は、二つ目の大便所の掃除をおわると、すぐそこを去つて講堂のほうに行つた。大河とは、ついに言葉をかわさないままだったのである。

講堂では、掃除はもうあらかた終わつて、机や椅子いすの整頓せいとんに

とりかかるところだった。そこは、第一室と第二室の共同の受け持ちだったらしく、田川大作や青山敬太郎などの顔も見えていた。田川は、例のしやがれた、激しい号令口調で、ほかの塾生たちをせきたてながら、自分でも椅子や机を運んで敏捷にたちはたらいていた。これに反して、青山の態度はきわめて冷静だった。かれは、田川の声には無頓着なように、並べられていく机の列をじつとにらんでは、そのみだれを正していた。——二人とも、それぞれに室長に選ばれていたのである。

次郎が入り口に立って様子をながめていると、
「もうここはだいたいすんだようですよ。」

と、みんなにきこえるような声で言いながら、
教壇きょうだんをおり

てかれのほうに近づいて来た塾生があった。飯島である。次郎は思わず苦笑した。何かむかむかするものが、胸の底からこみあげて来るような気持ちだった。しかし、かれはしいて自分をおちつけ、

「そうですね。」

と、なま返事をして眼をそらした。そして、そのまま、すぐそこを去り、塾長室のほうに行つた。

塾長室の掃除は、朝倉先生夫妻が、空林庵の掃除をすましたあと、給仕の河瀬かわせに手つだつてもらつて、自分たちの手でやることになつていたが、次郎も、都合がつきさえすれば、手つだうことにしていたのである。

中にはいつて見ると、もう掃除はすっかりすんでおり、河瀬がストーヴに火を入れているところだった。夫人は炊事場のほうにでも行つたらしく、朝倉先生だけが、まだあたたまらないストーヴのそばの椅子にかけて、手帳に何か書き入れていた。

「どんなふうだね。」

先生は、次郎の顔を見ると、手帳をひらいたまま、たずねた。

「はあ——」

と、次郎は笑いながら、

「例によつて、指導者がいるようですね。」

「飯島なんかも、そうだろう。」

「ええ、とくべつ露骨ろこつなようです。」

「田川はどうだい。」

「ちよつとその気があるようですが、軍隊式ですから、飯島とは質がちがいます。気持ちはあんがい純真じゃないかと思えますが

……」

「そうかもしれないね。……それで、べつにこれまでと大して変わったこともなかったんだね。」

「ええ——」

と、次郎はちよつと考えていたが、

「今のところ、平木中佐の影えいきょう響きょうでどうこうというようなこと

は、全然ないように思います。」

「そりゃあそうだろう。それがあらわれるのはまだ早いよ。」

それから、朝倉先生は、何かおかしそうにひとりで笑っていたが、

「それに、今朝はすいぶん寒かったし、平木中佐どころではなかつたんだらう。」

次郎は、すぐには、その意味がのみこめないで、きよとんとしていた。すると、先生は、

「こんな寒い朝に、死ぬ気になってみんながはね起きてくれると、平木中佐に感謝してもいいんだがね。」

二人は声をたてて笑った。次郎は、しかし、すぐ真顔まがおになり、「けさの板木ばんぎの音、どうでした？」

「最初の朝にしては、めずらしいことだったね。時刻が非常に正

確だったし、それに、打ち方がちつとも寒そうでなかった。」

「先生もそうお感じでしたか。」

「感じたとも。あんな落ちついた打ち方は今日のような寒い朝には、なかなかできるものではないよ。」

「僕もそう思つて、わざわざ廊下に出て見たんですが、当番は大河君だったんです。」

「なるほど。そうか。——しかし、大河にしちや惜おしかったね。おしまいごろにはかんしゃくをおこしていたようだったが。」

「はあ——」

次郎はぎくりとして、うまく返事ができなかつた。大河のにつと笑つた顔と、その時言つた言葉とがあらためて思い出されたの

だった。かれはしばらく眼をふせていたが、

「おしまいのほうは、実は僕が打ったんでした。」

それから、ちよつと柱時計をのぞき、

「その時、実は大河君にいわれたこともあるんですが、あとでゆつくり先生に教えていただきたいと思っています。」

かれは、そう言うのと、すぐおじぎをして、塾長室を出た。朝倉先生は無言のまま、かれのうしろ姿を見おくつていた。

もうそのころには、塾生たちは、室内の掃除整頓をすべて終わつて、最後に、廊下や、げんかん玄関や、そのほかの出入り口の掃除にかかっているとところだった。むろんそうした掃除も、ぶんだん分担は一通りきまっていたが、厳密には境界が定められないために、塾生

たちはかなり入りみだれていた。

次郎は、すぐ、事務室の前から玄関にかけての掃除を手伝った。朝倉先生も、そのうちに塾長室から廊下に出て、みんなの様子を見ていたが、それもほんのしばらくで、すぐまた塾長室にもどり、椅子に腰こしをおろすと、そのまま何か深く考えこんでいた。

掃除がすっかりすみ、洗面その他を終わると、みんなは広間に集まって朝の行事をやることになったが、それまでには、起床からたつぷり四十分ぐらいはかかっていた。次郎が、これまで毎朝、空林庵の寝ざめに親しんで来た雀すずめの第一声がきこえるのは、ほぼその時刻だったのである。

朝の行事は、まず室内体操にはじまった。それは友愛塾のため

に特に考案されたもので、その指導も指揮も次郎の役割だった。体操がすむと、朝倉先生の合い図で静坐せいざに入った。これは就寝前の静坐にくらべると、いくぶんながかったが、それでも、せいぜい十四五分ぐらいだった。次郎は、今朝も足音をしのばせながら、塾生たちの姿勢を直してやった。

静坐のあとは遥拝ようはいだった。——これは皇大神宮こうたいじんぐうと皇居こうきよに対する儀礼ぎらいで、その当時は、極左分子きょくさや一部のキリスト教徒以外の全国民によつて当然な国民儀礼と認められ、集団行事においてそれを欠くことは、国民常識に反するものとさえ考えられていたのである。

遥拝がすむと、おたがいの朝のあいさつをかわし、そのあと、

もう一度静坐に入った。そして、それが三分もつづいたころ、朝倉先生は、自分も静坐瞑めいもく目のまま、おもむろにつきぎのような話をした。

*

越前永平寺えちぜんえいへいじに奕堂えきどうという名高い和尚おしやうがいたが、ある朝、しずかに眼をとじて、鐘しょう楼ろうからきこえて来る鐘かねの音ねに耳をすましていた。和尚は、今朝の鐘の音には、いつもにない深いひびきがこもっているような気がしたのである。

やがて、最後のひびきが、澄すみわたった空に消え入るのを待つて、和尚は侍僧じそうを呼んでたずねた。

「今朝の鐘をついたのはだれじやな。」

「新参しんざんの小僧こぞうでございます。」

「そうか。ちよつと、たずねたいことがある。すぐ、ここに呼んでくれ。」

間もなく、侍僧ともなに伴われて、一人のつつましやかな小僧がはいって来た。和尚じあいは慈愛じあいにみちた眼で、小僧を見ながらたずねた。

「ほう、お前か、今朝の鐘をついたのは。……で、どのような気持ちでついたのじゃな。」

「べつにこれと申す心得もございません。ただ定めに従いましてつきましただけで……」

と、小僧はあくまでもつつましくこたえた。

「いや、そうではあるまい。世の常の心では、ああはつけるもの

ではない。わしの耳には、そのまま仏界ぶつがいの妙音みょうおんともきこえたのじゃ。鐘をつくなら、あのようにつきたいものじゃのう。何も遠慮えんりよすることはない。みんなの心得にもなることじゃ。かくさず、そなたの気持ちをきかせてはくれまいか。」

「おそれ入ります。では申しあげますが、実は国もとにおりましたころ、いつも師匠ししやうに、鐘をつくなら、鐘を仏と心得て、それにふさわしい心のつつしみを忘れてはならぬ、と言ひ聞かされておりましたので、今朝もそれを思い出し、ひとつきごとに、礼らいは拝いをしながらついたまででございます。」

奕堂和尚は聞きおわつて、いかにもうれしそうにうなずいた。そして、まだどこかに漂ただよつていそうな鐘の音を追い求めるように、

ふたたびしずかに眼をとじた。

この妙音をつきだした小僧こそは、実に、後年の森田悟由ごゆうぜんじ禪師
 だったそうである。

*

朝倉先生は、この話を語りおわると、しばらく沈黙した。

塾生たちは、かるとじたまぶたをとおして、窓のすりガラス
 に刻々に明るくなって行く朝の光を感じながら、つぎの言葉を待
 った。軒端のきぼには、雀がちゅんちゅんと、間をおいて鳴きかわして
 いる。

やがて先生は言葉をついだ。

「私はけさ、君らの中のだれかが打った板木の音を聞きながら、

ふと、この話を思い出したが、それはおそらく、けさの板木が、ここの生活にふさわしい心をもつて打たれていたからだと思う。君らの耳にあの音がどう響いたかは知らない。しかし、私は、あの音から、この塾はじまって以来のゆたかな感じをうけたのだ。じつくりと落ちついて、すこしも軽はずみなどころのない、また、すこしも力りきんだところのない、おだやかな、そして辛しん抱ぼうづよい努力、——心の底に深い愛情をたたえた人だけに期待しうるような努力を、私はあの音から感じとり、これこそこの生活を象しょう徴ちようする響きだと思ったのである。——私は、しかし、奕堂和尚のように、だれが、どんな気持ちで、今朝の板木を打ったかを、しいて知りたいとは思わない。それは、もともとここの生活では、

だれがどんな働きをして、どんな名誉めいよを担になうかということ、あまりたいせつなことではないからだ。ここの生活でたいせつなのは、名でなくて実である。心である。その心がむだにならないで、共同生活全体の中に生かされていけば、個々の人の名などは、書いて問題にする必要はない。そういう意味で、私は、今朝のような板木の打ちかたをする心をもった人が、君らの中に、少なくとも一人だけはある、ということを知っただけで満足したいと思う。そして、その一人の心が、おたがいの生活の中に、すこしもむだにならないで生かされていくことを、心から期待したい。……つまり、愛情に出発した、おだやかな、しかも辛抱づよい努力、そういう努力を、単に板木を打つ場合だけでなく、すべての場合に

払^{はら}つてもらいたいのである。……名を求めず、ひたすらに実を捧^{ささ}げるといふ気持ちに徹^{てつ}して、そういう努力を、みんなで払^{はら}つてもらいたいのである。——」

朝倉先生は、そこでまた口をつぐんだ。塾生たちの中には、話^わがそれで終わったのかと思ひ、そつと眼をひらいて、先生の顔^{かほ}をのぞいて見たものもあつた。

次郎は、しかし、それどころではなかつた。かれは、もう、先生のつぎの言葉^{ことば}が、槍^{やり}の穂^ほ先^{さき}のような鋭^{とが}さで、自分の胸^{むね}にせまつているのを感じ、かたく観念^{くわんねん}の眼^{まなこ}をとじていたのだつた。

「ところで——」

と、先生は、かなり間^まをおいてから、つづけた。

「私は、そつちよく率直に言う、君らが私の期待を裏切らないだろうということについて、残念ながらもまだ十分の自信を持つことができな。というのは、今朝の板木が、あまりにもながく鳴りつづけたからだ。あれほど辛抱づよく、しかも、あれほどおだやかに鳴りつづけたということは、一方では、あれを打っていた一人の塾生の心の深さを物語るが、また、一方では、その一人をのぞいた多数の塾生の心の浅さを物語ることもなったのだ。君らの大多数は、板木を打った一人の塾生があれほどの誠意を示したにもかかわらず、容易にそれにこたえようとはしなかった。君らにとつては、その誠意よりも、ねどこ寢床の中のぬくもりのほうがはるかにたいせつだったのだ。あたたかい寢床の中で、うつらうつらと、

できるだけ眠りねむを引きのぼすことを、人間の誠意以上に、たいせつにする心、これは決して深い心だとはいえない。……もつとも、君らの中には、内心それをいくらか恥じていたものも、おそらく幾いくにん人かはあつたであろう。気がとがめるといった程度なら、あるいは君らのすべてがそうであつたのかもしれない。しかし、それも結局は何の役にもたたなかつたのだ。では、なぜ役にたたなかつたのか。今、君らに真しんけん剣に考えてもらいたいのはこの一点だ。——」

静かな空気の中を、えぐるような沈黙の数秒が流れたあと、朝倉先生の言葉が沈ちん痛つうにつづけられた。

「私に言わせると、それは、君らに、ほんとうの意味で自分をた

いせつにする心がないからなのだ。言いかえると、君らには、自分で自分をたいせつにする自主性というものがまるでない。さらに言いかえると、君らは多数をたのみ、多数のかけにかくれて、何よりもたいせつな自分の良心を眠らせることに平気な人間なのだ。私は、現在の日本人の大多数がもっている最大の弱点を、君らの今朝の起床の様子でまざまざと見せつけられたような気がして、全く、暗^{あんぜん}然とならざるを得なかったのだ。——」

次郎は、朝倉先生が、開塾最初の朝の訓話^{くんわ}で、これほど激^{はげ}しい言葉をつかつて、真正面から塾生たちに非難をあげせかけたのを、これまでにきいた覚えがなかった。かれは、まだあとに残されている自分への非難が、どんな言葉で表現されるかを、身がちぢま

る思いで待っていた。

「君らのそうした非良心的な態度は、君ら自身をますます非良心的にするばかりではない。それがある限度をこすと、ついには、愛情と忍耐にんたいとをもって、君らの良心を力づけようと努力している人の心までをきずつけ、その愛情と忍耐とを、憎しみにくと怒りいかとに代えてしまうものだ。現に君らは、今朝の板木の音の調子が途とちゆう中から変わったことで、それがわかっただらうと思う。あの、おだやかで辛抱づよかった板木の音が、おしまいになって、急に怒りだしたとしか思えないような乱調子になったが、あれは、君らのあまりにも非良心的な態度が、板木をうつ人の心をきずつけた証しょうこ拠うなのだ。……むろん、私は、愛情も忍耐心も失った、あ

あした乱暴な打ちかたを是認^{ぜにん}はしていない。また、それをやむを得ないことだとして弁護しようとも思っていない。怒りや短気は、友愛塾の精神とは根本的に相いれないものなのだから、どんな事情のもとでも、ああした打ちかたは、二度とくりかえされてはならないことなのだ。もし今朝の板木当番が、ついに業^{ごう}をにやしてあんな打ちかたをしたとすると、私はその人のために、まことに残念なことだと思っている。しかし、いつそうわるいのは、ああした打ちかたを余儀^{よぎ}なくさせた君らの態度だ。君らさえもう少し良心的であつてくれたら、板木を打った人も、ああしたあやまちを犯^{おか}さないですんだのだらうと思うと、それが私はくやしくてならない。……だが、それはまあいい、それは百歩をゆずってあき

らめるとしても、ここにどうしても私にあきらめのつかないことが一つある。それは、愛情で打たれた板木の音では寢床をはなれようとしなかつた君らが、怒りで打たれた板木の音では、わけなくはね起きたということだ。その点で、君らは精神的にはまだ奴隷れいの域を一步も脱だつしていかないということを証明している。いや、それどころか、君らはよりいつそうみじめな奴隷になることを希望しているときえ私には思える。これはほんとうになさけないことだ。私は、むろん、こう言つたからといって、怒りに対しては怒りをもつて立ち向かえ、と君らにすすめているのではない。ただ私は、愛情に対しては、つけあがり、怒りに対しては、ただちに膝ひざを屈くつするような君らの奴隷根性こんじょうが、なさけなくて、じつ

としてはいられない気持ちがあるのだ——」

次郎は、先生の言葉がますます激しくなっていくのにおどろいた。先生は、あるいは、昨日の入塾式における平木中佐の影えいきよ響うから、できるだけ早く塾生たちを救い出そうとしていられるのかもしれない。しかし、それにしても入塾したばかりの青年たちに話す言葉としては、あまりにも激しすぎる。これではかえって逆効果を生むのではあるまいか。

しかし、かれにとっていつそう不安に感じられたのは、今朝の板木の打ちかたについて、大河無門がぬれぎぬを着せられていることであつた。

（おしまい、あの乱暴な打ちかたをやつたのが、自分だという

ことは、すでに先生に言っておいたのに、先生はどうしてそのことをはつきり言われないのだろう。もしそれが助手としての自分の立場をまもってくださるためだとしたら、自分はむしろ心外だ。大河もむろん心外に思っているにちがいない。）

かれは、そう思つて、われ知らず眼をひらき、塾生たちの中に大河の顔をさがした。かれは塾生たちの静坐の姿勢を直したあと、朝倉先生の横に斜め向きにすわっていたので、よく全体が見渡せたのである。

大河は第五室の列の一番うしろにすわっていた。しかし、ただ静かに瞑目めいもくしているだけで、その顔からは、かれの気持ちがあつた。う動いているかは、すこしもうかがえなかつた。

朝倉先生は、それつきり口をつぐんでいる。次郎はいよいよ不安だつた。もし先生の話がそれで終わったとすると、大河に対してはむろんのこと、あとでほんとうのことがわかった場合、他の塾生たちに対しても、このままでは決していい結果をもたらさないだろう。

かれは視線を転じて、そつと先生の顔をのぞいてみた。すると、ふしぎなことには、先生のいつもの端^{たんぜん}然^{ぜん}たる静坐の姿勢がいくらかくずれている。顔をすこし伏^ふせ、その眉^{まゆ}の間には深いしわさえ見えるのである。次郎は、先生が気分でも悪くなつたのではないか、と思つた。

先生は、しかし、まもなく顔をまっすぐにした。そして、これ

までの激しい調子とはうって代わった、沈しずんだ調子で言葉をつづけた。

「だが、考えてみると、なさけないのは決して君らだけではない。こんなことを言っている私自身が、今朝は、君らに対して重大な過失を犯おかしてしまったようだ。私は、さつき君らを非難して、平気で自分の良心を眠らせている人間だと言った。また、君らの奴隷根性がなさけないとさえ言った。こういう言葉は人間に対する最大の侮ぶじよく辱の言葉で、心に愛情をもつものの容易に口にすべきことではない。少くとも同じ屋根の下で、一つ釜かまの飯をたべながら、これから共同生活をやっていこうとする人たちの間では、決してとりかわされてはならない言葉なのだ。しかるに、私は、つ

い、自分の感情にかられて、そんな言葉をつかつてしまった。それは、私に忍耐力が欠けていたからだ。いや、君らに対する愛情が、まだ十分でなかったからだ。私は、板木当番の乱暴な打ちかたを非難しながら、自分自身で、それとちつともちがわないう過失を犯してしまった。私は、いま、それに気がついて、心から恥じている。同時に、私は、今日の私の言葉が、君らを強制して、盲もう従うじゆうを強しいるような結果にならないことを、心から祈いのらずにはいられない。……くれぐれも言っておきたいのは、人間にとつて良心の自由をまもるほどたいせつなことはない、ということだ。板木の音であれ、先生の言葉であれ、そのほか、そこから与あたえられたどんな刺激しげきであれ、それがきびしいから従あまう、甘いから軽ん

ずるといふのでなく、君ら自身の良心の自由な判断に訴え、従うべきものには進んで従い、従うべからざるものには断じて従わない、というようなのであつてこそ、君らはほんとうの人間だといえるのだ。私は、愛情と忍耐力が足りないために、つい激しい言葉を使ひすぎたが、それも、君らに、あくまでも良心的・自主的に行動してもらいたいと願つていたからのことだ。私は私として十分反省するが、どうか君らにも、私のその気持ちだけはくんでもらいたい。そして、その意味で、私の激しすぎた言葉をよいほうに生かしてもらいたいと思う。——最後に、私は君らとともに、永平寺の小僧さんが、礼拝しながら鐘をついたという、あの敬虔な態度の意味を、もう一度深く味わつて、けさの私の話を終

わることにはしたい。」

みんなは、しずかに眼を見開いた。窓のすりガラスはもう十分明るくなつており、ほのかな紅をさえとかしていた。

だれの顔にも、何かしら、ゆうべとはちがった感情が流れており、互礼ごれいをすまして広間を出て行く時のみんなの足音も、これまでになく静せい肅しゆくだった。

七時の朝食までには、まだ二十分ほどの時間があり、その間に食事当番は食しょくたく卓の準備をやり、そのほかのものは、自由に新聞に目をとおしたり、私用をたしたりするのだった。次郎は、いつもなら、こんな時間にも、できるだけ塾生たちに接せつ触しよくして、かれらの感想をきいたりするのだったが、今日は、広間を出ると

すぐ、塾長室に行き、朝倉先生に向かつて、なじるように言った。「先生は、ぼくのやりそこないを、どうしてあからさまに話してくださいませんか。」

「板木ばんぎのことか。あれは、私が直接見ていたわけではなかったのだからね。」

「しかし、ぼくから先生にそう申しておいたんじゃないやありませんか。」

「うむ。それはきいた。しかし、私が何もかも知っていたことになると、君の名前だけでなく、大河の名前も出さなければならなくなるんでね。」

「出してくださいすつてもいいじゃないやありませんか。」

「出してわるいことはない。しかし、出さないほうがいいんだ。少なくとも、今朝の話には、出さないほうがよかつたんだ。」

次郎はちよつと考えていたが、

「ええ、それはぼくにもわかります。しかし、そのために、大河君がぬれ衣ぎぬをきなければならぬという道理はないでしょう。ぼくとしては、それがたまらないほど心苦しいんです。」

「心苦しければ、君自身で何とか始末したらいいだろう。原因はもともと君にあるんだから。……私は、板木の音そのものを問題にただけなんだ。」

次郎は、朝倉先生らしくない詭弁きべんだという気がしてさびしかつた。かれは語気を強めて言った。

「むろん、ぼくは大河君にあやまるつもりでいます。しかし、大河君としては、ぼくがあやまつただけでは、気がすまないでしょう。」

「そうかね——。」

と、朝倉先生は、まじまじと次郎の顔を見ながら、

「私は、大河をそんなふうと思うのは、むしろ大河に対する侮辱だという気もするんだがね。」

次郎は、いきなりぴしりと胸に答むちをあてられたような気がした。かれの眼には、大河の、今朝のしずまりきった静坐の姿がひとりでに浮うかんで来た。むろん、先生に返す言葉は見つからなかった。先生は、すると、微笑びしょうしながら、

「君は大河の思わくなんかを問題にするまえに、君自身のことを問題にすべきだと思うが、どうだね。」

それは第二の答だった。しかも、第一の答よりはるかにきびしい答だった。

「わかりました。」

と、次郎は眼をふせたまま頭をさげ、逃げるように塾長室を出た。

やがて朝食の時間になった。次郎は箸はしをにぎっている間も、ときどき眼をつぶって、何か考えるふうだった。

食後には、みんな卓についたまま、雑談的に感想を述べあつたりする時間が設けられていた。次郎は、その時間が来るのを待ち

かねていたように立ちあがった。そして、みんなに今朝の起床の板木のいきさつを話し、最後につけ加えた。

「ぼくは、ながいこと友愛塾の仕事を手伝わせていただいていたが、その精神がまだちつとも身についていなかったために、けさのようなあやまちを犯してしまいました。ほんとうに恥はずかしいことだと思っています。しかし、そのあやまちによつて、開塾そうそう、大河君のような、友愛塾精神に徹底した、実践家じっせんかの魂たましいにふれることができたことを思いますと、一方では、かえつてありがたいような気持ちもしています。」

みんなの視線は、もうさつきから大河に集中されていた。大河の顔には、しかし、それでてれているような表情はすこしも見ら

れなかった。かれはただ一心に次郎の顔を見つめ、その声に耳をかたむけているだけであつた。

そのあと、八時から正午まで、「郷土社会と青年生活」という題目で、朝倉先生の講義があり、午後は屋外清掃せいそうと身体検査、夜は読書会や室内遊戯ゆうぎなどで、開塾第一日の行事が終わった。

消燈まで、これといつてとりたてていうほどの変わったこともなかった。しかし、大河無門が、かれ自身の希望に反して、あまりにも早くその存在を認められ、みんなの注目の的になったということは、この塾にとって、よかれあしかれ、決して小さなできごとではなかつたといえるであろう。

朝倉夫人は、行事をおわつて空林庵に引きあげるまえに、わざ

わざ次郎の室にやって来て、しばらく話しこんだ。その話の中にこんな言葉もあつた。

「次郎さんの板木の打ちかたには、行事の性質や、そのときどきの必要で、少しずつちがつた調子が出ますわね。あたしは、それがいいと思いますの。それでこそ、そのときどきの気分が出るんですもの。板木だつて、打ちかた次第しだいでは芸術になりますわ。あたし、次郎さんの板木の音をきいていると、いつもそう思いますのよ。先生には叱しかられるかもしれないけれど、今朝の打ちかただつて、頭かぶせにわるいとばかりいえないんじゃないかしら。」

次郎は、それで安心する気にはむろんなれなかつた。しかし、夫人がそんなことを言つて自分をなぐさめるために、わざわざ自

分の室にやって来たのだと思うと、何か心のあたたまる思いがした。そして、その日のかれの日記の中に、そのことが、今朝からのできごととともに、大事に書きこまれていたことは、いうまでもない。

七 最初の日曜日

最初の日曜が来た。開かいじゆく塾じゆくの日がちょうど月曜だったので、まる一週間になる。

この一週間は、塾生たちにとっては、まったく奇きみよう妙な感じのする一週間だった。朝倉先生夫妻も、次郎も、生活の細部の運営

については、自分たちのほうからは、何ひとつ指図さしずをせず、また、塾生たちから何かたずねられても、「ご随意ずいに」とか、「適当に考えてやってくれたまえ」とか、「みんながよく相談してみるんだな」とかいったような返事をするだけだったので、とかくかれらはとまどいした。中には、それをいいことにして、ずるくかまえるものもなかった。その結果、むだとへまとがつきつぎにおこり、かれらの共同生活のすがたは、見た眼めには決していいものではなかった。時には、不規律と怠慢たいまんだけが塾堂を支配しているのではないか、と疑われるような場面もあり、もし学ぶことよりも批評することにより多くの興味を覚えている参観者がたずねて来たとしたら、その人は、批評の材料をさがすのに、決

して骨は折れなかつたであろう。

朝倉先生は、しかし、どんな悪い状態があらわれて来ても、すぐその場でそれを非難することがなかつた。すべてをいちおう成り行きにまかせ、行くところまで行かせておいて、あとで、——たとえば食後の雑談や、夜の集まりなどの際に、——それを話題にして、みんなといっしょに、その原因結果をこまかに究明し、その究明をとおして、共同生活の基準になるような原則的なものを探求する、といったふうだったのである。

塾生たちのある者にとっては、朝倉先生のそうしたやり方が、非常に皮肉に感じられた。

「気がついているなら、すぐそう言ってくれたらよかりそうなも

のだ」と、そんな不平をもらすものもあつた。また中には、「先生は要するに指導者でなくて批評家だ」などと、したり顔に言うものもあつた。しかし日がたつにつれて、しだいにかれらの間に取りかわされ出したのは、「ひまなようで、いやに忙しい」とか、「しまりがないうで、変にきびしい」とか、そういったちぐはぐな気持ちであらわす言葉だつた。

かれらの大多数は、まだむろん、人間生活にとつての自由の価値や、そのきびしさについて、ほんとうに目を覚さましていたわけではなく、友愛塾というところは一風変わった指導をやるところだぐらいにしか考えていなかった。しかし、それにしても、そうした言葉が、しだいにかれらの間にとりかわされるようになった

ということは、たしかに一つの進歩であり、混乱と無秩序むちつじよの中で、不十分ながらも、何か自主的創造的な活動が始まっている証ししようこ、
拠よこにはちがいがいなかったのである。

日曜日は、特別の計画がないかぎり、朝食後から夕食前まで自由外出ということになっていた。東京見物を一つの大きな楽しみにして上京して来た塾生たちは、最初の夜の懇談会こんだんかいで、ほとんど議論の余地なく、満場一致いっちでそれを決議していたのだった。

事務所にそなえつけてあった何枚かの東京地図は、すでに二三日前から各室で引っぱりだこだった。土曜日の晩には、炊事部すいじぶはみんなの弁当の献立こんだてをするのに忙しかった。次郎が道順の相談のために、各室に引っぱりこまれたことはいうまでもない。そし

て、いよいよ日曜の朝食がすむと、二十分とはたたないうちに、塾内はもの音一つしないほど、しんかんとなつてしまつたのである。

みんなが出はらつてしまうと、次郎も一週間ぶりで解放された時間を持つことができた。いつもだと、さつそく読書をやるか、くうりんあん空林庵に行つて、朝倉先生夫妻とゆつくり話しこむかするはずだつたが、今日は、事務室の隣となりの自分の部屋で、机によりかかつたまま、ながいことひとりで考えこんでいた。

机の上には、二三日まえ、兄の恭きょういち一から来たはがきが、文面を上にしてのつていた。それには、

「朝倉先生にもしばらくお目にかかつていないので、近いうちに、

ぼくのほうから訪ねたいと思つている。塾がまたはじまつたそうだから、先生も君も日曜でなければひまがないだろうと想像そうぞうして、だいたい今度の日曜を予定している。ぼくのほうはたぶん変へんこう更の必要はあるまいと思うが、君のほうでさしつかえがあつたら、すぐ返事をくれたまえ。さしつかえなければ返事の必要はない。「

とあつた。

次郎は、その中の「ぼくのほうはたぶん変更はあるまいと思うが」という文句が気になつた。もし恭一だけの考えで日取りがきめられるものだったら、そんなあいまいな言いかたをするわけがない。これはだれかほかの人の都合を念頭においてのことらしい、

もしそうだとすると、それは道江みちえの着京の日取りにちがいないのだ。
だ。

では、なぜそれならそれとはつきり書かないのだろう。道江の名を書くのがきまりわなくて、暗々裡あんあんりにそれをほのめかしたつもりなのだろうか。あるいは、予告なしに道江をつれて来て、自分をおどろかすつもりなのだろうか。いずれにしても、自分にとつては、あまり愉快ゆかいなことではない。何といういい気な、甘あまつちよろい兄だろう、と軽蔑けいべつしてやりたい気にさえなる。

もつとも道江にたいして自分の抱いだいている気持ちに、兄がまだまるで気がついていないらしいのは、ありがたいことだ。しかし、だからといって、二人がむつまじくつれだつてやつて来るのまで

を、ありがたく思うわけにはいかない。痛いきずは、どんなに用心ぶかくさわられても痛いのに、まして、そのきずに気がつかないで、無遠慮ぶえんりよにさわられては全くたまつたものではないのだ。

しかし、兄はおそらく道江をつれて来る。いや、かならずつれて来る。そして、無意識な残酷ざんこくさで自分の痛いきずにさわろうとしているのだ。二人はあらゆる好意にみちた言葉を自分になげかけるだろう。二人のむつまじさを三人にひろげることによって、二人は一そう深いよろこびを味わおうとつとめるだろう。二人はいろいろと過去の思い出を語るにちがいないが、その思い出の愉快さも不愉快さも、三人に共通するものとして語られるにちがいない。自分は、二人のそうした無意識な残酷さにたいして、いつ

たいどういふ態度をとればいいのか。いや、どういふ態度をとりうるというのか。

かれには、まったく自信がなかった。白鳥会時代の心の修練も、友愛塾の助手としての現在の信念も、こうした場合の態度を決定するには、何のたしにもならなかつた。かれがこれまでしんぼう信奉し、実践じっせんにもつとめて来た、友愛・正義・自主・自律・創造、といったような、社会生活の基本的徳とくもく目は、今のかれには、全く力のない、空疎くうそな言葉の羅列られつでしかなかつた。そしてそこに気がつくと、かれはいよいよよろたえた。

道江という一女性が、間もなく、自分の目のまえに現われるという小さなできことの予想、——大きな人間社会の運うんこう行の中で

は、まったくどうでもいいような、そうした小さなできごとの予想そうが、どうしてこれほどまでに自分をまごつかせ、自分の不断の心の修練を無力にするのか。どうして、現在友愛塾におおいかぶさっている深刻な問題以上に、自分の心をなやますのか。女性とは、恋愛れんあいとは、いったい何だろう。それは、これまで自分が考えて来た人間生活の秩序とは、全く次元のちがった秩序に属するものだろうか。

そんなはずはない！

かれは心の中で強く否定した。しかし、否定した心そのものが、やはり、ふだんの秩序を失った心でしかなかったのである。

事務室の柱時計はしらどけいがゆっくり、十時をうった。次郎はかぞえる

ともなくその音をかぞえていたが、かぞえおわると、やにわに立ちあがった。

二人が午前中に来るとすれば、もうそろそろ来るころだ。めいめた顔は見せたくない。いつそ門のそとまで出て愉快に自分のほうから迎えてやろう。あとはあたって砕けるまでのことだ。——かれは冒険ぼうけんとも自棄じきともつかない気持ちで、自分自身をはげましたのだった。

すると、ちようどその時、事務室に人の足音がして、仕切りの引き戸を軽くノックする音がきこえた。

「どなた？」

次郎が、いぶかりながら戸をあけると、そこには大河無門が立

っていた。

「おや、外出しなかったんですか。」

次郎は大河の顔を見ると、救われたような、こわいような、変な気になりながら、つとめて平静をよそおってたずねた。

「ええ、べつに出る用もなかったので……」

「でも、道案内によく引っぱり出されなかったことですね。」

「やんやと頼たのまれましたが、断わることにしました。」

「うらまれやしませんか。」

「ふ、ふ、ふ。」

大河はとぼけたような顔をして、笑った。

「どの方面の希望者が多かったんです。」

「たいていは二重橋を見て、それから銀座に行きたがっていたよ
うでした。」

「相変わらずですね。」

「いつもそうなんですか。」

「ええ、最初の日曜は、きまつてそんなふうです。」

「二重橋のつぎが、銀座というのは、しかし、おもしろいじゃあ
りませんか。」

「ええ、ちよつと皮肉ですね。しかし、今の日本の青年としては、
おそらくそれが正直なところでしょう。」

二人はいつの間にか、火鉢ひばちを中にしてすわりこんでいた。大河
はまじめな顔をして、

「それは、しかし、青年ばかりではないでしょう。本職の軍人だつて、正直なところは、たいていそんなものですよ。銀座みたいなどころの魅力は、みりよく超時代的ちようじだいてきというか、本能的というか、とにかく人間の本質にこびりついたものでしょうから、非常時局のかけ声ぐらいでは、どうにもならないでしょう。」

「そんなことを考えると、時代の力なんていっても、たいしたも
のではありませんね。」

「ええ、本質的なものに対しては、結局無力かもしれません。せいぜいできることは、お体裁ていさいを作るために形をかえでそれを満足させることでしょう。しかし、だからといって、時代の力は軽けい蔑いべつはできませんよ。うそを本気でやらせる力もあるんですから

。
「

「うそを本気で?……それはどういふことです。」

「早い話が、今の時代がそうじゃないですかね。このごろ時局だ時局だと叫^{さけ}んでいる人たちはむろんのこと、それにおどらさされている人たちも、自分では本気のもりなんですよ。本気でなくちやあ、あんな気がいじみたまねはまさかできないでしょう。ところで、その本気が、冷静に物事を考え、自分の心をどん底までたたいて見た上での本気かというと、決してそうではありません。たいていは時局のかけ声に刺^{しげき}激されて、自分でも気づかないうちに、本心にないことを本気で言ったり、したりしているだけなんです。そうは思いませんか。」

「なるほど、そう言われるとそうですね。ここの塾生たちの中にも、入塾当初には、そんなのがざらにいますよ。」

「その意味で、銀座に行くのは、正直でいいじやありませんか。少なくとも、うそを本気でやるよりはいいことでしょう。」

「かといって、正直だとほめてやるほどのこともなさそうですね。」

二人は声をたてて笑った。次郎は、しかし、笑いながら、道江のことでなやんでいる自分が何かあわれなもののように感じられて、いやにさびしかった。

かれはふと、思い出したように、

「何か用事じゃなかったんですか。」

「ええ、今日はみんなが帰るまでに、風呂ふろをわかしておきたいと思つたもんですから。」

「風呂？ 今日、やすむことになつていたんじやありませんか。」

最初の日曜に、風呂当番だけが外出できなくなつては氣の毒だといふので、みんなの相談でそうきめていたのである。

「ええ、しかし、わかしておいてもいいんでしょう？」

「そりやあ、むろん、いいどころじやありませんよ。わかしてくれる人がありさえすれば……」

「じゃあ、ぼく、やつぱりわかしておいてやりましょう。……わくの何時間ぐらいかかりますかね。ぼく、まだ、ここの風呂の

ぐあいがわかつていないんですが。」

「時間はまだゆっくりでいいんでしょう。しかし、いつたい、どういうわけなんです。風呂なんか……」

「べつにわけなんかありません。ただ、ひまなので、風呂でもわかしておいてやろうかと思っただけなんです。みんなは、今日はほこりをかぶつて来るでしょうし、それに、今夜はお国自慢じまんの会をやって遊ぶ予定でしょう。風呂でもあびて、さっぱりしたほうがいいんじゃないか。」

大河無門は、そう言つてにっと笑つたが、すぐ、

「おじやました。」

と、ぴよこりと頭をさげた。そしてのっそり立ちあがると、そ

のまま室を出て行ってしまった。

次郎は、ぽかんとして、そのすんぐりしたうしろ姿を見おくつていたが、戸がしまつたあとまで、大河のにつと笑つた顔が、あざやかに眼に残つていた。その笑顔は、こないだの板木ばんぎ一件以来、これで二度目だったのである。

かれは、いつまでもその笑顔にとらわれていた。まんまるな顔の輪郭りんかく、近眼鏡のおくにぎらりと光る眼、真赤な厚い唇くちびる、剃りあとの真つ青な頬ほおの肉、そうしたものが、組みあわさつてできあがる大河の笑顔には、一種異様な表情があつた。それは、決して冷たい皮肉だとは受け取れなかつた。かといつて、単なるあたたかい親愛感の表現と受け取るには、その奥おくに何かきびしすぎるも

のが感じられたのである。

次郎は、その笑顔を思いうかべながら、風呂をわかすことについての大河との問答を心の中でくりかえした。そして、大河が最後に言った言葉まで来ると、われ知らず肩かたをすくめ、吐息といきをついた。

（やはり、どこか突つきぬけたところのある人だ。ものごとにとらわれない、あの自然さは、ぼくなんかとは、まるで段がちがう。）
かれは、それからもながいこと、机の上にはおづえをついて、大河の笑顔と言葉との意味を心の中にかみしめていた。かれの臂ひじの下には、恭一から来たはがきがあつた。

と、だしぬけに、窓のそこから、給仕の河瀬かわせの声こゑがきこえた。

「本田さん、朝倉先生がお呼びです。空林庵のほうにおいでくださいって。」

次郎が窓をあけると、

「どなたかお客さんのようですよ。」

「お客さん？」

次郎の眼には、つい忘れかけていた恭一と道江の顔が、大河の顔に代わって、やにわに大きく浮^うかんで来た。

「どんなお客さんだい。」

「大学生のようでしたが。」

「ひとり？」

「いいえ、女の人がいっしょです。」

「そうか、いま来たんかい。」

「ええ、たつた今でした。」

河瀬はにやにや笑っている。次郎は、自分がどんなおろかな問答をくりかえしているかには、まるで気がついていないらしく、

「今すぐ行くよ。」

と、ぶつきらぼうに言つて、窓をぴしやりとしめた。

かれは、しかし、容易に立ちあがろうとはしなかつた。そして、机の上にあつたはがきに、かなりながいこと眼をこらしていたが、いきなりそれをとりあげると、両手でもみくちやにし、屑かごくずの中に投げこんだ。そのあと、やつと思いきつたように、立ちあがるには立ちあがったが、それでもすぐには室を出ようとせず、う

つろな眼を戸口に注そそいだまま、立ちすくんでいた。

かれが空林庵の玄げん関かんをはいったのは、それからおおかた、十分ほどもたつたあとのことだったのである。

先生の書しよ斎さいからは、にぎやかな話し声がきこえていた。かれは、しいて自分をおちつけながら、玄関をあがり、書斎のふすまをあけたが、その瞬しゆん間かん、みんなの顔がピントのあわない写真のようにかれの眼にうつった。

「何かお仕事でしたの？」

朝倉夫人がたずねた。

「ええ、……ちよつと。」

次郎は、突つ立つたまま、どもるようにこたえた。

「めずらしいお客さまでしょう。」

「ええ。」

次郎は、しかし、道江のほうは見ないで恭一に向かつてわざとらしく、

「やあ。」

と声をかけ、自分のすわる場所を眼でさがした。

「どうぞ、あちらに。」

朝倉夫人に指さされた座ぶとんは、恭一と道江との間にはさまれていた。入り口に近いほうに夫人と道江、床の間に近いほうに先生と恭一とが席を占めていたのである。

かれがまだ尻をおちつけないうちに、

「次郎さん、しばらく。」

と、道江が座ぶとんを半分すべって、あいさつをした。

「やあ、しばらく。」

次郎も、すぐあいさつをかえしたが、道江の顔をまともには見ていなかった。かの女の羽織しよはおりや帯の色が、美しい雲のように、うずを巻いて、眼のまえに浮動ふどうするのが感じられただけだった。

「道江さんにお会いするのは、私も家内も今日がはじめてなんだよ。君のお父さんからのお手紙や何かで、お名前だけは、すこし前から存じていたんだがね。」

朝倉先生が次郎に言った。次郎は、固くなって、

「はあ。」

とこたえたきりだった。しかし、心の中では、父が朝倉先生にあてた手紙に道江のことを書いたとすれば、それは恭一との婚こんや約くに関係したことにちがいない。それ以外のことで、道江のことなんか書く必要はすこしもないはずなのだから、と思った。

「うちで、白鳥会の連中が先生の送別会をやった時には、道江さんもいたんじゃないかな。」

恭一が道江にたずねた。

「あの日は、あたし、お台所でお手伝いをしていましたの。」

「お給仕には出なかった？」

「ええ、おばさんに出るように言われたんですけれど、あたし、とうとうしりごみしちゃって。……でも、あの時は、男の学生ば

かり、三十人もならんでいらしたんですもの。」

「すると、先生がたのお顔も今日がはじめてなんだな。」

「そりやあ、お顔だけは存じていましたわ。あのとき拝見したんですもの。」

「のぞき見したの？ どこから？」

「はしご段のところからですわ。ほほほ。」

みんなが笑った。次郎も笑ったが、苦しそうだった。何でもない会話ではあったが、そうした対話が、自分を中にはさんで、二人の間にすらすらと取りかわされるのをきいていると、次郎は平気ではいられなかつたのである。

そのあと、話は、そのころの思い出で、つきからつきに花が咲さ

いた。共通の話題は、いつまでたつてもつきなかつた。次郎をのぞいては、だれもが雄弁ゆうべんだつた。そして、次郎がとかくだまりこみがちになつても、それは全体の話の流れには何のさまたげにもならないかのようにであつた。

道江の言葉づかいは、以前に変わらず素直すなおで、すこしも才走さいぱしつたところがなかつた。それが、かつては、次郎に道江を平凡へいぼんな女だと思わせた一つの理由だつたが、今はまるでちがつた感じだつた。素直さが、そのまま知性的に高められて、この上もない美しい品格を作っているように思われたのである。かれは、その感じが深まるにつれ、恭一が上京以来しばしば、かの女のためにいろいろの本を選せん択たくして送つてやつていたことを思い出し、こ

れまでに覚えたことのない、異様なねたましさを覚えたのだった。

朝倉夫人は、話の途とちゆう中で、みんなの昼飯の用意をするために、

本館の炊事場のほうに行つたが、行きがけに次郎に言つた。

「これからどんなお話がでるか、よく覚えていてくださいよ。あとでできかしていただきますから。」

次郎には、夫人のそんな言葉までが、何かとくべつの意味があるような気がして、平気では受け答えができないのだった。

そのあと、話は主として朝倉先生と恭一との間にとりかわされた。道江は、女の話相手を失つて、口を出す機会が自然に少なくなつたのである。次郎は、そうになると、いよいよ気がつまり、舌がこわばつた。

道江は、朝倉先生と恭一とが話している間に、たびたび次郎の顔を見て、何か話しかけたいような様子を見せた。次郎は、むろん、それに気がついていた。かれは、しかし、あくまでも眼を先生と恭一とのほうにそそぎ、熱心に二人の話に聞き入っているかのように装よそおった。

「ねえ、次郎さん——」

と、道江が、とうとう身をすりよせるようにして、小声でいった。

「お手紙、どうして一度もくださらなかったの？」

次郎はちらつと道江の顔を見たが、その眼はまたすぐ恭一のほうにそそがれていた。そして、かなり間をおいて、

「べつに用がなかったからさ。」

と、ほかの人にきこえるのをはばかりような、ひくい声でこたえ、頬を紅潮こうちようさせた。

まもなく朝倉夫人が玄関口までもどつて来て、言った。

「おひるは本館のほうに用意しておきますわ。あと三十分ほどでしたくができますけれど、それまでに、お二人に館内をご覧いだいたら、どうかしら。恭一さんも、まだ本館のほうはよくご存じないんでしょう。次郎さん、すぐご案内してくださいよ。」

次郎はふすまを半分あけて夫人にこたえたが、むろん気はすすんでいなかった。かれは夫人の足音が消えると、恭一を見て、「本館を見る？　もうたいてい知っているだろう。」

「くわしくは知らないよ。いつも、塾生たちのじやまをしてはいけないと思つて、先生の室と、君の室よりほかには、はいったことがないんだ。」

「そうだったかな。」

次郎は、そう言いながら、やはりぐずついていた。すると、朝倉先生が、

「恭一君はいつでも案内できるが、道江さんはそうはいかない。ぜひ見ておいてもらいたいね。案内するなら、早いほうがいいよ。午後になると、塾生たちが帰つて来るかもしれないからね。」

次郎は、それで、しかたなしに立ちあがり、二人を本館に案内した。案内したといつても、大して説明することもなかった。か

れが口をきかないと、道江のほうから、何かと話しかけた。それがかれには気づまりだったが、まるで相手にならないわけにもいかなかった。

「次郎さんは、すっかり以前とはお変わりになったようね。」

「そうかな。」

「ご自分では、お変わりになったこと、お気づきにならない？」

「そりゃあ、中学時代とは、ちつとは変わっているだろうさ。もうそろそろ四年近くになるんだもの。」

「ちつとどころじゃないわ。」

「そうかな。」

次郎は、うわの空らしくよそおって、そつぽを向いたが、つき

の瞬間には、ぬすむように恭一の顔をうかがっていた。

「あたし、今日は何だか次郎さんがこわいような気がしますわ。」

「こわい？ どうして？」

「だって、おそろしく、かまえていらっしやるでしょう？ あたしなんか、まるで相手にならないっていうふうに。」

「そんな……」

と言いかけたが、次郎の舌は、それつきり動かなかった。

「あたし、さつきから考えていますの。塾生活なんかなされると、自然そんなふうにおなりなのじゃないかしらつて。」

道江はひやかしているのか、腹をたてているのかわからないよ
うな調子で言った。それが、次郎の胸にはひどくこたえた。かれ

はそのあと、ろくに塾の説明もできなくなつたのだった。

しかし、よりいつそう大きな打撃だげきをかれにあたえたのは、一通り案内を終わつて、最後にかれの居室きよしつをのぞいたとき、それまでほとんど口をきかないでいた恭一が、まじまじとかれの顔を見つめながら言つたことだった。

「今日は、君、たしかにどうかしてるね。ぼくの眼にも、いつもと非常に違ちがつて見えるよ。何か苦しんでいることがあるんじゃない？ もしそうだったら、打ちあけて朝倉先生に相談するがいいじゃないか。むろん、ぼくでよかつたら、いくらでも相談にのるがね。」

次郎は、恥はずかしさと腹だたしさとで、顔中が引きつるような

気持ちだった。

「何でもないよ。」

と、かれはおこったようにいって、すぐ二人を、しよくたく食卓の準備されている広間に案内した。

食卓は、日ざしのいい窓ぎわに据すえられており、朝倉先生夫妻のほかにも、大河無門がもう卓について、三人がはいつて来るのを待っていた。

「大河さんがおひとりで居残いのこっていていらしつて、お風呂に水をいれていたものですから、ごいっしよにお食事をしていただくことにしましたの。」

夫人は、次郎にそう言ってから、恭一と道江を大河にひきあわ

した。そのあとで、朝倉先生は微笑しながら、恭一に言った。

「大河君は、普通の塾生とはちがって京大を出た人だよ。専門は哲学だ。しかし概念の哲学者じゃない。孔子とかソクラテスとかいった型の、いわゆる哲人だね。今日は居残っていてもらってちようどよかった。大いに教えてもらうんだな。」

ごちそうはさつま汁だった。あたたかい日ざしの中でそれをすすっていると、汗をかきそうだった。食後の蜜柑が、舌にひやりとして甘かった。

朝倉夫人が食卓のあとかたづけをはじめると、道江がそれを手伝った。そのあとは、またいつしよになって話のはすんだ。話題は、ひる前の空林庵での懐旧談とはちがって、人生論めいた

ことを中心に、民族とか、国家とか、階級とかいうことにまで及んだ。おもに口をきいたのは、先生と恭一と大河の三人だった。中でも大河が主役の観かんがあった。それは、朝倉先生も、恭一も、大河を相手に話しかけがちだったからである。

次郎はほとんど聞き役だったが、かれの関心の中心もやはり大河だった。かれはまず第一に、大河の頭が論理的にもすばらしく緻密ちみつであるのおどろいた。しかし、いつそうおどろいたのは、その緻密な論理の中から、間歇かんけつ的に、気味わるいほどの激はげしい情熱と強い意力とがほとぼしり出ることだった。大河は、いつも半ば顔を伏ふせ、眼をつぶるようにして、ぼそぼそと、落ち葉をふむ足音のような声で話すくせだったが、何か大事だと思ふ話の焦し

ようてん

点ようてんにふれだすと、その眼は、やにわにぎらぎらと光つて相手をまともに見つめ、その厚い真赤な唇からは、青竹をわるような澄すんだ調子の高い声が、つづけざまに爆ばくはつ発するのだった。

次郎が、その日感かんめい銘めいをうけた大河の言葉は、一つや二つではなかつたが、とりわけ心に深くしみたのは、つぎの言葉だった。

「先生は、さつき、ぼくを、孔子やソクラテス型の哲人だなんて持ち上げてくださつたんですが、ぼくは、実は、そんなふうえらに言われると、悲観するんです。悲観するというのは、そんな偉えらい人たちと、ぼくとの間に距離きよりがありすぎるからばかりではありませぬ。そういう事とは別に、ぼくにはぼくの考えがあるからなんです。生意気なことを言うようですが、孔子やソクラテスは凡ほんぞく俗

の上に立って凡俗を教えた人たちではありましたが、凡俗といつしよに暮くらした人たちではなかったと思います。その意味で、ぼくの今の気持ちには、何かびったりしないところがあるんです。ぼくは、今のところ、教える人になりたいとは、ちつとも考えていません。自分も凡俗の一人として、凡俗といつしよに暮らしてみたい。おたがい凡俗のまごころをつくして暮らしてみたい。ただそう思うだけなんです。これは、あるいはまちがっているかもしれない。しかし、現在のぼくは、それよりほかに、気持ちよく生きて行く道がないような気がしているんです。」

この言葉には、次郎だけでなく、みんなも強い刺激しげきをうけたらしかった。ことに、朝倉先生は、その言葉をきくと、何かにおど

ろいたように目を見張り、しばらくして、うむ、うむ、と何度もうなずいたり、ながいため息をもらしたりしたほどであった。

恭一と道江とが帰ったのは、四時近いころだった。次郎は門のそとまで二人を見おくって出たが、わかれぎわになって、ふと思ひ出したように恭一に言った。

「ぼく、今度の期間を終わったら、ひよつとすると、ここの助手をやめるかもしれないよ。」

「え？」

と、恭一は、しばらく穴のあくほど次郎の顔を見つめていたが、「何か失敗した？」

「失敗なんていうことはないけれど、ぼく、もっと考えてみたい

ことがあるんだ。」

「塾がいやになったんじゃないだろうね。」

「そんなことないさ。そんなこと——」

と、次郎はいかにも心外だというように、口をとがらしたが、
「要するに、ぼく、今のままじゃあ、不適任だという気がするんだ。」

「どうして？」

「どうしてって——」

と、次郎は目をふせたが、その視線の中には、白い足袋たびをはいた道江の足がはつきり浮うかんでいた。かれは、あわてたようにそれから眼をそらし、

「ぼく弱すぎるんだ。自信がなくなつたんだ。だから、もつと自分を鍛きたえてみたいんだ。」

「自分を鍛えるのに、助手をやめる必要はないだろう。やめたら、かえって——」

「ぼく、孤独こどくになつてみたいんだよ。」

「孤独に？」

「ぼく、実は、大河君がうらやましくなつたんだ。大河君には、ぼくとちがつて、朝倉先生のような、先生らしい先生がなかつたらしい。大河君の力は孤独から生まれた力なんだ。ぼくはこれまで、あんまり先生をたよりすぎて来た。だから、ぼく自身でぼくを始末する力がないんだ。」

恭一は、複雑な表情をして、しばらくだまりこんでいたが、

「しかし、塾を出て、どこへ行くんだい。」

「それは、これから考えるさ。」

「君に去られたら、先生がお困りじゃないかね。」

「助手には大河君をつかってもらえば、かえっていいと思ってるんだ。大河君も、たのめばきつと喜んでやってくれるだろう。」

「ふむ——」

と、恭一は、もう一度考えこんだが、

「しかし、大事なことだ。もつとおたがいに、考えて見ようじゃないか。いずれ近いうちにまたやって来るよ。できれば、今度はおおさわ大沢君をさそつて来る。三人でゆつくり話しあってみよう。朝

倉先生に話すのはそのあとにしたらどうだい。……まだ話しては
いないんだろう。」

「むろん先生にはまだ話してないさ。こんなことを考えたの、今
日はじめてなんだから。」

「今日がはじめて？ なあんだ、そうか。」

と、恭一は笑いかけたが、その笑いは、急に何かにはら^{はら}払いのけら
れたように消えた。そしてつぎの瞬間には、かれの聡^{そうめい}明^{めい}そうな
眼が、しずかに次郎と道江との間を往復していた。

道江は、二人の話を心配そうにきいているだけで、ひとことも
口をきかなかつた。しかし、いよいよわかる時になると、遠^{えんり}
慮^よぶかそうに次郎に言った。

「次郎さんは、今でもやつぱりどこかに一途いちずなどところがあるのね。どんなわけだか知らないけれど、短気をおこさないでくださいよ。何ていったって、次郎さんは朝倉先生のおそばにいらつしやるのが一ばんいいと、あたし思うわ。」

次郎は、そつぽを向きながら、悲しいような、腹だたしいような気持ちで、それをきいていた。返事はむろんしなかつた。そして、二人にわかれて、自分の室にかえると、机の前にすわりこんで、いつまでも動かなかつた。

塾生たちの大多数は、時間ぎりぎりに帰つて来た。早めに帰つて来たものは一人もなく、中には夕食に間にあわなかつたものも幾いくにん人かあつたので、ちよつと心配されたが、それでも食卓をか

たづけるころまでには、どうなり全部の顔がそろった。

入浴は、みんなの帰りがおそかったので、夕食後になり、一時に殺^{さつとう}到したため、かなりこんだ。しかし、大河のおかげで、予期しなかつた入浴ができたのを、みんなは心から喜んだ。かれらにとつては、大河は、最初の朝の板木一件以来、いわば、いい意味での一種の変人であり、何かしら人の意表に出るような親切をやつて喜ぶ性質^{たち}の人であつた。かれらはいつの間にか、大河を「さん」づけで呼ぶようになっていたが、それは、そうした変人に対するかれらの親しみの情をこめた敬称だったのである。

入浴がすむと、いよいよ待望の「お国自慢^{じまん}の会」がはじまつた。広間にあつまつたみんなの顔は、つやつやと光つて晴れやかだ

つた。

「今夜は何だか銀座の匂いにおがするようだね。」

朝倉先生は、座につくと、すぐそんなしやれを飛ばした。

「銀座の匂いは、もう風呂で流してしまっただんです。」

だれかがすかさずおうしゆう 応酬した。つづいて、

「おみやげに、すこし残しておくところだったね。」

そんなふうで、最初から笑いが室内の空気をゆりうごかしていた。

「お国自慢の会」は、一面「郷土を語る会」であり、他面「郷土芸術の発表会」であった。あるものは演説くちよう口調で郷土の偉人いじんや、名所きゆうせき旧蹟とくしゆや、特殊の産業などを紹しょうかい介し、あるものは郷

土の民謡みんようや舞踊ぶようを披露ひろうした。かれらは決して各府県青年の代表という資格で集まって来ていたわけではなかったが、たいていは、立ちあがるとすぐ、力りきみかえって「ぼくは〇〇県を代表して」などと、前口上まえこうじょうをのべるのであった。かれらを、日本の青年に通有な、そうした無意味な構え心から脱却だつきやくさせようとしても、それは、友愛塾の一週間ぐらいの共同生活では、どうにもならないことだったのである。

注目されていた飯島は、徹頭徹尾てつとうてつび演説口調で、村を語り、郡を語り、県を語ったが、話の内容は、とかく政治勢力の問題にふれ、地についたところかほとんどなかった。田川は白鉢巻しろはちまきをして勇壮ゆうそう活発かつぱつな剣舞けんぶをやった。青山は民謡をうたったが、その

声は美しくさびびて、おちついていていた。大河は、飯島とはちがった意味で、やはり注目されていた一人だったが、自分の順番が来ると、くそまじめな顔をして、のそのそと窓のほうに行き、そのの柱にしがみついた。そして、

「ぼくの村には、夏になると、こんな声を出して鳴く蝉せみが、たくさんいます。——みいん——みいん——みいん——」

と、蝉の鳴き声をたて、その声にあわせて、ぶるぶるとからだをふるわせた。声だけは、いかにも蝉らしかったが、からだのほうは、まるで小牛が身ぶるいしているような格かっこう好こうだった。みんな腹をかかえて笑った。その笑い声の中を、大河は、相変わらず、くそまじめな顔をして自分の席にもどり、とぼけたようにあたり

を見まわした。それでもう一度笑いが爆発した。

この席には、炊事夫の並木なみき夫婦や、給仕の河瀬も加わっていて、みんなそれぞれに何か一芸をやった。最後に、次郎と朝倉先生夫妻の三人だけが残されていた。

「本田さん、まってました。」

「先生、お願いします。」

「小母おぼさんも、どうぞ。」

塾生たちがほうぼうから叫さけび、拍手はくしゅが何度も鳴りひびいた。

いつもなら、次郎がすぐ立ちあがって何かやるところだったが、今日は変に立ちしぶっていた。すると、朝倉先生が、急にいずまいを正し、謡ようきよく曲でもやりだしそうな姿勢になった。みんなは

急にしんとなつて、片唾かたずをのんだ。

「猛虎もうこ一声、山月高し——」

ろうろう

朗々たる詩吟しぎんの聲が流れた。ところが、詩吟はそれつきりで、

そのあと先生は、ひよいと畳たたみに両手をついて四つんばいになった。そして首を前につき出し、しばらく塾生たちのほうをにらめまわしていたが、いきなり、その咽のどから、

「うおーっ」

と、窓ガラスを振動させるような、すごいなり声がほとばしり出た。これは先生がいつもやるたつた一つのかくし芸だったが、はじめての塾生たちの中には、虚きよをつかれて、思わず首をちぢめたり、「ひやッ」と叫び声をあげたりするものもあつた。今夜も

そうだった。しかし、あとは笑い声と拍手の音がながいこと室内にうずをまいた。

笑い声がしすまりかけると、塾生のひとりが言った。

「先生、それは先生の郷土芸術の一つですか。」

「まあ、そんなものだ。」

「何だか、あいまいですね。」

「私は、子供のころ、父が転任ばかりして、ほうぼううろついていたものだから、実は、郷土というほどの郷土を持たないんだ。

今のところ、しいて郷土を求めるとすれば、この塾の近所がそうかな。」

「じゃあ、ここいらの民謡でも。」

「そいつは無理だ。ここに落ちついてから、まだながくならんのでね。それに、第一、こんなに東京に近いところでは、民謡なんか、残っているはずがないよ。」

「今度は小母さんの番だ。お願いしまあす。」
だれかが夫人のほうに鋒ほこさき先を向けた。

「あたしも郷土芸術はだめ。」

「何でもいいんです。」

すると、すみのほうから、

「猫ねこの鳴き声。」

と、小声で言ったものがあつた。笑いがまた爆発した。朝倉夫人も笑いながら、

「猫の鳴き声なんか、陰気いんきじゃありません？ それよりか、ここには友愛塾音頭おんどというのがありますから、あたしそれをご披露ひろうしますわ。」

一せいに拍手がおこった。夫人は、

「では、本田さん。」

と、次郎に目くばせした。次郎は自分のそばにおいていたガリ版刷りを塾生たちに渡わたした。それには音頭の歌詞かしが印刷してあったのである。

ガリ版刷りがみんなにゆきわたったところには、次郎は、もう、室の隅すみに据すえてあつたオルガンの前に腰こしをおろしており、先生夫妻と、炊事すいじの並木夫妻と、給仕の河瀬の五人が、室の中央に輪を

作って立っていた。

やがて、オルガンにあわせて、五人は歌をうたいながら、踊りだした。手ぶりや、足のふみ方や、ぐるぐるまわって行進したり、あともどりしたりするところなど、すべては盆踊りそっくりだった。歌の文句は朝倉先生と次郎の合作で、つぎの四節から成っていた。

板木鳴る、鳴る。浄めの朝だ。

こころしずめて打つかしわ手は、

わかい日本の脈音だ。

くぬぎ、赤松、ほのぼの白みや、

さあさ、世界のあけぼのだ。

板木鳴る、鳴る。張りきる胸だ。

咲いたつつじが照る日に燃えりや、

わかい日本の血の色だ。

真理まこともとめて走るか、友よ。

さあさ、世界の駈かけくらだ。

板木鳴る、鳴る。そら飯めしどき時だ。

色は黒ろても、半つき米は、

わかい日本の持ち味だ。

腹ができたら、ひと汗あせかこか。

さあさ、世界の地固めだ。

板木鳴る、鳴る。日暮れひぐの杜もりだ。

一風呂ひとふろあびて円坐えんざを作りや、

わかい日本のいしずえだ。

語れまごころ、歌えよのぞみ。

さあさ、世界の平やわらぎ和だ。

五人の中で、朝倉先生の踊りが目だつてぎごちなかった。しばしば手のふり方や、足のふみ方をまちがえて、前後の人を面くら

わせ、時には鉢合はちあわせしそうになることもあった。そのたびに、塾生たちは手をたたき、腹をかかえて笑った。

朝倉夫人は、手振りてぶりのあい間あい間に、おりおり塾生たちを手まねきしては、踊りの輪に加わらせようとした。はじめのうちは、みんな尻しりごみして、笑ってばかりいたが、踊りに自信のできたらしい塾生が、二三名、思いきつて飛びこむと、あとは、つぎつぎにその数がふえて行った。

踊りはいつまでもつづき、時がたつにつれてその輪が大きくなり、あとでは、輪を二重にしなければ、室せまが狭すぎるほどになった。そして、そのころになると、まだ輪に加わらないでいる塾生は、ほんの四五名にすぎず、その四五名も、そうなると、すわっ

ているのがかえってきまりわるくなったらしく、とうとう頭をかきかき、一人のこらずたちあがった。その四五名の中には田川や飯島がいた。大河や青山は、もうとうに踊りはじめていたのだった。

踊りの輪が大きくなり、二重になるにつれて、全体としては、しだいに熟練の度をまして行つた。しかし、朝倉先生のように、いつまでたつてもじょうずにならないものもあり、また新加入者があるごとに、かならず二度や三度は何かのへまをやつたので、爆笑の種は容易につきなかつた。

最も多く爆笑の種をまいたのは大河無門だつた。かれの不器用ぶきようさは朝倉先生どころではなく、その手振りけんとうはまるで拳闘けんとうでもや

つているような格好であり、その足の運びには、四股しこをふむ時のような力がこもっていた。しかも、かれ自身は、どんなへまをやつても微笑一つもらさず、いつも真しんけん剣そのものといった顔つきをしていたのである。

次郎は、その晩は、最後まで、心から愉快ゆかいにはなれなかつた。みんなが愉快になればなるほど、変にいらだつような気持ちになり、オルガンをひきながら、大河無門の不器用な踊りを見ていても、たださびしく笑うだけだった。そして、その晩の集まりが友愛塾音頭を打ちどめにして終わったあと、自室に引きとつてからも、ともすると、大河の踊っている時の顔が眼に浮かんで来た。それは、かれの今朝からのがい思い出を茶化しているような顔

にも思え、また真剣に憂うれえているような顔にも思えるのだった。

かれは、ふと、何と思つたか、このごろしばらく手にしなかつた「歎たんにし異抄」を本立からひき出して机の上にひらいた。しかし、かれの眼は、その中にしるされた文字に深くはいつていくようではなかつた。かれは何度か髪かみの毛をむしり、ため息をついたあと、ばたりと「歎異抄」をとじ、その上に顔をふせてしまったのである。

八 手紙

それから四日目の、昼食後の休み時間のことであつた。次郎が、

葉の落ちつくしたくぬぎ林の、日あたりのいい草っ原で、四五人の塾じゅくせい生たちを相手に雑談をしていると、郵便物当番の塾生がやつて来て、かれに一通の分厚な封書ふうしょを渡わたした。見ると恭きようい一ちからの手紙である。

同じ東京に住むようになってからは、しばしば顔を合わす機会も得られたので、これまで、恭一との間の通信は、おたがいに葉書ぐらいですませており、長い手紙など、一度もやりとりしたことがなかったし、それに、先日道江みちえといっしょにたずねて来てもらった時のいきさつもあったので、次郎はその分厚な封書を受け取ると、心にかなりの動揺どうようを感じ、もう落ちついて雑談などしておれなくなった。かれは、しかし、しいて平気をよそおいなが

ら、無造作むぞうさに手紙をかくしに突つつこんだ。それから、立ちあがって背のびをしたり、両りょう腕うでをふりまわしたりしたあと、一人でぶらぶらと赤松あかまつの林のほうに歩きだした。そして、林をすこしはいつて、人目のとどかないところまで来ると、いそいで手紙の封をきり、むさぼるように読み出した。

「……直接会って話すほうが誤解がなくていいと思つたが、しかし、話しているうちに、おたがいの感情がもつれあつて、かえつて誤解を招くような結果になりはしないか、というふうにも考えられたので、やはり手紙を書くことにした。ぼくは手紙を書くことによつて、だれにもさまたげられないで、ぼくの考えていることを、その正否は別として、いちおうピンからキリまで君につた

えることができると思うのだ。もつともこの手紙を書くことになつた動機は、現在の君の心境についての、ぼくの一方的な判断——むしろ想像といったほうが適當かもしれないが——にあるのだから、その判断がてんで見当ちがいだとすれば、この手紙は全然無意味だということになるだろう。いや、無意味だけですめばまだいいが、あるいは君の怒りいかをかうようなことになるかもしれない。しかし、ぼくとしては、結果がどうであろうと、ともかくもいちおうこの手紙を書かないではおれないような今の気持ちなのだ。会つて話をすれば、事情がはつきりして、一方的な判断で、無意味な、あるいは危険な手紙を書いたりする必要がないではないか、と君は言うかもしれない。それはその通りだ。ぼく自身、

一応も二応もそう考えてみないではなかった。しかし率直そつちよくに
言うと、ぼくは実は、会って話をすると、君が君の本心をいつわ
って、ぼくの君にたいする判断を、頭から否定してかかるのでは
ないか、と心配したのだ。もしそういうことになれば、ぼくは二
の句がつけなくなる。むろん君の否定が真実であれば、ぼくが二
の句がつけないのは当然なことで、ぼくはただ君に対して陳謝ちんしゃ
するほかはない。しかし、万一にも、ぼくの心配があたっている
とすると、ぼくが二の句がつけないということは、あるいはぼく
たち二人にとつて一生の不幸を意味することになるかもしれない
のだ。真実を語ればかえって物ごとの解決が困難になるという場
合、それを語らないのは、むろんいいことにちがいない。しかし、

真実がわかりさえすれば、わけなく解決の道が発見されそうに思えるのに、それをかくしておいて、一生の不幸を見るということは、何というばかげたことだろう。ぼくはそういう気持ちで、一方では君の怒りを招くという危険をおかしながらも、思いきつてこの手紙を書くことにしたのだ。つまり、ぼくは君にはひとまず物を言わせないで、言いかえると、君の本心をいつわる機会を君に与えないで、^{あた}ぼくの言いたいことだけを言ってしまう方法として、この手紙を書くことにしたのだ。だから、そのつもりで、ともかくもいちおう最後まで眼めをとおしてもらいたい。」

次郎には、そうした前置きがもどかしくもあり、気味わるくも感じられた。恭一がふれようとする問題が、道江のことにちがひ

ないという気もしたし、また一方では、まさかという気もしたの
である。まさかという気がしたのは、自分が道江に対して抱^{いだ}いて
いる気持ちを恭一が知つていようはすがない、と思つていたから
である。

しかし、恭一の手続は、そのつぎの行では、残^{ざん}酷^{こく}なほどあか
らさまだった。

「君は道江を愛している。これが、ぼくの君に対する判断だ。ぼ
くはまずそのことをはつきり言つておきたい。」

いきなりそんな文句があつた。その文句を見た瞬^{しゆん}間^{かん}、次郎
は、眼のまえに炎^{ほのお}が渦^{うず}巻^まくような気がして、しばらくはつぎの文
字を見ることができなかつた。

「この判断には、しかし、たしかな根拠こんぎよはない。ただ、先日君をたずねたあとで、直観的にそう判断したまでのことだ。しかし、ぼくだけでは、この直観にあやまりはないという気がしている。むろん、ぼくは、あの日最初から君をそう思つて観察していたわけではない。じつは、君に塾内を案内してもらつていた間に、君の道江に対する態度のあまりにもよそよそしいのに気がつき、なぜだろうと思つたのがはじまりで、そのあと、ぼくはかなり注意ぶかく君の一挙一動を見まもつていたのだ。すると、君にはまるで落ちつきがなかった。君は何の原因もないのに、いつもおどおどしていた。かと思うと一人で何かに腹をたてているようにも思えた。君はただの一度も君のほうから道江に言葉をかけなかった

ばかりか、まともに道江の顔を見ることさえしなかった。ぼくたち兄弟のなかでだれよりも道江に親しかったはずの君が、何年ぶりかで会ったというのに、あんな態度に出るからには、何かよほど重大な理由がなければならぬ。ぼくは、あの時、そう思わぬいわけには行かなかったのだ。しかし、あの日君とわかれるまで、その理由が、何であるかには思いあたらなかった。ただぼんやり、道江が何かひどく君を怒らせるようなことをしたにちがいない、と考えていたのだ。もつとも、別れぎわになって、君が急に友愛塾をやめたいというようなことを言いだしたときには、理由はそんな単純なことではない、という気がしなくてもなかった。しかし、それも、君のそうした考えが以前からのものではなく、その

日の急なでき心だと知ると、やはり道江と結びつけて考えてみないではいられなかつたのだ。——」

「で、ぼくは帰る途とちゆう中、道江にそれとなく、君との間に何かいきさつがありはしなかつたか、とたずねて見た。そして、あの時の道江の答えによつて、ぼくは非常におどろかされたのだ。道江の言うところでは、君は、上京以来、郷里のいろんな人たちに、かなり多くの通信をしているにかかわらず、道江に対してだけは、葉書一枚も書いていないし、道江のほうから通信をしても、受け取つたという返事さえ出していないというではないか。もし事実その通りだとすると、これほど変なことはない。というのは、ぼくの知っているかぎりでは、君は上京のその日まで道江とは十分

親しくしていたし、まさか君が汽車に乗って東京につくまでの間に、仲なかたが違いをするような原因が発生するとは思えないからだ。

そこで、ぼくは、君の道江にたいするこの変な仕打ちの意味を真しんけん

剣に考えてみた。その結果、ぼくの下くだした判断はこうだ。君は道江を深く愛している。しかし、それはある事情によつて実を結ばない。だから君は永久に道江とわかれる決心をした、そしてその機会を上京に求めたのだと。ぼくは、実は今になつて思うのだが、君が卒業間近になつて中学を退学しなければならなくなつたのを、あんがい平気でしのび得たのは、それが道江からのがれる一つの機会を君に与えることになつたからではあるまいか——」

次郎の心は、一瞬、強く反はんぱつ発した。かれにとっては、退学の

問題と道江の問題とは何の関係もないことで、正義感によって動いた自分の行動を、一女性に対する私の感情と結びつけて考えられるのは全く心外だったのである。しかし、道江にわかれた時のかれの気持ち、未練以外の何もものでもなかったことに気がつく、むしろ、恭一に自分が高く評価されたような気もして、その反発はすぐ羞恥しゆうちと自嘲じちように代わった。

「むろん、ぼくは、君が喜んで道江と別れたとは思わない。君にとっては、それはおそらく退学などとは比べものにならないほどの大きな苦痛であつたらうと想像する。それにもかかわらず、君はそれをしので道江とわかれる決心をした。そして、その原因になつた事情が、おそらくぼく自身に関係したことであるだろう

ことに思い到ると、ぼくはいても立つてもいられないような気がして来たのだ。今さら何をいうのか、と君はあるいは怒るかもしれない。しかし、もしあの当時、君の道江にたいする気持ちに、ぼくが、少しでも気がついていたらとしたら、君にこんな苦痛をなめさせないでもすんだにちがいない。そう思うと、ぼくは実際たまらなくなるのだ。ぼくは誓ちかつていうが、あの当時、道江にとくべつな関心をもっていたわけではなかった。ぼくの道江に対する気持ちは、親類のおとなしい女の子という以上には出ていなかったのだ。また、婚約こんやくのことにしたところで、まだ何も正面切つての話があつていたわけではなかった。なるほど、父とうさんからは、たった一度だけ、それもごくぼんやりと、ぼくの気持ちをきかれ

たことがあるにはあつた。しかし、その時も、ぼくは、結婚けっこんは
まだずいぶん先のことだし、ゆつくり考えておきましようぐらい
な、いいかげんな返事をしたにすぎなかつたのだ。むろん、ぼく
は、はつきり道江をきらいだとは言わなかつた。しかし、それは、
あんなやさしい子をそんなふうに言う気がしなかつたからで、決
して異性として、将来の結婚の相手として、いくらかでも心をひ
かれていたからではなかつた。要するに、ぼくは、親類のやさし
い女の子として、道江を十分愛しもし、尊敬もしていたが、道江
がだれと結婚しようと、その相手がいい人でさえあれば、それは、
その当時、ぼくにとつてはどうでもいいことだつたのだ。では、
今はどうか。これがおそらく君にとつても、ぼくにとつても最も

大事な問題だと思いが、それについても、ぼくははっきり言うことができない——」

次郎は思わず息をのんだ。

「道江は、今でも、ぼくにとつては、親類の愛すべき女の子以上の存在ではない。ただその当時と、いくぶんちがっている点があるとすると、それは、彼女かのじよがこの数年の間に読書によつてその当時よりはるかに尊敬すべき女性に成長しているということだ。

——」
次郎は、のんだ息を大きく吐はいた。そのあと、深い呼吸がしばらくとまらなかつた。

「こう言うと、君は、今度はぼくのほうが本心をいつわっている

と思うかもしれない。しかし、その疑いを解くのはさほど困難ではない。そのたしかな証拠は、もし君がちよつと骨折つてそれをさがす気にさえなれば、すくなくとも二つは見つかるはずだ、その一つは、先月はじめ、ぼくが父さんに出した手紙であり、もう一つは、それから少しおくれて朝倉先生に出した手紙だ。どちらも、道江との婚約問題についてぼくの考えをたずねられたのに対する返事だが、父さんあての返事には、婚約は、相手のいかにかわらず、自分が社会的に独立する目あてがはつきりするまでは絶対にやりたくない。もし道江がそれまで自由な立場にあれば、その時になって、あらためて考えてみることにしたい。しかし、そういうことを先方に通じて、それが少しでも道江を拘束こうそくする

ことになっては困るから、いちおうこの話は、打ち切ってもらいたい、という意味のことを書き、朝倉先生に対しては、ごく簡単に、当分結婚のことは考えたくない、という返事を出しておいたのだ。もつとも、ぼくはこの二つの手紙を書きながら、道江自身の気持ちをおしはかってみないのではなかった。そして、もし万一にも、道江自身がぼくとの結婚を希望し、それがこの話の糸口になっているとすれば——と、そう考えると、道江がいじらしくてならないような気もしたのだ。しかし、これは、同じような立場に立たされた女性に対してだれでもが感じる人間の感情を、ぼくがいくぶん強く感じたというまでのことで、断じて恋^{れんあい}愛というべき性質のものではない。君はこの点についてもぼくを信じ

ていいのだ。——」

次郎は信ずるよりほかなかつたし、また、信じたくもあつた。

しかし、それを信ずるといふことは、この場合、かれにとって何なぐさの慰めにもなることではなかつた。

（道江は恭一を愛している、それはちようど自分が道江を愛しているように。）

このことは、道江の今度の上京の意味を考えてみるまでもなく、かれにとつては、あまりにも明めいりよう瞭りようなことだったのである。

恭一の手紙は、しかし、かれの気持ちに頓とんちやく着やくなく、しだいに論理的になつて行つた。

「さて、君が道江に対していだいてゐる気持ちについてのぼくの

判断に誤まりがなく、そして、ぼくが道江に対していただいている
気持ちについてぼく自身のいうことを君が信じてくれるとすると、
残る問題で最も重要なことは、道江自身の気持ちはどうか、とい
うことだ。君は、おそらく、それはもうわかりきったことだ、と
言うだろう。今の君としては、無理もないことだ。そう思ってい
たればこそ、これまで一人で苦しんで来たのだろうから。……し
かし、もし、ぼくの将来の結婚の相手として、道江のことが内うちわ
輪話ぼなしの種になっていたのを、君がたまたま耳にして、それだけ
で、すぐ道江の気持ちまでを決定的なもののように君が思いこん
でしまったとすると、それはあまりにも軽率けいそつだったと言わなけ
ればなるまい。それでは、道江が第一気の毒だし、ぼくも非常に

迷惑めいわくする。だいたい、この話は、双方そうほうの老人たちの軽い茶話の間から生まれたことで、もともと道江の気持ちにもぼくの気持ちにも全くかかわりのないことだったのだ。それが多少真剣な話になって来たのは、つい半年ばかり前からのことだが、それでも、その中に道江の気持ちきもちが反映しているとは思えない。というのは、そのことについての父さんからの最初の手紙に、若い女の心をきずつけてはならないから、お前の肚はらがきまらないかぎり、道江本人には絶対秘密にするように、双方で固く申合わせてある、と書いてあったからだ。おそらく現在でもこの秘密は守られていることだと思う。要するに、道江のぼくに対する気持ちということと、ぼくに婚約の話が持ちかけられたということとは、最初から全然

無関係のことだし、今でもやはり無関係だとぼくは信じている。

この点をまず君にりようかい了解してもらいたいと思う。——」

次郎は、ふんと鼻を鳴らし、冷笑とも苦笑ともつかぬ変な笑いを口元にうかべた。しかし、その目は、むさぼるように先を読みすすんでいた。

「もつとも、こういうことは、いくら秘密にしても、周囲の空気へんりで何とはなしにわかることもあるし、何かのはずみで、話の片

鱗ぐらいは耳にはいらぬものでもない。だから、道江がまる

でこのことに感づいていないとは断言できないだろう。そして、

もし感づいているとすれば、それが、よかれあしかれ、道江の心

理に相当大きな影えいきよう響およを及ぼしているであろうことも、想像で

きないことではない。――」

次郎の変な笑いは、いつのまにか、またもとの緊張きんちように変わつていた。

「しかし、現在までのところ、ぼく自身が直接道江からうけた印象だけで判断すると、その心配もなさそうだ。道江は、これまで、ただの一度も、ぼくに対して、とくべつの意味を持つと察せられるような言葉をかけたことがないし、またそんな態度に出たこともない。手紙はしばしばもらったが、それもたいてい、新刊書の選せんたく択いっさいの依頼いっさいのついでに、故郷の消息をつたえろといった程度以上のものではなかった。そのうちの何通かは、ちようど君が来あわせた時に、君にも見せたのだから、たいてい想像がつくだろう。

もつとも、いつごろだったかはつきり記憶きおくしないが、かなり以前にもらった手紙の中に、ちよつと変わったことが書いてあつたのを今でも思い出す。それは君自身に關係したことだった。女学校時代に、いつも君に低能あつかいにされていたので、今度君にあうときには、すこしは君の話相手になるように勉強しておきたいといったような意味だったと思う。今だからいうが、ぼくは、実は、それを読んだとき、道江は君を愛しているのではないかと、ちよつと疑つてみたくなつたくらいなのだ。——といつても、それが原因で、ぼくが道江との婚約を断つたわけでは、むろんない。——なお、これも手紙に關連したことだから、ついでに言つておくが、道江は、君が上京以来一度もたよりをしなかつたこと

を、なぜぼくのほうにうつたえて来なかったのか、今になって思うと、それもぼくにはふしぎでならないのだ。ひかえ目な女性というものは、自分が心の中でひそかに愛している人の消息を、他の人にはたずねたがらないものだが、道江もあるいはそうではなかったのか、などとぼくが疑ったとしても、必ずしも無茶ではな
いと思うが、どうか。——」

次郎は、それが恭一の自分に対する気やすめ以上のものではないと思ひながらも、ふしぎに怒りを感じなかつた。

「書くことが少し先走りしすぎたが、要するに、道江とぼくとの

間あいだがら柄がらは、どちらのがわからいっても、親類ないし友だち以上

のものではない。少なくとも、ぼく自身に関するかぎり、このこ

とは誓っていえることだし、また道江のがわから言っても、おそらくぼくの判断に誤まりはないだろうと思う。そこでつぎの問題は、何といても道江の君に対して抱いだいている気持ちいかんだが、これについては、今言ったようなきわめて薄はくじやく弱な判断の材料があるだけで、ぼくには決定的なことは何も言えない。これは、むしろ、君自身で判断するほうが一番たしかではないかと思うのだ。——」

次郎は急に突つっぱなされたような気がしながらも、やはり眼だけはつぎの文字を追っていた。

「こう言うと、君の今の心境では、ただ失望だけを感じずるかもしれない。もし道江の気持ちについての君の判断が、これまで通り

で少しも変わらないとすると、それは無理のないことだし、またしかたのないことだ。しかし、君のその失望は、君にとつて、まだ決して最後のものではない。いや、最後のものであらせてはならないのだ。橋のないところには橋をかけて進むという方法もあるのだから。……ぼくの考えるところでは、君の現在の悲観的判断がかりに当たっているとしても、道江が君以外のだれかを愛しているということがたしかでないかぎり、断念するにはまだ早い。というのは、道江が少なくとも君に対して友情を感じていることだけはたしかだからだ。しかもその友情は、ぼくの見るところでは、通り一ぺんの友情ではない。見ようでは、それは自然の成り行きに任せておいても、友情以上のものに、育っていきそうに思

えるほどの友情なのだ。だから、もし君が欲するならば、いや許すならば、ぼくはその友情を一刻も早く友情以上のものに育てるために積極的に何らかの手段に出たいと思つてゐるのだ。むろんその手段に少しでも無理があつてならないことは、ぼくもよく心得てゐる。その点についてはぼくを信じてもらつてもいい。ぼくは、決してそのために君ら二人の友情までも傷つけるようなことはしないつもりだ。しかし、何といつても、まずたいせつなのは、君の真意だ。最初に言つたとおり、すべては君の道江に対する気持ちについてのぼくの判断が誤まつていないということを前提とするのだから、それが誤まつておれば、手段も何もあつたものではない。で、どうか、君の真意を率そつちよく直ちよくにきかせてくれ。返事

は、イエスカノーかでたくさんだ。くれぐれも言っておくが、心にもない返事は、この場合ぜひやらないでくれ。こうした問題は、あまり考えていると、つい答えがあいまいになったり、心にもないことを言いたくなくなったりするものだ。ほかの場合とはとにかくとして、今度の場合だけは、君が子供のよう^{いの}に単純率直であることをぼくは心から祈^{いの}っている。」

読み終わった次郎の顔は、いくぶんほてっていた。うれしいよ
うな、恥^はずかしいよな、それでいて憤^{ふんが}慨^{がい}したいよな、変に
こんがらかった感情が、かれの胸の中に渦を巻いていたのである。
かれは赤松の幹によりかかつて、手紙をもう一度はじめから読
みかえした。それは最初の時よりはるかに時間をかけた、念入り

な読みかただった。そして読みおわると、それをかくしにつっこみ、腕組うでぐみをして、しばらくじつと考えこんでいたが、急に何か決心したらしく、大いそぎで自分の居室きょしつに帰って行つた。居室に帰ると、すぐ机の上に便箋びんせんをひろげた。そして、もう一度考えこんだあと、ペンを走らせた。

「手紙見た。感謝する。しかし、道江の気持ちは、ぼくにはわかりすぎるほどわかつているのだ。君がとうとうする方法は、ただ道江を悲しませるばかりだろう。それは同時に、ぼくにとつても、たえがたい苦痛なのだ。ぼくは、君がぼくに対して注ぐ愛情を道江に対して注ぐことを心から希望する。それは同時に、ぼくに対する大きな愛情でもあるのだ。」

かれはそれを封筒ふうとうに入れて封をした。が、上書きうわがを書こうとして、何かにはつと気がついたように、ペンをにぎつたまま、その封筒を見つめた。

しばらく考えたあと、かれはその封筒を、手紙ごとめりめりと裂きさ、もみくちやにし、さらにすたすたに裂いて屑籠くずかごに投げこんだ。

それからまた、便箋を前にして、じつとどこかを見つめていたが、やがてかれの頬ほおには冷たい微笑が影かげのように流れた。そして一気に記されたのはつぎのような文句であった。

「君の手紙を見て、ぼくは失笑しっしょうを禁じ得なかつた。とんでもない誤解だ。しかも君は、ぼくに対する判断を誤まっているばかり

りでなく、道江に対する判断をも誤まっている。ぼくの場合は、笑つてもすませるが、道江の場合は、そうはいくまい。道江にとつては、それはおそらく致命的な打撃ちめいてきを意味するだろう。おそろしいことだ。ぼくは、道江の一生の幸福のために、婚約拒絶きよぜつについて、君の再考を祈つてやまない。それは同時に君自身の幸福のためでもある、とぼくは信ずるのだ。——なお、これはついでだが、こないだちよつと話したこと（ぼくが塾の助手をやめる問題）は、もつとぼく自身でよく考えてみたい。君や大沢さんおおさわに相談する必要があつたら、あらためて通知するから、それまでは気にかけないでおいでくれ。このことを道江の問題などと結びつけて考えてもらうのは、むしろ滑稽こっけいだ。」

かれは封筒を書きおわると、今度はすぐ切手をはって、事務室に備えつけてある発信ばこに投げこんだ。——午後二時半になると、郵便物当番の塾生が、その中のものをひとまとめにして、近くの郵便局にもって行くことになっているのである。

間もなく板木ばんぎが鳴った。午後は屋外作業で、くぬぎ林えだの枝をおろして薪まきを作る予定になっていたのである。塾生たちは、いったん玄関前げんかんに集まり、班別にわかれてすぐ作業にとりかかった。

入塾後、すでに二週間近くになっていたので、作業は割合順序よく運ばれた。木にのぼって枝をおろすもの、おろされた枝を一定の場所に集めるもの、集められた枝を適当な長さに切るもの、切られた枝を縄なわでゆわえるもの、ゆわえられた束たばを薪小屋に運ん

で整理するもの、とだいたい五つの班にわかれていたが、管理部の人員の割り当てに、多少の誤算があり、はじめのうちは手持ちぶさたの塾生や、忙しすぎる塾生がないでもなかった。しかし、そのでこぼこも、間もなく修正された。

朝倉先生も、次郎も、むろん作業に加わった。こうした場合、二人は決して計画したり、指揮したりする側にはたたなかつた。それどころか、一般いっぱんの塾生たちと同じように、それぞれの班かに割り当ててもらって、班長の指揮の下もとに働くようにしていたのである。もつとも、全体の様子を観察する必要から、比較的自由な立場にいたことは、言うまでもない。

次郎は木のぼりの班に加わり、朝倉先生は薪小屋整理班に加わ

っていた。

木にのぼって、のこぎり鋸をひきながら、次郎は、たえず、恭一にあてて書いた手紙のことばかり考えていた。

（もし恭一の手紙にあるように、道江の自分に対する気持ちに、いくらかでも望みがあるとすると——）

そんな仮定がいくたびとなくかれの頭の中を往復した。ばかな！ と、そのたびごとに自分を叱しかってはみるが、しばらくたつと、いつのまにか、また同じ仮定がかれの心にしのびこんでいるのだ。つた。そして、

（何もあわてて返事を出す必要はない。出してしまったらもう取りかえしがつかなくなるのだ。）

と、そう考えて、いそいで木をおり、事務室の発信はこのほうにかけつけたくなつたことも、一度や二度ではなかつた。

しかし、また一方では、恭一の手紙を信じようとする自分の甘さを思つた。それを信じて返事をおくらすために、自分の本心を恭一に見ぬかれるということは、かれの自尊心がゆるさなかつたのである。

かれは、枝を一本おろすごとに、自分の腕時計うでどけいを見た。最初見たときには、二時間半までには、まだ四十分以上の時間が残されていたので、かれの気持ちには、かなりのゆとりがあつた。しかし、十五分、十分と、残された時間が少なくなるにつれ、かれの焦躁感しょうそうかんはしだいに高まつて行つた。そして、いよいよその

時刻が来て、郵便物当番が塾堂の玄関に自転車をひき出して来たのを見ると、かれはもう、枝をおろすのを忘れて、何かにつかれたように、一心にそのほうに目をこらしていた。

(やっぱり、もう一度考えなおそう。)

自転車が動き出した瞬間しゅんかん、かれはそう決心した。そして、手をふりあげて郵便物当番の名を呼んだ。かれは思いきり大声をあげたつもりだった。しかし、その声は、咽のどの奥おくから何かの力で引きもどされたように、変なうなり声になっただけだった。郵便物当番は、むろん、ふり向きもしなかった。かれは、玄関をはなれると、くぬぎ林のまへの広場を斜ななめに、正門のほうに向かつて自転車の速力をはやめた。

次郎には、もう一度、大声をあげてそれを呼びとめるいとまがなかつた。いとまがなかつたというよりも、心のゆとりがなかつたといったほうが適當であつた。かれは、気ぬけがしたように、ぼかんとしてそのあとを見おくつていた。そして、自転車が正門を出て見えなくなると、急にがくりと首をたれ、両腕で本の幹を抱^だいた。

いつさいは終わった。道江の問題に関するかぎり、いつさいは終わった。自分のとつた方法が賢^{けんめい}明であつたにせよ、おろかであつたにせよ、これでほんとうにいつさいは終わったのだ。と、いつたんはあきらめたようにそう思うのだったが、しかし、ながいこと闇^{やみ}にうずくまっていた自分のまえに思いがけなく一つの燈^と

火がともされたのに、その燈火の正体をよくつきとめもしないで、自分はあわててそれを吹き消してしまったのではないか、と思うと、やり場のないくやしさと、さびしさとが、胸の底からつきあげて来るのだった。

「どうしたんです。気分がわるいんじゃないやありませんか。」

だしぬけに木の根もとから声をかけたものがあつた。大河無門の声だった。大河は枝を運ぶ役割にまわっていたのである。

次郎はぎくりとした。大河無門の声が、この時ほど次郎の耳に気味わるく響いたことは、おそらくこれまでもなかつたことであらう。

「いいえ、何でもないんです。……鋸屑おがくすが目にはいったような

気が、ちよつとしたもんですから。」

次郎は、そう言つて、わざわざ目を手の甲こゝらでこすつた。しかし、つぎの瞬間には、そんなごまかしをやつた自分が、たまらなくいやになり、思わず肩かたをすくめた。

「おりて来ませんか。鋸屑がはいっているなら、はやくとつたほうがいいですよ。ぼく、見てあげましょう。」

「ええ、もうだいじょうぶです。」

次郎は、目をぱちぱちさせながら、大河を見おろした。大河は、まだ心配そうな顔をして次郎を見あげている。次郎は、大河の顔に例の笑いが浮うかんでいなかったの、ほつとした気持ちだった。

「ほんとうにだいじょうぶです。何でもなかつたんです。」

次郎はもう一度そう言つて、すぐ鋸をひきはじめた。

大河がそこいらにあつた木の枝を運び去つたあと、次郎は、まるで質のちがつた二つのにがい味を、同時に心の中で味わいながら、黙々^{もくもく}として鋸をひいた。永久に恋^{こい}を失つたということも、にがい味のすることだったが、弱い人間として大河無門の前に立たされているということも、それにおとらず、にがい味のすることだったのである。

三時になると、みんなは草つ原に腰^{こし}をおろして、お茶をのみ、ふかし芋^{いも}を食つた。一人あたり一日五十銭の食費の中から、こうした場合のおやつ代をひねり出すのは、炊事部^{すいじぶ}に任された権限なのであつた。

郵便物当番も、もうむろんそのころには帰つて来て、仲間に加わっていた。かれは、芋を頬張りながら、みんなに今日の発信数と、これまでの累計とを報告したあとで、言った。

「封書だけで言うと、今日がレコードだったよ。故郷をはなれて二週間近くにもなると、そろそろ綿々たる手紙が書きたくなくなるらしい。ことに今日の手紙には異性あてのが多かつた。それも差出人とは姓のちがった宛名が多かつたようだ。」

すると、にぎやかな笑い声にまじつて、いろんな野次がとんだ。「時局がら、憂うべき傾向だ。査問会をひらいたら、どうだ
い。」

「しかし、いつたい、郵便物当番に、異性あての手紙が何通だな

んていうことまで調査する権限があるのかね。」

「まさか開封かいふうして見たんではないだろうな。」

「とにかく、発信人の名前ぐらいは公表してもよさそうだ。」

「これからは、各人別に異性あての手紙の累計をとるべきだよ。」
そういった調子である。

朝倉夫人も、こんな時間には、かならず顔を出し、茶をついでまわったりする習慣になっていたが、一通り野次がとんでしまつて、笑い声がおさまったところ、夫人は、みんなの顔を見まわしながら、真顔まがおになつてたずねた。

「それはそうと、みなさんの中に、もう奥おくさんがおありの方は、どなた？」

みんなにやにや笑っているだけで、返事がない。

「あたしには、おおよそわかりますわ。あててみましょうか。飯島さんはおありでしょう？」

飯島は、めずらしく子供のようにはにかみながら、しばらく頭をかいたあとで、こたえた。

「あります。」

みんなが拍手はくしゅした。拍手にまじって、だれかがとん狂きょうな声で叫さけんだ。

「小母おぼさんはさすがに体験家たいけんかだなあ。」

それでまた笑いが爆発ばくはつした。朝倉夫人も笑いながら、

「大河さんは？」

みんなは、飯島のと看よりも興味深そうな目をして、一せいに大河を見た。大河は、しかし、近眼鏡の奥おくに、どこを見てもななく目をすえ、とぼけたようにこたえた。

「ありませんね。うっかりして、恋こいをしたこともまだないんです。だから、ぼくは入にゅうじゆく塾じゆくしてから一度も手紙を書いたことがありません。さびしい人間ですよ。」

みんなは腹をかかえて笑った。中には、たべかけた芋ふを吹き出したものもあつた。朝倉先生も夫人も、むろん笑つた。ただ次郎だけは、どうしても笑えなかつた。かれには、そんなことをいつた大河がいよいよ気味わるく感じられたのだつた。

かれは、ふたたび作業がはじまるまで、とうとうその場の空気

にとけこむことができず、まともに人の顔を見ることさえしなかつた。それがいよいよかれを苦しめた。自分はもう、友愛塾の中の人間ではない。そんな気がしみじみとするのであった。

予定の作業が全部終わったのは五時近いころだった。作業のあとは入浴の時間だった。浴室はかなり広かったので、一度に二十人ぐらいははいれた。朝倉先生も、次郎も、塾生たちと裸はだかの皮膚ひふをふれあい、おたがいに背中を流しあうのだった。

着物を着ている時の顔と、まる裸になった時の顔とは、まだ十分知りあわないうちは、とかく一致いっちしにくいものである。そのため、はじめのころは、湯ぶねにひたりながら、おたがいに名前をたしかめあうというようなこともよくあった。しかし、このごろ

では、もうそんなことはほとんどなくなっている。それどころか、おたがいに渾名あだなを呼びあうことさえ、すではやりだしているのである。そして、その渾名の中には、入浴時のある発見や偶然ぐうぜんのできごとを機縁きえんにして命めいめい名なされたものも少なくはなかつた。たとえば「河馬かば」とか、「仁王におう」とか、「どぶ鼠ねずみ」とか、「胸毛むなげ」の六蔵むくろ」とか、いったようなのがそうであつた。

大河無門も、入浴中に渾名をもらつた一人だつた。かれの眼は、近眼鏡をはずすと、いつもの光を失い、とろんとした眼になるのだったが、かれはその眼を半眼はんがんにひらき、周囲のさわがしさと はまるで無関係に、湯ぶねのすみに、默然もくねんとして首だけを出していることがよくあつた。ある日、かれのそうした様子を見てい

た茶目な一塾生が、四月八日の甘茶あまぢやだといって、タオルにふくませた湯を、かれの頭上にたらたらとかけてやった。かれは、しかし、それでも身じろぎ一つせず、ただしずかに眼をつぶつただけで、その湯を最後までうけていた。それ以来、「お釈迦しやかさま」というのが、かれの渾名になってしまったのである。

今日も大河は、その默然たる姿でしばらく湯にひたっていたが、急に、何と思つたか、そのとろんとした眼で、すぐとなりにいた塾生の顔をのぞきこみながら、にこりともしないでたずねた。

「君は恋れん愛あいの経験がありますか。」

たずねられたのは青山敬太郎だった。かれは面くらつたように、眼を見張つて大河の顔を見ていたが、やがて、くすぐつたそうに

笑いながら、

「ありませんね。」

「ほんとうにありませんか。」

大河は真顔だった。青山も真顔になりながら、

「あれば、どうなんです。」

「ちよつとたずねてみたいことがあるんです。」

「どんなことでしょう。」

大河は、しばらくだまっていたが、

「恋愛の経験のない人にたずねても、答えが出るはずがありません。よみましょう。」

青山は苦笑して、

「実は、ないこともないんですがね。」

「ないこともないぐらいな恋愛では、しようがない。」

大河は、そう言うともたもとの默然たる姿勢にかえり、それつきり口をききそうになかった。すると、湯ぶねの中で、二人の間答をおもしろそうにきいていたほかの塾生たちの一人が、ふざけた調子で言った。

「ぼくは、目下命もっかがけの恋をやっている最中なんですがね。」

みんながどつと笑った。大河は、しかし、そのほうをふりむこうともしなかった。

朝倉先生は、その時、たたきで塾生の一人に背を流してもらっていたが、それが終ると、湯ぶねの中にはいつて来て、言った。

「大河君、何かおもしろそうな問題らしいが、私では相手にならんかね。」

「ええ——」

と、大河はにつと笑って立ちあがり、湯ぶねのふちに腰をおろしながら、

「先生は、恋愛をやられたとしても、時代が古いでしょう。」

「古くては、問題にならんかね。」

「全く問題にならんこともありませんが——」

と大河は真顔になり、

「実は、ぼくは、世間できわめて重大だと考えている公おおやけの問題、たとえば現在でいうと、国家の非常時というような問題に対して、

恋愛というものが、その本人にとって、実際どのぐらいの比重をもつものか、正直なところをきいてみたかったです。」

「ふむ。」

と、朝倉先生も真顔になって首をかしげた。

「むろん、恋愛か、戦場か、という問題につきあたった場合、日本の青年たちが実際にとる態度はもうきまっています。よほど変わった青年でないかぎり、国家の要請ようせいのまえには恋愛などは何でもないといった態度をとるんです。しかし、そういう態度がはたして恋愛の比重を正直にあらわしたものでどうかは、疑問だと思うのです。正直なところは、むしろ恋愛のほうの比重が大きい場合が、多いんじゃないでしょうか。」

「そうかもしれないね。何と言ったって、恋愛は本能的なものだから。しかし、恋愛のほうの比重が大きければ、それが、どうだというんだね。」

「ぼくは、日本の青年は、恋愛について、もっと正直であつてもいいと思うんです。」

「というと、恋愛の比重が大きければ、公けの義務なんか、けつとばしてもいいと言うのかね。」

「いちがい概にそうは考えていないんです。人間が組織の中に生きている以上、いつさいの個人的関心を乗りこえて果たさなければならぬ公けの義務があることは、ぼくも知っています。ただ、ぼくがおそれるのは、青年たちが、自分の心に問うてみて非常に比

重の大きい、しかも、当然生かしてもいい、いや、進んで生かさなければならぬ純潔な恋愛までを、時局とか、国家の要請とかいうような意識で、むりにしめ殺しているのではないか、しめ殺さないまでも、その価値を不当に低く見ようとしているのではないか、ということですよ。」

「うむ、たしかにそういう憂うれいはあるね。」

「しかも、時局とか、国家の要請とかいったような意識が、しっかりした理性に導かれたものであれば、まだいいのですが、たいていは、マンネリズムといいますが、群集心理といいますが、まあそういう程度のものでしかありませんし、そんなうすつぺらな意識で、深く生命の自然に根をおろした恋愛を否定したり、軽

視したりするのは許しがたいことだと思ふのです。」

大河の声は、しだいに熱気をおびて来て、浴室のすみずみまでひびきわたった。みんなは私語しごをやめ、湯の音をたてることさえひかえて、かれのほうに注意を集中した。

「ぼく自身に恋愛の体験がなくて、恋愛を論じては、あるいは見当ちがいになるかもしれませんが、ほんとうの恋愛はどんな時局下でも抑よく圧あつされてはならない。むしろ、時局が緊きん迫ぱくすればするほど、それを正しく生かしてやるようにしなければならぬと思つてゐるんです。ほんとうの恋愛が抑圧されると、男女の関係は墮落だらくします。それは恋愛が人目にふれない暗いところに追いやられるからです。そして、そうになると、いつさいが不健全になり

ます。時局のために精神主義の名において恋愛を軽視することが、かえつて精神を低下させ、国民道德の頹^{たい}廢^{はい}を招く、というような結果にならないとは限らないと思います。何と言つたつて、恋愛は人間社会のあらゆる創造の源^{みなもと}なんですから、それが正しく評価され、堂々と生かさねないかぎり、すぐれた個人も、すぐれた民族も、すぐれた文化も生まれません。したがつて、いわゆる精神主義とか鍛^{たん}練^{れん}主義とかで、どんなに力んでみても、国は衰^とえ^{おろ}るばかりだということを、ぼくたちは忘れてはならないと思うんです。

大河はそこまで言つて、みんなの注意が自分に集まつているのに、はじめて気がついたらしく、急に口をつぐんで、にこりと笑

った。そして、もう一度、とつぷりと湯にひたり、首を湯ぶねのふちにもたせかけた。

「さすがはお釈迦さまだ。これからは、みんな安心して、恋文が書けるぜ。」

だれかが浴室のすみから、そんなことを言った。すると、また、べつの声で、

「恋文なら、もう安心して書いているんじゃないか。現に今日もたくさん出たんだろう。」

「しかし、それは時局から憂うべき傾向だなんて憤慨ふんがいした人もいたからね。」

それで浴室はまたにぎやかになり、笑い声がうずまいた。大河

は、しかし、もうにこりともしなかった。

朝倉先生は、何かものを考えるときのくせで、その澄すんだ眼をぱちぱちさせながら、湯ぶねを出て、からだをふいていたが、みんなの笑い声がしずまると、言った。

「大河君の考えている恋愛と、君らの考えている恋愛との間には、かなりのへだたりがありそうだ。うっかり安心して、やたらに恋文を書いていると、今に大河君に叱られるかもしれないよ。」

みんなは、それでまた笑った。しかし、その笑いは、まえほどにぎやかではなかった。

次郎も、大河の議論のはじまる前から浴室にいた一人だったが、かれは、大河が話している間、湯ぶねの中には一度もはいつて来

なかつた。それどころか、しじゅう自分の顔を大河からかくすようにさえしていたのである。しかし、だれよりも熱心に耳をかたむけていたのが、かれであつたことは言うまでもない。

かれは、むろん、大河の言葉のすべてを肯定こうていした。しかし、肯定すればするほど、やり場のない感情がかれの胸をしめつけ、ゆすぶり、にえたぎらした。

それは後悔こうかいでもあり、自嘲じちようでもあり、怒りいかでもあつた。かれは浴室に立ちこめた濃い湯気ゆげの中にじつと裸身らしんを据すえ、ながいこと、だれの眼にも見えない孤独こどくの狂乱きやうらんを演じていたのである。

九 異変（I）

恭一からは、それつきり何の音沙汰おときたもなかった。次郎には、日がたつにつれ、それが気になって来た。

自分であんな返事を出しておきながら、それに対して、恭一から押おしかえして、また何か言つて来るのを期待するのは、おかしなことだし、むろん、返事を書くときに、それを予期していたわけでは毛頭もうとうなかった。それにもかかわらず、かれは、三日とたち、四日とたつうちに、朝夕二回配達される郵便物がしだいに待ちどおしくなり、その中にそれが見つからないと、失望もし、何か欺あざむかれたような気にさえなるのだった。

しかし、また一方では、自分がそんな気持ちになるのを、するどく反省もした。そして反省の結果は、いつもたえがたい自己嫌けんお悪と自嘲だったのである。

何という弱さだ。いや、何という見ぐるしさだ。いったい自分は、これまで自分を育てるために何をして来たというのだ。白鳥会以来の苦心と努力とは、いったい何を目あてにしたものだったのだ。こんなふうでは、自分は、里子さとこから帰って来た幼年時代と少しも変わったところがないではないか。いや、あのころの自分は、まだ今ほどには見ぐるしくはなかった。なるほど、自分はあるところ、虚言きよげん、策略さくりやく、暴力、偽善ぎぜん、そのほかありとあらゆる卑劣ひれつな手段を毎日もてあそんでいた。しかし、それらはすべて、

自分の心の底からの願い、——自分にとっては生きるということと全く同じ意味をもつほどの、せっぱつまった願いをみたすために、自然が自分に教えてくれた手段だったのだ。自分は何よりもまず母の愛を求めていた。また、母をはじめ、肉親の人たちの自分に対する公平な待たいぐう遇を求めていた。それはあのころの自分にとって、決して不当な願いではなかったはずなのだ。いや、不当の願いでないどころか、それはかえって、自分を虚偽きよぎや、策略や、暴力や、偽善から救い、正常な人間になるために、絶対に必要な願いであったときさえいえるのだ。その意味で、あのころの自分は、無意識的ではあったにせよ、自分に対してきわめて忠実であったと言えるのではないか。しかるに今はどうだ。今の自分のどこに

少しでも真実さというものが残されているのだ。自分は、いったい、自分にとつてどんなたいせつな願いを生かそうとしているのだ。どんなたいせつな願いを生かそうとして、兄に対してあんな返事を書いたというのだ。——

みちえ道江の しやうがい生涯の幸福のために？——なるほど、自分は心のど

こかで、そんなことを考えていないのではない。だが、それがはたして自分の真実の願いだと言えるのか。道江と恭一との幸福な生活を将来に想像して、自分は今現に心の底からの喜びを感じていると言えるのか。正直のところ、心の底には、喜びどころか、むしろ呪いのろに似た気持ちさえ動いているのではないのか。——

あらゆる苦惱くのうにたえて、そうした呪いに似た気持ちを克服こくふくす

るのだ、と、そう自分に言いきかせて、自分をはげますことに、ある誇りほこを感じていないのではない。だが、そうした誇りに生きることが、自分にとってはたしてのつぴきならぬ願いなのか。その願いのまえには、どんな他の願いも犠牲ぎせいにされていいほど自分にとって高価な願いなのか。もしそれが、それほど高価な、それほどつのつぴきならぬ願いなら、兄からのつぎの手紙を期待するような今の気持ちは、いったいどこから湧わいて来るのか。心のどこにそんな余地があり、そんなすき間があるのか。――

考えてみると、道江の問題について、これまで自分のとつて来た態度のすべては、要するにお体裁ていさいであり、偽善であり、下劣げれつな自尊心の満足であり、劣等感れつとうかんをごまかすための虚勢きよせいでしか

なかつたのだ。何というなさけない自分だろう。

かれの反省の最後は、いつも、そうしたところに落ちて行くのだった。そして、それから先には一步も進むことができず、相変わらず恭一から手紙が来ないのが氣になり、またそれを反省しては、ますますみじめな氣持ちになるばかりだったのである。

とりわけ、かれが自分をなさけなく思い、ほとんど絶望的な氣持ちにさえなつたのは、ふと恭一に対してつぎのような疑いを抱いたときであつた。——兄は、兄自身のためにぼくの氣持ちをさぐつてみたにすぎないのだ。ぼくの返事を見て、今ごろはおそらくほくそ笑んでえいることだろう。——

もつとも、この疑いはほんのいっしゆん一瞬だだった。かれはいそいで

それを打ち消したし、疑いそのものが、あとまでながくかれを苦しめたわけではなかった。しかし、かれは、そうしたいやしい疑いがかりそめにもしのびこんで来る余地のある自分の心が、あまりにもなさけなかつた。かれは、その時、事務室で、郵便物当番を手伝って、配達された郵便物を各室ごとによりわけていたのだつたが、その当番に顔を見られるのが苦しくなり、いきなり自分の室にかけこんだために、かえって当番に目を見張らしたほどであつた。

かれが、このごろ、だれの眼めよりもおそれたのは、大河無門の眼だつた。かれは、むろん、大河が自分の心の中を見とおしているなどとは考えていなかつた。どんなにどうさつりよく洞察力のある大河で

も、こないだの日曜に恭一と道江とがたずねて来たおり、いっしよに飯を食つたり、わずかの時間話したりしただけで、それができるとは思えなかつたのである。しかし、かれが恭一に返事を出したその日に、大河がたまたま浴室で持ち出した恋愛論れんあいろんは、期せずしてかれに対する大きな人間的抗議こうぎとなつていた。そして道江に対するかれの恋情が深ければ深いほど、また自分という人間がなさけなく思えて来れば来るほど、この抗議がきびしく胸にこたえ、大河と顔をあわせるのが息ぐるしくなり、その眼がこわくなつて来るのだつた。こんな時こそ、自分から進んで大河にぶつかり、その助言を求むべきではないか、という気もして、何度か、かれを自分の室に招き、二人きりで、話してみたいと思つた

こともあったが、いざとなると、どうしてもその勇氣が出なかつたのである。

朝倉先生夫妻に対しても、いくぶん息ぐるしさを感じないではなかつた。しかし、仕事の上でどうしても話しあわなければならぬことが多かつたので、いつもいつも二人を避^さけてばかりはおれなかつた。それに、二人と言葉をかわしていると、やはり何とはなしに慰^{なぐさ}められるような気もして、いったん話したすと、あんがい尻^{しり}がおちつくのだった。しかし、話したあとがいつもいけなかつた。というのは、自分の態度に何か不自然なところがあり、それが二人の眼にとまつたのではないかと、それがいやに気になつたからである。

かれがこの数か月間、最も親しんで来たのは「歎異抄」で、
今度の開塾かいじゆくのすこし前ごろからは、すでに書いたように、毎
朝まだ暗いうちに起きて、かならずその幾節いくせつかを読むことにし
ていたのであるが、ことにこの数日間、ひまさえあると自分の
室にとじこもり、くりかえしそれに眼をさらしては、何か考えこ
むといったふうであつた。

かれが最初「歎異抄」というものを読んでみる気になつたのは、
実は、それが宗教の古典として非常に有名であるというだけの理
由からにすぎなかつた。しかし、一度それに眼をとおすと、これ
までの読書の場合とはまるでちがつた魅力みりよくをそれに覺えた。そ
して読めば読むほど、底の知れない苦惱と、限りなく清澄せいちょうな

心境とに、同時に誘さそいこまれて行くような気がするのだった。むろん「弥み陀だ」だの、「念ねん仏ぶつ」だの、「往おう生じょう」だのという言葉は、かれにはまだ、十分には理解もされず、気持ちの上でもぴつたりしない言葉であつた。その点からいって、かれは、おそらく、親しん鸞らんの他た力りき信しん心じんをそのまま素す直なほに受けいれていたとは言えなかつたであろう。しかし、それにもかかわらず、その中には無条てつて件てんにかれの胸にくい入る何ものかがあつた。それは、親しん鸞らんの徹てつて底いした真ま実じつ性せいであり、つきつめた自己反省による罪ざい惡あく深しん重ちゆうの自覚であり、そしてその結果としての自力の絶対否定であつた。「善惡のふたつ、総じてもて存知せざるなり」とか、「とても地じ獄ごくは一いち定じようすみかぞかし」とか、「親鸞は弟子一人も持たずさ

ふらふ」とか、「父母の孝養こうようのためとて、念仏一返にても申したること未だいまさふらはず」とか、そういった一途いちずな言葉に接するごとに、かれはおどろきもし、むちうたれもし、また同時に救われたような気もするのだった。

こうして、かれは「歎異抄」に親しむにつれ、これこそ人間の知性と情意との一如いちによてき燃ねん焼しょうであり、しかも知性をこえ、情意をこえた不可思議な心境の開拓かいたくを物語るものだ、というふう
に考えるようになり、自分みずからその心境に近づくために、い
よいよそれに親しむようになって来ていたのだった。ことにこの
ごろのように、内心の動揺どうようがはげしくなり、自己嫌悪の気持ち
が深まって来ると、その中の一句一句が実感をもって胸にせまり、

もう一ときもそれが手放せなくなつて来たのである。

*

二月二十四日は日曜だった。昨日の正午ごろからふり出した雪は、まだやんでいなかった。やむどころか、朝のラジオは、近年まれな新記録を出すかもしれないとさえ報じた。寒さもこのほかきびしかった。そのために、昨夜までは外出を計画していた塾生たちも、一人残らずそれを断念し、めずらしくみんなそろつて日曜の一日を塾内ですごすことになつたのである。

次郎も、実をいうと、内々その日の外出を、計画していた一人だった。かれは「歎異抄」に親しんでいるうちに、しだいに自分のこれまでの虚偽にたえられなくなり、いつそ自分から恭一の下

宿をたずね、思いきつて何もかも打ちあけてしまいたい、という気になつていたのである。むろん、かれは、自分が外出することをだれにももらしてはいなかつた。それをもらしたために、塾生たちに道案内をせがまれたりして、行動の自由を束縛そくばくされてはならないと思つたからである。しかし、いよいよその日になると、かれも結局外出を思いとまるよりしかたがなかつた。むりに出ようとすれば出られないほどの深い雪には、まだなつていなかつたが、塾生全部が思いとまっているのに、めつたに外出したことのない自分が、しいてそんな日を選んで外出するからには、少なくとも朝倉先生夫妻だけには、十分納得なつとくの行く理由を述べて断わる必要があつた。しかし、その理由を正直に述べる気にはまだど

うしてもなれなかつたし、かといつて、うそをつくののは、このごろのかれとしては、なおさら苦しいことだったのである。

朝倉先生夫妻は、これまで、日曜には、朝の行事をおわり、朝食をすましたあととは、すぐ空林庵くうりんあんに引きとり、読書をしたり、書きものをしたりしてすごす習慣だったが、居残りの塾生の中には、よく個人的問題について相談をもちかけて行くものがあり、先生夫妻も、喜んでそれを迎むかえるといったふうだったので、そうした塾生が三四人もあると、それで一日が終わるといふようなことも決してめずらしくはなかつた。今日は、しかし、朝食のあとで、全員居残りだときくと、朝倉先生は、夫人と顔を見合わせ、「じゃあ、私たちも居残りだ。何か話がある人は塾長室にやって

来たまえ。」

と言つて、すぐ塾長室にはいり、何か書きものをはじめたのだつた。

こうして、雪は塾生たちから外出の楽しみを奪^{うば}つたが、それは必ずしもかれらの気持ちを冷たくしたとばかりは言えなかつた。

考えようでは、何のきまつた行事もない、最も自由な日を選び、

塾長夫妻をはじめ、全員を一堂にとじこめることによつて、みんなの心をいつそうあたためてくれたとも言えるのであつた。その証^{しやうこ}拠^こには、塾生たちは、だれがだれを誘^{さそ}うともなく、いつの間

にか一人のこらず広間に集まり、朝倉先生夫妻を中心に、のびのびと話しあつたり、かくし芸を披露^{ひろう}したり、友愛塾音頭^{おんど}を踊^{おど}つた

りしていたのである。

次郎も、むろん広間に顔を出していた。そして、オルガンをひくとか、そのほか、こんな場合にかれでなくてはできないような役目は、いつもと変わりなく引きうけた。しかし、それがこの日のかれの気持ちにぴったりしていなかったことは、いうまでもない。かれは、ただ、自分の本心をだれにも見すかされないために、みんなと調子をあわせていたにすぎなかった。そして、そうした虚偽がさらに新たな苦^{くじゆう}汁となつてかれの胸の中を流れ、つぎからつぎに不快な気持ちをますばかりだったのである。

虚偽をにくむ心は尊い。しかし、人間が徹底して虚偽から自由であることは、ほとんど不可能に近い。この故に、^{ゆえ}虚偽をにくめ

ばにくむほど、人間の苦しみは深まるものである。次郎にとって、この日は終日、そうした意味での苦しみをなめる日であつたとも言えるであろう。かれは、実際、開塾以来の、いや、かれ自身の気持ちとしてはもの心ついて以来の、最もいやな日を、この雪の日にすごしたわけだつたのである。

翌日も雪空だつた。ときどき晴れ間を見せたが、雪は解けるよ
り積もるほうが多かつた。塾生たちは戸外こがいの作業が全くできない
ために、やはりとじこめられた形だつた。しかし、次郎にとつて
は、昨日の日曜にくらべるとはるかに楽な日だつた。それは予定
の行事を予定に従つてすすめて行けばよかつたし、そして、それ
だけのことは、自分の心をいつわっているという不愉快ふゆかいな自覚な

しにもできることだったからである。

雪のせいか、その日の午後の郵便物は二時間もおくれて、日暮ひぐれ近くに配達された。ちようど夕食まえの休み時間で、次郎はその時、何かの用で塾長室にいたが、用をすまして出て来ると、廊ろ下うかを急いでいた郵便物当番が声をかけた。

「本田さん、あなたにも来ていましたよ。お部屋にほうりこんでおきました。」

次郎は胸をどきつかせながら、自分の室にかけこんだ。しかし、そこにかれが見いだしたものは、つめたい畳たたみの上にぴったりとくつついている一枚の葉書にすぎなかった。しかもそれは、ひろいあげて見るまでもなく恭一の手跡しゆせきだったのである。文面にはこ

うあつた。

「重田父子は、昨日曜夜の夜行で退京した。二人の在京中、一度君にも出て来てもらいたいと思つていたが、ついにその機会が見つからなかった。

君の手紙は、むろん見た。しかし、今はすべてを白紙にかえたい。適当な機会が来るまで、僕はあのことについては沈黙する。同時に君にも沈黙してもらいたい。ただし、これは僕ら二人の間だけのことで、他に対しての発言は自由だ。

手紙を書くと、くどくなると思つたので、わざと葉書にした。

以上。」

重田は道江の姓である。次郎は、読みおわると、つめたい葉書

の中にこめられた兄の情熱と意志とを感じた。また、おぼろげながら、その情熱と意志との方向をも察することができた。しかし、それはすこしもかれの心を喜ばせなかつた。それどころか、かれは恭一に対して一種の敵意に似たものをさえ抱^{いだ}きはじめていた。自分はさらしものにはなりたくない。そういつた気持ちだったのである。

かれは、すぐ、机のひきだしから一枚の新しい葉書をとり出して、恭一あての返事を書いた。ペン先にやけに力がこもった。

「はがき見た。何のことやらわからぬ。沈黙はむろん結構。的なきに矢を放つようなことを君のほうでやりさえしなければ、僕ははじめから沈黙しているのだ。前便再読をのぞむ。これだ

けいつて、いよいよ沈黙しよう。」

かれはつめたく微笑びしょうしながらペンをおいた。しかし、それと同時にかれの眼をひいたものがあつた。それは机の上に開いたままになつていた「歎異抄」だつた。

かれは、しばらく、今書いたばかりの葉書と「歎異抄」とを見くらべていたが、やにわにその葉書をわしづかみにし、もみくちやにしてにぎりしめ、そして、にぎりしめたこぶしの上に顔を突つつ伏ぶせた。

こうして、この日も、次郎にとっては、決して昨日より楽な日だつたとは言えなかつたのである。

翌二十六日は火曜日だつた。雪は昨夜もふりつづいたらしく、

赤松あかまつがずつしりと重く枝えだをたれており、くぬぎ林が、雪だるまをならべたようにまるまっていた。

この数日は、門から玄関げんかんまでの道の雪をかくことが、塾生たちの朝食後の仕事になっていたが、今日は、まだかき終わらないうちに、外来講師がいらいこうしの小川先生が、ゴム長をはいてやって来た。たいていの外来講師は、下赤塚しもあかつか駅から、塾じゅくで特約してあるタクシーに乗って来るのだったが、小川先生はこの村に住宅を構えているので、いつも徒歩だったのである。

次郎は、外来講師の中のだれよりも小川先生に親しみを感じていた。先生は農学博士で、日本の村落史研究の権威けんいであり、友愛塾では、毎回その研究を背景にして、新しい農村協同社会の理想

を説くのだったが、色の黒い、五分刈り無髯むぜんの、ごつごつしたその風貌ふうぼうは、学者というよりは、鍬くわをかついでいる百ひやく姓しょうの親お爺やじさんといったほうが適当であり、講義の調子も、その風貌ふうぼうにふさわしく、訥々とつとつとして渋しぶりがちだった。しかし、そうした調子の中に、理論の骨組みが力強くとおつており、それを人間の誠実さが肉付けして、何となく鰹かつおぶし節の味を思わせるものがあった。なお、田沼たぬま理事長や、朝倉塾長とは古くから親交があり、塾創立の協力者として理事会に名をつらねていたばかりでなく、この村に住んでいる関係で、自分の講義のない日でも、ひまさえあると顔を出し、夜の座談会などにも、喜んで加わるといったふうであった。そんなわけで、次郎はもうとうから、小川先生に対

しては家族的な親愛感をさえ覚え、塾生たちといっしょに、その講義をきくのを楽しみにしていたのである。——むろん、講義の骨組みは毎回大体同じであつた。しかし、先生がおりおり眼をつぶつたあと、じつと塾生たちを見つめてもらす言葉の中には、深い人生体験と、思索しよくの中から生まれた、新しい知恵の言葉があり、それが次郎をして同じ講義を何度きいてもあかせない魅力みりよくになつていたのであつた。

小川先生の講義は八時からはじまつた。正午までの四時間を適当に二回に切つて話すことになつていたが、その第一回目の半ばをすぎたころ、給仕の河瀬かわせが講堂にはいつて来て、一番うしろの席で講義をきいていた次郎の耳に、何かこつそりささやいた。

次郎は、すぐ立ちあがって、河瀬のあとについて廊下に出たが、

「長距離ちようきより？ どこからだい。」

「東京からです。あなたに出てもらおうようにいわれました。」

「田沼先生からかな。」

「そうじゃないようです。若い人の声でした。」

そう言っている間に、次郎はもう、事務室の受話機の前に立って
いた。

相手はあんがいにも恭一だった。次郎がどぎまぎしながら、自分の名を告げると、恭一はかなり興奮した調子で言った。

「どうだい。そちらには、まだ何も変わったことはないのか。」

次郎は、いきなりそんなことを言われて、いよいよどぎまぎし

だが、

「変わったことつて、べつにないよ。……君の葉書は昨日見た。」

「見たか。しかし、あのことは、当分沈黙だ。今は、それどころじゃない。そんなことよりか——」

と興奮する声を強しいておさえ、あたりをはばかりるように、

「東京は大変なことになつたんだぜ。」

「大変なこと？ 何があつたんだ。」

「真相はまだはつきりしないがね。とにかく宮城きゆうじょうのまわりを

軍隊がとりまいていて、あの辺の交通が自由でないそうだ。」

「ふうん。」

「重臣がだいぶ殺されたらしいという噂うわさもとんでいる。」

「ふうん。」

「総理大臣官邸かんでいはたしかにやられたらしいんだ。そのほか、どういう人がやられたかわからんが、何でも、二人や三人ではないらしいよ。」

「ほんとうかい。」

「どうも、ほんとうらしいね。」

「すると、全くの叛乱はんらんじゃないか。」

「そんな風に思えるね。クーデターと言ったほうが適当かもしれんが。」

「なるほど。とにかく大変だね。街は大きすぎだろう。」

「大きすぎというより、今のところ、不安で身動きができないと

いった形だ。」

「オフィスや商店は戸をしめているのかい。」

「そんなことはない。丸の内付近はどうかわからないが、いっぽん一般は、表面べつにまだ変わった様子は見せていない。もつとも、雪のせいで、人通りも少いがね。」

「民間から暴動がおこるといふようなけはい気配はないのか。」

「それはないね。今のところは、軍人だけの仕事のように思えるんだ。もつとも、農民と何かれんらく連絡があるかもしれん、なんて噂もとんでいる。」

「それは、どんな人が言うんだい。」

「僕ぼくがきいたのは、うよく右翼団体に関係のある学生からだがね。」

「ふうん。もしそれが事実だとすると、いよいよ大変だね。」

「しかし、それは、僕は信じない。農村にそれほどの組織があるうとは思えないからね。」

「うむ、今のところはね。しかし、将来はわからんよ。事件の成り行き次第では……それで交通機関はどうなんだい。」

「ごく一部に遮断しやだんされているところもあるようだが、大体は市内電車も平常通り動いている。」

「新聞や、ラジオは？」

「あつ、そうそう。何でも朝日新聞が襲撃しゅうげきされたという話だ。

しかし、今朝はあたりまえに出ているんだから、変だよ。もつとも、事件については、まだ何も書いてないし、かりに襲撃された

としても、そのまえに刷ったものかもしれない。……ラジオはだ
いじょうぶらしい。今朝は予定のプログラム通りだ。そちらでも
きこえるんだろう。」

「今日はまだきいていないが……」

「そうか。しかし、これからじょうきよう状況は刻々変わるだろう。ぼく

は今から大沢君と二人で様子を見に行こうと思っている。何かわ
かったら、またすぐ電話で知らせるよ。もつとも、電話なんか通
じなくなるようなことになるかもしれないがね。」

そう言われて、次郎はぎくりとしたが、しいて自分をおちつけ
ながら、

「あぶないところに行くのはよせよ。こちらは、そう一刻を争っ

て知らせてもらう必要はないんだから。」

「必要がないことなんかあるもんか。さつきも大沢君と話したとだが、状況次第では、塾は早く閉鎖へいさしたほうがいいかもしれんよ。ぐずぐずしているうちに、とんでもないことにならんとも限らんからね。」

「塾が？ どうして？」

「どうしてって、友愛塾は自由主義精神とりでの砦とりでなんだろう。第一番に砲撃ほうげきされるよ。」

恭一の言葉の調子には、じょうだんめいたところがあつた。次郎は、しかし、それを全くのじょうだんだとして受け取る余裕よゆうがなかつた。かれの眼には、もう荒田あらたろう老や平木中佐ちゅうさの顔がちら

つき、二人と東京の異変とが無関係なものとは考えられなかったのである。

かれは、電話をきると、すぐ塾長室に飛んで行つて、きいたまを朝倉先生に報告した。朝倉先生も、さすがに愕然がくぜんとして、しばらくは口をきかなかつたが、

「とうとうそんなことにまでなつてしまったのか。おそろしいものだね。徒党とどうの争いというものは。」

と、にぎつていたペンをなげすてるように机の上において、腕うでをくみ、眼をつぶつた。

次郎は、先生が徒党の争いといったのを、政党の争いという意味にとつた。

「やはり政党の腐敗ふはいに憤激ふんげきしてのことでしょうか。」

「それもあるだろう。それはたしかに事をおこす名目めいもくにはなる。

しかし、今度のことは、おそらく陸軍内部の派閥争はばついに直接の原

因があるだろう。」

「陸軍の内部にそんな争いがあつていたんですか。」

「拳国一致きよこくいつち」という合い言葉の本家本元ほんけほんもとが軍隊であり、そし

てその合い言葉で、国民を刻一刻と、のつぴきならぬ羽目に追いたてているのがこのごろの軍人であるということ以外に、軍隊の裏面について何も知らなかったかれとしては、それは無理もない質問だったのである。

「去年の八月だったか、永田鉄山中将が、軍務局長室で相沢中佐

に暗殺された事件があつたね、覚えているだろう。」

「ええ、覚えていますとも。まだ裁判はすんでいないでしょう。」

「あれなんかも、陸軍の派閥争いの一つの犠牲ぎせいだよ。裁判がややこしくなるのも無理はない。」

朝倉先生は、それから、陸軍内部の近年の動きについて、あらかましの説明をしてきかせたが、それによると、全陸軍の主脳部が統制派と皇道派こうどうはの二派にわかれて、醜みにくい勢力争いをやっている、というのであつた。

「何より恐ろしいのは、両派の巨頭連きよとうれんが、自分たちの勢力を張るために、青年将校の意を迎むかえることに汲きゆう々きゆうとして、全軍に下剋上げこくじょうの風を作ってしまったことだ。これがほかの社会だと弊へ

害いがいがあると言つても程度が知れているが、軍隊の下剋上だけは全く恐ろしいよ。鉄砲てつぽうをぶつ放す兵隊を直接にぎ握つていのは下級将校だからね。しかもその下級将校が、単純な頭で、勇ましく鉄砲をぶつ欲しさえすれば国力はいくらでも増進するように考えて、盛さかんに政治・外交・経済を論ずる。それに將軍連が心ならずも調子を合わせ、正論を圧迫あつぱくしてとんでもない国論を作つてしまふ。こうなると、まるでめちやくちやだよ。今度の事件にしたつて、おそらく青年将校が主動者になつていいると思うが、それももとをただせは巨頭連の派閥争いが原因さ。こんなふうで、日本も結局行くところまで行くのかな。」

朝倉先生は、そう言つて、深いため息をつき、窓の外に眼をや

つたが、しばらくして、

「日本では、雪の日によく血なまぐさい事件が起こるものだね。

四十七士の討ち入り、さくらだもんがい桜田門外の変、……しかし、今度の事

件ほど暗い運命的な感じのする事件はないね。何だか、国民全体が浅はかな野心やしんのためにくずれて行くような気がするよ。」

朝倉先生は、これまで、どんな悲観的な問題について話しても、
きく人の気持ちまでを陰気いんきにさせるようなことはなかった。先生
の言葉の奥おくには、いつも強い意志が動いていたからである。しか
し、今日はそうでなかった。次郎は、きいていて、くずおれそう
な気持ちになり、雪の反射で異様に明るい室の空気の中に、しよ
んぼりと眼をふせていた。

すると、朝倉先生は、急に自分をとりもどしたように、椅子いすから立ちあがり、窓のほうにあるきながら、言った。

「しかし、できてしまったことは、できてしまったことだ。悔くやんでもしかたがない。……すべては、どうなるかでなくて、どうするかだ。友愛塾は友愛塾として、できるだけのことをすればいい。」

それから、次郎のほうを向いて、

「今日は幸い小川先生もおいでくださっているし、ご都合がつから、午後までお残り願おう。塾生には、休みの時間が来ても、そのことについては何も話さないでおいてくれたまえ。いいかげんな話をして、ただ気持ちどうようを動揺どうようさせるだけでもつまらんから

ね。話すときには、ゆつくり時間をかけて話すほうがいいんだ。それに、恭一君からの電話だけでは、どこいらまでが確実だかもわからんし。……そうだ、さっそく田沼先生におたずねしてみよう。先生には、もつとくわしいことがわかっているにちがいない。すぐお宅に電話をかけてお出先をきいてくれたまえ。」

次郎はいそいで事務室に行ったが、まもなくもどつて来て、「田沼先生は、今朝早くお出かけになって、お行先は、わからないそうです。しかし、お出かけの時に、昼ごろまでには友愛塾に行くから、必要があったら、そのほうに連絡れんらくするように、とお言い残しだったそうです。」

「この雪に、ご自分でこちらにお出でになるのか。ふむ、そうか

。」「
二人は、いよいよ事件の重大さを直感したらしく、だまって眼を見あつた。

「では、君は今日はなるだけ事務室か、君の室かにいて、電話に気をつけていてくれたまえ。」

次郎は、それで自室に引きとつたが、机の上には、相変わらず「歎異抄」がひらかれたままだつた。かれは、しかし、今はふしぎにそれに心をひかれなかつた。東京の異変でゆすぶられたかれの血は、「歎異抄」とは別の世界に流れ出ようとしているかのようであつた。自己沈潜ちんせんの深い洞穴ほらあなから、急にあれ狂う嵐くるあらしの中におどりだして、胸を張り大声をあげて叫さけぼうとしている自分自

身を、かれはかれの全身に感じていたのである。

かれの眼には、宮城をとりまいて所々に配備されている機関銃や、大砲や、歩哨や、また、総理官邸の付近に、雪を血に染めて横たわっている人間の死体や、それらの間を何か声高に叫びながら疾駆している若い乗馬将校の姿などが、つぎからつぎに浮かんで来た。

かれは落ちついてすわっていることさえできなかつた。せまい室内を歩きまわりながら、暗殺された重臣たちの顔ぶれを想像して見た。それは、しかし、かれには皆目見当がつかなかつた。また、かれは、全国の軍隊が真二つに割れ、敵味方になって弾丸をうちあう場合のことを想像してみた。内乱などということは、

外国のできごとだとしか考えていなかったかれにとつては、それは全く思慮しりよにあまることだった。まさか、という気持ちと、今にもそこいらから銃声がきこえて来そうに思える気持ちとの間に、かれはただ、うろろうするばかりであつた。

友愛塾の運命、ということが、しだいにかれの頭をなやましはじめた。それは内乱というとほうもない大きな事態の下では、まるで問題にならない些事さじのようにも考えられたし、また、その反対に、そういう事態になるような国情だからこそ、かえつて軽視できない、というふうにも考えられた。しかし、いずれにせよ閉鎖いせの運命はまぬがれないだろう。内乱状態が間もなく鎮定ちんていされるにせよ、ながくつづくにせよ、また、いずれの派閥はばつによつて勝

利が占められるにせよ、政治の全権が軍の手に握られる以上、こうした種類の青年指導機関が、無事にその存在を許されるはずがない。それどころか、危険はあるいは、田沼先生や、朝倉先生や、小川先生などの身边にまで及ぶかもしれないのだ。

かれは、そこまで考えると、田沼先生が、今日雪をおかしてさつそくここにやって来られる意味がわかるような気がして、いよいよ落ちつけなくなって来た。そんなことは考えすぎだ。ぱかな！ と何度か自分を叱つてみたが、気持ちはどうにもならなかった。

講義が中休みになったらしく、廊下を歩く塾生たちのにぎやかな笑い声がきこえた。次郎の耳には、それが変にうつろにひびい

た。そのうちに、二三名の塾生が事務室にはいつて来て、すみの机でとうしゃばん謄写版をすりだした。——塾生たちは、分担の仕事の種類によつては、そのための特別の時間を与あたえられていなかったの、それを間にあうように果たすためには、どんなわずかな休み時間をでも活用することを怠おこたるわけには行かなかつたのである。

謄写版をすりながら、かれらは話しだした。最初に口をきつたのは、たしか青山敬太郎だった。

「農村の科学化とか共同化とかいうことも、あんなふうに話してもらうと、なるほどと思うね。」

「ぼく、これまで同じような題目の話をほうぼうできいたが、今日ほどぴんとこたえたことはないよ。内容に大したちがいはない

がね。」

「やっぱり話す人の人柄ひとがらが大事なんだな。」

「そう言うのと、ここに来る先生は、外来の先生でも、人柄に一派通ずるところがあるんじゃないかな。」

「うむ、どの先生もしみじみとしたところがあつて、本気でぼくたちのことを考えていてくれるという気がするね。」

「ぼくは、はじめのうち、この塾の先生たちには、何だか活気がなくて物足りない気がしていたんだが、今から考えてみると、こちらが上うわつ調子だったんだね。」

「それは、おそらく、君だけじゃないだろう。入塾式の日には、たいいていの塾生が田沼先生や朝倉先生の話よりも、平木中佐の元

気な話に感激かんげきしたんだからね。」

「ははは。……しかし平木中佐だって、ふまじめではないだろう。あの人はあの人なりに、本気で日本の青年のことを考えているにちがいないよ。」

「それはそうかもしれない。しかし本気ぶりがちがうよ。自分の考えだけに夢むちゆう中になって、国民の地についた日常生活のことなんか、まるで忘れてしまっているような本気では困るね。」

「そうだ。そういうことが、ぼく、この塾にはいつてから、よくわかって来たような気がする。」

「そういうことのわかった青年が、一村に五六名もいると、心強いんだがね。」

「そうだ。ぼくも、このごろしみじみそういうことを考えているよ。それで、ぼくの村からは、このつきにもぜひだれか入塾させたいと思つて、昨日手紙を出してすすめておいたんだ。」

「すいぶん手まわしがいいね。ぼくもさつそく手紙を書くことにしよう。」

次郎は仕切り戸ごしにそんな話し声をきいていて、泣きたいよ
うな喜びを感じた。しかし、その喜びは、かれを一そう憂うつに
する原因でしかなかった。

（これほど塾生たちが期待してくれているこの塾の運命も、遠か
らず決定するのだ。何という矛盾むじゆんだろう。何という大きな損失
だろう。）

かれは、そう考えて、地だんだをふみたい気持ちだったのである。

まもなく、また講義がはじまり、事務室も廊下も、ひっそりとなった。次郎は、休みの時間に塾長室で、今日の事変のことを朝倉先生から聞かされたにちがいない小川先生が、どんな講義をされるか、きいてみたい気持ちで一ぱいだったが、電話のことが気がかりで、やはり自室に残っていた。

かれの眼は、べつに見る気もなく、机の上にひらいたままの「歎異抄」にそそがれた。そして、最初に眼にとまったのは、つぎの一節だった。

「念仏は、ぎょうじや行者のため、非行非善なり。わがはからひにて

行ずるにあらざれば、非行といふ。わがはからひにてつくる善にあらざれば、非善といふ。ひとへに他力たりにきにして、自力をはなれたるゆゑに、行者のためには、非行非善なり。」

かれは、これまで、こうした絶対自力否定の言葉に強く心をひかれていた。それは、しかし、その言葉を素直すなおに受けいれてのことではなく、むしろその反対に、素直に受けいれることのできな
い自分の心のいたらなさをもどかしく思うからのことであつた。
どうして自分はこうも自分にとらわれるのだろう。自分の力では
どうにもならないということがはつきりわかっている場合でも、
自分は身を投げ出して人の助けを求めめる気にはどうしてもなれな
い。何というあくどさだ。いや、何というけちくささだ。自分は

かつて白鳥会時代には、「無計画の計画」とか、「摂理せつり」とかいう言葉を自分の心のよりどころにして、明るく人生を眺める態度ながを養つて来たつもりであつたが、それは単なる観念の遊戯ゆうぎにすぎなかつたのか。——そういった反省の気持ちで、かれはこれまで、その一節と取つくんで来たのである。

ところが、今は全く別の方向にかれの気持ち動き出していた。もしこの一節に真理があるとすれば、友愛塾とはいつたい何だ。たとえひそやかなものではあつても、その時代への抵抗ていこうは決して「非行」ではないはずだ。民族生活の将来に描くえがその理想と、その実現のための実践じっせんは、決して「非善」とは言えないはずだ。「わがはからひ」を否定して、何の人生があり、何の喜び

があらう。生命とは、自主自律の力そのものを言うのではないのか。「念仏」だけでは、東京の事変はかたづかないのだ。――

かれの心には疑惑ぎわくの嵐あらしが吹きはじめた。これまで胸の底ふかくつちか培つちかい育てて来た「歎異抄」の魅力みりよくが、それで根こそぎになるというほどではなかったが、その枝葉の動揺はかなり激はげしかった。かれはせっかちに、ページを先にめくり、またあともどりした。しかし、どこにもかれの疑惑を解く鍵かぎは見つからなかった。それどころか、かれはただ親鸞しんらんにあざけられるような気がするばかりだったのである。

火鉢ひばちの火は小さくなっていて、さすがに寒さが身にしみた。次郎は、「歎異抄」をばたりと閉じ、それを本立てに立てると、事

務室に行つて、ストーヴのそばの椅子いすに腰こしをおろした。事務室には給仕の河瀬もいなかった。

はしらどけい

柱時計を見ると、もう十一時を二十分ほど過ぎていた。かれ

は、昼ごろには田沼先生が見えることを思い出し、走つて炊事すいじし室つに行き、中食の用意を臨時に一人分だけ加えておくように頼たの

むと、またすぐ事務室にもどつて来た。そして、いきなりストーヴの火をかきまわし、それに、石炭を何ばいもつぎたした。変にめいるような、それでいて何かしないではいられないような気持ちだったのである。

そこへ、朝倉夫人がはいつて来た。ふだんは、美しくひらいた眉根まゆねが、引きつるように、よつていた。

「次郎さん、東京は、まあ、大変ですってねえ。」

「ええ、おききでしたか。」

「たった今、塾長室できいて来ましたの。」

「それで、今日は田沼先生がおいでになるそうです。」

「それもうけたまわりましたの。——でも、恭一さん、よく気をきかして早くお知らせくださいましたわね。」

「大沢君と二人で、塾のことを心配しているらしいんです。」

朝倉夫人は何度もうなずいたきり、それには返事をしなかつたが、しばらくして、

「五・一五事件の時も私たちがいやな思いをしましたけれど、今度はそれどころじゃないらしいわね。でも、世間の人たちは、あの

ころよりか、かえって目を覚まして来ているんじゃないかしら。」
「そうかもしれない。しかし、それだけに、無理な圧迫あっぱくもい
つそうひどくなるでしょう。」

「そうね。悪い時代って、そんなものね。」

と朝倉夫人は、しばらく何か考えていたが、

「でも、おちつきましようよ。せめて、あたしたちだけでもおち
つかないと、これから育つ人たちに申しわけありませんわ。それ
にながい目で見ると、世の中は、おちついてあたりまえのことを
する人の希望どおりに、きつとなつていくものですわ。あたしそ
う信じるの。」

次郎は、何か心のなごむような気持ちで、じつと眼をふせてい

た。心の動揺を感じたあと、夫人と二人きりで話していると、かれはいつとはなしにそんな気持ちになるのだった。夫人の言葉の内容にそれだけの説得力があるわけでは必ずしもなかったが、その言葉のはしほしからにじみ出るものが、かれのいらだつ神経をやわらかになでてくれたのである。

ストーヴは底ごもるような音をたて、鉄の膚はだをほの赤くぼかしており、窓外の木々は雪をかぶってどっしりと重かった。

「ぼくには、落ちつくということ、まだよくわからないんです。」次郎は、かなりたつて、ぽつりとそんなことを言った。それはしかし、朝倉夫人に対する抗議こうぎではむろんなかった。また、かれの深い苦悶くもんの表白であるとも言えなかった。うら悲しいような、

甘^{あま}えたいような気持ちだが、自然にそんな言葉となつて、かれの唇^{くちびる}をもれたといったほうが適當だったのである。

一〇 異変（Ⅱ）

田沼^{たぬま}先生が、雪をけつて自動車^{自動車}をのりつけたのは、もう小川先生の講義もすみ、食事当番の塾^{じゆくせい}生^{せい}たちが広間に食^{しょくたく}卓^{たく}の準備をはじめていたころであつた。次郎が胸をどきつかせながら出^で迎^{むか}えると、先生は、まだ靴^{くつ}もぬがないうちに言った。

「ちようど、昼になつてしまつたが、私のぶん、食事の用意ができるかね。」

「はい、用意しておきました。」

「用意しておいた？ 私が来るの、わかっていたのかい。」

「ええ、お宅にお電話をしましたら、こちらにお出でになるよう
におっしゃったものですから。」

「ふうむ——」

と、先生が、けげんそうに次郎の顔を見ているところへ、朝倉
先生がやって来て、

「お待ちしていました。雪の中を大変だったでしょう。」

「いや——」

と、田沼先生は次郎にオーバーをぬがせてもらいながら、ちよ
つと声をひそめて、

「東京のさわぎ、もうこちらにもわかつているんですね。」

「ええ、あらまし。……大学にかよっている、本田君の兄から電話で知らしてくれたものですから。」

「なるほど。……ここだけは別天地べってんちだなんて考えるわけには、いよいよいかなくなって来ましたかね。はっはっはっ。」

朝倉先生も笑った。が、すぐ真顔になり、

「実は小川博士もお待ちかねです。今日はちようどご講義の日でお見えになっていたものですから。」

「ああ、そう。それは好都合でした。」

次郎は、二人がそういつて塾長室にはいるのを、自分もあとについてはいりたい気持ちで見おくついていた。すると、すぐ耳のう

しろで、いきなり、中食を報ずる板木ばんぎの音が鳴りひびいた。

食事は、まもなくはじまった。むろん、田沼、朝倉、小川の三先生も、塾長室で話をするいとまもなく、食卓に顔をならべたのだった。塾生たちは、田沼先生が塾に顔を出すのは珍めづらしいことではなかった。雪をおかしてやって来たのを、べつにあやしむふうもなく、ただ親しみをこめた眼めで迎えただけだった。三先生の食事の中の対話も、いつもとたいして変わりはなかった。すべては平へいじつ日どおりだった。

次郎の気持ちは、しかし、はじめからおわりまで、緊きんちよう張ちやうそのものだった。かれの眼はたえず田沼先生のほうに注がれ、その一挙一動をも見のがさなかった。先生は、肥満ひまんがた型で、血圧が高

かつたため、酒も煙草たばこもたしなまなかつたが、その代わりに、非常な健啖家けんたんかで、速度もなみはずれてはやく、それがしばしば卓の笑い話の種になるほどだった。今日も相変わらずだったが、先生は何杯なんばいめ目かのお代わりを朝倉夫人によそってもらいなから、とうとう自分から笑いだして言った。

「だしぬけに飛びこんで来て、こんなに食べても、だいじょうぶですかね。」

「ええ、ええ、ご安心なすつて。そのつもりで、こちらのお鉢はちにうんと入れておきましたから。ほほほ。」

「それはどうも。……しかし、今日はとくべつですよ。何しろ、暗いうちに茶ものまないでうちを飛び出して、やっと昼飯にあり

ついたというわけですからね。」

田沼先生は、そう言つて、もう一度大きく笑つた。しかし、朝倉夫人はもう笑わなかつた。笑いかけていた朝倉先生や小川先生の顔も、何かにつきあたつたように固くなつた。そうした顔を見くらべていた次郎の眼は、もう一度、田沼先生のほうに注がれたが、その時には、田沼先生も次郎のほうを見ていた。二人の眼はあつてすぐはなれた。しかし、次郎には、何で田沼先生が自分のほうを見たかがわかるような気がした。

食事がすむと、いつもなら、各部から緊急な報告や、ちよつとした生活上の注意などをやり、そのあと五分か七分雑談をやつて過ごすことになつていたが、塾生たちは、田沼先生が食卓に顔を

出すと、きまつてその雑談の時間を先生に提供することにしており、先生もそのつもりで、いつも何かちよつとした話の種を用意しているのだった。ところが、今日は、その時間になると、すぐ朝倉先生が言った。

「今日は、田沼先生は、あとですこし時間をかけて、ある大事なことを諸君にお話くださるはずだから、いつものおねだりはやめにして、これで解散する。午後は読書会の時間になっているが、その時間にお話をうけたまわることにはしたい。お話がすんだあと、読書会がやれるかどうかわからないが、その用意だけはしておいてもらいたい。」

塾生たちはいつにない緊張した顔をして食卓をはなれた。

そのあと、塾長室には、三先生のほかに、朝倉夫人と次郎とが集まった。夫人も次郎も、食卓をはなれて事務室に行きかけたところを、田沼先生に呼びこまれたのであった。

田沼先生は椅子いすに深く身をうずめ、両手を前にくみ、伏目ふしめがちになって話しだした。言葉の調子には、すこしも興奮したところになかった。むしろ重々しい、考えぶかい調子だった。事変の輪りんがなかつた。むしろ重々しい、考えぶかい調子だった。事変の輪りんがなかつた。郭かくは恭きょう一いちからの電話と変わりはなかつたが、もつとくわしく、具体的に、確実性があつた。

叛乱はんらんに参加したのは、近衛歩兵第三連隊・歩兵第一、第三連隊・市川野戦砲第七連隊などの将兵の一部で、三宅坂・桜さくら田門だもん・虎の門とらもん・赤坂見附あかさかみつけの線の内側を占拠せんきよし、陸軍省・陸

相官邸かんてい・参謀本部さんぼうなどとはもとより、警視庁もすでにその占せんり

領下ようかにあり、各所に立てられた旗じるしには、「尊王討姦そうんのうとうかん」

の四文字が書かれている。暗殺された重臣中、すでに確実となつ

たのは、齋藤実さいとうまこと・高橋是清たかはしこれきよ・渡辺錠太郎わたなべじょうたろう、といつた

人々で、そのほかに、牧野伸顕まきののぶあき・鈴木貫太郎すずきかんたろうの二重臣も襲しゅう

撃げきをうけたらしいが、その生死はまだ確実ではない。総理大臣

の岡田啓介おかだけいすけも消息不明だが、十中八九、官邸で殺害されている

だろう、というのであった。

なお、朝日新聞社襲撃も事実で、暗殺終了しゅうりょう後、午前九時ご

ろに、トラツク三台に分乗した叛軍の一部が、「国賊朝日を破は

壊する」と叫んで社内さかいに乱入し、印刷局の活字ケースなどをめち

やくちやにひつくりかえしたそうである。

叛軍の一部は今朝から赤坂の山王ホテルに宿営りようしている。料

亭てい 幸楽も午前十時ごろ若い将校から多量の酒と弁当の注文をうけたが、ここもあるいはかれらの宿営所として占領されるかもしれない。

田沼先生は、一通り以上のような状況を話しおわると、言った。

「何より心配だったのは、軍部の巨頭きよとうがこれに参加してはいないかということでしたが、それはさすがにないようです。少なくとも、今のところ、直接指揮しきしているとは思えません。その点からいって、さわぎがすぐにも全軍に波及はきゆうするようなことは、おそらくないだろうと思います。もつとも、派閥はばつを作るような巨頭

連のことですから、今後どう動くか、安心はできません。現に、巨頭連の中には、叛軍の説得に行つて、「ご苦労さん、よくやつたね」とか、「お前らの心はようくわかつとる」とか言つて、かえつてご機嫌きげんをとつたり、はなはだしいのは万歳ばんざいをとなえてやつたものもあつたそうですからね。」

「それはひどい。」

と、小川先生はひとりごとのように言つて、その鈍どんじゆう重な眼をぎろりと光らせたが、

「いったい、そういう人たちは、この事件を、どう考えているんでしょう。それにいくらかでも、正当性があるでも思つていないでしょうか。」

「そこなんです、心配なのは。われわれの考え方からすると、これほど明白な叛乱はないのですが、軍首脳部で、まだ一人も叛乱という言葉をつかった人はないようです。それどころか、五・一五の場合と同じように、行動を正当づけるような名称を案出するのに苦心しているらしいのです。」

「むろん、もう陛下へいかのお耳にもはいつているでしょうが、陛下はどうお考えでしょう。」

「そのことは、まだ、はつきりしたことは私にはわかりません。しかし、陛下はご聡明そうめいです。それに——」

と、田沼先生は、ちよつと言いよんだが、

「そつきんご側近には、ゆあさ湯浅内大臣のような方もおられます。内大臣は

あくまでも筋の通った方だと私は信じます。」

「内大臣には危険はなかったのですね。」

「ええ、ご無事でした。」

と、田沼先生は何かを回想するようにしばらく眼をつぶったが、
「実は、今朝ほんの五分間ほどお目にかかって来たのです。」

みんなは眼を見はった。田沼先生は、しかし、もうそれ以上そのことについて何も言おうとはしなかった。沈黙ちんもくがかなりなが

いことつづいた。次郎はかつて経験したことのない異様な興奮と、
厳げんしゆく肅しゆくな気持ちとを同時に味わいながら、じつと先生の横顔を

見つめていた。すると、朝倉先生が、沈黙をときほぐすように、
たずねた。

「叛乱をおこした若い将校たちは、すると、皇道派こうどうはですね。」

「ええ、まあそうだと見なければなりません。統制派と見られていた教育総監そうかんの渡辺大將が遭難そうなんされたのですから……。しかし、叛乱がいずれの側からおこされたかということは、今も問題ではありません。罪は軍全体にありますよ。」

「それは、むろん、そうです。もつとつきつめると、国民全体にあるとも言えますね。」

「ええ。おたがいとしては、そこまで考えてあと始末にかかると覚悟かくごがたいせつでしょう。ことにこの塾堂なんかではね。」

朝倉夫人は、眼をふせがちにして三人の話をきいていたが、

「叛乱に参加している人数は、すべてで、どのくらいでございま

しよう。」

「千四五百のところらしいのです。むろん正確ではありませんが。」

「すると、それだけの兵隊さんが、はじめから計画に加わっていたわけなのでございましょうか。」

「そんなことはないでしょう。下士官以下は将校の命令で動いているにすぎないと思いますね。」

「そんな兵隊さんたちこそ、ほんとうにお気の毒ですわね。」

「ええ、それなんです。だれの胸にもすぐぴんとこたえるのは：

…成り行きしだいでは、青年将校たちと同じように賊名ぞくめいを負わなければなりませんし、万一そんなことにでもなったら、実際、

何と言っていていいか……」

「そのうち、参加者の名前もわかるでしょうが、家族の方たちのお気持ちはどんなでしょう。」

「実は、市内の人で、自分の息子が参加していやしないかと、それを心配して、走りまわっている人が、もう何名もあるそうです。」

「そうでしょうともねえ。」

みんなは、めいめいにテーブルの一点に眼をおとして、まただまりこんだ。

「そこで——」

と、田沼先生は、ちよつと腕時計うでどけいを見て、

「午後の読書会は一時からでしょう。もうあと二十分しかないが、塾としてこの事件を、どういう態度で取り扱あつかって行きましよう。実は、私は、デマがおそろしかったので、私自身の見聞けんぶんで、正確なところをみんなに話しておきたいというだけの考えでやって来たんですが、塾長に何かとくべつのお考えがあれば、それもふくんでいて話すほうがいいと思います。」

次郎は息をのんで朝倉先生の答えを待った。朝倉先生は、しかし、あんがい無造作むぞうさにこたえた。

「塾としては、やはり理事長がさつきおっしゃったように、国民全体の責任というような考え方で行くよりほかありませんし、その点を反省させながら、できるだけ落ちついて、これまでどおり

の生活をつづけて行きたいと思ひますが。」

「結構ですな。」

と、田沼先生も無造作にうなずいたが、すぐ、

「しかし、だからといって、事件の批判をあいまいにしておきたくはないものですな。」

朝倉先生は、げげんそうな眼をして田沼先生を見つめた。すると、田沼先生は、ちよつと次郎のほうを見たあと、苦笑しながら、「批判などというと、大げさにきこえるかもしれませんが、何も軍の内情まであばきたてて、かれこれ言おうというのではありません。そういうことは、この塾ではいつさいふれたくないし、また、ふれる必要もないと思ひます。しかし、叛乱軍をはつきり叛

乱軍と言いきることだけは遠慮えんりよしてはなりません。それをあ
いまいにして、事件の全責任をただちに国民全体が負うというよ
うになりますと、まるで筋が通らなくなります。通すべき筋だけ
ははつきり通して、その上で、負うべき責任を全国民が負う、そ
ういったぐあいに指導していただきたいように思います。……」
「いや、よくわかりました。むろん同感です。国民の責任といっ
たところで、それは要するに、満州事変以来、おっしゃるような
筋を通すことに国民が卑怯ひきょうだった点にあるんですからね。」
田沼先生はうなずいて、じつと眼をふせた。そして、しばらく
考えていたが、

「しかし、筋を通すには、それだけの覚悟がいりますね。」

と、今度は朝倉夫人のほうに眼をやり、急に、じょうだんめかして、言った。

「奥さん、五・一五事件の折りは、大変いやな思いをなすつたんですが、もう一度ご苦労をおかけするかもしれないですよ。」

「ええ、ええ。それが必要でしたら。」

と、夫人も微笑しながら、

「あたくしどもの苦労なんて、苦労のうちにははいりませんわ。どうせ先生のおあとをついてまわるだけですもの。ほほほ。」

夫人は、しかし、そのあとすぐしんみりして、

「でも、この塾はどうなるんでございましょう。あとにどなたか

……」

「それは、あなた方と運命をともにするよりほかありませんね。」

田沼先生は、きつぱりこたえた。すると、小川先生がどもるような声で、

「理事長、すると、あなたはもう、塾の閉鎖^{へいさ}まで決心されているんですか。」

「ええ、最悪の場合は、こちらが決心しなくとも、自然そうなるでしょうし……」

「しかし、それは避^さけられないことではないでしょう。」

「むろん、避けられるだけは避けます。無用な摩擦^{まさつ}をおこして自分から最悪の事態に落ちこむようなことはしないつもりです。しかし大義名分をみだすようなことにまで、お調子をあわせるわけ

には行きますまい。」

「軍では、もう、そういうことについて、何かいいだしているんですか。」

「正面きつて何もいいだしているわけではありません。しかし、叛乱とか叛軍とかいう言葉は、今のところ絶対禁物きんもつのようです。それをはつきり口に出したら、それだけで、最悪の事態におちいるかもしれません。今朝の状況では、そうとしか思えませんでした。今度の場合は、しかし、何としてもそれに妥協だきようするわけには行かないと思います。友愛塾が、そのために犠牲ぎせいになつても、いたし方ないでしょう。身を焼いて灰からよみがえるという不死鳥の覚悟をしようじゃありませんか。」

小川先生は、大きな息をして眼をつぶった。そして眼をつぶったまま、ひとりごとのように言った。

「惜おしい、実に惜しい。こういう塾こそ今の時代の良心なんです
がね。」

「その良心を守ろうというんです。ははは。」

と、田沼先生は快活に笑った。

次郎は小川先生の気持ちにしみじみとした共感を覚えていた。そのせいか、田沼先生の笑い声に腹がたつような気持ちがあった。すると、朝倉先生が言った。

「どうだい、本田君、理事長のおっしやるような覚悟ができたかね。」

次郎は田沼先生のほうをぬすむように見ながら、

「ぼくは、この塾では、事件を無視することにしたらいと思つて
いるんです。」

「無視する、というと？」

「いつさい、ふれないんです。ふれないでおいで、ふだんのお
りの生活を、おちついてやって行くんです。」

「おちつくのはいい。しかしこれほどの事件を無視するわけには
行かんだらう。われわれが無視しようとしても、いずれどうい
う形でか新聞にも出るだらうし、塾生たちが問題にしないではお
かないよ。その時、君はどうする？ にげるかね。」

次郎は返事ができなくて、顔をあからめた。すると、今度は田

沼先生が微笑しながら、

「無視するとはうまく考えたな。いかにも本田君らしい。しかし、それは一種の小細工こざいくだ。そういう小細工はやらないほうがいい。やはり塾生を愛することだよ。塾生の良心をね。その愛さえあれば、塾堂はつぶれても、塾はどこかで生きる。塾長、そうでしょう。」

「ええ、そうですとも。」

朝倉先生が答えた時には、次郎はもう椅子いすをはなれて棒立ちになつていた。田沼先生の言った「小細工」という言葉が、鋭い刺すりどとげのようにかれの胸をつきさしていたのである。かれは何か言おうとしたが、言葉が出なかつた。

「そう 窮きゆう 屈くつ にならんほうがいい。」

と、田沼先生はにこにこ笑いながら、

「窮屈になるから、やることがつい小細工になるんだよ。君の真ま剣けんなのはいいが、人間は大事な時ほど大らかでないと、目的をはずしてしまうものだ。ちやうど火事の時にくだらんものを持ち出すようなものでね。はっはっはっ。」

次郎は、しかし、笑うどころではなかった。田沼先生のきわめて自然な、目的をはずさぬ物ごとの判断が、その深い人間愛から流れ出ているということに気がつけばつくほど、かれは、かれ自身の気持ちがいよいよ窮屈さと不自然さの中に追いこまれて行くような気がするのだった。

「わかりました。」

かれは、ばかに声に力を入れてそう言ったが、それはほんとうに納得なっとくしたというよりは、しいて言葉をはげまして、自分の不安をはらいのけているといった調子だった。

ちようどその時、午後の行事を報ずる板木ばんぎが鳴った。次郎はそれをきくと、逃げるにように室をとびだした。

読書会は、広間の畳たたみに、食卓を四角にならべてやることになっていた。塾生たちが「二宮翁夜話にのみやおうやわ」を持って席につき終わったころには、三先生ももう顔をならべていた。朝倉夫人は、読書会には、ふだんは手すきの時だけ顔をだすことにしていたが、今日はむろんはじめから、次郎とならんで席についていた。

「今日は、非常に残念なことを、諸君の耳に入れなければならぬ
いが——」

と、田沼先生は、いつものものにこやかな態度に似ず、いかにも苦しそうに話し出した。言葉はきわめて平へい凡ぼんで、刺し激げ的てきな形容詞など一語も使わなかった。ただ実際に見聞した事実を、それも要点だけ、ごく手短かに話したにすぎなかった。ただ最後に、いくぶん調子をつよめて言った。

「勅ちよくめい命めいなくして兵を動かす、重臣を殺害したということとは、明らかに叛乱だ。そういうことが日本にあらうとは、諸君は夢ゆめにも思わなかったにちがいない。しかし残念ながらこれは事実だ。私は、今日は取りあえずその事実だけを諸君の耳に入れておく。

いずれこれからは、いろんな報道がつたわるだろうと思うが、その中には、デマもあるだろうし、雑音もまじるだろう。しかし、私が話したことだけは、間違いまちがのないことだから、それを基礎きそにして、これからのすべての報道を冷静に判断してもらいたい。」

塾生たちのうけた衝しょうげき撃は、むろん大きかった。先生の言葉が、いつもに似ずしづりがちで、しかも簡単だったのが、かえってかれらに気味わるい感じを与あたえたらしかつた。次郎は、かれらが眼を光らせ、耳をそばだてて聞いている沈ちん黙もくの底に、さまざまうずじく渦うずを巻まいている感情あらしの嵐あらしを明らかに感こずることができた。

話がおわったあと、しばらくは部屋中が凍こったようにしんとしていた。かなりたつて、塾生の一人が、だしぬけに、

「先生！」

と、叫さけんだ。田川大作だった。かれは自分のまえにおいた「二宮翁夜話」をにぎりこぶしで押おしつぶすようにしながら言った。「ぼくたちは、実は、こういうことになりはしないかと、とうから心配していたんです。」

田沼先生は返事をしないで、じつと、田川の顔を見つめたきりだった。すると田川は、

「ぼくは二年近く満州にいたんですが、あちらから見ていると、日本の政治はだらしがなくて、なっていないんです。」

「そういう見方もあるようだね。」

田沼先生が、あっさりそうこたえて、眼を朝倉先生のほうにそ

らしかけると、田川は追っかけるように、

「先生は、どうお考えですか。」

「私も、日本の政治がこのままでいいとは思っていない。しかし、だからといって、そのために、今度のような事件が起こるのもやむを得ないなどは、なおさら思わない。日本には、憲法というものがあるからね。」

「ぼくは、政党がこんなに墮落だらくしては、議会政治なんかだめだと思えます。」

「なるほど。」

と、田沼先生はまじめにうけて、

「どうです、朝倉先生、今の意見は日本が憲法政治を否定するか

どうかという大問題をふくんでいるようですが、あとでじっくり時間をかけて話しあってみられては？」

「ええ、そういたしましょう。」

と、朝倉先生もまじめにこたえ、次郎のほうを向いて、

「今夜の研究会の問題は何だったかね。」

「青年団と政治ということになっています。」

「じゃあ、ちようどいい。今夜は、今度の事件を中心に、いま、

田川君が言ったような問題をまず論じあつて、それから、青年団と政治の問題にはいることにしよう。……どうだい、研究部のほうは、それでいいね。」

「結構です。」

答えたのは青山敬太郎だった。今週は第三室が研究部を受け持っていたのである。

みんなの興奮した感情は、しかし、事件についての論議を夜までのばす気持ちにはなれなかったらしく、あちらこちらで不服らしい私語がはじまった。すると、飯島好造が心得顔にいった。

「読書会を夜にして、このまま話をつづけたらどうでしょう。夜になると、田沼先生も小川先生も、いらつしやらないでしょう。こんな話は、やはり両先生にもきいていただくほうがいいと思うんです。」

「私は、そうゆつくりはしておれない。」

と、田沼先生は腕時計を見ながら、

「それに読書会は読書会で、あたりまえにやるほうがいい。何もあわてることなんかないんだからね。やはり、朝倉先生がいつもいわれるように、大事なものは平常心だよ。それをなくしちやあ、何を話しあってみても、いい結論が生まれるわけがない。」

そのとき、事務室から、けたたましい電話のベルの音がきこえて来た。次郎は、はじめられたように座を立つて行つたが、すぐもどつて来て、かなり興奮した調子で、田沼先生に言った。

「荒田あらたさんからです。急に先生にお目にかかりたいんですつて、ご自分でこちらに来てもいいといわれますが、どうぞ返事しまし
よう。」

「そうか。」

と、田沼先生はちよつと首をかしげたが、

「私、電話に出てみよう。」

田沼先生が広間を出て行くと、みんなは申しあわせたように黙りこんで耳をすました。先生の電話の声はつきりきこえるわけではむろんなかつたが、そうしないではいられない気持ちだつたのである。

間もなく田沼先生は広間の入り口までもどつて来て、

「じゃあ、私、いそぎますから、これで失礼します。」

朝倉先生が立とうとすると、

「私にかまわず読書会を始めてください。予定を狂くるわしてすみませんでした。」

それから、塾生たちみんなに軽く会釈えしやくしたあと、急いで。玄げん関んかんのほうに去った。

見おくりには、朝倉夫人と小川先生とが立って行き、あとは読書会のいつもの顔ぶれだけになった。

読書会では、テキストのページを追って輪読りんどくする場合もあつたが、「二宮翁夜話」の取り扱あつかいはそうではなかった。あらかじめ、めいめいのひまな時間にその幾節いくせつかを読んでおき、その中から、心にふれたとか、疑義があるとかいうような節をだれからでも発表して、それについて相互そうごに意見を述べあうといったやり方であった。このやり方は、実は次郎の提案によるもので、それが「二宮翁夜話」の場合、特に適切であつたせいも、毎回非常な

成功をおさめ、塾生たちのそれを読む態度もそのために次第しだいに真剣味をまして来ていたのであつた。

ところが、今日はかなり様子がちがっていた。いつもだと、朝倉先生が、「では、だれからでも……」と口をきると、先を争うようにして幾いくにん人かの塾生が手をあげるのだつたが、今日は、それどころか、かんじんの「夜話」をひらきもしないで、ひそひそと私語をつづけているものが多かつた。それに、第一、次郎自身の様子がおかしかつた。かれは私語こそしなかつたが、その眼はろうか廊下の硝子戸ガラスドをとおして、食い入るように玄関のほうを見つめていた。玄関では、田沼先生が小川先生と朝倉夫人とを相手に、まだ立ち話をつづけていたのである。

朝倉先生は、しかし、みんなのそんな様子を見ても、べつに注意をうながすのでもなく、その澄すんだ眼に微笑をうかべて、しずかに待っていた。

すると、大河無門がだしぬけに言った。

「巻の一の第二十八節をぼくに読ませてもらいます。」

その声は、例の落ち葉をふむような低い声だったが、みんなの私語をぴたりととめた。だれよりもぎくりとしたのは次郎だった。次郎にとつては、それが大河の声であるということだけで、もう十分な刺激だった。しかも、その大河は、これまで読書会ではほとんど沈黙を守りつつづけて来ており、真まつ先さきに口をきつたことなど、全くなかった人なのである。

みんなが、あわててページをひらくと、大河は、ぼそぼそと読み出した。

「翁いわ曰く、何事にも変通といふ事あり。知らずんばあるべからず。すなわ即ちけんどう権道なり。夫れそ難かたきを先にするは聖人の教へなれども、これは先づ仕事を先にしてしか而して後に賃金を取れと云ふが如ごとき教へなり。ここに農家病人等ありて、耕くさぎしくさぎ手くさぎおくれなどの時、草多きところを先にするは世上の常なれど、右様の時に限りて、草少なく至つて手易き畑より手入れして、至つて草多きところは最後にすべし。これ最も大切の事なり。至つて草多く手重のところを先にする時は、大いに手間取れ、その間に草少なき畑も、みな一面草になりて、いづれも手おくれになる

ものなれば、草多く手重き畑は、五畝せや八畝は荒あすともままよと覚悟して、しばらく捨ておき、草少なくて手軽なるところより片付くべし。しかせらずして手重きところにかかり、時日を費す時は、僅わずかの畝歩せぶのために、総体の田畑順々手入れおくれて、大なる損となるなり。国家を興復するもまたこの理なり。知らずんばあるべからず。また山林を開拓かいたくするに、大なる木の根はそのままさしおきて、まわりを切り開くべし。而して二三年を経へれば、木の根おのづから朽くちて、力を入れずして取るなかり。これを開拓の時、一時に掘ほり取らんとする時は勞して功少なし。百事その如し。村里を興復せんとすれば必ず反抗はんこうする者あり。これを処するまたこの理なり。決して拘かわわるべからず、

障^{さわ}るべからず。度外に置いてわが勤^{はげ}めを励^{はげ}むべし。」

ぼそぼそと読み出した大河無門の声は、おわりに近づくにつれて、次第に高くなり、澄んで来た。そして最後の一句を、思い切り張った調子で読みおわると、また、ぼそぼそとした声で言った。「さつき田沼先生に事件のお話をきいたあとで、ページをめくつていると、偶^{ぐうぜん}然この一節が眼にとまりました。何だか関係があるような気がしたので読んでみたんです。それだけのことで、べつに感想はありません。」

塾生たちは、同じページにあらためて眼を走らせはじめた。朝倉先生は眼をつぶって何度もうなずいていた。その中で、次郎だけが、こわいものでもものぞくように、遠くから大河の横顔を見て

いた。

その時、田沼先生の自動車は玄関をはなれる音がきこえた。つづいて小川先生と朝倉夫人のスリッパの音がきこえたが、それは廊下をつたって塾長室のほうに消えた。次郎はそれを意識しながらも、眼を大河からそらすことができなかつた。大河の表情には、ふだんとちつとも変わつたところがなかつたが、それがかえつて次郎の心を強くとらえていたのである。

そのあと、読書会はいつもとあまり変わりなく進められたが、大河のなげかけた問題は、たいして論議の種にならないですんでしまった。大多数の塾生たちの頭では、大河の読みあげた一節と東京の異変とが、すぐには、ぴんと結びついて来なかつたらしい

のである。朝倉先生も、それを夜の研究会にゆずるつもりか、強しいては深入りしようとしなかった。

読書会のあとは軽い室内体操、つづいて音楽。それがすんだのが四時半で、それから五時半の夕食までは自由時間だった。塾生たちがその時間を、異変の話についやしたのはいうまでもない。どの室からも興奮した声がひっきりなしに流れた。

一方、塾長室では、小川先生と朝倉夫人に朝倉先生と次郎とが加わって、ひそひそと話しあいをはじめた。話は、しかし事変そのもののことよりも、事変が塾およに及ぼす影えいきよう響きょうについてのことが多かった。

小川先生は言った。

「さきほど玄関口で理事長からちよつとおききしたところでは、荒田さんが変なことを思いついているらしいですよ。」

「変なこと？ 何でしょう。」

と、朝倉先生が眼を見はると、

「全国の私設の青年指導機関の連合組織を作つてはどうか、というんだそうです。」

「それで思想を統制しようとしてもいうんですか。」

「むろん、そうでしょう。表面は連絡提携とか、共励切瑳

とかうたうでしょうが。」

「そんなこと、急に思いついたんでしょうか。これまで私はまだ

一度も耳にしたことがありませんが。」

「さあ、それはわかりません。理事長もさっきの電話ではじめてきかれましたらしいんです。何でも、荒田さんは、今度のような事件がおこるのも、国民の頭のきりかえができていないからだ、それには青年の指導者に大きな責任がある、とかいって、大変、息まいていられそうです。」

「なるほど。それで、そういうことをまずここの理事長と話し合おうというのですね。」

「荒田さんの電話では、ここの理事長のほかに、小関君が相談にのるらしいのです。」

小関というのは、古い文部官かんりよう僚で、こちこちの国家主義者

としてその名が通っており、在官中から「興国青年塾」という私塾を腹ふくしん心の教育家に経営させ、退官後は、自らその指導の中心になっている人であった。友愛塾に対しては、その創設当時から好感をもっていない一人だった。人物は、正直そうに見えて策さくがあり、それに神経質なところもあつて、氣にくわないことがあると、いつまでも陰いんき氣に押し込まれているといったふうであつた。したがつて、友愛塾の関係者は、これまでなるべくその人との接せ触つしよくをさけるようにして来ていたのである。

「小関さんが？」

と、朝倉先生はかなりおどろいたらしく、

「理事長も、荒田さんと小関さんの二人を相手では、お骨が折れ

るでしょう。これは、ひよつとすると、全国的連合組織に名をか
りて、友愛塾を窒息ちつそくさせる算段かもしれませんね。」

「私もそれを心配しているんです。じつは、もうずいぶん前のこ
とですが、ある会合で小関君と偶然ぐうぜんとな隣りあわせにすわったこと
があつたんです。その時、小関君は私に青年塾の話をしだして、

現在東京付近にある青年塾で、最も特色があり、各方面の注目を
ひいているのは、興国塾と友愛塾の二つだと思ふが、お互いたがに塾
そのものの内容をいつそう充じゆうじつ実じつさせるためにも、また、双そうほ
方うの塾生が地方に帰ってから気持ちよく提携ができるようにす

るためにも、今後は二つの塾がもつと連絡を密にする必要がある、
といったような意味のことを言っていました。私は、それを正面

から受け取って、小関さんにしては珍めずらしいことを言うと思つて感心してきいていましたが、今から考えると、もうそのころから、何か変なことを考えていたんじゃないかという気がしますね。」

「連絡を密にするということでは、実は私にも小関さんから一度お話がありました。ところが、その具体的な方法というのが、おりおり日を定めて、双方の塾生を交こうかん換して指導したり、あるいはいっしょにして討論会みたようなことをやらせたりしようというのですから、こちらとしては、どうもお受けするわけには行かなかつたのです。」

「ふうむ。そんなことで友愛塾を押しつぶそうなんて、小関君もなかなかの自信家だな。すると、今度もその手で来るかもしれま

せんね。」

「そういうことも考えられますが、まさか理事長がそれをしょう承しょう諾だくなさるようなことはありませんまい。」

「ええ、それはだいじょうぶ。しかし今度は理事長もお骨が折れますね。何しろあの荒田老人が正面きつて口をききだしたんですから。」

それまでだまって二人の話をきいていた朝倉夫人が、なみだごえ涙なみだ声こゑになつて言った。

「ほんとうに、田沼先生のお気持ちはどんなでございましょう。先生は、どういう方に対しても、けんか別れなんか決してなさらない方ですし、そして守るところはちゃんとお守りになる方だけ

に、なみたいでいのご苦心ではなからうと思えますわ。」

次郎は、むろん、田沼先生の強い面もあたたかい面も、もう知りすぎるほど知っていた。しかし、先生が大きな難局に当面して、その二つの面を、実際にどう調和して行くかを、まのあたりに見たことがなかった。かれは、眼をふせて、三人の対話の様子を想像した。荒田老の怪物かいぶつのような顔とならんで、まだ一度も見たことのない小関という人の顔がうかんで来たが、それは血色のわらい、頬ほおのこけた胃病患者かんじやのような顔で、眼だけがいやに光っていた。その二人と向きあっている田沼先生の顔は、にこにこ笑っているようでもあり、ゆたかな頬を紅潮さして、きつと口を結んでいるようでもあった。

「でも、田沼先生にはちゃんとしたお考えがおありでございませうし、あたしなんか、こんなことご心配申しあげるの、かえって失礼でございますわね。ほほほ。」

と、朝倉夫人はさびしく笑ったあと、次郎のほうを向いて、「あたしたち、こういう時に、すっかり世の中のことを勉強さしていただきましようね。いい機会ですわ。」

「ええ。」

と、次郎はうなずいたが、いかにも心細そうな、元氣のないうなずき方だった。

それから間もなく、朝倉夫人は炊事すいじのほうの用で塾長室を出て行き、あとは三人で夕食になるまで話しこんだ。その話の間に、

次郎は、友愛塾に対する軍部の圧迫あつぱくが、荒田老や小関氏を通じてばかりでなく、かなり以前から文部省を通じても加えられており、その間に処しての田沼理事長の苦勞が一通りでなかったことを知った。

夜の研究会には、小川先生も自ら進んで加わった。

討議は、なまなましい異変を中心題目にして、最初から興奮の渦うずをまいた。塾生の大多数は、どうなり友愛塾生活の意義だけは理解しており、不十分ながらもその実践じっせんにも努力して来たのであるが、それがかれらの生活感情に焼きついて動かないものになるまでには、まだ多くの時日を必要とした。かれらの血を染めているのは、何といつても過去の社会環境かんきようであり、軍国主義的

指導者によつて植えつけられた思想であつた。ことに最近は独逸ドイツのナチズムや伊太利イタリのファツシズムの大波に上下をあげてもまれている時代であり、その影えい響きようにくらべると、まだ一か月にも足りない友愛塾生活の影響など物の数ではなかつた。ちよつとしたきつかけさえあれば、それはあとかたもなく消え去るような、根の浅いものでしかなかつたのである。したがつて、かりに田川大作のような狂熱きやうねつ的青年がいて、血けつ涙なみをふるつて叛軍はんぐんに同情するようなことがなかつたとしても、塾生たちが冷静でありうる道理がなかつた。事実、かれらの半数は、田川の側に立つて激はげしい意見を述べ、他の半数も叛軍の行動には、かなり批判的でありながら、あからさまにそれを叛軍と認めるには忍しのびない、と

いった意見であつた。こうして、意見は塾生相互の間で戦わされるよりも、むしろ、朝倉・小川の両先生と塾生たちの間に戦わされる場合が多かつたのである。

二人の先生の言葉の調子は、その風貌ふうぼうの異なるように異つていた。朝倉先生の澄んだ張りのある声は、水のようにさわやかに流れ、小川先生のさびた低い声は、ごつごつと石がころがるように断続した。しかし、両先生が、あくまでも真剣しんけんにかれらと取りくみ、かれらのどんな言葉に対しても熱心にうけ答えをしたという点では、変わりはなかつた。こうした場合、塾生に十分ものを言わせなかつたり、言うことを聞き流しにしたり、冷笑をもつて迎むかえたりすることが、どんな結果をもたらすかを、両先生とも

よく心得ていたのである。しかし、さればといつて、両先生は、その真剣さと熱心さのために、感情的興奮に駆^かられてはげしい言葉づかいをするようなことは決してなかつた。真剣であり熱心であるということと、冷静であり理性的であるということを一^{いっ}致^ちさせることの困難さを、両先生は、その教育的信念と年^{ねん}齡^{れい}とによつて、すでに十分克^{こく}服^{ふく}していたのである。

だが、両先生のそうした真剣さと聰^{そう}明^{めい}さにもかかわらず、塾生たちの興奮は、なかなか治まらなかつた。どうなり治まりかけたかと思うと、だれかのちよつとした刺激的な発言によつて、またすぐ火がつくといつたぐあいであつた。青年の集団では、一^い般^{ぱん}に理知よりも激^{げき}情^{じょう}が勝利をしめがちなものだが、とりわ

け説得者が大人であり、青年自身の中からその強力な支持者が一人もあらわれない場合、理知の勝利はほとんど絶望的だとさえ言えるのである。だから、もし塾生の中に大河無門や青山敬太郎のような青年たちがいかなかったとしたら、両先生も、わずか二時間ぐらいの研究会では、政治に対する青年団のあり方について正しい結論を引き出しうるまでに、かれらの気分を落ちつけることができなかつたかもしれないのである。

この研究会における大河無門のはたらきは、実際すばらしかつた。かれは、ひる間の読書会のおりに読みあげた「夜話」の一節をもう一度くりかえし、政治革新のために暴力を用いることの罪悪を痛論するとともに、いつさいの建設は個々人が脚^{きやつか}下^{しょう}を照

顧しつつ、一隅を照らす努力を払うことによつてのみ可能であることを力説し、最後にそれを青年団と政治の問題に結びつけた。

「青年団の政治革新への協力の第一歩は、青年団自体の、共同生活をみごとに組織だてることであり、つぎは郷土社会の実体を研究して、その将来の理想化を準備することである。もしこの二つのことに十分の成功を収めるならば、府県政や国政の腐敗墮落はおのずからにして救われるであらう。」

要するに、これがかれの結論であつた。かれはこの結論を引き出すために、巧みに「夜話」の中の言葉を利用した。そして、その間にかれが示した気魄と機知と、明徹な論理と、そして自然

のユーモアとは、異変に眩げんわく惑わくされていた塾生たちを常態に引きもどすのに大きな役割を果たしたのである。

青山敬太郎は大河ほど雄ゆうべん弁べんな口はきかなかつた。かれはむしろ沈ちんもく黙もくがちであり、ごくまれに断片的だんぺんてきな意見を発表するにすぎなかつた。しかし、かれの明めいびん敏びんさと誠実さから出る言葉は、

田川大作のような激情家や、飯島好造のような機会主義者の言葉とはいい対照をなしており、それが他の塾生たちの心の動きに及ぼした効果は、決して小さいものではなかつた。

こうして、この晩の研究会は、いつもにない波瀾はらんを見せたといえ、一二のすぐれた塾生の協力によつて、ともかくも友愛塾らしい結論を生み出すことに成功して、最後の幕をとじた。さすが

の田川大作も、大河無門の気魄がぐいぐいと全体の空気を支配して行く力には勝てず、とうとう「そうかなあ」という嘆息たんそくに似た言葉を最後にもらして、旗をまいたのである。

ただふしぎだったのは、次郎の態度だった。かれは、はじめから終わりまで一言も口をきかなかつたが、そうしたことは、これまでに全く例のないことだった。研究会の場合、とりわけその研究題目が青年団に關したものである場合、かれはもう朝倉先生とともに指導的立場に立つてものをいう資格があつたし、また、これまで、自分でも十分な自信をもって、論議を戦わして来ていたのである。そのかれが今度のような大事な場合にかぎって沈黙を守つたということには、何か大きな理由がなければならなかつ

た。

いつたい人間というものは、自分とあまり年齢ねんれいの差のない人たちの間に、自分の及びもつかないほどすぐれた人物を発見すると、とかく自信を失いがちなものであり、そして、その危険は、これまで自分の持っていた自信の大きさに比例して大きくなるものだが、万一にも、その自信が何か他の事情によつて多少でも傷つけられている場合であると、それはほとんど絶対的だとさえ言えるのである。次郎は、少年時代からの苦闘くとうによつて、自分の人間としての価値にすでにかなりの自信をもっていた。ことに郷里の中学を退き、道江みちえへの愛情を断ちたききつて、友愛塾の生活に専念するようになってからは、心ひそかに自分を朝倉先生の後継者こうけいしや

にさえなぞらえていたのである。だが、かれのそうした自信も、一方では荒田老という怪奇かいきな人物の出現によつて、他の一方では道江の上京の通知によつて、ゆずぶられはじめていた。そしてそこに現われたのが、大河無門という、すばらしい人物だったのである。

かれは大河との初対面から、すでにある程度のひけ目を感じていたが、それは塾生活の進展とともに、いよいよ深まるばかりであつた。それに拍車はくしゃをかけたのが、道江の来訪と、それにつづく恭一との手紙のやりとりの間に感じた心の動揺どうようであつた。そして最後に、東京の異変がおとずれたが、この異変をめぐつての、かれ自身の態度と大河の態度との、あまりにも大きなちがいに気

がついたとき、かれはこれまでの自信をほとんど完全に打ちくだかれてしまったのである。

これが、おそらく、その晩の研究会で、かれが沈黙に終始した大きな理由であつたにちがいないのである。

一一 混迷こんめい

翌日から塾じゆくせい生たちは、毎朝、ラジオと新聞の大きな活字によつて、あらためて大きな興奮にまきこまれた。ラジオは事務室に備えつけてあり、ふだんはゆつくり聞く時間がないので、めつたにスウィッチを入れたこともなかつたが、事変以来は、きまつ

た行事の時間でないかぎり、ほとんどかけっぱなしの有様だった。

何といつても、最も刺激的しげきてきだったのは、重臣暗殺の報道だつ

た。とりわけ斎藤実さいとうまこと、高橋是清たかはしこれきよといったような、ながく

国民に敬愛されていた人たちの遭難そうなんの詳報しょうほうは、田川大作の

ような右翼的うよくてき傾向けいこうの強い塾生たちにも、さすがに悲痛な気持

ちをもつて迎えむかえられたらしかつた。ほとんど確実に死んだと見ら

れていた岡田首相の生存の報が、この塾堂につたわつたのは、も

ういくぶん刺激に慣れて来た三十日の朝だったが、それがあまり

にも意想外であつたために、一種のユーモアをまじえた好奇こうきしん心

をもつて迎えられた。

新聞にせよ、ラジオにせよ、その報道の中に、たえす塾生たち

を困惑こんわくさせた一事があつた、それは「蹶起けつき部隊」とか、「行動部隊」とか、あるいは「占拠せんきよ部隊」とかいう言葉が使用され、三日目になつて、やつと「騷擾そうじょう」という言葉が使用されたが、それもはつきり「叛乱はんらん」を意味するものとは思えないことであつた。このことは、塾生たちの間に、しばしば先夜の研究会の論議をむしかえさせる種になり、また朝倉先生に対する正面切つての質問ともなつた。そうした場合の朝倉先生の答えは簡単だつたが、内容はいつも複雑だつた。たとえば、

「何も知らない兵隊たちには、汚名おめいを負わせないですめばそれにこしたことはないだろう。」とか、

「報道者の苦心はなみたいていではないだろう。ちよつとした文

章や声の調子にもそれがあらわれているのがわかるね。」

とかいうのであった。

報道は一報ごとに不安と疑惑ぎわくを増大せしめるようなものばかりであった。戦時警備令が下り、香椎中將かしいの下に第一師団と近衛師団このえとその任に当たることになったのは当然だとしても、叛乱軍の諸部隊が、そのまま警備部隊に編入され、それぞれの占拠地において警備に任ずることになり、戒嚴令かいげんれいが布かれてもやはり同様であった。しかも叛軍の一将校はその占拠地において民衆に、「尊皇義軍そんのうぎぐん」の精神を説くアジ演説をさえやつた。また永田町首相官邸かんでいの付近には、青年団体や日蓮宗にちれんしゅうの信者などが押しかけて、ラツパを吹き、太鼓たいこを鳴らし、叛軍のために万歳ばんざいを唱

えたが、どこからも制止されなかつた。軍首脳部や長老の動きは頻ひんぱん繁で、その代表者は叛軍の説得おもむに赴いたが、その結果はきわめてあいまいであり、しかもその夕方には、叛軍の疲労ひろうをねぎらう意味で首相官邸をはじめ、鉄道、文部、大蔵おおくら、農林の諸大臣の官邸や、山王ホテル、料亭りょうてい幸楽等が彼等かれらの宿舎として提供された。こうした矛盾むじゆんにみちた報道が、つぎつぎに伝わる一方、二十八日の夕刻ごろからは、九段戒嚴司令部の警戒けいかいが次第しだいに嚴重を加え、叛軍包圍の態勢が刻々に整つて行くかのような印象を与あたえるラジオ放送もちらちらきこえだした。

塾生たちが最も不安の念にかられたのは、二十八日夜から二十九日にかけてであつた。皇軍相討こうぐんあいうつ危険が、こうした報道を通

じて、避けがたいものに感じられて来たのである。ことに二十九日朝のラジオはアナウンサーの切々たる情感をこめた声をとおして、戒厳司令官の兵に対する原隊復帰勸告の言葉をつたえ、いよいよ事態の切迫を思わせた。司令官は、その中で、すでに奉勅命令が下ったことを告げ、それに従わないものは「逆賊」であるということを明言し、「今からでも決しておそくはないから、直ちに抵抗をやめて軍旗の下に復帰するようにせよ。そうしたら、今までの罪は許されるのである。」と諭し、また、「お前たちの父兄は勿論のこと、国民全体もそれを心から祈っている。」と訴えていた。

この放送は、これまでの矛盾にみちたいろいろの報道にはつき

りした終止符しゅうしふをうち、一部の塾生の頭にまだいくらか残っていた義軍の観念をいっそう一掃するに役だった。しかしそれだけに、それはまた流血の惨事さんじを間近に予想させる原因でもあった。「逆賊」と決定したものをそういつまでも放任するわけには行かない。もしかれらが直ちに原隊復帰を肯んじないとすると。……そう思うと焦躁感しょうそうかんはいやが上につのり、それがめいるような悲哀感ひあいかんにさえなつていくのであった。

しかし、そうした不安の中にあつた塾生たちも、二十九日夕方から三月一日にかけての諸報道によつて、どうなりいちおうの落ちつきを見せた。叛乱兵は、一二の下士官をのぞき、二十九日の午後それぞれ原隊に復帰し、首謀者しゅぼうしや将校のうち数名は自決、そ

の他は檢束けんそくされて、ともかくも事件はいちおう終わったのである。

事変中、塾堂の諸行事の運営が、時間的にも内容的にも、目だつほどの狂くるいを見せたことは、幸いにして一度もなかったが、気分の波が常にそれに作用していたことは、さすがに見のがせないものがあつた。しかし、その波も事変がすぎてみると、たいしてながくあとをひくというほどではなかつた。月があらたまるとともに、むしろ台風一過の感さえあつた。事変後の国内諸状態の深刻さは、まだ多くの塾生たちの関心のそとにあつたのである。

田川大作は意氣銷沈しょうちんの姿であり、何事についてもほとんど発言しなくなつていた。飯島好造は相変わらず多弁で、とかく話

題を政治に向けがちだったが、その興味の中心は後継内閣の顔ぶれといったことにあるらしかった。またしばしば叛乱将校の個人に関する噂話などを、何かにつけやりだしたり、口ぎたなくかれらの罪状に追い討ちをかけたりして、心ある塾生たちの反感を買った。大河無門は、二十六日の読書会と研究会で発言したきり、事変中も事変後も沈黙を守りつづけたが、それは田川の場合とはちがって、むしろ本来のかれの面目にかえった姿だった。塾生たちは、しかし、研究会でのかれの雄弁に圧倒されて以来、議論がめんどうになって来ると、とかくかれの意見を求めたがった。かれも求められると何か言うには言ったが、いつも結論だけをぼそつと言って、あとはとぼけているといった風で

あつた。青山敬太郎も本来あまり口をきかないほうだったが、事変以来は、大河とは反対に、進んで発言する場合がかえつて多くなつていた。もつとも、その発言は、友愛塾生活の根本の精神にふれるような論議の場合にかぎられているようだった。また、かれは、しばしば朝倉先生や次郎に対して、こんな感想をもらした。「事変が起こつてみて、ここの生活の意味が、いつそうはつきりわかりました。しかし、一方では、いよいよむずかしくなつたという気がします。」

事変後、塾生たちに何か目だつようなことがあつたとすれば、まずそんなようなことで一いっぽん般の塾生たちは、たよりないほど自然に、もとの気分^{いっぽん}に立ち直りつつあつたのである。

そうした中で、だれの目にもついたのは次郎の変わり方であった。かれが無口になったことは、田川や大河などの比ではなかった。二十六日の研究会以来、よんどころない用件以外は絶対に沈黙を守っているといったほうが適當なぐらいであった。しかもそれは集会の場合にかぎられたことではなかった。廊下ろうかで塾生たちにあつても。目を伏せて通りすぎることが多かつたし、塾長室や空林庵くうりんあんにも自分から顔を出すことはほとんどなく、行事がない時には、たいてい自分の室にとじこもっているといったふうであつた。

このことが、朝倉先生夫妻の話題に上のらないわけは、むろんなかつた。二人は、しかし、いつもそれを塾の不安な将来と結びつ

けて考えていた。

「そりやあ、むりもありませんわ。次郎さんにとっては、今ではこの塾だけが、ただ一つの世界ですものね。いつでしたか、ここを自分の死に場所にしたいなんて、本気でそう言っていたら、そんなこともありますわ。」

「そんなことを言っていたのか、わかいくせに。元来それほど単純な男でもないが、打ちこむと馬車馬うまのようになるんで困る。」

「でも、あんなに純な気持ちになれるのは尊いと思いますわ。」
「尊いかもしれんが、そのために、あんなにふさぐようでは、感心ばかりもしておれんね。」

「何とか慰なぐさめてあげたほうがいいじゃありません？」

「うむ。そうも考えるが、ほっておくのもわるくはないだろう。いざとなったら、ふさいでばかりもおれないだろうし、自分で何とか始末するよ。」

「あたし、それじゃあ何だか残酷ざんこくなような気がしますけれど。」

「そうかね。しかし、そんな残酷さは、友愛塾では毎日のことじゃないかね。」

「そうおっしゃられると、そうですね。」

二人の話は、いつもそんなふうで終わりになるのだった。二人とも、次郎のふさぎの虫の原因の大半が道江みちえの問題にあるということには、まるで気がついていなかったし、まして、それが塾の運命についての不安感とからみあって、かれの人間としての自信

をゆすぶり、さらにそれが大河無門という人物の存在によって拍はくしゃ車くるまをかけられているという複雑な事情など、とうてい思いも及およばなかったことなのである。

道江の問題といえば、次郎は、その後、そのことについていつそうきびしい試練にあわなければならなかった。しかも、その試練は東京の事変が塾内の空気を不安の絶頂にかりたてていた二月二十八日の夕方にはじまったのである。かれは、その日、夕食をすまして自室にかえると、机の上に通の分厚な封書ふうしょを発見した。かれは、その発信人が道江であることを知った瞬間しゆんかん、おどろくというよりは、むしろ恐怖きょうふに似た感じで胸をふるわした。かれには、すぐには封を切る勇気が出なかった。もしもそれが一

枚のはがきに帰郷を報じて来たものにすぎなかったとしたら、かれはただ寂しいさび気持ちでそれを読みすてたかもしれない。また封書ではあつても、それがわずか二三枚の便箋びんせんに書かれたものであつたとしたら、かれはその中から何か言外の意味を探ろうとして、くりかえし読んでみたかもしれない。だが、それはあまりにも分厚であり、分厚であるというそのことが、内容を想像してみるまえに、ただわけもなくかれを不安にしたのである。

かれは封を切らないまままで焼きすてようかと、何度か思つてみた。しかし、それははかない努力であつた。焼きすてようと思つてみただけで、焼きすてたあとに感ずるであろう不安が、現在の不安以上の力をもつてかれにせまつて来るのだった。かれは封書

を前にしたままながいこと迷った。迷えば迷うほど、一方では自分のふがいなさが感じられて、腹だたしくも悲しくもなった。かれは何かにしがみつきたい気持ちだった、そして、いつの間にか、たんにしよう「歎異抄」の中のいろいろの言葉を心の中でくりかえしていた。くりかえしているうちに、

（そうだ、自分の「はからひ」なんか、なんの力にもなるものではない。）

と、そんな考えが自然にかれの頭をかすめた。この場合、それは実は、かれ自身に対する言いわけ以上のものではなかったのかもしれない。しかし、それでも一つの救いであったにはちがいがなかった。かれはどうとう思いきって封を切った。

手紙には、帰郷のあいさつらしい文句はどこにもなく、最初から次郎を息づまらせるような言葉ではじまっていた。

「こんなお手紙を差しあげては、次郎さんはきつと私を軽蔑けいべつなさるだろうと思いますけれど、次郎さんよりほかに、今の私の気持ちかみごを訴えるところがありませんから、軽蔑されるのを覚悟の上で、思いきって書くことにいたしました。どうか私のこの気持ちをお察しください。おいやでも、読むだけは、最後までお読みください。切に切にお願い申します。」

この書き出しを見ただけで、次郎はもう、道江がこれから自分に訴えようとする問題の中心が何であるかを想像し、自分がその問題について第三者的立場に立たされていることを、はつきり意

識した。それはにがい、そして冷たい味のする意識だった。封を切る時に、かすかながらもある期待をかけていた自分の甘さあまに対する自嘲じちようが、そのにがさと冷たさとを倍加した。かれの眼は、しかし、そうであればあるほど鋭すずどく手紙の上に光っていた。

手紙の文句はふしぎなほどの冷静さをもつてつづられていた。次郎はかつて道江を平凡へいほんな女だと思つたことがあつたが、読んで行くうちに、その平凡さのおどろくべき成長を見せつけられ、それに一種の威圧いあつをさえ感ずるのだった。

「……実は私は、女学校を卒業前後から、いつとはなしに、恭きよう一いちさんと私とは許婚いいなづけの間柄あいだがらだとばかり信じて来ました。今になつて考えて見ますと、あらたまつてそれを私に言つて聞か

してくれた人はだれもありませんので、全く私の思いちがいだつたのかもしれません。もしそうだとすると、私の軽はずみを恥はじるほかないような気がいたします。しかし、これは次郎さんもたぶんおわかりくださることだろうと思います。親類中が、私にそう信じこませるような空気を作っていたことも事実だと思いません。私は、自分の家においても、大おおまき巻の姉の家や次郎さんのお家をおたずねしても、何かにつけ、そうとしか思えないようなことを耳にして、よく顔をあからめたものでした。その中には、だれがどんな場合にどういうことを言ったのかさえ、今でもはつきり思い出せるものも少なくはないのです。女というものは、そういうことについては男よりずっと敏びんかん感だということをお次郎さんが

お認めくださるなら、私が恭一さんと許婚の間柄だと信じこんでいたのも無理はない、とお許しいただけるのではありますまいか。そしてそれをお許しいただけますなら、私が恭一さんをお慕したい申しあげる気持ちがあるために日に日に深まって行って、今ではそれだけが私の生きる力になっている、と申しあげても、きつとおさげすみにはならないだろうと信じます。」

次郎は、こうした理詰りづめの言葉がつづけばつづくほど、かえって道江の苦惱くのうの深さを感じた。一心不乱になって色青ざめている額の下から、二つの眼がじつと自分のほうを見つめているような気さえするのだった。

「しかし、何おろという愚かな私だったことでしょう。私はこれまで、

私の希望をつなぐために何よりもかんじんな、というよりは、それを忘れては何もかもが空になるような、ただ一つのよりどころを、私自身ではつきりたしかめることを忘れていたのです。私はながい間、いわば根のない希望の花を胸にさして、水だけを周囲の人たちに注いでもらっていたようなものでした。そのことをはつきり知らされたのは、ついこないだ上京して帰りの汽車の中だったのです。」

そのあと、道江の手紙は、上京から退京までのことをかなりこまかに記していたが、それを要約すると、――

道江は幸福に胸をふくらまして上京した。そして滞在たいざいちゆう中は、父が用事で忙いそがしかったために、たいていは恭一の案内で見物や買

い物に出かけ、その間に、二人きりで食事をすることもまれではなかつた。恭一はいつも親切で、二人の将来の家庭生活の夢ゆめを語るというようなことこそなかつたが、思想・文芸などの話から、かなり突つつこんだ人生問題などにふれたこともあり、道江は最後まで何か新鮮しんせんな明るい光につつまれたような気持ちで日を過ごした。ただ、退京の前夜、恭一が宿にたずねて来て、荷造りをしている道江をあとに残し、父だけを誘さそつて外に出たが、二時間あまりもたつて帰つて来た父が、いやに考えぶかそうな顔をしており、口もあまりきかなかつたので、それが道江にはちよつと気になつた。しかし、翌日、東京駅に見おくつてくれた恭一は、道江に対しては、これまでと全く変わりはなかつた。ただ、父とのあ

いだは何かしら気まずそうで、気のせいか、あいさつもぎごちなく思われた——。

「私はそれでいよいよ気がかりになりましたが、それでも、それが私自身の問題に係のあることだとは夢にも思っていませんでした。ところが、列車が静岡をすぎたころになって、それまで眼をつぶつてばかりいて、ほとんど口をきかなかった父が、だしぬけに、お前はこれまで恭一君といっしょになるつもりでいたんだろうね、とたずねるのです。それがあんまりだしぬけであり、また、事がらが事がらだけに、私はもちろん返事ができませんでした。私はその時どんな顔をしたか、今から自分で想像してみましても、まるで見当が付きません。ただ、覚えていることは、父が

それつきり、また眼をつぶってしまい、おおかた十分近くもおたがいに口をききあわなかつたことです。それほど私はその一言をきいただけで自分を取り失っていたのでした。沈黙のあとで、父は、今度はしいて笑いを浮かべながら話しました。私は今、父がどんな言葉をつかい、どんな順序で話したのか、とても思い出せませんが、私の頭にはつきり残りましたことは、恭一さんは私と結婚することなど夢にも思っていらつしやらない、それどころか、ご自分と非常にお親しいお友だちで、死ぬほど私のことを思っていてくださる方があるから、私にぜひその方との結婚のことを考えてみるように熱心におすすめくだすつた、ということでした。そのお友だちがだれだかは私にはわかりません。父は私

にそれを申しませんでしたし、私もたずねて見る気にもならなかつたのです。」

次郎は、それ以上読み進む勇氣がしばらくは出なかつた。

かれの気持ちは、非常に複雑だつた。まず第一に、かれは恭一のやり方がきわめて愚劣ぐれつであり、自分に対するこの上もない侮ぶじよ辱くであると思つた。自分が道江を思つていることは、道江の父

にはもうはつきりわかっているにちがいない。それがまだ道江にはわかつていないとしても、いつかは彼女かのじよの耳にもはいるだろう。その時の道江の顔を想像しただけでも、身がちぢむような気がするのだつた。しかし、また一方では、道江が、「お友だちの名をたずねてみる気にもならなかつた」と書いているのには、あ

る怒りを感じないではいられなかった。これが死ぬほど自分を愛している者に対する態度だろうか。かりに彼女の父があからさまに真実を語ったとしたらどうだろう。それでも彼女はそうした冷れ淡いたんな態度に出られるのだろうか。もし出られるとすると、彼女にとって自分は一たい何なのだ。いや自分にとって彼女は一たい何なのだ。——そこまで考えると、恭一のやり方の愚劣さに対する怒りは、その底に、自分で意識しない嫉妬しつとの感情を波うたせて、いよいよ昂こうじて行くのであった。

かれは、しかし、懸命けんめいに自分を落ちつけて先を読んだ。今となつては、手紙を読みやめるのが卑怯ひきようなような気がしたのである。

「そのあと、親子二人がどんな汽車旅行をつづけたか、また家に帰りついてから今日までの日々を、私がどんな気持ちですごしたか、それはいつさい次郎さんのご想像にお任せいたします。ただ私がこの数日間に考えましたことの中で、ぜひ次郎さんに知っておいていただきたいことがあります。それは、私のこれまで抱いて来た希望が、全く根のない切り花のようなものであったとしても、私はその希望を恥じて悔んでもいないということです。むしろ、根のないものを根があるように信じこんでいた私の愚かさは、笑われても致し方ありません。しかし、その愚かさの中で育った希望そのものは、私にとっては、もう決して愚かな希望ではないのです。それどころか、それは私の生命の花であり、私の

生命のあるかぎりは、たとえ根はなくとも決して枯れることのない花なのです。私はその花を、根のないままに私の胸にさして一生を終わりたいとさえ思っているのです。次郎さんは、それを少女の感傷にすぎないとしてお笑いになるでしょうか。」

次郎は笑うどころではなかった。心のどこかにまだかすかに残っていたぬくもりが、すつとぬぐい去られたような気がしながら、いそいでつぎの行に眼を走らせた。つぎの行は、次郎にとって、いつそう残酷だった。

「しかし、次郎さん、これは決して私の感傷ではありません。なるほど、根のない花を、根のないままに胸にさして一生を終わるなどと申しますと、いかにもため息まじりの感傷にすぎないかの

ようにきこえるかもしれませんが、私はそういうことをただあきらめの気持ちで申しているのではないのです。私は弱い女ながらもやはり一人の人間として生きております。人間には意志があります。意志は、それにふさわしい知恵と情熱との助けをかりるときさえできれば、根のない希望に根をはやすことだってできると信ずるのです。私はこのことを挿木さしきのことから思いつきました。

次郎さんも、まだきつとお忘れではないと思います。何年前の梅雨つゆのころに、私と二人で、お宅の畑にいろんな木を挿木にしてみました。それがたいいてい成功したので大喜びをしたことがありますね。私、今度のことで思いなやんでいるうちに、ふとそのことを思い出したのです。それを思い出すと、私の胸には、何かし

ら勇気みたようなものがよみがえってきました。そしてそれと同じ時に、今は根のない私の希望も、それを大事に胸にさしてさえおれば、きつと根をはやすにちがいない、いや、根をはやさせずにはおかないと思うようになったのです。それにしても、次郎さんと二人で挿木をして楽しんでいたころの記憶きおくが、こうした場合に私を力づけてくれるなんて、運命というものは、何とふしぎなものでしょう。」

次郎の頭に、自然に浮かんで来たのは、いつもかれの人生てつが哲くの奥おくにひそんでいる「無計画の計画」という言葉であった。

これは、しかし、この場合、かれにとって何とにがい味のする言葉だったろう。

「次郎さん、今、私がどんな気持ちでいるかは、これでもうわかりくだすったことと思います。私はむろん悲しいには悲しいのですが、決して悲しみに負けてはいません。それだけはどうぞご安心ください。そして、もし私の今の気持ちをお認めくださいますなら、私がこれから進もうとする道にお力をおかしくください。実は、私は、はじめのうち、私を思っていてくださるといふ皆さんのお友だちがどなたであるか、知りたいとは少しも思いませんでした。それは前にも書いた通りです。しかしいろいろ考えていますうちに、すべてのことをはつきり知った上でありませんと、自分の進む道も見つからないだろうということに思いあたったのです。それで、今では一ときも早くその方のお名前を知りたいと

思っています。父はなぜか、どうしてもそれを私に教えてくれ
ません。何度かたずねてみましたけれど、いつもむずかしい顔を
して、お前は知らないほうがいい、と答えるだけなのです。私自
身では、恭一さんにどんなお友だちがおありなのか、それさえわ
かっていませんので、見当をつけようにもつけようがありません。
もつとも、大おおさわ沢さんという方には上京中二三度お目にかかり、
一度は恭一さんと三人で映画を見に行ったこともありましたので、
あるいはあの方かとも思ってみました。しかし、お見うけしたと
ころ、二度や三度顔を見たばかりの女に心を動かすような、そん
な軽けい薄はくな方だとも思えませんし、そう疑ってみるだけでも失礼
なような気がいたします。恭一さんだって、そんな軽薄な人を私

におすすめくださるほど、私に対して不親切ではないでしょう。私は、私の希望に根をはやすために、せめてそれだけは信じていたいと思います。」

次郎は、^{すろど}鋭い切^{きつさき}尖がじりじりと胸にせまるような気味わるさと、何もかもが身边から消えて行くような寂^{さび}しさを、同時に感じながら、最後に残された二枚の便箋に眼を走らせた。

「こんなわけで、私にはその方のお名前を知る手がかりが全くありません。むりやりに父にたずねたら、あるいは、しまいには言ってくれるかもしれないませんが、恭一さんのことを私に忘れさせようとして苦しんでいる父を、この上苦しめたくはありません。で、最後にたよるところは次郎さんです。実をいうと私ははじめのう

ち、こんなことを次郎さんに打ちあげたくはありませんでした。それは次郎さんに軽蔑されそうな気がして、それがこわかったからでもあります。それよりも、恭一さんがそれをどうお思いになるだろうか、それが心配だったからです。しかし、今はもうそんなことにかまってはいられません。私は、とにかくにも、ほんとうのことが知りたいたいのです。ほんとうのことを知ることが、私のこれからの道を私に教えてくれるだろうという気がするのです。次郎さん、どうか私にお力をおかしくください。軽蔑しながらでもいいから、お力をおかしくください。私は何もめんどろなことをお願いするつもりはありません。ただその方のお名前とお所を知るだけで結構です。次郎さんなら、あるいはもう何もかもご存

じでしようとも思いますが、もしそうでしたら、すぐにもご返事をください。もしまだご存じなければ、恭一さんにおたずねになるなり何なりして、できるだけ早くお知らせください。私から直接恭一さんにおたずねしたらいいではないか、とお考えになるかもしれませんが、それは、今のところ私にはとてもできないことなのです。私がこの後恭一さんにお手紙を差しあげるのは、私を思っていてくださるといってお友だちの方に、すっかり私のことを思いきっていただいたあとのことにいたしたいと存じております。このこともお心にとめていただいて、ぜひ今度だけはご返事をお願いいたします。自分のことだけを書きつらねて、ほんとに相すみませんでした。今の私の気持ちをお察しくだすって、どうかお

許してください。」

それで手紙は一たん終わったが、宛名あてなのあとにさらにつぎの三行ほどが書きそえてあつた。

「東京には大変なさわぎが起こっているようですが、朝倉先生をはじめ皆さんみなさぞご心配あそばしていることでしょう。恥ずかしいことですが、私には、それさえ今はよそごとのような気がしてなりません。お笑いくださいませ。」

次郎は読み終わつたあと、しばらくは化石したようにすわつていた。胸の中には、熱いとも冷たいものかもしれぬものが、激はげしい渦うずを巻いてその突とつぱ破口こうを求めていた。

(何という醜みにくい一途いちずな執念しゅうねん深ぶかさだろう。そして、何という落

ちつきはらった我ままな要求だろう。愛情の対象として完全に自分を無視しておきながら、道江は一たいどんな返事を自分に期待しようというのだ。）

そう思うと、かれはにえるような怒りを感じた。

しかし、道江の執念を醜いと思う心は、すぐかれ自身にもはねかえつてきた。

（道江に何の罪がある。道江はただ自分を信じてすべてを自分に訴えているだけなのだ。それを醜いと思う心こそ、何にもまして醜い心ではないか。我^{がしゆう}執と自負と虚偽^{きよぎ}とのわなにかかつて身もだえしている嫉妬心の亡者^{もうじや}、それ以外に今の自分に何が残されているというのだ。）

憎悪ぞうおと自責とが恋れんじょう情じょうの燈火とうかのまわりをぐるぐると回転した。それは際限のない回転だった。

いつそうかれをみじめにしたのは、道江の手紙が、かれに返事をせき立てていることだった。今度という今度は、これまでのように、まるで返事を出さないのでおくというわけにはいかない。もし自分がそういう態度に出たら、道江は自分を人間だとは思わな
いだろう。それは次郎としてたえがたいことだった。だが、真実を書いた場合の結果を思うと、それは身ぶるいするように恐ろおそしいことだった。それは自分の自尊心を台なしにして、道江をいつそう深い苦悩に追いこむだけのことではないか。——残された道はうその返事を書くことだが、では一たいどんなうそを書けばい

いのか。第一、そんなことに心を苦しめて、それにいったい何の意味があるというのだ。

かれは迷いに迷った。そしてこの迷いにも際限がなかった。

とうとうその日は決心がつかないままに暮れた。かれはうつろな心で塾の行事を終わり、解決を翌日にのぼして、冷たい床にはいった。眠られない一夜だった。昏迷はやはり翌日もつづいた。また夜が来た。こうして二日とたち三日とたつうちに、かれはもうそのことを考えることさえいやになってきた。そして事實は、結局、返事を書かない決心をしたのと同じ結果になり、それがよいよかれの気持ちをも不安にし、かれを陰気な沈黙に誘いこんでいったのである。

道江の手紙を受け取つて以来、次郎の関心が、事変後の国情とか、塾の運命とかいうようなことからいくぶん遠ざかつていたことは、いうまでもない。かれはおりおり自分でそのことに気がついて、ぎくりとした。一女性の問題に心を奪うばわれて公おおやけの問題を忘れることは、かれにとっては、人間としての良心の問題であり、少なくとも自尊心の問題だったのである。そしてこの反省は、大河無門の顔がかれの視界にあらわれる時に、とりわけきびしかった。そのために、かれはこのごろいよいよ大河がおそろしくなってきたのだった。

さて、二月二十六日の事件が始まつて十日近くもたつと、新聞の記事もそろそろ平常に復し、友愛塾では、しばらくぶりで日曜

らしい日曜を迎えることになった。その日は天気もよかつたので、塾生たちは朝食をすまずと、先を争うようにして外出した。事變のあつた現場を見たいという好奇心こうきしんもかなり強く手伝つていらしかつた。

次郎は、まだやはり道江の手紙のことが氣になつて、外出する氣にはむろんなれず、かといつて落ちついて読書もできず、例によつて日あたりのいい広間の窓によりかかつて、ひとりで思い悩なやんでいた。床の間の掛軸とこまに筆太かけじくに書かれた「平常心」の三字も、今のかれにとつては、あまりにもへだたりのある心ふでぶとの消息でしかなかつたのである。

塾生たちの出はらつた本館の静けさは、氣味わるいほどだつた。

そとには風もなかった。霜しもばしら柱のくずれる音さえきこえそうなきがした。次郎は、しかし、あたりが静かであればあるほど、気がいらだつのだった。

ふと、しずかな空気をやぶって、玄関げんかんのほうに人の足音がした。つづいて、

「次郎さん、いらつしやる？」

と朝倉夫人の声がかきこえ、事務室と次郎の室との間の引き戸をあける音がした。

次郎があわてて広間にとび出すと、朝倉夫人は、もう廊下ろうかをこちらに歩いて来ながら、

「何かお仕事？」

「いいえ。」

次郎はどぎまぎして答えた。夫人は微笑びしょうした眼を次郎にすえながら、

「このごろ空林庵のほうはすっかりお見かぎりのようね。でも、今日はぜひいらっしていただかなければなりませんわ。」

次郎がいくぶん顔をあからめながら、眼を見はつてみると、

「今日は、先生と三人で重大会議を開かなければなりませんの。」
「重大会議？ 何でしょう。」

朝倉夫人は、やはり微笑したまま、それにはこたえず、

「もし大河さんが外出していらっしやらなかつたら、次郎さんとごいっしょに、ご相談に加わっていただきたいんですって。だけ

ど、いらっしやるかしら。」

「さあ。」

次郎は大河の名が出たので、いよいよまごついた。「さあ」というかれの返事は狼ろうばい狽ばいの表現でしかなかったのである。

「じゃあ、ちよつとお室へやをのぞいてみてくださらない？　そして、もしいらしつたらすぐごいっしよに空林庵のほうにおいでくださいね。」

朝倉夫人は、そう言って、いそいで玄関を出て行った。

次郎は、考える余裕よゆうもなく、すぐ第五室に行つて戸をノックした。

「はあい。」

にぶい大河の返事がきこえた。戸をあけると、大河は坐禪ざぜんでも組んでいたかのよう、背筋せすじをのばしてあぐらをかいていた。かれの前の机の上には、何一つのつていなかった。窓の光線をうしろにしてふり向いたその顔には、近眼鏡のふちだけが強く光った。次郎が朝倉夫人の言葉をつたえると、

「そうですか。」

と、べつにふしぎに思った様子もなく、のっそりと立ちあがり、それつきりだまって次郎のあとについて来た。次郎も空林庵の玄関を上がるまで、口をきかなかつた。

空林庵の朝倉先生の書齋しよさいは、深く陽ひがさしこんで温室のようにあたたかだった。二人がはいって来ると、先生はすぐ言った。

「やあ、大河君も来てくれたか。いてくれてしあわせだったな。

……実は、ちよつとうるさいことがあつてね。それが対外的の意味をもっているんで、いつもの通り、いきなり塾生みんなの相談にかけても、どうかと思つたもんだから。……」

対外的という言葉をきいて、次郎の眼はやにわに光つた。それはこのごろにない鋭い光するとだった。大河もいくぶんきんちよう緊張した顔をして朝倉先生を見つめた。

朝倉先生は、しかし、笑いながら、

「対外的なんていうと、少し大げさにきこえるかもしれないが、そう大したことじゃない。いわゆる招かれざる客がやって来るだけのことなんだよ。」

そう言つて朝倉先生が説明したところによると、その招かれざる客というのは、小関氏を塾長とする興こうこくじゆく国塾の塾生約五十名で、来塾の目的は見学と交こうかん歓、日時は今度の土曜の午後一時から夜八時まで、夕食をともにするが、実費は先方の分は先方で負担する、プログラムは当方に一任、ただし、意見交こうかん換の時間をできるだけ長くする、というのであつた。

「いつの間に、そんなことがきまつたんですか。」

次郎は、話をきき終わると、詰きつもん問するようにならずねた。

「つい二三日前。——荒田あらた老人から、田沼たぬま先生を通じて申し入れがあつたんで、そうきめたんだ。こないだ君もきいて知っているだろうと思うが、やはりこれも、私設青年塾堂の全国的連合組織

を作るための準備工作だそうだ。」

「どうしてそれをお断わりにならなかつたんです。」

「表面、悪いことではないし、それを強^しいて断わるのは現在の客観的情勢が許さないのですね。」

「しかし、先方の肚^{はら}はまるでちがつたところにあるんでしよう。」

「むろんちがつているだろう。……まあ昔^{むかし}でいえば、道場やぶりというところだろうね。」

次郎は、そんなことを平気で言う朝倉先生が、ふしぎでならなかつた。まさか先生が、時代の重圧に負けてやけくそになるわけがない。そうは思うが、やはり何となく不安である。かれはだまつて先生の顔を見つめた。すると先生は、その澄^すんだ眼をぱちぱ

ちさせながら、

「道場やぶりがこわいかね。」

次郎はめんくらった。同時に闘志とうしに似たものがかれの心にうごめいた。

「そんなことないんです。」

と、かれはおこったように答え、きつと口をむすんだ。

「こわくなけりやあ、そうむきになって拒絶きよぜつすることもないだろう。受けて立つという法もある。もしこういう機会に少しでもこちらの理想を相手の心に植えつけることができれば、むしろ一歩の前進だ。しかし、それにはけちくさい闘志を燃やしてはいけない。ただこちらのふだんの生活のすがたをくずさないようにす

れば、それでいいのだ。人間は、結局、一番自然で、一番合理的な生活に心をひかれるものなんだから、君らがそれをくずしさえしなければ、いつかは必ず相手の心に響く時があるだろう。それでいいんじゃないかな。どうだい、大河君。」

「ええ、結構だと思います。」

それまで眼をつぶつて二人の話をきいていた大河は、無造作にそうこたえると、またすぐ眼をつぶった。

「本田君も、いいねえ。」

「ええ、わかりました。」

次郎の意識の中には、やにわに大河の存在が大きく浮かんではいた。かれは朝倉先生に説き伏せられたというよりは、大河の無造

作な答えに説き伏せられたといったほうが適當であつた。

「じゃあ、プログラムを二人で相談して組んでみてくれたまえ。

こまかなことはどうでもいいんだ。どうせみんなにも相談してきめることなんだから、こまかなことは、その折にきめることにして、動かせない大筋おおすじだけを考えておいてもらいたいね。かんじんなのは、ここの生活の空気をこわさないことだよ。できればお客さんをこちらの空気にまきこんでしまいたいのだが、そこまではちよつとむずかしいな。とにかく、そこいらがうまくいきさえすれば、あとは、どうでもいいんだ。」

「大変ね。」

と、その時、火鉢ひばちのはたでみんなのためにコーヒーをいれてい

た朝倉夫人が言った。

「でも、お二人でお考えくだされば、きっといいプログラムが
できになりますわ。」

それから、何か思い入ったように、

「あたし、その日は、お役にたつことでしたら、どんなことでも
いたしたいと思っていますの。」

次郎はそのしみじみとした調子が変に気になりながら、コーヒ
ーをすすった。

大河と次郎とは、それから間もなく本館にかえり、さっそくプ
ログラムをねりはじめた。次郎が大河と二人きりでながい時間話
すのは、しばらくぶりだった。かれの気持ちは変に落ちつかなか

つた。威^{いあつ}圧されるような気持ちと、よりかかりたいような気持ちとがたえず交^{こうさく}錯していたのである。しかし、一方では、かれのこのごろの暗い混迷した気持ち^{きもち}が、新しい問題を投げかけられたせいもあつて、少しずつうすらいでいくかのようであつた。

プログラムを組むのに、二人が最も重要だと思つたのは、意見交換の時間をできるだけながくするように、という先方の申^まし入れに、どう応ずるかということであつた。先方の肚^{はら}が、それによつて激^{げき}論をまきおこし、日本精神とか時局とかの名^なにおいて、こちらを窮^{きゆう}地に追^おいこみ、あわよくば重大な失言をさせようとしていることは明らかであつた。その手に乗つてはならない。かといつて、その申し入れを無視するわけにも行かない。そこに二

人の苦心があつたのである。だが、これは大河の提案によつてあんがい簡単に片づいた。それは八つの室に分散して地方別の懇こんだ談会んかいを開き、それにできるだけ多くの時間を費すことであつた。

大河は言つた。

「小人数にわかれると肩肘張かたひじつた演説もできまいし、それに地方別ということが、自然話題を地についたものにするだろうと思ひます。そうなると、こちらの生活のほんとうの意味が、先方の人たちにもいくらか納得なっとくしてもらえるかもしれませぬ。」

このことがきまると、あとはわけはなかつた。二人は中食前にだいたいの案を朝倉先生に報告することができた。朝倉先生は一通り案に目を通すと、笑いながら言つた。

「地方別懇談会とはうまく考えたね。先方では裏をかかれたと思うかもしれないが、文句をつけるわけにはいくまい。まあ、名案としておこう。」

それから、しばらく何か考えていたが、

「しかし、こういう細工をやるのは、あまり愉快ゆかいなことではないね。」

その日、塾生たちが外出から帰って来て夕食をすますと、さつそくその問題が相談にかけられたが、ほとんど原案通り決定された。ただ原案になかったことで、こちらの塾生代表と進行係とをだれにするかが問題になり、進行係のほうはすぐ次郎にたのむことにきまつたが、塾生代表については、いろいろの意見が出た。

室長の互選ごせんという意見も出たのでそれに落ちつけば一番合理的なはずだったが、それには室長の多数がふしぎに賛成しなかつた。そして結局、青山敬太郎の発言で大河を推おし、それがほとんど全部の塾生に拍手はくしゅをもつて迎むかえられたのであつた。

その晩、自分の室に帰つた次郎の気持ちには、ふしぎな変化がおこつていた。かれは机の引き出しの奥深おくくしまいこんでいた道江の手紙を取り出して、もう一度しずかに読みかえした。そして読み終わると、すぐ二通の手紙を書いた。一通は道江あて、もう一通は恭一あてだつた。恭一あてのには、

「道江からこんな手紙が来たが、僕ぼくには返事のしようがない。すべては君の責任において解決してもらいたい。」

とだけ書いて、道江の手紙を同封した。道江あてのもきわめて簡単だった。

「お手紙拝見。ご胸中同情にたえません。返事が遅れてすまなかつたが、おたずねの人物については、いろいろ考えてみました。しかし、結局僕には見当が付きません。で、思いきって、お手紙をそのまま兄におくり、その返事を求めることにしました。あるいは直接そちらに返事が行くかもしれない。とにかく、この事については、兄自身がすべての責任を負うのが当然だと思います。道江さんもそのつもりで勇敢に兄にぶつつかつてみてください。切に前途の光明を祈ります。」

一二 交歓会

それからの一週間は、次郎にとって、変に矛盾むじゆんにみちた明け暮くれだった。

二通の手紙を出したあとのかれの胸には、大きな空洞くうどうがあり、その空洞の中を、悔恨かいこんと、嫉妬しつとと、未練と、そしてかすかな誇ほこりとが、代わる代わる風のように吹ふきぬけていた。しかも、一方では、興こう国塾こくじゆくとの交歓会なまりをひかえて、その同じ胸が、空洞どころか、重い鉛なまりでもつめこんだように心配で一ぱいになっていた。心配といつても、それはむろん、こぎこぎした準備や、その日の手順などのことについてではなかった。そうしたことは、

もうたいてい塾生たちの分担に任しておいても、決して不安はなかつたのである。ただ、かれがたえず悩んだのは、ともすると心の底に、朝倉先生のいわゆるけちな闘志とうしがうごめくことであつた。交歓会とは名ばかりで、その実、戦いをいどまれているようなものであり、しかも、その結果いかんは、ただちに塾の運命を左右するのだ、と思うと、怒いかりがこみあげて来て、何くそ、負けてなるものか、という気になる。

だが、そうした闘志に身を任せることは、決して友愛塾としての真の勝利をもたらすゆえんではない。それどころか、そのこと自体がすでに敗北を意味するのだ。かりに百歩をゆずつてそうした闘志をゆるすとしても、その闘志をどう使えば相手を打ち負か

すことができるのか、相手はこちらが相手以上に軍国調にならないかぎり、絶対に負けたとは思わない人たちなのだ。そう思いかえしては、自分をおさえるのだったが、おさえればおさえるほど、無念でならない気がして来るのである。

こうした鬪志は、むろん次郎だけのものではなかった。気の強い塾生たちの中には、次郎ほどの反省力や責任感がないせいもあって、あからさまにそれを口に出していうものも決してまれではなかった。それがいつそう次郎をなやました。かれは自分自身の鬪志にたえずなやまされつつ、その同じ鬪志が他の塾生たちの心にきざすのを注意ぶかく警戒けいかいしていなければならなかったのである。

そのために、かれはもうこれまでのように、ひまさえあると自分の室にばかりとじこもっているというわけにはいかなかった。

かれは塾生たちの気持ちの動きを知るために、かれらとの個人的

せつしよく

接 触 の機会をできるだけ多くすることにつとめなければなら

なかった。このことは、自然かれをいくらか饒 じょうぜつ 舌にし、一見

いかにも快活らしく見せた。しかし、それが見かけだけのものであつたことは、かれ自身が一ばんよく知っていたのである。

こうして、ついに約 やくそく 束の土曜日 むさしの が来た。天気は快晴というほ

どではなかったが、この季節の武蔵野 むさしの にしては、風も静かで、割合あたたかい日だった。準備は昨夜までにすっかりととのついたので、塾生たちの気分には十分のゆとりがあり、午前中は、外

来講師小西先生の民芸に関する講義も落ちついてきいた。小西先生は良寛りようかん和尚おしょうを思わせるような風格の人で、その言葉や動作の中に作為さくゐのないユーモアがあふれ、それが話の内容にぴったりにして、この日の講義としては、あつらえ向きだった。

中食後の座談がすむと、民芸に特別の関心を有する二三の塾生が小西先生の帰りを見おくつて、門のあたりまでついて行つた。そのほかの塾生たちも、そのあとから、そろそろと塾庭に出て、三人五人と、草っ原に腰こしをおろしたり、森をぶらついたりしていた。その光景は、いかにもものんびりしていた。今日のお客を迎えむかる前にしてはのんきすぎるようにも思えたが、これも実は次郎と大河とが組んだプログラムの中の、かくれた一コマだったのであ

る。

一時ちよつと前になると、朝倉先生夫妻も塾庭に姿をあらわした。それとほとんど同時に、自家用車らしい黒塗りの自動車くろぬが一台、正門をすべりこんで来るのが見えた。みんなの眼めは、自然そのほうにひかれた。中でも次郎の眼がぎらりと光った。かれはその時、草っ原に腰をおろしていた仲間の一人だったが、いきなり立ちあがって、朝倉先生のほうに走って行き、何かささやいた。自動車は、もうその時には、二人のすぐ前まで来ていたが、通りすぎたかと思うと、すぐとまった。そして、その中から出て来たのは、鈴田すずたに手をひかれた荒田あたらう老だった。

「あつ、荒田さんでしたか。ようこそ。……あなたがお出いでにな

ることは全く存じがけなかったものですから、どなたのお車かと思つていました。」

と、朝倉先生が歩みよりながら声をかけた。

荒田老は、和服の上にマントをひっかけ、毛皮製のスキー帽ぼうみたようなものをかぶっていたが、帽子には手もかけず、

「やあ、塾じゆくちやう長さんですか。」

と、黒眼鏡を朝倉先生の声のするほうに向け、

「今日は、しばらくぶりで、わしも見学にあがりましたんじや。

まだ興国塾からは見えませんか。」

「一時に到とうちやく着という約束になっていきますので、もうすぐ、見えるでしょう。」

そう言っているうちに、正門の外から、「歩調取れ」というか
ん高い号令の声がかきこえ、つづいて、カーキ色の服を着た一隊
の青年が、ももを高くあげ、手を大きく前後にふりながら、堂々
と門をはいって来た。

それを見ると、こちらの塾生たちは、ほうぼうから急いで朝倉
先生の立っている近くに集まって来た。そして、手を高くあげて
叫さけんだり、拍はくしゅ手てをしたりして、歡かんげい迎むかひの意を表した。むろん、
みんなの顔は笑いでほころびていた。それはちやうど町の群衆が
凱がい旋せんの軍隊を迎える時のような光景であった。

その間、先方の隊はわき目もふらず行進しつづけて来たが、や
がてこちらの集まっている前まで来ると、「分隊止まれ」の号令

で停止し、「左向け左」の号令で横隊おうたいになった。そして両りよう翼くの嚮導きようどうによつて整頓せいとんを正され終わると、そのあとは壁かべのように動かなくなつた。

同時に、こちらの歓迎のざわめきもぴたりととまり、あたりはしいんとなつた。

すると、それまで隊のあとから見えがくれについて来ていた背広の紳士しんしが、つかつかと進み出て、まず荒田老と、つぎに朝倉先生と、あいさつをかわした。年格好としかつこうといい、容貌ようぼうといい、その人が興国塾長の小関氏であることは、次郎には一目でわかつた。小関氏は、あいさつをすますと、こちらの塾生たちの群をさげすむように見ながら、朝倉先生に言つた。

「どういう順序になっていますかね。私のほうは、もうすべて予定通りに動くように準備ができていますが。」

「あ、そうですか。これは失礼しました。」

と、朝倉先生は、すぐそばに立っていた次郎をかえり見て、

「じゃあ、予定どおりすすめてくれたまえ。」

そこで次郎は双方そうほうの中間に進み出て言った。

「僕は、本田ほんくという者です。今日の進行係をつとめさせていただきます。

実はいちおう皆さんみなを舎内にお迎えした上で予定のプログラムを進めるのが礼儀れいぎだと思ひますが、幸いに天気もよいし、

それにこれからの進行の都合もありますので、双方の最初のごあ

いさつの交換こうかんだけは、この青天井あおてんじょうの下でお願いしたいと思います

います。では、まず友愛塾生代表の歓迎かんげいの辞……」

すると、大河無門がのそのそと進み出て、歓迎の辞をのべた。それはきわめて簡単だった。わざわざ訪ねて来てもらったお礼と、うちくつろいで歓談してもらいたいという希望とをのべたにすぎなかった。それに要した時間も、おそらく一分以上には出なかつたであろう。

つぎは先方のあいさつだった。隊の指揮しきをしていた青年が、そのまま先方の代表として進み出た。かれはまず大河をはじめこちらの塾生たちに厳げん肅しゆくな挙手きよしゆ注ちゆうもく目の礼をおくつたあと、精一しやういちぱいぱいの声をはりあげて、

「不肖ふしょう黒田勇は興きん国塾生一同を代表して、友愛塾の諸兄に初対

面のごあいさつを申し述べ、る光榮を有します。」

と叫んだ。それから、およそ五六分間は、十分に暗誦あんしようして

来たらしい文句をつらねて、熱烈ねつれつに世界の大勢を説き、日本の

生命線を論じた。そして論旨ろんしを一転して青年の思想問題に入りか

けたが、そのころからかれの言葉は次第しだいにみだれがちになり、ま

たしばしばゆきづまった。ゆきづまると、かれの視線はきまつて

空のほうにはねあがり、血走った白眼が大きく日に光った。そん

なふうで、さらに五六分の時間がどうなりすぎたが、そのうちに、

いくら空をにらんでも、どうしてもあとの言葉がつづかなくなつ

てしまった。するとかれは、ちよつと肩かたをすくめ、右手をあげて

耳のうしろをかいた。それからやりと笑つて胸のかくしから草そ

稿うこうを引きだし、大いそぎでそれをめくった。

そのあと、かれがふたたびもとの厳肅さと熱烈さをとりもどしたことは言うまでもない。それは、しかし、必ずしも草稿にたよれるという安心ができたからばかりではなかつたらしい。というのは、かれの演説は決して単なる朗ろうどく読演説ではなく、一つの句切りの最初の言葉さえ見つかれば、あとの数行は草稿なしでも自然に口をつけて流れ出て来たし、そのあいだに、かれはかれの予定通りの厳肅さと熱烈さを十分に発揮はつきすることができたからである。ただかれのために残念だったのは、かれの前にテーブルが据すえてなかつたことであつた。もしそれさえあつたら、かれはもつと巧たくみに草稿に眼を走らせることができたであらうし、またし

たがってかれの演説はいっそう雄渾ゆうこんであることができたかもしれなかつたのである。

かれは最後に、草稿をにぎった左手を腰のうしろにまわし、右手で力一ぱい空間をたたきつけながら言った。

「諸君、お互たがいの修練の場所はちがっても、等しくこれ日本の青年であります。日本の青年である以上、修練の目的とするところは全く同どう一いつでなければなりません。その意味で、諸君がすでにわれわれの同志であることは、一点の疑いをいれないところでありませう。ただ、人により、また修練の場所により、体得するところに深しん浅せん高低の差があるのは、おそらく免まぬれがたいところであり、また時としては、自ら知らずして誤まった方向に進んでいる

者もないとは限りません。そのことに思いをいたしますと、本日の交歡の意義はまことに深いものがあります。われわれは、この半日の交歡において、われわれの信念と體驗の全部をひっさげて諸君にぶつつかるつもりでやってまいりました。諸君もまた全力をあげてわれわれの妄もうをひらかれんことを希望します。終わりつ

「
かれはもう一度挙手の礼を送り、まわれ右をして、駆かけ足あしで隊の右翼うよくに帰って行き、そこではじめて「休め」の号令をかけた。すると次郎がふたたび進み出て、言った。

「では、これからしばらくの間、皆さんにこの塾しせつの施設を見ていただきたいと思います。それには、小人数にわかれて見ていただ

くほうが、説明や何かにも便利だと思いましたが、こちらは、九州班とか東北班とかいうぐあいに、地区別にわかれてご案内をすることにいたしております。皆さんのほうでも、そんなぐあいにわかれていただければ、何よりだと思います。そして一通りご覧ください。夕食までの時間を、お互いの意見交換なり研究なりに費したいと思いますが、それもやはり地区別にわかれてやったほうが、自然親しみもあり、話が具体的にもなつて、将来のれんらくしていい連絡提携のために非常にいいのではないかと考え、そういうことにプログラムを組んでおきました。ご懇談こんだんくださる場所は、いちおう本館の各室をそれぞれ割り当てておきましたが、天気もこんなないいことでもありますし、森蔭もりかげや草っ原をご利用ください

るのも一いっきよう興かと思ひます。その辺は各班のご希望によつて、
ご随意ずいにお願いいたします。夕食は五時半に、本館の広間に集ま
つて、ごいっしょにいただくことにしておきました。そのあと、
八時のお引きあげの時刻までは、親交を主としてできるだけおも
しろくすごしたいと思ひます。その進行係は私にお任せ願ひます
が、あるいは皆さんに隠かくし芸げいを出していただくようなことがある
かもしれませんから、そのご用意を願つておきます。なお、念の
ため申しそえておきますが、この塾堂には、秘密の室とか、出入
り制限の室とかいうものは一室もありませんし、また了りようかい解の
もとにここの門をはいつて来た人なら、どんな人でも家族同様の
気持ちでお迎えすることになっていきます。ですから、皆さんもど

うかそのおつもりで、今日はお客でなく、もとからの家族だとい
うお気持ちでおすごしくださるようお願いしたいと思います。」

次郎がそう言つて引きさがると、大河無門がすぐ手をあげて、
何か友愛塾の塾生たちに合い図をした。すると、塾生たちは、五
人、七人とかたまつて、興国塾生たちのほうに近づいて行き、

「関東地方の諸君はこちらに」とか、「東北地方の方は私どもが
ご案内します」とか、いったぐあいには、口々に叫びだした。

次郎は、もうそのときには、塾生たちのほうよりは、荒田老や
小関氏のほうに注意をひかれていた。黒眼鏡をかけた荒田老の表
情はほとんどわからなかつた。ただ気のせいかな、そのでつぷりと
ふとったきずだらけの顔が、いつもよりいくぶん赤味をおびてい

るように見えただけだった。

しかし、小関氏の表情はたしかに普通ふつうではなかった。骨にぴつたりとくつついたような、青白い、つるつるに光った顔面筋肉が、唇を中心くちびるにびりびりとふるえており、その眼は塾生たちのほうを見つめて凍こおったように動かなかつたのである。

次郎は二人を見た眼を転じて、朝倉先生と夫人の顔をのぞいた。先生のほうはべつに変わった顔もしていなかつたが、夫人はさすがに緊きんちよう張ちやうしていた。先生はしばらくして小関氏に言った。

「では、夕食まで私の室でお休みいただきましようか。それまでは、私たちは、べつに用もなさそうですし。」

小関氏はそれには答えないで、ちよつと荒田老の顔を見たあと、

詰問きつもんするように言った。

「こういう計画はあなたがおたてになったんですか。」

「いいえ、塾生たちに考えてもらったんです。ここでは、なるだけ塾生たちの創意を生かす方針でやっているものですから。」

「なるほど。すると、あなたもこういう計画だということは、今はじめておわかりになったんですね。」

「そうじゃありません。決めるまえには、むろん私にも相談はするんです。」

小関氏は、もう一度荒田老の顔をのぞいた。それからつめたい微笑びしょうをもらしながら、

「じゃあ、今日の計画は、やはり、あなたがお認めになった計画

ですね。」

「それはそうですとも。」

と、朝倉先生は相手の皮肉にはいつこむとんちやくう無頓着なように、まじめくさつて、

「創意を生かすといったところで、任せつきりでは、まだ何といつてもあぶないことがあるものですから。」

「しかし、あなたにお認めいただいたにしては、今日のご計画は少し変ではないですかね。」

小関氏は、真正面から切りこむはら肚をきめたらしく、その顔には、もうつめたい微笑も浮うかんでいなかった。

「そうでしようか。」

と、朝倉先生はやはりとぼけている。

「こんなに、ばらばらになってしまつては、第一、眼もどきま
せんし、まじめに意見の交換をやるかどうか、わからないじやあ
りませんか。」

「それはだいじょうぶでしょう。青年は信じてさえやれば、それ
ほど裏おもてのあるものではありませんから。」

小関氏の青白い頬ほおがぴくりと動いた。が、すぐ、

「かりにまじめな意見交換が行なわれたとしても、議論にな
つた場合、その黒白はだれがつけてやるんです。」

「青年たちがおたがいの間でつけるんじゃないか。」

「それができれば、言うことはないんです。しかし、万一まちが

った結論になった場合、おたがいに、指導者としての責任は、どうなんです。」

「あとで正す機会はいくらでもあるでしょう。私はむしろそのほうが指導が徹底てつていするんじゃないかと考えるんですが。」

「それはどういう意味ですか？」

「このごろの青年たちは、とかく指導者の前では存分にものが言えない。言っても迎合げいごう的なことを言う。これは指導者があまり急いで結論を押しつけるからじゃないかと思えます。私は、青年たちに、自分たちでものを考え、自分たちで意見を戦わして、たといまちがいでもいいから、いちおう自分たちの判断を生み出さしておいて、そのあとで正すべきものを正してやる、というふう

にしたい。そうでないと、せつかくの指導がほんとうに身につかないように思いますが。」

「なるほど。つまり自由主義的な指導をなさろうというのですね。」

小関氏の顔には、ふたたび冷たい微笑がうかんだ。

「自由主義というかどうか、私には主義のことはわかりませんが、しんからまじめで、表裏のない、そして感情に走らない国民を養うのには、そうした指導が必要だと信じています。」

「すると、あなたは——」

と、小関氏がいきりたつた調子で何か言おうとした。が、それより早く、荒田老の、さびをふくんだ、どうかっ恫喝するような声なき

こえた。

「小関さん、もう問答は無用です。」

荒田老は、そう言つて、数秒の間その黒眼鏡をとおして二人のほうに眼をすえているようだったが、

「朝倉さん、あんたはせつせと小理屈こりくつのいえる青年をお育てにな

るほうがよかろう。じゃが、言つておきますが、あんたのお育てになるような青年は、もう日本には用がありませんぞ。これから
の日本に役にたつのは、理屈なしに死ぬる青年だけですからな。」

それから、すぐ横につきそつていた鈴田すずたのほうを向いて、

「どうれ、帰ろうか。せつかく来たが、もう用はない。」

鈴田はじろりと朝倉先生を横目で見たあと、荒田老の手をひい

て、自動車のほうにあるき出した。

もうその時には、双方の塾生たちは地区別にわかれてほうぼうに散っていた。あとには、朝倉先生夫妻と小関氏と次郎の四人だけが立っていたが、朝倉先生が、

「お帰りですか。」

と荒田老のあとを追うと、ほかの三人も、だまってそのあとにつづいた。

自動車の扉がとびらしまるまえに、朝倉先生は近づいて行って、言った。

「どうも相すみませんでした。せっかくおいでいただきましたのに。」

荒田老は、しかし、それには答えないで、

「小関さんは、塾生をほっておいて帰るわけにもいきませんな。

お気の毒じや。」

自動車は気まずい沈黙ちんもくのうちに動きだした。四人はそれが門外に消えるまで見おくついていたが、その間も沈黙がつづいた。

やがて朝倉先生が小関氏を見て言った。

「ともかくも中にはいつてお休みいただきましょう。ここではお茶も差しあげられませんし。」

「ええ。」

「塾生たちの様子は、あとで、集まっているところをまわってお歩きになっても、大よそわかると思います。」

「ええ。」

小関氏は、にがりきつて、ただなま返事をするだけだった。それでも、朝倉先生が歩きだすと、しぶしぶそのあとにつづいた。朝倉夫人と次郎は、二三間はなれてそのあとを追った。二人はあ
るきながら、何度も顔を見あつたが、口はきかなかつた。

玄関をはいるころになつて、小関氏が言つた。

「せめて夕食後の時間でも、もっと有効に使つてもらいたいと思
いますね。」

「もっと有効にとおっしゃいますと？」

朝倉先生は、靴くつをスリッパにはきかえながら、小関氏の顔を見
た。

「全部を娯楽会ごらくかいみたいなことを使うのはもつたいたないじやありませんか。お任せした以上、いけないとおっしゃればそれまでのことですが、その一部分でも、全員集まつての意見交換に使つてもらいたいと思つているんです。」

「なるほど、いや、よくわかりました。そういうご希望であれば、その通りにいたさせましょう。変へんこう更へんこうするのは、わけはありません。」

朝倉先生は軽くこたえて、すぐその場で、次郎にそのことをつたえた。次郎はちよつと不安そうな顔をしたが、承知するよりほかなかつた。

それから夕食までの時間が、四人にとってながい時間であつた

ことはいうまでもない。とりわけ朝倉先生と小関氏にとつてそうであつた。二人は塾長室にはいつて腰をおろしてはみたものの、どちらからもあまり口をきかなかつた。朝倉先生は小関氏の「意見」を誘^{ゆう}発^{はつ}しないような適当な話題を見いだすのに困難を感じたし、小関氏は朝倉先生にすっかり見切りをつけて、もう自分の欲する話題を提供するのをいさぎよしとしなかつたのである。

テーブルの上には、この塾堂にしては珍^{めづ}らしい、豪華^{ごうか}な洋なまな^もどを盛^もつた菓子鉢^{かしぼち}が置いてあつたが、それも朝倉先生が一つつまんだきりだつた。小関氏は、朝倉夫人がたびたび茶を入れかえにはいつて来て、そのたびごとにすすめても、見向こうともしなかつたのである。

二人の沈黙は、それでも、初めの三四十分間は、さほど息苦しいものではなかった。というのは、地域別にわかれた双方の塾生たちが、塾内をくわしく見てまわるのには、少くともそのぐらいの時間が必要だったし、そしてその間は廊下ろうかにはたえずさわがしい人声と足音がきこえ、塾長室の戸がひらかれて、中をのぞきこまれることさえたびたびだったからである。

しかしそのさわぎが治まって、塾生たちがそれぞれ割りあてられた室に落ちついてしまうと、ちょうど、音をたててぶつつかりあっていた浮氷ふひょうが急に一つの氷原にかたまつたような沈黙が支配した。それはごまかしのきかない沈黙だった。二人はめいめいにテーブルの上にあつた新刊の雑誌にでも眼をとおすよりしかた

がなかった。

そのうちに、小関氏はひよいと立ちあがって、一人で室を出た。便所にも行つたのか、と朝倉先生は思っていたが、そうではなかった。小関氏は、塾長室の窓から見える草っ原に、十人あまりの青年たちが円陣えんじんを作っているのを認め、そのほうに出かけて行つたのだつた。朝倉先生がそれを知つたのは、かなりたつたあと、次郎からの報告によつてであつた。

「あの班には、大河君がいるんです。」

次郎はそうつけ加えて、意味のふかい微笑をもらした。朝倉先生はただうなずいただけだったが、それからは、たえず窓ごしに小関氏のほうに眼をひかれていた。小関氏は、青年たちの円陣に

加わるのでもなく、かといつて遠くにはなれるのでもなく、あたりをうろつきまわったり、急に立ちどまったり、また、たまには腰をおろしたりして、話に耳をかたむけているかのようであった。そうして、ともかくもながい数時間が終わって夕食の板木ばんぎが鳴った。

夕食の食卓しょくたくは、これもやはり地域別に配列され、双方の塾生が一人おきに入りまじって座を占しめることになっていた。ごちそうはあたたかいさつま汁じゅうだった。食事の作法は、双方のしきたりにかなりなちがいがあつたが、郷ごうに入つては郷に従つてもらおう主旨しゆしで、友愛塾の簡単な日常生活の方式、つまり「いただきます」と「ごちそうさま」のあいさつだけですまし、その他は「無作法

にも窮きゆうくつ 屈くつにもならないように」各自に心を用いてもらうことになった。食事がすみ、食器が片づくのと、それに代わつて茶菓が運ばれた。友愛塾では、開塾中に先せんぱい輩はいから陣じんちゆうみまい中見舞ちゆうみまいと称して、しばしば各地の名産が送られて来たが、この時も、ちようど青森のりんごが三箱はっしほど届いていたので、それもむろん食卓をかざった。その色しきさい彩さいの豊かさは、興国塾の塾生たちの眼を見張らせるのに十分であつた。

準備がととのうと、進行係の次郎が言った。

「ではこれからお約束の懇親こんしんかい会にはいりたいと思います、そのまえに、もし、昼間の意見交換会で論じ足りなかつた問題とかあるいは、全員が顔をそろえたところで論議してみたい問題とか

いうようなものがありましたら、ご発表を願います。これは実は興国塾の塾長先生からのご希望もありましたので、茶菓のほうはしばらくお預けにして、まずそのほうから片づけたいと思います。

次郎は皮肉を言うつもりではなかったが、言ってしまったて、變に自分の耳に皮肉にきこえ、はっとしたように、朝倉先生と小関氏のほうを見た。朝倉先生は、眼をつぶっていた。小関氏はきりと眼を光らせたが、すぐ塾生たちを見まわしながら、

「時間はできるだけ有意義につかうがいい。茶話会は三十分もあればたくさんだろう。興国塾の諸君は、こういう時に思いきりふだんの抱負ほうふを述べ、十分批判してもらうんだな。」

しかし、どこからも発言するものがなかった。室内はしんとして、ほうぼうにすえてある火鉢ひばちの中で、かすかに、炭火のはねる音がきこえていた。

すると、窓ぎわの卓についた大河無門が、だしぬけに言った。

「興国塾の塾長先生は、ひる間のぼくたちの話をきいていてくださったようですが、何かそれについてご注意ください。さることはありませんか。」

小関氏の眼がまたぴかりと光った。氏は、その眼をいりつくように大河のほうに注ぎながら、

「それは大いにある。しかし今日は私の出る幕ではない。私の考えは帰ってから私のほうの塾生だけに話せばいいのだ。」

また沈黙がつづいた。次郎はそつと朝倉先生の顔をのぞいたが、先生はやはり眼をつぶっているきりだった。

「では、問題もなさそうですから、すぐ懇親会にうつります。」

次郎は思いきつて言った。そしてさっさと予定の計画を進めていった。次郎たちの計画では、しよっぱなから、固い気分を徹てつて底的いてきにぶちこわすことであつた。

そのためには、まず第一に、朝倉先生夫妻をはじめ、友愛塾がわが総立ちになつて、例の友愛塾音頭おんどを踊るのが、もつとも効果的だと思われた。この予想はみごとに的ちゆうした。小関氏ただ一人をのぞいては、満場笑いと拍手の渦うずだった。とりわけ朝倉先生と大河無門の拳闘けんとうでもやるようなぎこちない手ぶりが爆ばくしよ

笑うの種だった。中には朝倉夫人のしなやかな手振りてぶりに最初から最後までうつとりと見ほれているものもあつた。

つぎは個人のかくし芸だったが、その皮切りにも、大河無門が立ちあがつて例の蟬せみの鳴き声をやり、大喝かつさい采さいだった。それにこたえて、興国塾しゆがわからずも、その代表である黒田勇が出て詩吟しぎんをやつた。満面朱しゆを注いでよてきの熱演は大河の蟬の鳴き声とは全く対たいし蹠よてき的てきだったが、節まわしはさすがに堂に入つたもので、これも大喝采かくさいだった。

そのあと次郎は、もう進行係としてほとんど世話をやく必要がなかつた。すべては笑いと感嘆かんとんと拍手の中にすぎた。そして、最後に相互そうごの代表からなごやかなあいさつを述べて解散すること

になつたが、もしわかれぎわになつて興国塾の塾生たちがきちんと玄関前に整列し、号令のもとに挙手注目の礼をおくらなかつたとしたら、双方の塾生たちの間に、しつけの大きなひらきがあるのを認めることは、困難だつたかもしれなかつたのである。もつとも、そうであればあるほど、小関氏にとつて、この数時間がにががしい時間であつたことは言うまでもない。

興国塾の塾生たちの足音が消え、朝倉先生夫妻と次郎とが塾長室にはいると、そのあとを追うようにして五六名の塾生たちがおしかけて来た。その中には大河無門もいた。かれらは口々に言つた。

「すいぶん盛さかんな連中だつたね。何しろぼくたちとは生活がちが

いすぎているんだ。こちらの言うことなんか、はじめのうち、てんで聞こうともしないで、自分たちの言いたいことだけをしゃべりまくるんだ。閉へい口こうしたよ。」

「それでも、食後はいやに愉快ゆかいそうだったじゃないか。やはり地区別の話し合いは、それだけ効果的だったと思うね。」

「そういえば、食後には、催さい促そくされてもふしぎにだれも理屈を言いだすものがなかったね。ひる間の意気いきご込みとはまるでちがっているんで、あの時はぼくも意外だったよ。」

「すると、やはり多少は考えたかな。」

「考えたんじゃないよ。本能だよ。」

と、大河無門が口をはさんだ。

「あの連中だつて、つけ焼き刃^{やば}の理屈をならべるよりか、りんごを食つたり、歌をうたつたりするほうが実はおもしろいんだよ。ふふふ。」

それから朝倉先生のほうを向いて、

「今日、ぼくたちの班で話しあつてみたかぎりでは、あの連中の生活には、自然で大つぴらな楽しみというものがまるでないらしいんです。やるべき時に、しっかりとやりさえすれば、そのほかの時のずぼらは大目に見てもらえるんだから、それで取りかえしがつく、なんて平気で言う者がありましたね。それをきいていて、ぼくは、気の毒になつてしまいました。」

朝倉先生はただうなずいたきりだった。すると塾生同士がまた

話し出した。

「最後にどんな気持ちになって帰って行ったかな。」

「大多数はやはり勝ったつもりで得意になっていたんじゃないかな。夜の会で議論が出なかったのも、一つは、そのせいだったかもしれないよ。」

「まあ大多数はそうだろうね。しかし、中にはずいぶん考えこんだものもいるよ。現にぼくの隣となりむら村から来ていた青年なんか、帰りがけにいやにさびしそうな顔をして、もっと早く友愛塾のことを知っていればよかった、なんて、こつそりぼくに言っていたんだから。」

「ほんとうにまじめな人は、そうだろうね。しかし、そんな人は

めずらしいよ。ぼくたちだつてここの生活のいいところがわかる
までには、ずいぶんお手数をかけたからね。」

「まあ、しかし、今日はとにかくよかつたよ。興国塾の連中はと
にかくとして、ぼくたち自身にぼくたちの生活がこれでいよいよ
はつきりしたんだから。」

「実際だ。ああいう連中といつしよになつてみると、それが実
にはつきりわかるね。」

朝倉夫人は涙ぐんでおり、次郎は何かじつと考えこんでいた。
すると朝倉先生が言った。

「そんなふう^なに自己陶酔^{とうすい}に陥^{おちい}るようでは、今日は最悪の日だつ
たね。アルコール漬^{づけ}になつて生きてゐる動物はないよ。はっはっ

はっはっ。」

それから急に立ちあがって、窓ぎわを行ったり来たりしながら、
 「今日の収しゅうかく穫かくは、あるいはアルコール漬の標本を作っただけ
 だったかもしれないね。そのうち、その標本が瓶びんごと捨てられる
 時が来るだろう。それじゃ、あんまりみじめではないかね。……
 こういう時こそ、一人一人が、もつとげんしゆく嚴げん肅しゆくに……もつとけんそ謙けん
 遜んに、自分を反省してみなくちゃあ。……大事なのは、友愛塾
 が友愛塾という形で勝つか負けるかということじゃない。かりに
 友愛塾という容器がつぶされても、君らの一人一人が、まる裸はだかで
 ぴちぴち生きているような人間になることだよ。とにかく自己陶
 酔はいけない。勝ったつもりでいい気になってはおしまいだ。人

間は、苦しい時よりも、かえつて得意な時に墮落だらくするものだからね。……平常心……そうだ、平常心のたいせつなのは、苦しい時よりも、むしろこうした場合なんだよ。」

朝倉先生が、こんなに、物につかれたように、きれぎれなもの言い方をするのは、まったくはじめてのことだった。みんなはおびえたように先生を見まもった。朝倉夫人と次郎とは、先生の言葉がおわると、すぐおたがいの顔を見あつたが、その眼は友愛塾のさしせまつた運命について何かささやきあっているかのような眼だった。

ただ大河無門だけは、その間にも、しずかに眼をとじているきりだったのである。

一三 旅行

それから一週間は、表面何事もなくすぎた。次郎は、一方では、^{じゆく}塾の将来についての予感におびえながら、また一方では、^{みちえ}道江からも ^{きよういち}恭一 からも、その後何のたよりもないのを気にやみながら、ともかくも予定どおりの行事をすすめていった。季節はもう ^{むさしの}武蔵野名物の黒つむじが吹^ふきあがるころで、朝夕の清^{せい}掃^{そう}にはとりわけ骨が折れたが、同時に水がぬるみ、^{ぞうきん}雑巾をしぼる手がかじかむようなこともほとんどなくなっていた。

友愛塾では、毎回の講習期間の終わりに近く塾長以下全員そろ

つて三泊ほく四日の旅行をやることになっていた。それは塾の生活を外に持ち出し、特殊とくしゆな教育環境かんきやうにおいて練りあげたものを、世間ふつうという普通の社会環境において試ためそうというのが主目的であったが、また近県在住の第一回以来の修了しゆうりやう者たちと親交を結び、そういう人たちの郷土生活の實際に接したいというのも、重要なねらいの一つだったのである。

その旅行に出るのは、すでに三日の後にせまっていた。しかし、計画は早くから研究部でねられ、これまでの次郎の経験などを参考にして何もかも決定されていたので、塾生たちはただその日の来るのを待つばかりであった。

ところで、次郎には、旅行に出る前に果たしておかなければな

らない一つの重要な仕事が残されていた。それは数日前に出願を締め切った次回の入塾希望者の履歴書りれきしよを整備して朝倉先生に提出し、採否の決定を得た上で、それぞれ本人に通知することであった。出願者の数はこれまでの記録をやぶって、ほとんど定員の二倍になっていた。それだけにその銓衡せんこうは困難だった。次郎は昨夜までにすっかりその整備をおわり、自分でも採否のあらましの見当をつけておいたが、今朝は、いよいよ朝倉先生にその最後の決定を求めることになっていたのである。

今日もちょうど小川博士の講義の日だったが、次郎はその講義がはじまるのを待ち、一まとめにした履歴書と推薦書すいせんしよとをかかえて塾長室にはいつていつた。

「もうちよつとで百名をこえるところでした。それに、志願者の質もたいていはよさそうです。やはり、これまでの修了者の勸かんゆ誘うがきいたんだと思います。」

次郎は朝倉先生の机の上に書類をおくと、そう言つて、いかにも得意そうだった。

「そうか。ふむ。」

と、朝倉先生は、何か考えていたらしい眼でちよつと履歴書のほうを見たが、すぐ机の引き出しをあけて、小さな紙ばさみにはさんだ一束たばの電報をとり出し、それを次郎のまえにつき出しながら、言つた。

「しかし、残念ながら、この通りだ。」

次郎はいそいで電報に眼をとおした。おどろいたことには、十五六通の電報が、どれもこれも推薦団体からの志願取り消しの電報だった。志願者の数にして、もうそれだけで五十名近くになっていた。次郎は呆然ぼうぜんとなつて朝倉先生の顔を見つめた。かれは、この五六日、頻々ひんぴんと塾長あての電報が来るのを知つてはいた。そしてそれが何か先生の身分にとつて重大なことではないかという気がして、不安にも感じていた。しかし、こうした意味の電報であろうとは夢ゆめにも思つていなかったのである。

「おどろいたかね。」

と、朝倉先生はさびしく笑いながら、今度は一通の封書ふうしょを、同じ引き出しから取り出して、

「あらましの事情は、これを見ればわかる。君にはなるだけ心配をかけまいと思つていたが、もうかくしておいてもしかたがない。読んでみるがいい。」

次郎は封書を受け取ると、まず発信人の名を見た。杉山悦男すぎやま えつおとあつた。杉山は現在文部省の社会教育課せきに籍せきをおいて、主として青年教育の事務を担当している人だが、かつての朝倉先生の教え子で、田沼先生たぬまとも近づきがあり、自然友愛塾しんらにもしばしば出入りして次郎ともかなり親しい仲になつていた。次郎はある信しん頼感いを抱いだいて手紙をよんだ。

手紙の文面はさほど長いものではなかつた。

「……小生としては、立場上、くわしい事情を述べる自由も有し

ませんし、また述べても今さら何の役にもたつことではなく、単に先生のお気持ちを損そこなうだけにすぎないと思いますのでそれは省略いたしますが、とにかく、各府県の社会教育課の青年ないし青年団の方針が、今後はいつそう片寄つたものになるにちがひありません。ことに幹部養成のための施設しせつの選せん択たくには、それとなく強い制限が加えられることになり、その結果、残念ながら、友愛塾の志願者もいちじるしく減少するのではないかと予想されます。このことについては、省内にも内々反対の意見を持つものがないではありませんが、それを口に出すことさえできないのが現在の現状です。……」

内容はそれだけでほとんどつきており、あとはいろいろの感情

を盛^もつた言葉の羅列^{られつ}にすぎなかつた。

次郎は読みおわると、がくりと首をたれた。かれの膝の上には、
もう涙^{なみだ}がぼろぼろとこぼれていた。

朝倉先生は眼^めをそらして窓のそとを眺^{なが}めていたが、

「時勢だよ。」

と、ぽつりと言つて、眼をとじた。

しばらくして、次郎が声をふるわせながら、

「先生は、もうあきらめていらつしやるんですか。」

「あきらめるよりしかたがないだろう。じたばたしても、どうにもならない。」

「田沼先生も、もうご存じなんでしょうか。」

「むろんご存じだ。取り消しの電報のことも電話で申しあげてある。」

「それで何ともおっしやらないんですか。」

「やはりしかたがないだろうとおっしやる。」

次郎は、きつと口をむすび、涙のたまった眼で、にらむようにしばらく朝倉先生の顔を見つめていたが、

「ぼく、しかたがあると思うんです。」

「どうするんだね。」

「この中には——」

と、次郎は履歴書の束をひきよせて、

「これまでの修了生や現在の塾生たちにすすめられて志願したも

のがすいぶんあるんです。そういう志願者たちは、今から手をうてば、どうにかなると思うんです。」

「手をうつというത്？」

「勧誘かんゆうの手紙を出すんです。先生からも、塾生みんなからも。」

「どんな手紙を出すんだい。」

「真相をぶちまけて正義感に訴え、同志的な呼びかけをやるんです。」

「それで動くと思うかね。」

「動くように書くんです。旅行までには、まだあと二日あるんですから、みんなで文案をねるんです。」

朝倉先生はさびしく笑った。が、すぐ深刻な眼をして、

「かりに名文ができて、それに青年たちが動かされたとしたら、あとはどうなるんだい。」

「それで問題はないじやありませんか。塾生が集まって来さえすれば、あとはどんな圧迫あっぱくがあつても、これまでどおりにやっていけばいいんです。」

「それで友愛塾はつぶれないと言うんだね。」

「そうです。」

「なるほど。君の言うことはよくわかる。友愛塾をつぶさないためには、成功するかしないかは別として、いちおう手紙を出して見るのも一策いっさくだろう。しかし、そうして集まって来た青年たちは、気の毒なことになるね。」

「どうしてです。」

「おそらく村や町の生活から孤立こりつすることになるだろう。どうかすると、非国民のレッテルをはられることになるかもしれない。少なくとも公然と何かの役割を果たすことができなくなるのはたしかだよ。」

次郎は、机の一点を見つめて、ちよつと考えたあと、

「しかし、そうなればそれでもいいんじゃないやありませんか。どうせ友愛塾の運動は時代への反抗はんこうでしょう。今の時勢では、正しいものが孤立するのはむしろ当然ですし、それでこそかえって大きな役割が果たせるとも言えると思うんです。」

「時代への反抗、なるほどね。——」

と朝倉先生は眼をつぶった。そしてしばらく額をなでていたが、「なるほど友愛塾の精神は、今の時代では一種の反抗精神だと言えるね。しかし、田沼先生も私も、大衆青年を反抗の精神にかりたてるつもりは毛頭もうとうない。私たちが大衆青年に求めているのは、まず何よりも愛情だよ。愛情に出発した創造と調和の精神だよ。」

「それはわかっています。しかし、今のような時代では、その愛情はまず反抗の精神となつてあらわれるのが当然でしょう。それでこそ、ほんとうの意味での創造と調和とが期待されるんじゃないでしょうか。」

「それはその通りだ。だからこそ軍部ににらまれるような友愛塾も生まれたんだ。しかし、そういうことをただちに個々の大衆青

年に求めるのは大きな冒険ぼうけんだよ。大衆青年というものは、どんなに思慮しりよがあるように思えても、いったん反抗の精神にかりたてられると、どこにいくかわからないし、たいていの場合、破壊はかいに終わるものだからね。それでは世の中はちつともよくなならない。青年自身としても不幸になるだけだ。」

「すると、流されるままに放つとくほうがいいとおっしゃるんですか。」

「そう言われるとつらいが、それもしかたがない。やはり時勢には勝てないよ。今は無益な摩擦まさつの原因を作るより、なごやかな愛情を育てるために、できるだけの手段を講ずべきだね。」

「その手段も、友愛塾をつぶしてしまつては、おしまいじやあり

ませんか。」

「むろん、友愛塾があるにこしたことはない。しかし、それがつぶれたからといって、何もかもおしまいになるというわけのものでもあるまい。全国には塾の修了生がもう五百名近くも散らばっているし、私は、これからは、むしろわれわれの精神をよく理解した修了生たちに事情を訴^{うった}えて、各地でこれまでに友愛運動を展開してもらいたいと思っているんだ。」

「しかし、そういう人たちも、これからは孤立するんじゃないか。すまいか。」

「友愛塾の修了者だという理由で？」

「ええ。」

「まさか。……もつとも、その人たちが友愛塾の旗をふりまわすといったふうであれば、その心配もあるだろう。しかしほんとうに塾の精神がわかつているかぎり、そんなばかなまねはしないよ。結局は周囲にとけこんでいく実際の生活がものを言うさ。」

次郎は考えこんだ。考えれば考えるほど、朝倉先生が敗北主義者になったような気がして腹がたつて来た。かれは、もう何もいわないで塾長室を出ようかと思つた。しかし、ながい間の先生に対する信頼感しんらいかんがかれにそれをためらわせた。

かなりたつて、かれはいくぶん皮肉な調子で言つた。

「ぼくにも、先生が愛情をたいせつたいせつにされるお気持ちをよくわかります。しかし愛情の表現をどうするかということにつ

いては、問題があると思うんです。先生のように、周囲にとけこんで摩擦を起こさないようにすることに、あまり重きをおきすぎると、修了生たちだつて、結局は時代に流されるよりほかないじやありませんか。」

「ある点では、——いや形の上ではすべての点で、そうなつていくかもしれないね。しかし、時代に流されながらも愛情だけはたいせつに育てていくということを忘れない点で、ただやたらに叱つたげきれい咤激励する連中とは根本的にちがっているよ。」

「しかし、そんなことが日本の破滅を救うのに何の役に立ちますか。」

「少しは役にたつかもしれないし、あるいは全く役にたたないか

もしれない。今の形勢では役にたたないといったほうが本当だろうね。」

「先生！」

次郎は激昂げきこうして、

「ぼくたちは、これまで、日本の破滅をくいとめるために戦つて来たんじゃないやありませんか。」

「むろんそうだ。」

「そんなら、それに役だつ方向に少しでも努力したらどうです。」

「今は愛情を育てることだけが、ただ一つの道だ。愛情を失つては、そのほかのどんなことに成功しても何の役にも立たない。」

「愛情だって、日本が破滅したら、何の役にも立たないでしょう。」

」。

「愛情はあらゆる運命をこえて生きる。それは破滅の悲劇にたえて行く力でもあり、破滅の後の再建を可能にする力でもあるんだ。人間の社会では、愛情だけがほんとうの力なんだよ。それさえあれば無からでも出発ができるし、反対に、それがなくては、あらゆる好条件がかえって破滅の原因にさえなるんだ。」

次郎はまた考えこんだ。首をたれ、顔色が青ざめ、眼が凍こおつたように光っていた。かれはその眼をそろそろとあげ、じつと朝倉先生を見つめながら、

「先生は、すると、日本の破滅はもう必至だとお考えですか。」

「必至？ それはわからない。悪の勝利ということもあるのだから」

らね。しかし、かりにそれで一時的に破滅をまぬがれても、むろん安心はできないだろう。悪の勝利は決して、永遠ではないんだ。

「そういう意味では、やはり必至だとお考えですね。」

朝倉先生は沈痛ちんつうな眼をして、

「実は、これは田沼先生にうかがったことだが、現在のの上層部の人たちで、世界の事情に少しでも明るい人なら、さつきいった悪の勝利でさえ信じているものは一人もないらしい。それにもかかわらず、現在の勢いを阻止そしできないというのは、いかにも残念だ。田沼先生もそれで非常に苦しんでいられる。むろんああいう方だから、最後まで努力はつづけられるだろう。しかし、青年指導に

ついで、せんだつて私にもらされたご意見から察すると、やはり大勢たいせいはどうにもならないらしいね。」

「青年指導についての田沼先生のご意見といえますと？」

「勢いを阻止するための指導よりは、最悪の事態を迎えるための指導が今ではたいせつだ、とおっしゃるんだ。」

「つまり、先生がさつきおっしゃったように、愛情を育てるといふことなんですな。」

「そうだ。目あきもめくらもいっしょになつて地獄じごくに飛びこむのが運命だとすれば、その運命をおそれてじたばたするより、その運命の中で生きて行けるたしかな道を求めるほうが賢明けんめいだといふお考えなんだ。むろんこれは一いっぱん般ぱんの国民についてのお考えで、

先生ご自身としては、まだ決してあきらめてはいられない。おそらく今もどこかで血の出るような努力をつづけていられることだろう。田沼先生という方はそういう方なんだ。席むしろばた旗たを押したてて青年をけしかけるような運動は、血をもつて血を洗うにすぎない、というのが先生の信念でね。」

次郎は、田沼先生が、二月二十六日の事変後に組織された内ないか閣くに入閣の交こうしやう渉しやうをうけたのを、即座そくざに拒絶きよぜつした、という新聞記事を見たのをふと思いいおこした。それと今の話との間には、直接には何の結びつきもなかったが、信念の人としての田沼先生の人柄ひとがらが、それでいよいよはつきりするように思えたのである。「とにかく、田沼先生も、友愛塾をつづけて行くことはもう断念

しておいでだ。君としては、一生をかけた仕事か、わすか十回でおしまいになるのは残念だろうが、考えようでは、仕事がいっそう地についた、大きいものになったともいえる。気をおとさないようにしてくれたまえ。」

朝倉先生がしんみりとなつて言った。次郎はもう何も言うことができなかつた。かれは泣きたい気持ちだつたが、やつと気をとりなおして、

「すると、先生はこれからどうなさるんです。」

「全国行あんぎや脚だね。」

「講演をしておまわりですか。」

「講演はしない。したいと思つても、おそろくどこでもさせては

くれないだろう。まあ、せいぜい、ここの修了生を中心に、同志の座談会をひらくぐらいなものだね。それも、できるだけ目だたない方法でやらなくてはなるまい。何だか一種の秘密結社みたようになるかもしれないが、しかたがない。しかし、辛抱しんぼうがよくつづけていけば、将来の国民生活の底力そこちからにはなるよ。目だたない底力にね。」

次郎は雲をつかむよう心ぼそい気がした。五百名の修了生があると言っても、それは全国に散らばれば無にひとしい勢力である。それに、そのなかの何人が、そうした運動に真剣しんけんに協力してくれるか、それも心もとない。これは朝倉先生の自己慰安いあんにすぎないのではないか、とも思った。

「不賛成かね。」

朝倉先生は、次郎の気持ちを見透す^{みすか}ように、微笑^{びしょう}しながら言
った。

「ええ——」

と、次郎がなま返事をする、朝倉先生はその澄^すんだ眼を射る
ように光らせながら、

「君は、一粒^{ひとつぶ}の種をまく、という言葉を知っているだろう。ほ
んとうの仕事はその一粒からはじまるものなんだよ。ついこない
だ読んだ本の中にあつたことだが、レドレーとかいう宣教師が中
国の西の果てのある土地にはいりこんで、二十年間宣教をしたが
一人の信者も得られなかつた。ところが、その翌年になつてやつ

と一人の信者ができると、そのあとは年々加速度的にふえていつて、今ではその地方の住民がほとんど全部キリスト教徒になつてしまつていふといふことだ。私も及ばおよずながら、それに学びたいと思つてゐる。実は、白状すると、私もこの話を知るまでは、なかなか決心がつかかなかつたがね。」

廊下ろうかが急にさわがしくなつた。講義が中休みになつたらしい。やがて小川先生がのつそりはいつて来て次郎の横こしに腰をおろし、その鈍どんじゆう重な眼で、じつとかれの顔を見つめた。次郎はあわてたように立ちあがつて、茶を入れはじめた。すると朝倉先生が言つた。

「本田君がなかなか納な得とくしてくれないので、弱つてゐるところ

です。」

「そうでしよう。私もまだ納得がいきません。」

小川先生は、ぶすりとこたえて、履歴書のたばを自分のほうにひきよせ、

「ほう、こんなに志願者があつたんですか」

次郎は、入れかけていた茶をそのままにして、いきなり両手で顔をおさえ、逃にげるように室を出て行つてしまった。

その日は、次郎にとって、友愛塾はじまつて以来の暗い、うつろな日だった。恋こいのみか、生命をかけた仕事までが根こそぎになつたという意識が、かれの心から考える力をも感ずる力をも完全に奪うばつてしまつたかのようであつた。かれはもう朝倉夫人に慰なぐさめ

を求めたいという気持ちさえ失ってしまっていた。そのくせ、一
ところにじつとしてはいかなかった。つきからつきに、こぎこぎし
た仕事を求めて塾内をあるきまわった。そして、ながい間の習慣
に従って、まちががなく、それらを果たしていった。ちようど正
確な機械でもあるかのように。

夕方、べつにする仕事も見つからなくて、寒い塾庭を一人でぶ
らついていると、大河無門がうしろからかれの肩かたをたたいて言っ
た。

「本田さん、ぼくもききましたよ。」

次郎が虚脱きよだつした眼でかれの顔を見つめていると、

「塾は今度きりで閉鎖へいさになるんですってね。」

「ええ、どうしてわかったんです。」

「小母おぼさんにききました。」

次郎は塾が閉鎖になることは、塾生たちにはまだ秘密にすべきことだと思っていた。それを朝倉夫人がどうして大河にもらしたのだろうと、それが不思議でならなかった。大河は、しかし、平気で、

「先生は、これからは、全国行あんぎや脚あしだそうじゃありませんか。いいですね。ぼく、もしお許しが出たら、ついて行きたいと思ってるんです。」

次郎は、しびれた頭のどこかに急に電気でもかけられたような刺激しげきを覚え、眼を見はった。

「本田さんも、むろん、ついて行くんでしよう。」

「ぼく、まだ、そんなこと何も……」

「二人でついて行きましょう。友愛塾の運動は、こんな建物の中でやるより、そのほうがほんとうですよ。ぼく、今度講習をうけてみて、つくづくそう思いました。むろん、それもはじめからじや無理かもしれません、修了生が五百も全国に散らばっておれば、やり方次第では相当なことができますよ。一回に五十人やそこいらをここに集めてやってるよりか、運動としては、よつぽどそのほうが効果的だと思いますね。」

次郎は、朝倉先生と三人で、リュックをかついで全国を行脚してあるく姿を心に描いて、何か楽しい気がしないでもなかった。

しかし、かれの眼は、建つてまだ三年とはたたない本館や、空くうり林庵んあんを、無念そうに見まわしていた。かれの胸には、幼いころ、自分の通かよつていた村の小学校が新築され、それがかれと乳母うぼのお浜はまを引きはなす原因になり、お浜と二人で最後に旧校舎の屋根を見あげたときの、あの言いようのない寂さびしい気持ちさびが、しみじみとわいていたのだった。かれは何か言いわけでもするように言った。

「しかし、ぼくらがついて歩けば、それだけ費用もかかりますし、勝手には決められないでしょう。」

「それはだいじょうぶです。小母さんのお話では、その費用なら、田沼先生のお力でいくらでも出るところがあるんだそうです。」

次郎は、このことについて自分とはまだ何一つ話しあっていない朝倉夫人が、すでにそんなことまで大河に話しているのを知つて、おどろいた。そのおどろきにはかすかに暗い影かげがさしていた。塾の建物を見まわして幼いころの寂しかった気持ちをそそられていたかれは、同時に、そのころ覚えた不快な嫉妬しつとしん心をも呼びさまされていたのである。それはかれがとうの昔むかしにのりこえていたはずの人間としての弱点であつた。かれは、その弱点が今もなお心に巣すくつているのに気づいて、ぎくりとした。弱点の反省は不快を二重にする。かれは大河から思わず眼をそらして、返事をしなかつた。

すると大河が言った。

「本田さん、小母さんにあまり気をもませないほうがいいですよ。小母さんは今朝から、あなたのことばかり心配して、しじゅう様子を見ておいでですが、ぼく、気の毒に思うんです。」

次郎ははつとしてまともに大河の顔を見た。大河はにっと笑つて、次郎のりようかた両肩に手をかけ、

「実は、ぼくも、あなたの様子が今朝から変だと思つて、小母さんにたずねてみたんです。すると小母さんが、何もかも打ちあけて、ぼくにあなたを慰めてくれ、と言つたんですよ。ははは。」

大河の笑い声はびっくりするほど高かつた。次郎はがくりと首をたれた。大河は、すぐ真顔になり、

「友愛塾は、勝つとか負けるとかいうことを考えるとこころではな

いんでしよう。ぼく、それがおもしろいと思うんです。くやしが
つたりしちやあ、塾の精神が台なしになるじやありませんか。や
つぱり愉快ゆかいに行脚あんぎやしましょうよ。」

次郎はいきなり大河に抱だきついた。そしてむせぶように言った。
「ぼく、助かりました。……これから大河さんに、もつといろい
ろきいてもらいたいことがあるんです。旅行に出たら、すっかり
話します。」

この時、塾長室の窓から、二人の様子をじつと見まもっていた
四つの眼があつた。それはむろん朝倉先生夫妻の眼だった。次郎
も大河も、しかし、それにはまるで気がついていなかった。

その後、旅行までの二日間は、べつに変わったこともなくすぎ

た。入塾志願取り消しの電報は、その間にもさらに幾いくつう通かど
いたが、次郎はもうそれを大して気にはしなかった。むしろそれ
よりも、旅行前夜まで取り消しの通知が来なかった幾人かの志願
者に対して、こちらから、事情により当分休塾するという意味の、
きわめて事務的な通知を発送しなければならなくなったことが、
かれの気持ちを割りきれないものにしていったのだった。

いよいよ旅行の日が来た。全員——といっても朝倉夫人だけは
いつも留守番役だった——が門を出たのは、まだ夜が明けはなれ
ないころだった。旅行中のいろんな役割は万まんべん遍なく塾生全部に
ふりわけられていた。出発から帰塾まで、全く役割なしですませ
る塾生は一人もなかった。きまった役割のないのは、朝倉先生と

次郎だけだったが、この二人には、とうちやく到着した先で自然に何かの役割が生じて来るはずだったのである。

最初の目的地は、静岡県の日村だった。この村にはKという友愛塾の第一回の修了生がいて、村生活に大きな役割を果たしているということが、すでに早くからたしかめられていた。朝倉先生としても、次郎としても、ぜひ一度はたずねてみたい村だったのである。

みんなは、日村につくと、まず小学校の一室にしやう招ぜられた。ここには村の青年たちばかりでなく、村長以下のあらゆる機関団体の首脳者が集まっていて、かんげい歓迎してくれた。儀式ぎしきばつた歓迎では決してなかったが、顔ぶれがあまり大げさなので、朝倉先生が

K青年にそのことをそつとただしてみると、かれはこたえた。

「この村では、一つの機関や団体が何かいもよおい催しをやると、他の機関や団体もいっしょになつて喜んでくれ、できるだけのおうえん応援をしてくれるんです。今日も私のほうからむりをお願いして集まつてもらつたわけではありません。」

いちおうあいさつがすみ、お茶のごちそうになると、陽ひのあるうちに村中の諸施設しよしせつを見学した。そのあと、また小学校に集まつて、村の青年たちと夕食をともにし、座談会をやつたが、ただ場所がちがつているというだけで、気分ははじめから終わりまで友愛塾そつくりだった。この村の青年たちは、すでに友愛塾音頭おんどまでを、塾生たちといっしょにじょうずにおどることができたの

である。

ふんだんに用意してあつた夜具にくるまつて一夜をあかし、翌朝早くこの村をたつたが、塾生たちのこの村からうけた印象は、なごやかな空気の中にみなぎっている生き生きした創意工夫と革新的の精神であつた。なお、わかれぎわに、村長が朝倉先生に私語した言葉は、それをはたできいていた塾生たちに、異常な感銘かんめいを与えたらしかつた。村長は言つた。

「この村をござらんになつて、何かいいことがあつたとしますと、その半分以上は、実はK君の力ですよ。K君は、自分ですばらしいことを考えだしておいて、それを実施じっしする場合には、だれかほかの人を表面に立てるんです。私が村長としてこれまでやって来

たことも、たいていはK君の入れ知恵でしてね。ははは。」

第二日目は、報徳部落として全国に名のきこえた、同県の杉すぎや

山部落まの見学だった。杉山部落は、歴史と伝統に深い根をもち、

すでに完成の域にまで達しているという点で、新興革新の気がみなぎっているH村とは、まさに対蹠たいしよてき的だった。明治維新いしんごろま

では乞食部落こじきとまでいわれた山間の小部落が、今では近代的な組

合の組織を完成し、堂々たる事務所や倉庫や産業道路などをもつに至ったその過去は、塾生たちにとって、まさの一つの驚きょうい異であつた。

かれらはめいめいに自分たちの村の貧しい光景を心に思いうかべながら、この富裕ふゆうな部落をあちらこちらと見てあるいた。ほと

んど平地にめぐまれないこの部落の人たちは、過去数十年間の努力を積んで、山の斜しゃめん面を残るくまなく、茶畑と蜜柑畑みかんと竹林とにかえてしまったのである。その指導の中心となったのは片平一家であるが、すでに七十歳さいをこしているとと思われる当主九郎左衛門翁んおうの、賢者けんじゃを思わせるような風格に接し、その口から報徳社の精神と部落の歴史とをきくことができたのも、塾生たちの大きな喜びであった。

午後、杉山部落を辞し、一路バスで清水しみずに行き、三保付近の進んだ農業経営や久能くのう付近の苺いちごの石垣いしがき栽培さいばいなど見学し、その夜は山岡やんまお鉄舟てつしゅうにゆかりの深い鉄舟寺ですごすことにした。

鉄舟寺は、朝倉先生と次郎にとっては、もう親類みたようなと

ころであつた。それは第一回るときにこの地方に旅行に来て、清水青年団の肝きもいりで一泊いっぱくして以来、たびたび厄やっかい介をかけ、住職の伊藤老師ともすつかり仲よしになつていたからである。

老師は五尺にも足りない小柄こがらな人で、年はもう八十に近かつたが、子供のようなあどけない顔をしており、心も童心そのものであつた。いつも塾生たちがつくまえから、庫裡くりの玄げん関かんにちよこなんとすわりこみ、いかにも待ちどおしそうにしていた。そしていよいよ塾生たちの顔が見えると、

「よう来た、よう来た。さあさあ、おあがり。御堂でも庫裡でも遠慮えんりよはいらん。うちのつもりで、すきなところにゆつくりするんじや。」

と、それだけ言うと、すぐ立ちあがつて姿を消してしまふ。姿を消すのは、塾生たちのためしょうじん精進料理をこしらえるためである。老師はその粗末そまつな黒い法衣の上にたすきをかけ、手伝いに来た近所のおかみさんたち二三人を相手に、自分でも、こま鼠ねずみのように台所を走りまわるのだった。塾生たちが、その様子を見て手伝いに行くと、

「おうお、こりやあ助かる。こりやあ助かる。でも、お客さまに手伝うてもらうては、仏さまに叱しかられるがな。」

と、いかにもうれしそうな顔をする。こんなふうだから、いつの旅行の時も、老師は塾生たちにとって忘れがたい人物の一人になるのだったが、とりわけ今度の場合は、杉山部落で賢者のよう

な風貌ふうぼうをした片平翁に接した直後だったただけに、対照的な意味でも、ふかく印象づけられたらしかつた。

その夜は、精進料理に舌つづみをうったあと、清水の青年たちとおそくまで座談会をやったが、ここにも塾の修了生が二名ほどいて、友愛塾音頭を、一般いっばんの青年たちにも普及ふきゆうさせていたの
で、最後にはみんなでそれをおどり、一座に加わっていた老師を
子供のように喜ばせたのであった。

第三日目は人間的交こうしやう渉をさけて、ひたすら自然に親しもう
という計画だった。未明に鉄舟寺を辞すると、まず竜華寺りゆうげじの日
の出の富士ふじを仰あおぎ、三保みほの松原まつばらで海気を吸い、清水駅から汽車
で御殿場ごてんばに出て、富士の裾野すそのを山中湖畔こはんまでバスを走らせた。山

中湖畔の清溪寮せいけいりょうは日本青年館の分館で、全国の青年に親しまれている山小屋風な建物である。ここに旅装りよそうをとくと、朝倉先生はみんなに言った。

「自然に親しむには、孤独こどくと沈黙ちんもくに限るよ。明日ここを出発するまでは、できるだけおたがいにならした気持ちですごしたいものだね。」

次郎はその言葉をきいた時、何か悲しい気がした。

かれは実を言う、過去二日半をほとんど孤独と沈黙の中ですごして来ていたのだ。心の中では大河に対して道江の問題を打ちあける機会をたえずねらっていたながら、そして一度ならずその機会をつかみながら、ついに言いだしそびれていたかれは、そ

れゆえに他の場合にも、とかく孤独と沈黙に自分自身を追いやっていたわけだったのである。こうして今となつては山中湖畔の半日だけが、かれにとって最後の機会になつていたが、その最後の機会に、朝倉先生のそんな言葉をきいたので、それがいかにも自分を運命的に追いつめるように聞こえたのである。

かれは、しかし、つぎの瞬間しゆんかんには、かえつてその言葉を機縁えんに、自分を勇気づけていた。寮の前庭で中食の弁当をすましたかれは、すぐ大河をさそつて、落葉松からまつの林をくぐり、湖面のちらちら見える空地あきちに腰をおろした。木かげにはまだ雪がところどころ溶け残とっていたが、陽ひざしはしずかであたたかだった。かれはいくぶん恥はじらいながら、同時にいくぶんの自尊心をもつて、道

江の問題に対して自分のとつた態度を説明しながら、いつさいを告白した。大河は、次郎が話している間、眼をつぶっているきりだった。口もきかず、うなずくことさえしなかった。そして話がおわってから、次郎を気味わるがらせるほどだまりこくつていたが、やがて眼をひらくと、言った。

「ぼくが同じ立場にいたとしたら、ぼくはおそらく無遠慮ぶえんりよに恋こいを打ちあげたでしょう。それがぼくにとつては自然なような気がします。むろん拒絶きよぜつされたら、その時にはさっぱりあきらめますがね。もつとも、あきらめるのがぼくにとつてはたして自然だかどうだか、それは実際になつてみないとわかりません。」

それから、また、しばらくして、

「朝倉先生だと、どういう態度に出られますかね。今度の友愛塾の問題で見ると、恋を忍んでいられるようでもあるし、さっぱりとあきらめていられるようでもあるし、ちよつと見当がつきませぬね。」

次郎の耳には、大河の言葉の調子が、いかにもそらとぼけた、情味のないもののようにきこえた。かれは、しかし、そのために茶化されているという気にはちつともならなかった。大河の眼は、人を茶化すにしては、あまりにも深い光をたたえていたのである。次郎はおびえたようにその眼をうかがいながら、つぎの言葉を待った。すると大河はまた例のにつとした笑顔えがおをして言った。

「ぼくは、しかし、あなたのとつた態度が不自然だったと言っているわけではありませんよ。あなたにはそれよりほかに行き道がなかったとすれば、それがおそらくあなたにとつては自然だったでしょう。ぼくは、人間の心の自然さというものは、その人のつきつめた誠意の中にあると思うんです。」

次郎はほうつと深い息をした。それは安堵あんどの吐息といきともつかず、これまで以上の深い苦悶くもんの吐息ともつかないものだった。

二人はやがて立ちあがって、言い合わしたように富士を仰あおいだ。どちらからも口をきかなかつた。富士は、三保で見たすらりとした姿とはまるでちがった、重々しい沈黙と孤独の姿を、青空の下に横たえていた。

次郎は、その沈黙と孤独の奥に、自分の恋と自分をとりまく時代とが蛇へびのようにもつれあい、すさまじく鳴動めいどうして、自分の運命を刻々にゆさぶっているのを、まざまざと感ずるのであった。

次郎の生活記録は、こうしていろいろの問題を残したままその第五部を終わることになるが、この記録は、見ようでは、かれの生活記録と言うよりは、むしろ、満州事変後急速に高まりつつあったファツシズムの風潮に対する、一小私塾のささやかな教育的抵抗ていこうの記録であり、その精神の解明である、と言ったほうが適當であるのかもしれない。少なくとも、その叙じよ述じゆつの半ばに近い部分がそれに費されていることは、否いなみがたいことのように思

える。しかし、この私塾での三年あまりの次郎の生活が、道江の問題とからんで、かれの人間形成に及ぼした影およ響えいきようは決して小さなものではなかったし、また、それがかれのこれからの生活に對して、よかれあしかれ、重大な意義を持つであらうこともたしかである。その点から言つて、この一篇いっぺんは、全体として、やはり次郎の生活記録であるにはちがいないのである。

実をいうと、かれの生活記録としては、この記録のほかにも、つとたしかな記録があることを私は知っている。それは次郎自身の日記である。もし、それをそのままここに収録することができれば、この記録の大部分は無用になつたかもしれないが、次郎の現在の気持ちとしては、おそらくその公表を欲していないであら

う。で、今は、この記録の不備を補^{おぎな}う意味で、わずかにその数節を読者に提供することだけで満足したい。左に抜^ぬき書^がきしたのは、かれがいよいよ朝倉先生夫妻とともに空^{くう}林^{りん}庵^{あん}を引きあげることになった前日あたりに書かれたものらしいが、そのころの、明るいとも暗いともつかない、かれの心境をうかがうには、いい資料になるだろうと思うのである。

「ぼくは、中学一年にはいつの間もないころ、しみじみと人間の運命というものの不思議さに思^{いた}い到^{いた}ったことがあった。それは、朝倉先生にはじめて接することができた時の喜びの原因を、それからそれへと過去にさかのぼって考えていくうちに、ついに、ぼくがお浜^{はま}の家に里子^{さとこ}にやられたのが、そのそもその原

因であることに気がついた時であった。ぼくは今またあらためて同じようなことを考えないではいられない。というのは、ぼくが中学を追われたのも、友愛塾の助手になったのも、また、たぬま田沼先生の人格にふれ、大河無門という友人を得、全国の青年たちと親しむようになったのも、そしてさらに、悲しみと憤りいきどおをもつて友愛塾にわかれを告げ、自信のない新しい生活をはじめなければならなくなったのも、すべては朝倉先生とのつながりにその原因があり、もとをただせば、やはり里子ということにその遠因があると思うからである。

道江の問題を考えて見てもやはり同様である。ぼくが道江を知ったのは、おおまき大巻との関係からだが、その大巻との関係は、

今の母によつて結ばれており、今の母がぼくの家に来るようになったのは、正木の祖父がぼくの将来を気づかつて父にそれをすすめたからのことであつた。そして、ぼくがその当時将来を気づかわれるような子供であつたのは、やはり里子ということにその遠因があつたのだ。

里子！ 何という大きな力だろう。それは現在のぼくのいつさいを決定しているのだ。ぼくの生活理想も、恋れん愛あいも。……そしておそらくそれは将来にもながく尾おを引くことであろう。いや、あるいはぼくの一生がすでにそれによつて決定されてしまつているのかもしれないのだ。

こう考えて来ると、人間の自由というものは一たい何だろう、

とぼくは疑わずにはいられない。それは、円の中心から、自分の欲するままに、円周のどこへでも進んでいけるといふようなことでは、絶対にならない。おそらく、円の中心から円周に向かって、ほとんど重なりあうように接近して引かれた二つの線の間のスペースを、わずかな末広がりを楽しみに進んでいけるといふにすぎないのではあるまいか。もしそうだとすると、それは自由というよりも、むしろ運命とよんだほうが適當だとさえ、ぼくには思えるのだ。

だが、ぼくはまた考える。もしもぼくが、そうした運命観にとらわれて、正しく生きるための努力を放棄するならば、ぼくは円周のどの一点にも行きつくことができないであろう。ぼく

にとつて今たいせつなことは、運命によつてしめつけられた自由の窮きゆうくつ 屈なげさを嘆くことではなくて、そのわずかな自由を極度に生かしつつ、一刻も早く円周の一点にたどりつくことではなければならぬのだ。ぼくには、このごろ、やっと一つの新しい夢ゆめが生まれかけている。それは、円周の一点にたどりつきさえすれば、そこから円周のどの点にも自由に動いて行けるのではないか、と思えて来たことだ。どんな偉人いじんにだって運命はあった。かれらがその運命を克服こくふくして自由になり得たのは、運命の中のささやかな自由をたいせつにし、それを生かしつつ、円周の一点にたどりつくことができた時ではなかつたらうか。ぼくにはそう思えて来たのである。

ぼくは、ぼくの小学校時代、大巻の徹太郎てつたろうおじ叔父につれられて山に登り、岩を真二つに割って根を大地に張っていた松まつの木を見たことを今思い出す。その時、徹太郎叔父に言っまつて聞かされた言葉は、そのままには記憶に残っていないが、たしかに今ぼくが考えているのと同じ意味のことだったのだ。

ところで、運命の中のささやかな自由を生かすためには、いったいどうすればいいのか。その努力の心棒になるのは、いったい何なのだ。この問題の解決こそ、今のぼくにとっては何よりたいせつなことなのだが、ぼくの頭では、まだはつきりとした答が出て来ない。ぼくは中学にはいつの間もないころ、生意気にも、「人に愛してもらおうことなんかどうでもいい。これか

らは人を愛する人間になるんだ」というようなことを考えたことがあった。しかし、今から考えてみると、それは、愛にうえている自分のみじめさに腹がたち、子供らしい英雄心理で自分をごまかしていたにすぎなかつたのだ。むろん、ぼくは、

「愛されたい願い」から、「愛したい願い」への心の転換てんかんを尊く思わないのではない。だが、それはしよせん人生の公式的教訓でしかないのではないか。だれが現実にそれができるといふのだ。朝倉先生？ 田沼先生？ 大河無門？ いや、人を疑ってはすまない。世の中にはすぐれた人もいるのだから、自分の心をもって人の心をおしはかるのはよそう。だが、少なくとも今のぼくにはできない。今のぼくは、正直に言つて、やはり

道江に愛されたいのだ。また、友愛塾をつぶした権力者や、それをとりまく人々を心から憎にくんでいるのだ。ぼくの心に、そうした気持ちがあらずをまいている限り、ぼくは、親鸞しんらんのあとに従って、自分を煩惱熾盛ぼんのうしじょう、罪惡深重ざいあくしんちゆうの人間だと観念するよりしかたがないのではないか。

ぼくは、しかし、だからといって、決してやけにはなりたくない。またなつてもいないつもりだ。ぼくの今の気持ちは、迷うだけ迷ってみたいという気持ちだ。円周にたどりついたあとのほのかな夢だけを抱いて、もがきにもがいているうちには、きつとどこかに道が見つかるだろう。その道は、煩惱熾盛、罪惡深重のままに歩ける道であるのかもしれない。あるいは、公

式的教訓にすぎないと思われたことが、次第しだいに現実性をおびて来るといふ形で現われて来るのかもしれない。そう思うと、迷いに迷うことがすでに一つの道である、という気もするのだ。これは自分の自慰じいにすぎないだろうか。

何だか、書くことが矛盾むじゆんだらけで、どこに自分の本心があ
るのか、わけがわからなくなってしまうたが、わけがわからな
いのが現在の自分の姿であるとすれば、それもしかたのないこ
とだ。ぼくは、あるいは疲れつかすぎているのかもしれない。今日
は、日記を書くのはもうやめよう。」

(第五部おわり)

「次郎物語 第五部」あとがき

この物語の第四部を書き終えたのは、昭和二十四年の三月十八日であった。それからもうやがてまる五年になろうとしている。月日のたつのは早いものである。それにしても、第五部を書くために五年の歳さいげつ月はあまりに永過ぎるのではないかと怪あやしむ人も多いだろう。事実、多数の読者からは、ずいぶん怠たいまん慢だというお叱しかりもうけた。第四部の「あとがき」の手前、著者としては、ただ頭を下げるより仕方がない。しかし、言いわけをしようと思えば、その種がまるでないわけでもないのである。

実をいうと、第五部に筆をとりはじめたのは、第四部を書き終つて間もない五月半ばであつた。そして七月からは、その当時の私の個人雑誌「新風土」にそれを発表しはじめたものである。ところが翌年の三月、その九回目を書きあげたころになつて、私からだの調子がわるくなり、ついに病びようしやう床しょうに横たわる身となつてしまった。病氣はさほど重いというほどではなく、二カ月ほどで起きあがるには起きあがつたが、主治医からは執筆しつぴつを厳禁され、自分でも、それを押しきつてまで書きたいという程の意欲はどうしても湧わいて来なかつた。一方、個人雑誌「新風土」も、そのために自然はいかん廢かん刊よぎの余儀なきにいたり、何もかもが当分休止という状態になつてしまつたのである。

その後、幸いにして健康が徐々じよじよに恢復かいふくし、一冬をこして春になったころには、完全に医者の手をはなれ、執筆の自信も十分に出来、ちよいちよい雑文などを書くようになったが、それでも第五部の続稿ぞくこうにはなかなか手がつかなかった。というのは、それに手をつけようとして、すでに書き終った分を読みかえしてみた結果、意に満たない箇所かしよが非常に多く、そのまま稿をつづけることに全く厭気いやげがさして来たからであった。

こうして毎日重たい気分におそわれながらも、ひと月ふた月と続稿をのぼしているうちに、いつの間にやら一年が経過してしまつた。知人のたれかれは、はじめのうち、「もう次郎は育てないつもりか」と、詰問きつもんするように言つて私をばげましてくれたが、

あとでは、そういう声もめつたに聞かれなくなり、私としては、
気重な気分と共に淋さびしい気分まで味わいはじめることになったの
であった。

いつそはじめから書き直すつもりで筆をとろう。そう決心して、
あらためて構想をねりはじめたのは、一昨年くれの暮くれごろであったが、
その新たな構想がまだまとまらないうちに、たまたま、宗教雑誌
「大法輪」の編集者がたずねて来て、同誌上に第五部を連れん載さいし
たいという希望をのべた。すでに「新風土」に発表した部分があ
るが、と答えると、それでも差さ支しえつかない。新春早々にその第一
回をもらうことが出来れば幸いだという。そこで私は、構想に多
少の修正を加えると共に、毎回新たに筆をとるような気持で書き

出す決心をして、話をまとめることにした。

いよいよ「大法輪」に連載され出したのは、昨年の三月号からで、終回は今年の三月号だから、その完成に、あらためて一年以上を費やしたわけである。

以上が、第五部出版遅延ちえんの言訳である。

なお、第六部はどうするか、ときかれても、それは第五部の場合のこともあり、確約は差さ控ひかえたい。ことに、私ももう七十歳をこしてしまったことだし、生命に別条がないとしても、脳味噌のうみその硬化はさすがに争えないものがあるのだから、めったな約束やくそくはしない方がいいだろうと思うのである。ただ私の希望だけをいうならば、戦争末期の次郎を第六部、終戦後数年たってからの次

郎を第七部として描^{えが}いてみたいと思つている。むろんすべては運命が決定することであり、私自身の意志は、次郎がかれの日記に書いているように、運命にしめつけられた、せまい自由の範^{はん}圍^いにおいてのみ動くことを許されるであらう。

一九五四年三月四日

青空文庫情報

底本：「次郎物語（下）」新潮文庫、新潮社

1987（昭和62）年5月30日発行

入力…tatsuki

校正…松永正敏

2006年3月4日作成

2015年3月7日修正

青空文庫作成ファイル：

このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫 (<http://www.aozora.gr.jp/>)

で作られました。入力、校正、制作にあたった

のは、ボランテイアの皆さんです。

次郎物語

第五部

2020年 7月13日 初版

奥付

発行 青空文庫
著者 下村湖人
URL <http://www.aozora.gr.jp/>
E-Mail info@aozora.gr.jp
作成 青空ヘルパー 赤鬼@BFSU
URL <http://aozora.xisang.top/>
BiliBili <https://space.bilibili.com/10060483>

Special Thanks

青空文庫 威沙

青空文庫を全デバイスで楽しめる青空ヘルパー <http://aohelp.club/>
※この本の作成には文庫本作成ツール『威沙』を使用しています。
<http://tokimi.sylphid.jp/>